
桶川市

諏訪野遺跡 I

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う
桶川地区埋蔵文化財発掘調査報告
(第2分冊)

2014

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

(第一分冊)

卷頭図版	
序	
例言	
凡例	
目次	
I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
3 発掘調査・報告書作成の組織	4
II 立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	6
III 遺跡の概要	10
IV 遺構と遺物	17
1 縄文時代の遺構と遺物	17
(1) 住居跡	17

(第二分冊)

(2) 土壙	387
(3) 集石土壙	425
(4) ピット集中区	427
2 近世の遺構と遺物	442
(1) 掘立柱建物跡	442
(2) 井戸跡	453
(3) 土壙	454
(4) 溝跡	472
V 調査のまとめ	480
1 調査の成果	480
2 遺構出土縄文土器について	480
3 縄文時代中期の竪穴住居跡について	489

写真図版

(2) 土壙

第6号土壙 (第346・362図)

N - 13グリッドに位置する。長径1.21m、短径1.15mの不整円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 50° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第362図6・7が出土遺物である。6は勝坂式、7は加曾利E I式であろう。

第7号土壙 (第346・362図)

M・N - 14グリッドに位置する。長径1.35m、短径1.25mの不整円形で、深さは0.09mである。主軸方向はN - 59° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第362図10～14が出土遺物で、勝坂式末～加曾利E I式と考えられる。

第8号土壙 (第346・362図)

M - 14グリッドに位置する。長径1.43m、短径1.2mの不整円形で、深さは0.19mである。主軸方向はほぼ南北を指す。壁の立ち上がりは、比較的急である。底面は平坦で中央がやや低くなっている。

第362図8・9が出土遺物である。8は諸磯式で、円盤型浅鉢の口縁部である。9は勝坂II式であろう。

第25号土壙 (第346・362図)

P - 7グリッドに位置する。長径1.45m、短径1.37mの楕円形で、深さは0.53mである。主軸方向はN - 57° - Wを指す。壁は比較的急角度で立ち上がり、底面は東方向に傾斜しており、南東端に小ピットを有する。

第362図15・16が出土遺物で、いずれも無文の胴部破片である。

第34号土壙 (第346図)

P - 11グリッドに位置する。長径1.48m、短径1.29mの不整楕円形で、深さは0.15mである。主軸方向はN - 70° - Eを指す。丸底の土壙で、壁はごく緩やかに立ち上がる。

第56号土壙 (第346・358・362図)

M・N - 11グリッドに位置する。長径1.55m、短径1.3mの楕円形で、深さは0.42mである。主軸方向はN - 7° - Wを指す。壁の立ち上がりは北西～北東壁が急で、それ以外では緩やかである。

遺物は検出面付近を中心に出土した。第362図17～26が出土遺物で、勝坂III式が主体である。

第57号土壙 (第346・362・372図)

N - 9グリッドに位置する。長径0.96m、短径0.94mで、深さは0.85mである。主軸方向はN - 10° - Eを指す。覆土は互層をなし、中央に柱痕状の部分がみられる等、柱穴に似た特徴を持っている。確認はできなかったが掘立柱建物か、木柱状の遺構であった可能性がある。

第362図27・第372図362が出土遺物である。27の土器片は三叉文を描く勝坂III式である。

362は楕円形の磨石で、短軸方向に折損している。両面に使用面を持ち、片面には凹孔がみられる。長さ5.57cm、幅58.87cm、厚さ24.21cm、重さ93.84gである。石材は安山岩である。

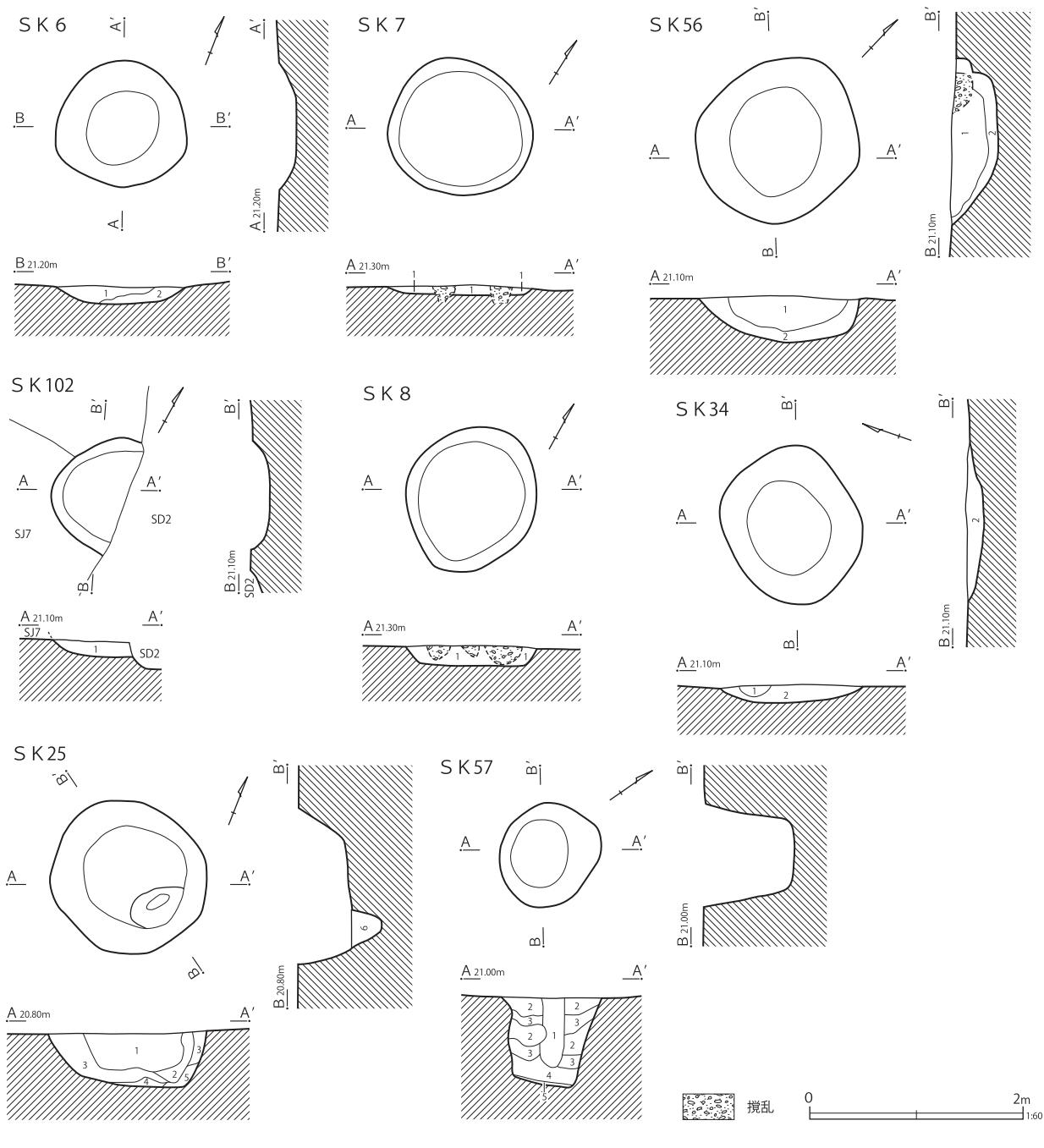
第102号土壙 (第346・362図)

L - 15グリッドに位置する。第2号溝跡に壊されている。また、第7号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。長径1.11m、短径0.64mの楕円形の土壙であると思われ、深さは0.18mである。主軸方向はN - 62° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第362図28～31が出土遺物である。28・29は爪型文を描く深鉢胴部で、諸磯b式であろう。30は角押し文の勝坂I式。31はLR单節横位回転の繩文を施文する胴部で、諸磯式であろう。

第105号土壙 (第347・362・372図)

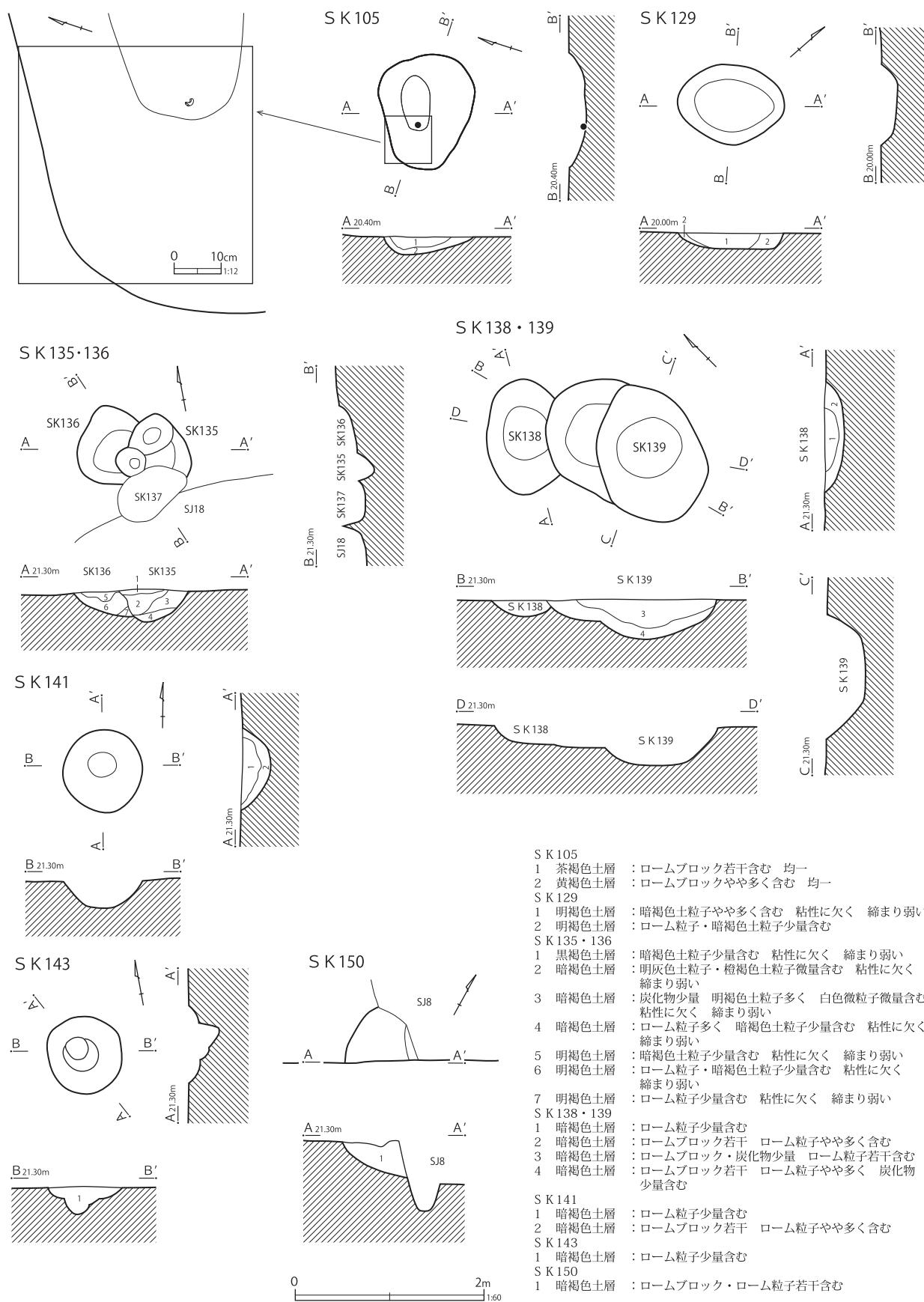
R - 5グリッドに位置する。長径1.15m、短径1.02mの不整楕円形で、深さは0.26mである。主軸方向はN - 90° - Eを指す。壁の立ち上がりは北側がやや急だが、それ以外では緩やかである。底面から滑石製の耳飾り片が出土した。



SK 6
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干 炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む
SK 7
1 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む
SK 8
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
SK 25
1 黒褐色土層 : ロームブロック若干 焼土ブロック少量含む
2 黒褐色土層 : ロームブロックやや多く 烧土ブロック少量含む
3 黄褐色土層 : 締まり弱い やや不均一
4 黄褐色土層 : ロームブロックやや多く含む 締まり弱い やや不均一
5 灰褐色土層 : ロームブロック若干含む 固く締まっている 均一
6 灰褐色土層 : ロームブロック多く含む 固く締まっている 均一

SK 34
1 黒褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む 砂質不均一
2 黑褐色土層 : 黒色土ブロック少量含む ローム質 繊密 均一
SK 56
1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 焼土粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
SK 57
1 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む 締まり弱い 柱痕と思われる
2 暗褐色土層 : ロームブロック多量 炭化物微量含む 締まりやや弱い
3 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まりやや弱い
4 暗褐色土層 : ロームブロック多量含む 締まりあり
5 暗褐色土層 : ロームブロック多量含む 固く締まっている
人為的埋床土
SK 102
1 極暗褐色土層 : 焼土粒子・炭化物少量含む

第346図 土壌(1)



第347図 土壌(2)

第362図32・第372図361が出土遺物である。32はキャタピラ文がみられる勝坂Ⅱ式である。361は玦状耳飾りの破片である。長さ1.87cm、幅14.46cm、厚さ7.98cm、重さ2.11gである。石材は黄白色の滑石である。

第129号土壙（第347図）

T - 3グリッドに位置する。長径1.12m、短径0.83mの楕円形で、深さは0.19mである。主軸方向はN - 41° - Eを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第135号土壙（第347・362図）

O - 14グリッドに位置する。第136号土壙を壊しており、第137号土壙に壊されている。長径0.68m、短径約0.7mの楕円形の土壙とみられ、深さは0.25mである。主軸方向はN - 33° - Wを指す。

壁の立ち上がりはやや急で、底面は中央が下がる。北西壁際に2つの小ピットを伴っている。

第362図33の土器片が出土した。深鉢胴部で、縦位の撚糸文を施文する。勝坂式末～加曾利E I式と考えられる。

第136号土壙（第347・362図）

O - 14グリッドに位置する。第135・137号土壙に壊されている。長径0.8mの楕円形の土壙とみられ、深さは0.44mである。主軸方向はN - 25° - Eを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は南東方向へと下がっている。

第362図34・35が出土遺物である。縦位の撚糸文と0段多条の縄文がみられ、勝坂式末～加曾利E I式の土器とみられる。

第138号土壙（第347・362図）

M - 15グリッドに位置する。第139号土壙に壊されている。長径1.21m、短径0.74mの楕円形で、深さは0.21mである。主軸方向はN - 30° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央が下がっている。

第362図36～38が出土遺物である。37は三角押

し文を施文する勝坂I式である。

第139号土壙（第347・362図）

M - 15グリッドに位置する。第138号土壙を壊している。長径1.81m、短径1.28mの楕円形で、深さは0.43mである。主軸方向はN - 15° - Wを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は中央が下がっており、北側がテラス状に張り出す二段の掘り込みを持つ。

第362図39・40が出土遺物で、いずれも勝坂式末～加曾利E I式期の土器と考えられる。

第140号土壙（第349・362図）

M - 15グリッドに位置する。第211・212号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.47m、短径1.32mの楕円形で、深さは、0.53mである。主軸方向はほぼ南北を指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦で南がやや下がっている。

第362図41～44が出土遺物で、勝坂I～II式である。

第141号土壙（第347・362図）

M - 15グリッドに位置する。直径0.85mの円形で、深さは、0.31mである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は中央が下がっている。

第362図45・46が出土遺物で、勝坂I式期の土器である。45は角押し文を施文し、胎土に金雲母を含む。

第143号土壙（第347・362図）

M - 15グリッドに位置する。長径0.82m、短径0.8mで、深さは0.22mである。主軸方向はN - 28° - Wを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面中央に小ピットを持つ。

第362図47・48が出土した。47は纖維土器で、48は刻みを持つ隆帶と爪型文を描く諸磧b式である。

第144号土壙（第349・362図）

N - 15・16グリッドに位置する。第149号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。直径0.7

mの不整円形で、深さは0.19mである。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。

第362図49～51が出土遺物である。49は胴上半部が球胴状に張り、口縁直立する深鉢で、勝坂式末の土器である。

第145号土壙（第348・362図）

M - 15グリッドに位置する。第196号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.3m、短径1.25mの不整楕円形で、上下二段の掘り込みを持つ。深さは、0.41mである。主軸方向はN - 17° - Wを指す。

第362図52～54が出土遺物で、勝坂I式およびIII式である。

第149号土壙（第349・363図）

N - 15・16グリッドに位置する。北東壁を第8号住居跡に壞されている。第144号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。長径は計測不能、短径1.06mで、深さは0.47mである。主軸方向は不明である。壁の立ち上がりは比較的急で、南西壁近くに小ピットを伴っている。

第363図55～58が出土遺物で、いずれも勝坂III式と考えられる。

第150号土壙（第347・363図）

N - 16グリッドに位置する。北壁を第8号住居跡に壞されており、また、南西側の大半が調査区域外に存在する。規模は不明ながら楕円形の土壙と考えられ、現存部分の深さは0.27mである。壁は比較的急に立ち上がる。

第363図59の土器片が出土している。縄文のみ施文されるが、諸磯b式であろう。

第152号土壙（第350・363図）

N - 15グリッドに位置する。長径1.23m、短径1.2mの円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 75° - Eを指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

第363図60・61が出土遺物で、勝坂式と考えられる。

第154号土壙（第349・363図）

N - 15グリッドに位置する。南壁を第11号住居跡に壞されている。長径1.13mの楕円形で、深さは0.21mである。主軸方向はN - 87° - Wを指す。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

第363図62～66が出土遺物である。64は胎土に多量の金雲母を含む阿玉台式、他は勝坂式末～加曾利E I式期の土器群と考えられる。

第156号土壙（第349・363図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壞されている。長径1.33m、短径1.19mの楕円形で、深さは0.19mである。主軸方向はN - 74° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は西に向かって傾斜している。

第363図67～70が出土遺物である。67は勝坂I式だが、68・69は諸磯式と考えられる。

第165号土壙（第349・363図）

J - 16グリッドに位置する。長径1.05m、短径0.95mの楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN - 18° - Wを指す。壁は急に立ち上がり、底面は丸底である。

第363図71～73が出土遺物で、いずれも胎土に金雲母を含む阿玉台式である。

第166号土壙（第349・363図）

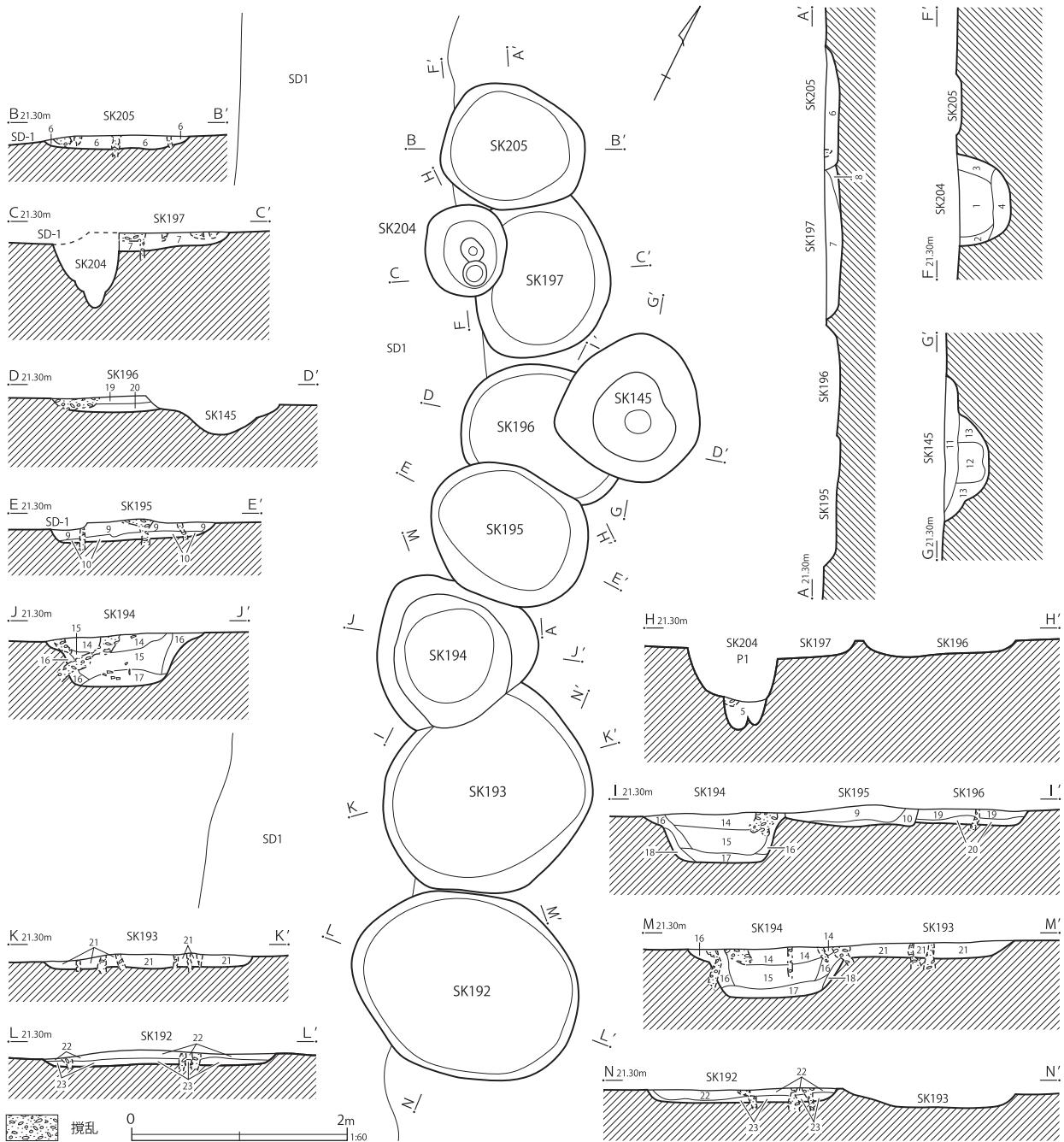
J - 16グリッドに位置する。長径1.5m、短径1.42mの楕円形で、深さは0.29mである。主軸方向はN - 27° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。北壁・南壁に沿ってそれぞれ楕円形の小ピットを伴っているが、切り合いの可能性もある。

第363図74～76が出土遺物で、76が諸磯式、他は勝坂式である。

第172号土壙（第350・363図）

N - 12グリッドに位置する。第173号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.13m、短径約1mの楕円形で、深さは0.25mである。主軸方向はほぼ南北を指す。壁の立ち上がりは比較

S K 145・192～197・204・205

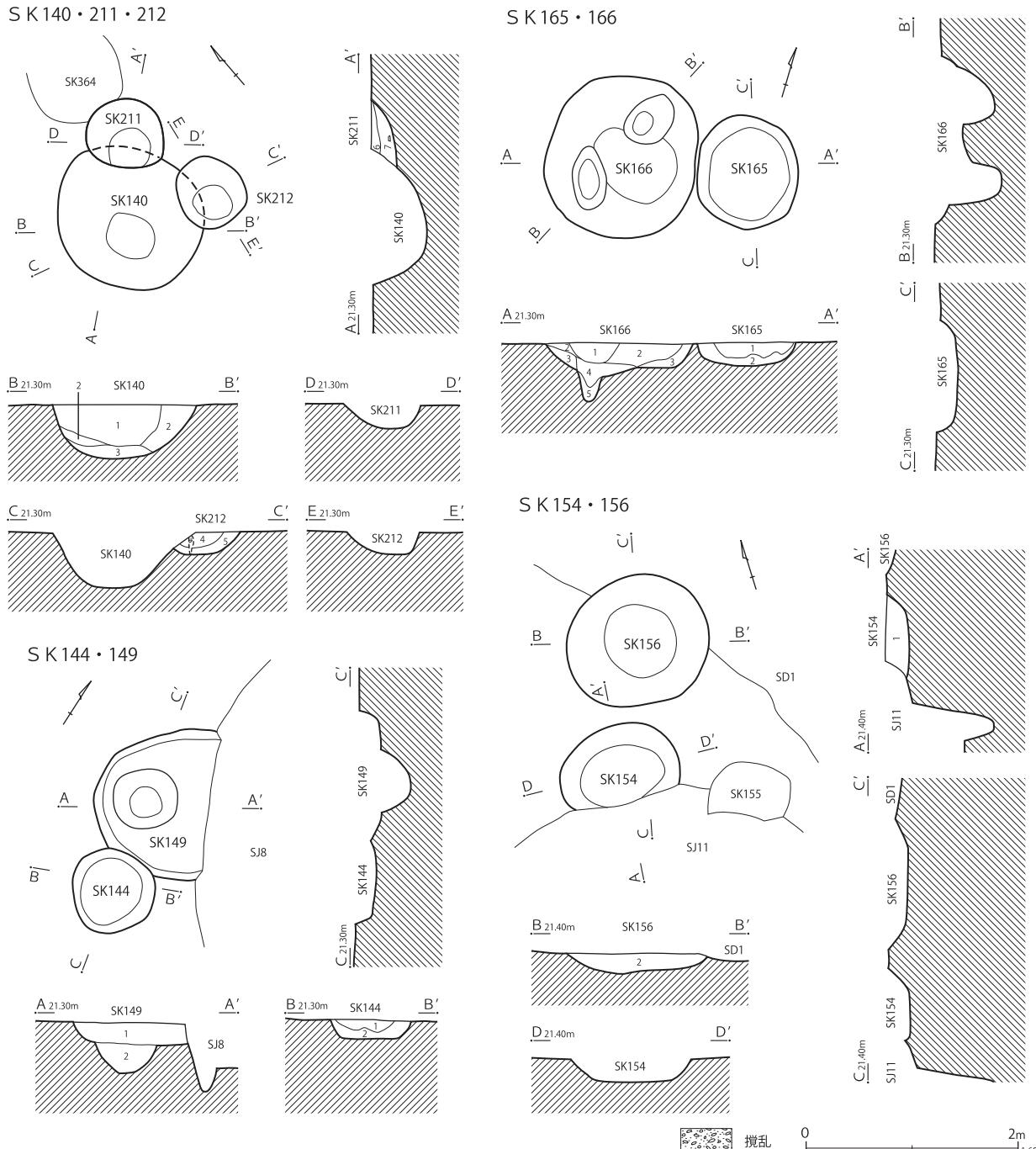


S K 145・192～197・204・205

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子微量含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子少量含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物微量含む
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子微量含む 繊まり弱い
- 6 暗褐色土層 : 粒粗ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 7 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 8 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物粒子微量含む
- 9 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 10 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 11 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む

- 12 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む
- 13 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
- 14 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 15 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物微量 ローム粒子若干含む
- 16 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
- 17 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む
- 18 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む
- 19 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり
- 20 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり
- 21 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物粒子微量含む
- 22 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子少量 炭化物微量含む 粘性あり
- 23 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり

第348図 土壌(3)



SK 140 • 211 • 212

1 暗褐色土層	: ロームブロック若干 炭化物少量含む
2 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子少量含む
3 暗黄褐色土層	: ロームブロック微量 ローム粒子多く含む
4 暗褐色土層	: ローム粒子・白色粒子少量 炭化物粒子微量含む 粘性あり
5 暗褐色土層	: ロームブロック若干 白色粒子微量含む
6 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子 微量含む
7 暗褐色土層	: ロームブロック多く 炭化物粒子・白色粒子微量含む 縮まりなし

SK 144

1 暗褐色土層	: ローム粒子少量含む
2 暗褐色土層	: ロームブロック若干 ローム粒子やや多く含む

SK 149

1 暗褐色土層	: ローム粒子若干含む
2 暗褐色土層	: ロームブロック若干 ローム粒子少量含む

SK 154 • 156

1 暗褐色土層	: ローム粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層	: ローム粒子・炭化物少量含む

SK 165

1 黒褐色土層	: 明褐色土粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
2 明黃褐色土層	: 黑褐色土ブロック少量含む 粘性に欠く 締まり弱い ローム粒子主体とする

SK 166

1 黒褐色土層	: 明褐色土粒子少量 暗橙褐色土粒子微量含む 粘性に欠く 含む 粘性に欠く 締まっている
2 暗褐色土層	: ローム粒子微量 明褐色土粒子多く 暗橙褐色土粒子少量 含む 粘性に欠く 締まっている
3 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子・明褐色土粒子・黒褐色土 粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い 不均一
4 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子・明褐色土粒子 微量含む 粘性に欠く 締まり弱い
5 暗褐色土層	: 暗橙褐色土粒子少量含む 粘性弱い 締まっている

第349図 土壌(4)

的急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第363図77～81が出土遺物で、いずれも勝坂式と考えられる。

第173号土壙（第350・363図）

N - 12グリッドに位置する。第172号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.1m、短径約0.8mで、深さは0.26mである。主軸方向はN - 65° - Wを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第363図82・83が出土遺物で、83は勝坂Ⅲ式である。

第174号土壙（第350・363図）

O - 13グリッドに位置する。長径1.13m、短径0.94mの楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 19° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第363図84の勝坂Ⅲ式の土器片が出土した。

第175号土壙（第350・363図）

O - 13・14グリッドに位置する。長径1.37m、短径1.2mの楕円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 55° - Eを指す。

第363図85・86が出土遺物で、85は撚糸文の胴部で勝坂Ⅲ式～加曾利E I式とみられる。86は勝坂I式である。

第176号土壙（第350・363図）

O - 13グリッドに位置する。長径1.4m、短径1.3mの不整楕円形で、深さは0.17mである。主軸方向は南北を指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦で、中央がやや高くなっている。

第363図87～89が出土遺物である。87は勝坂Ⅱ式、88・89は加曾利E I式であろう。

第177号土壙（第350・358・363図）

O - 14グリッドに位置する。第178号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.37m、短径1.24mの不整楕円形で、深さは0.17mである。

主軸方向はN - 31° - Wを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

遺物は検出面付近を中心に出土した。第363図90～93が出土遺物である。91の諸磯b式以外は勝坂I式期の土器である。

第178号土壙（第350・358・364図）

O - 14グリッドに位置する。第177号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.81m、短径約1.4mの楕円形ないし隅丸長方形で、深さは0.22mである。主軸方向はN - 19° - Wを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

遺物は検出面付近を中心に出土した。第364図94～103が出土遺物で、勝坂式の各時期と加曾利E I式が混在する。

第179号土壙（第350・358・364図）

O - 13グリッドに位置する。第180号土壙を壊している。長径1.95m、短径1.41mの楕円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 45° - Wを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦で、やや南東側に傾斜している。

第364図104～108が出土遺物で、主体は勝坂Ⅲ式である。

第180号土壙（第350・358・364図）

O - 13・14グリッドに位置する。第179号土壙に壊されている。長径1.7m、短径1.08mの楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 83° - Wを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第364図109～113が出土遺物である。109は勝坂I～II式期の浅鉢、110は同時期の小突起である。

第181号土壙（第351・364図）

N - 13グリッドに位置する。長径1.3m、短径1.13mの楕円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 81° - Eを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦である。耕作による攪乱が著しい。

第364図114・115が出土遺物で、加曾利E I式であろう。

第182号土壙（第351・364図）

N - 13グリッドに位置する。第183号土壙を壞している。長径1.1m、短径0.93mの楕円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 15° - Eを指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦で中央がやや下がっている。耕作による攪乱が著しい。

第364図116～118が出土遺物で、主体は加曾利E I式と考えられる。

第183号土壙（第351・364図）

N - 13グリッドに位置する。第182号土壙に壞されている。長径1.32m、短径1.17mの楕円形で、深さは0.1mである。主軸方向はN - 32° - Wを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。耕作による攪乱が著しい。

第364図119～121が出土遺物で、加曾利E I式であろう。

第184号土壙（第351・364図）

N - 13グリッドに位置する。長径1.9m、短径1.52mで、深さは0.15mである。主軸方向はほぼ南北を指す。

第364図123～128が出土遺物で、勝坂II～III式と加曾利E I式が混在する。

第185号土壙（第351・364図）

N - 14グリッドに位置する。長径1.01m、短径0.76mの隅丸長方形で、深さは0.15mである。主軸方向はN - 35° - Wを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦である。

第364図122の土器片が出土した。加曾利E I式と考えられる。

第186号土壙（第351・359・364図）

O - 14グリッドに位置する。プランの南東側ほぼ二分の一が調査区域外に存在する。長径計測不能、短径1.77mの楕円形であると思われ、深さは0.47mである。主軸方向は不明である。上下二段の掘り込みを持ち、壁の立ち上がりは比較的急で、底面は丸底である。

遺物は検出面付近を中心に出土した。第364図

129～139が出土遺物で、勝坂III式が主体である。

第187号土壙（第351・365図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壞されている。長径1.32m、短径1.18mの楕円形で、深さは0.22mである。主軸方向はN - 12° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦でやや南に下がる。北端部に小ピットを有する。

第365図140～144が出土遺物で、144以外は諸磯b式と考えられる。

第188号土壙（第351・365図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壞されており、第189号土壙を壞している。長径1.65m、短径1.07mの楕円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 65° - Eを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第365図145～148の土器片が出土した。勝坂式末～加曾利E I式と考えられる。第372図364は撥形の打製石斧である。長さ7.9cm、幅5.3cm、厚さ2.1cm、重さ88.54gである。石材はシルト岩である。

第189号土壙（第351図）

N - 15グリッドに位置する。第188号土壙・第1号溝跡に壞されている。長径1.26m、短径1.15mの不整楕円形で、深さは0.15mである。主軸方向はN - 34° - Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦でやや南側に傾斜している。

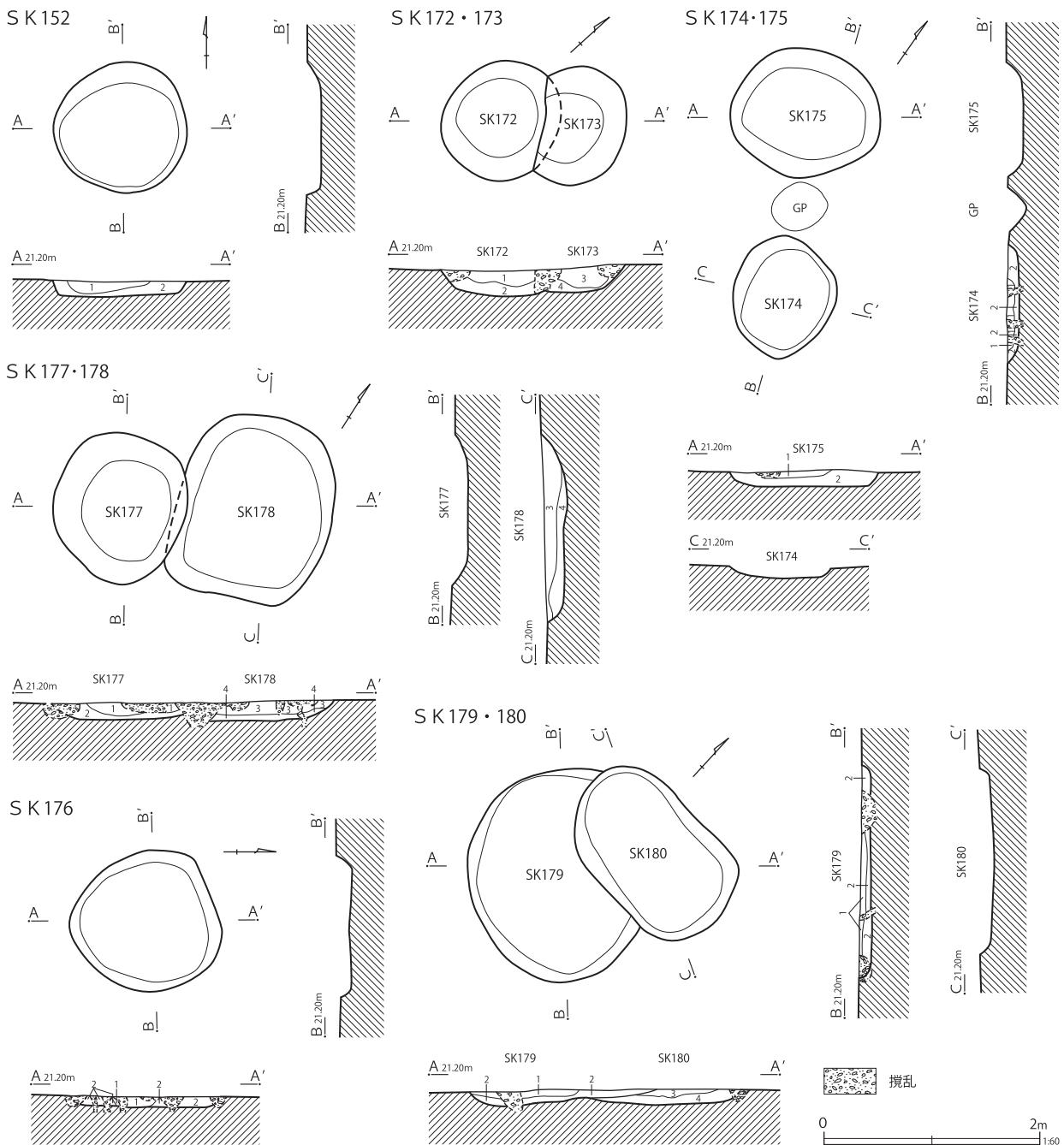
第190号土壙（第352・365図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壞されている。直径1.4mの円形ないし隅丸方形で、深さは0.5mである。主軸方向はN - 45° - Eを指す。上下二段の掘り込みを持ち、中央が長楕円形のピット状になっている。

第365図149・150が出土遺物で、勝坂II式と考えられる。

第191号土壙（第352・365図）

O - 13グリッドに位置する。長径1.67m、短径



S K 152

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 暗橙色粒子微量含む
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 暗橙色粒子微量含む

S K 172・173

- 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 燃土ブロック・炭化物微量含む
- 2 暗黄褐色土層 : ローム粒子やや多く 炭化物微量含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干 炭化物微量含む
- 4 暗黄褐色土層 : ローム粒子やや多く 炭化物微量含む

S K 174・175

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり 締まっている
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり 締まっている

S K 176

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック少含む 締まっている 粘性あり
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む

S K 177・178

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり 締まっている
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物粒子微量含む 粘性あり
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子微量含む 粘性あり

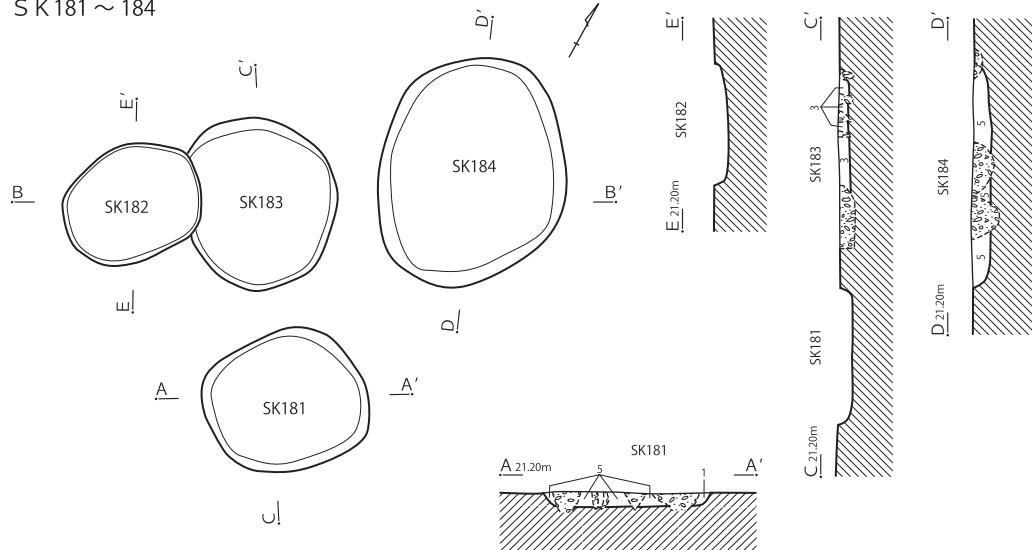
S K 179・180

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物粒子少量含む 粘性あり
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子少量含む 粘性あり
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 粘性あり 締まっている
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 粘性あり 締まっている

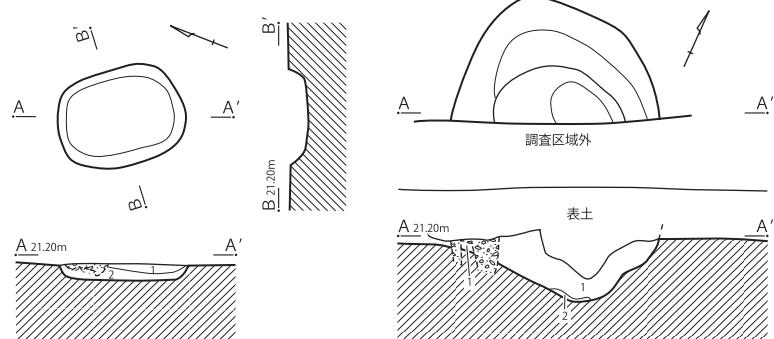
搅乱

第350図 土壌(5)

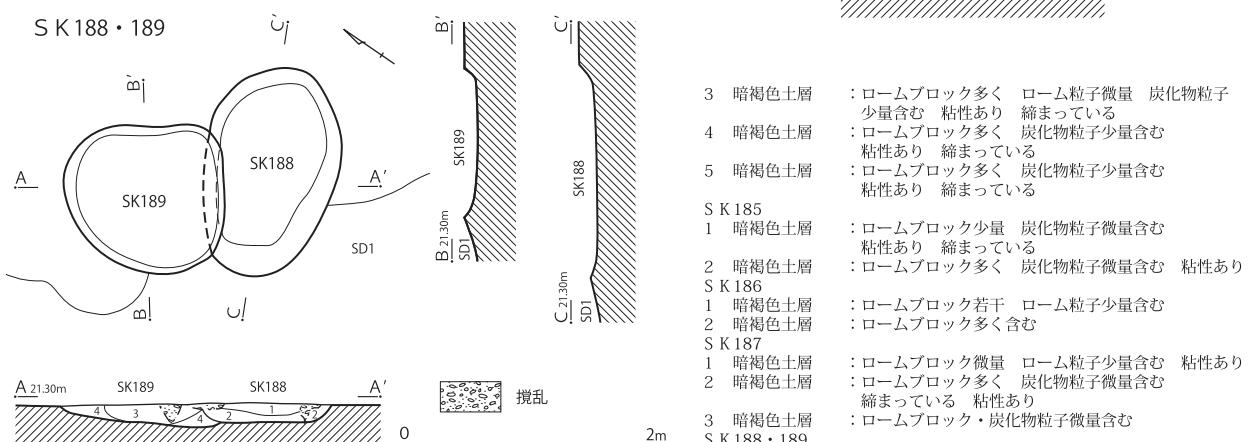
SK181 ~ 184



SK185



SK188・189



SK181 ~ 184

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子微量 炭化物少量含む
粘性あり 締まっている
2 暗褐色土層 : ロームブロック非常に多く 炭化物粒子微量含む
粘性あり

- 3 暗褐色土層 : ロームブロック多く ローム粒子微量 炭化物粒子少量含む 粘性あり 締まっている
4 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子少量含む
粘性あり 締まっている
5 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子少量含む
粘性あり 締まっている
SK185
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物粒子微量含む
粘性あり 締まっている
2 暗褐色土層 : ロームブロック多く 炭化物粒子微量含む 粘性あり
SK186
1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子微量含む
ロームブロック多く 含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック多く 含む
SK187
1 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子微量含む 粘性あり
ロームブロック多く 炭化物粒子微量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック微量 粘性あり
ロームブロック多く 含む
SK188・189
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む
粘性あり
2 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物微量含む 粘性あり
3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 粘性あり
ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物微量含む
4 暗褐色土層 : ロームブロック微量 粘性あり
ロームブロック非常に多く 炭化物粒子微量含む 粘性あり

第351図 土壌(6)

0.87mの楕円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 76° - Eを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦で東へと傾斜している。

第365図152・153が出土遺物で、勝坂式である。

第192号土壙（第348・365図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されている。長径2.15m、短径1.73mの楕円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 84° - Eを指す。壁は緩やかに立ちあがり、底面は平坦でやや西へと傾斜している。

第365図151の土器片が出土した。勝坂式末の土器であろう。

第193号土壙（第348・365図）

M・N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されている。また、第194号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。長径2.05m、短径1.78mの楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN - 48° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦で南西側がやや下がっている。

第365図154～156が出土遺物である。勝坂式末～加曾利E I式期の土器であろう。

第194号土壙（第348・360・361・365図）

M - 15グリッドに位置する。第195号土壙・第1号溝跡に壊されている。また、第193号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。直径約1.5mの不整円形で、深さは0.49mである。主軸方向はN - 47° - Wを指す。鍋底状の掘り込みで、検出面付近が漏斗状に開いている。底面は平坦である。

遺物は覆土の下層にまとまって出土した。第361図1は水平口縁の深鉢である。復元最大径は約20.1cm、現存高は約15.5cmである。口縁と胴部中段に区画帯を持ち、内部は鋸歯状の隆帯により三角形の区画文を構成する。隆帯に沿って爪型文列が巡り、波状の沈線を描く。胎土はシルト質、雲母粒子少量を含む。器壁は外面暗褐色、内面黒

褐色である。焼成は比較的良好。

第365図157～168は破片資料で、主体は勝坂II式である。

第195号土壙（第348・360・361・366図）

M - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されており、第194・196号土壙を壊している。長径1.58m、短径1.21mの楕円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 88° - Wを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦で西へと緩やかに傾斜している。

遺物は検出面付近を中心に出土した。第361図2は小型の深鉢胴部である。復元最大径は約14cm、現存高は約5.7cmである。二本隆帯による横帯区画内部を対弧状の隆帯で区切って楕円形の区画を構成する。下方にはY字状の隆帯による懸垂文が垂下するものとみられる。隆帯の側縁には爪型文を施文する。胎土に多量の砂、シルトを含む。器壁は灰橙色である。焼成はやや不良である。

第366図169～188は破片資料で、勝坂II式が主体である。

第196号土壙（第348・366図）

M - 15グリッドに位置する。第195号土壙・第1号溝跡に壊されている。また、第145号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。長径約1.6m、短径約1.1mの楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 75° - Eを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第366図189～190の土器片が出土している。

第197号土壙（第348・366図）

M - 15グリッドに位置する。第205号土壙・第1号溝跡に壊されている。また、第204号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。長径1.55m、短径約1.3mの楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 27° - Wを指す。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦で中央がやや下が

っている。

第366図191・192が出土遺物で、角押し文の勝坂I式と金雲母を含む阿玉台式である。

第198号土壙（第352図）

N - 15グリッドに位置する。長径1.32m、短径1.18mの楕円ないし隅丸方形で、深さは0.07mである。主軸方向はN - 82° - Wを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦である。

第199号土壙（第352図）

N - 15グリッドに位置する。長径0.87mの不整円形で、深さは0.31mである。主軸方向はN - 61° - Eを指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第200号土壙（第352・366図）

M - 14・15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されており、第201号土壙を壊している。長径1.68m、短径1.64mの不整楕円形で、深さは0.17mである。主軸方向はN - 46° - Wを指す。壁は比較的急に立ち上がり、底面は平坦で、中央がやや下がっている。

第366図193～196が出土遺物で、勝坂式末～加曾利E I式と考えられる。

第201号土壙（第352・366図）

M - 14グリッドに位置する。第200号土壙・第1号溝跡に壊されている。直径約1mの不整楕円形の土壙とみられ、深さは0.12mである。主軸方向は不明である。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第366図197～199が出土遺物である。

第202号土壙（第352図）

N - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されている。長径1.03m、短径0.95mの楕円形で、深さは0.11mである。主軸方向はN - 52° - Wを指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦でやや南東に下がっている。

第204号土壙（第348図）

M - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊さ

れている。また、第197号土壙とも重複するが、新旧関係は不明である。長径0.85m、短径0.75mの楕円形で、深さは0.76mである。主軸方向はN - 29° - Wを指す。壁は急に立ち上がり、底面は主軸線上南東寄りの2か所がピット状に落ち込んでいる。

第205号土壙（第348図）

M - 15グリッドに位置する。第1号溝跡に壊されており、第197号土壙を壊している。長径1.31m、短径1.12mの楕円形で、深さは0.13mである。主軸方向はN - 63° - Eを指す。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は平坦である。

第206号土壙（第352図）

N - 12グリッドに位置する。直径1.05mの円形で、深さは0.1mである。主軸方向はN - 21° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。

第207号土壙（第352・366図）

N - 12グリッドに位置する。長径1.26m、短径1.05mの不整楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 84° - Wを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦で、やや東に傾斜している。

第366図200・201の土器片が出土した。

第208号土壙（第353・367図）

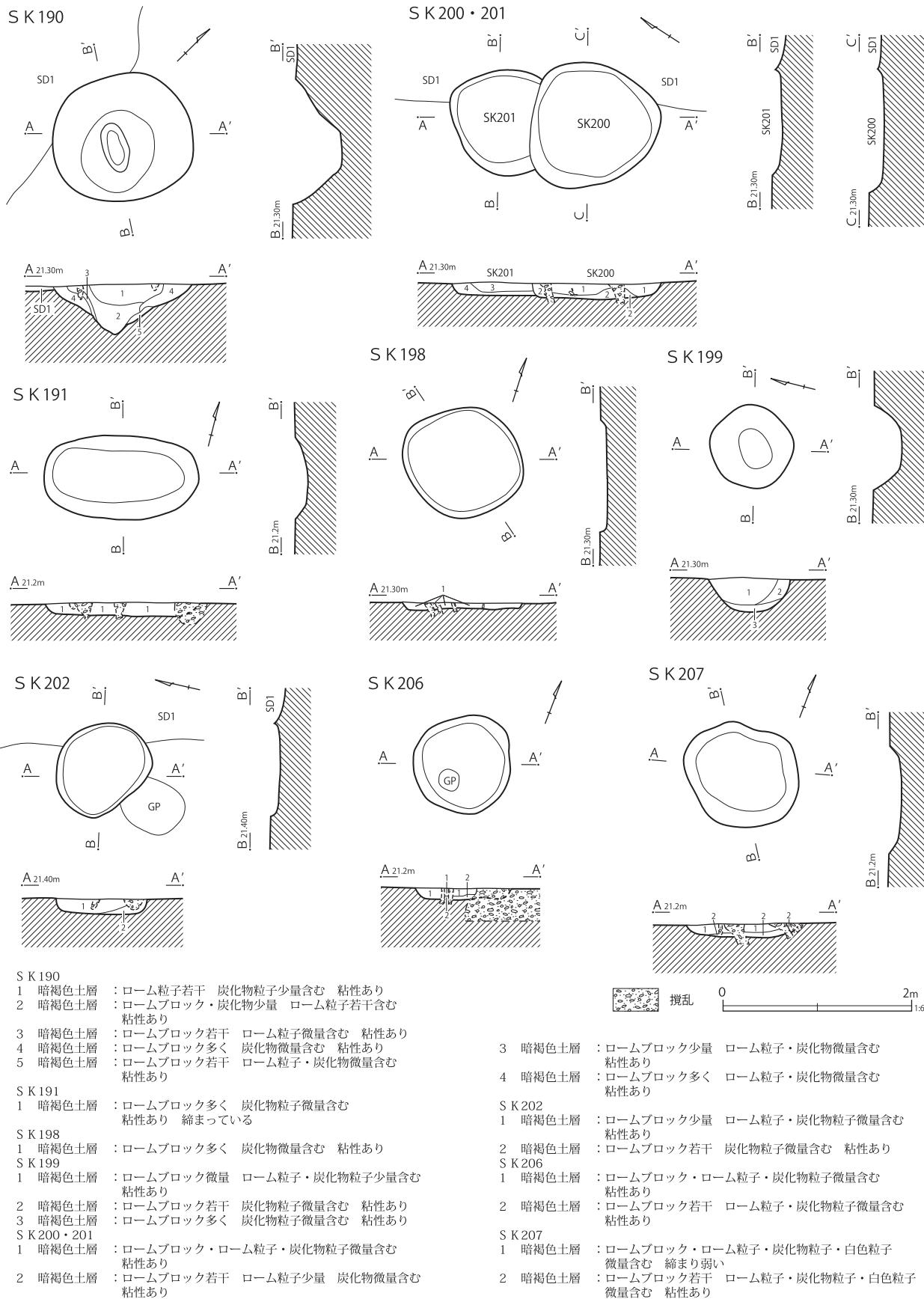
N - 12グリッドに位置する。長径1.07m、短径0.92mの不整楕円形で、深さは0.14mである。主軸方向はN - 8° - Eを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は南西に傾斜している。

第367図202・203が出土遺物で、勝坂II～III式である。

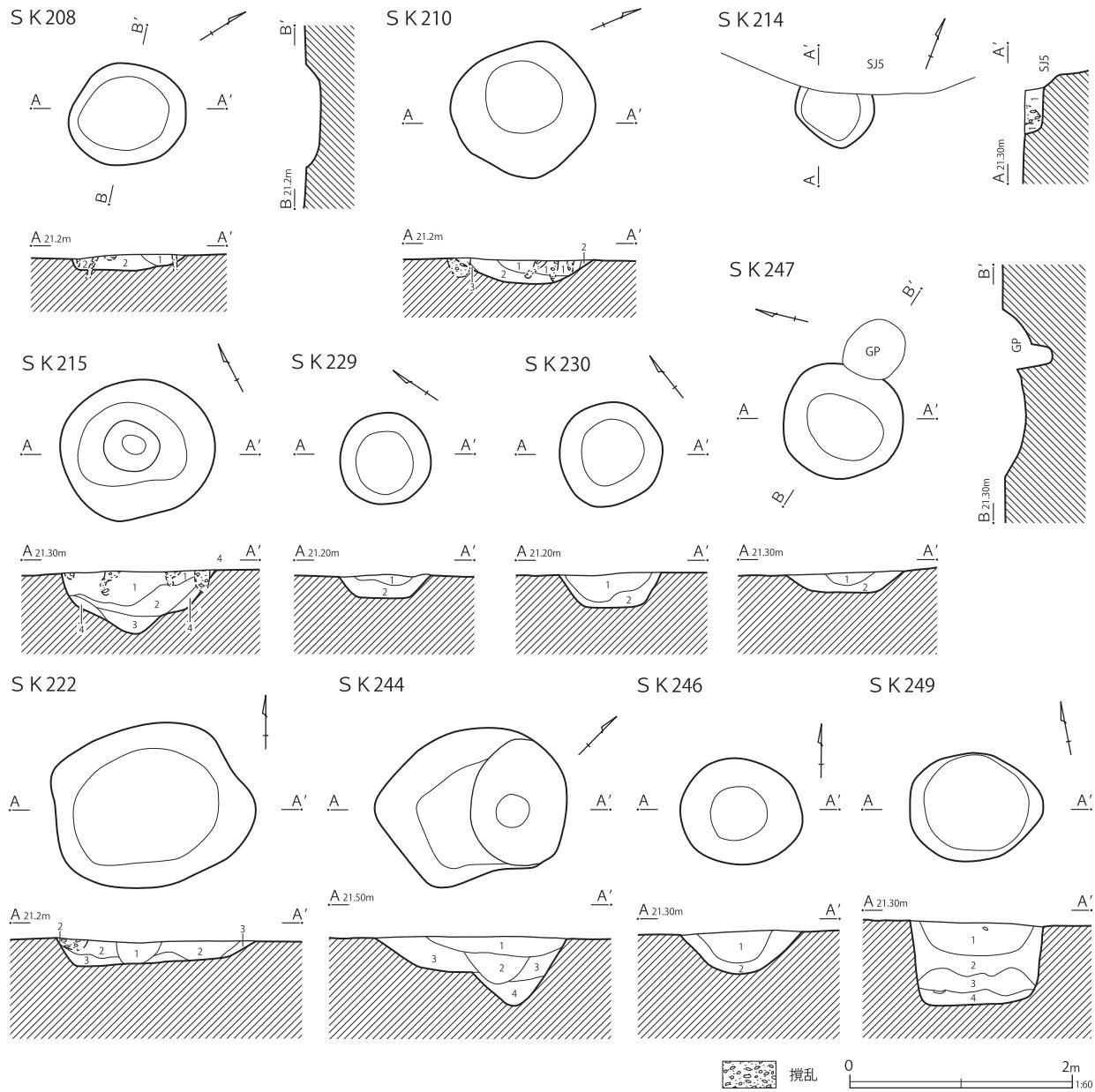
第210号土壙（第353・359・367図）

N - 12グリッドに位置する。長径1.23m、短径1.15mの不整楕円形で、深さは0.27mである。主軸方向はN - 17° - Eを指す。丸底の土壙で、壁は緩やかに立ち上がる。

第367図204～210が出土遺物で、勝坂式末～加



第352図 土壌 (7)



S K 208	1 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子微量含む 粘性あり	S K 230	1 暗褐色土層	: 明褐色粒子少量 明橙褐色粒子・浅間Aわずかに含む
2 暗褐色土層	: ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子微量含む 粘性あり	2 暗褐色土層	: 明褐色粒子多く 浅間A少量含む 粘性を欠く 締まり弱い		
S K 210	1 黒褐色土層	: ローム粒子微量 白色粒子少量含む 粘性あり	S K 244	1 暗褐色土層	: ロームブロック多く 炭化物わずかに含む 締まっている
2 暗褐色土層	: ロームブロック・白色粒子少量 ローム粒子・炭化物粒子微量含む 粘性あり	2 暗褐色土層	: 焼土粒子少量 炭化物わずかに含む 締まっている		
3 暗褐色土層	: ロームブロック若干 ローム粒子・炭化物粒子・白色粒子微量含む 粘性あり	3 暗褐色土層	: ロームブロック多く 炭化物わずかに含む 締まっている		
S K 214	1 極暗褐色土層	: ローム粒子少量 燃土粒子・炭化物微量含む 粘性あり	S K 246	1 暗褐色土層	: 炭化物わずかに含む 締まっている
S K 222	1 暗褐色土層	: 粗粒ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む	2 暗褐色土層	: ロームブロック少量 燃土粒子微量 炭化物少量含む	
2 暗褐色土層	: ロームブロック少量 ローム粒子・炭化物微量含む	S K 247	1 暗褐色土層	: ロームブロック少量 燃土ブロック微量 炭化物少量含む	
3 暗黃褐色土層	: ロームブロック多く ローム粒子・炭化物微量含む 締まりなし	2 暗黃褐色土層	: ロームブロック多く 炭化物少量含む 粘性あり		
S K 229	1 暗褐色土層	: 明褐色粒子少量 暗橙褐色粒子わずかに含む 粘性を欠く 締まり弱い	S K 249	1 暗褐色土層	: ローム粒子・燃土粒子少量 炭化物多く含む
2 暗褐色土層	: 明黃褐色粒子(ローム) 少量 明褐色粒子多く含む 粘性弱い 締まり弱い	2 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む		
		3 黒褐色土層	: ローム粒子多く 燃土粒子少量 炭化物多く含む		
		4 暗黃褐色土層	: ロームブロック・炭化物少量含む		

第353図 土壌(8)

曾利E I式であろう。

第211号土壙（第349・367図）

M - 15グリッドに位置する。第140号土壙・第364号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。直径0.7mの円形で、深さは0.24mである。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。

第367図211の勝坂I式が出土している。

第212号土壙（第349・367図）

M - 15グリッドに位置する。第140号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。長径0.67m、短径0.59mの楕円形で、深さは0.21mである。主軸方向はN - 9° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面はやや北に傾斜している。

第367図212の勝坂式が出土している。

第214号土壙（第353・367図）

M - 13グリッドに位置する。第5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。長径0.7mの楕円形で、深さは0.17mである。主軸方向はN - 72° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。

第367図213～216が出土遺物で勝坂式末～加曾利E I式であろう。

第215号土壙（第353・359・367図）

M - 13グリッドに位置する。長径1.35m、短径1.23mの楕円形で、深さは0.6mである。主軸方向はN - 62° - Wを指す。壁の立ち上がりは急である。底面は丸底で、中央がピット状に下がっている。遺物は検出面付近を中心に出土した。第367図217～224が出土遺物で、勝坂式末～加曾利E I式が主体である。

第222号土壙（第353・367図）

O - 12グリッドに位置する。長径1.78m、短径1.45mの不整楕円形で、深さは0.23mである。主軸方向はほぼ東西を指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は西へと傾斜している。

第367図225～230が出土遺物で、勝坂式末～加曾利E I式が主体である。

第229号土壙（第353・367図）

K - 16グリッドに位置する。直径0.8mの円形で、深さは0.21mである。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。

第367図231～235が出土遺物で、加曾利E I式である。

第230号土壙（第353・368図）

K - L - 16グリッドに位置する。直径0.9mの円形で、深さは0.31mである。主軸方向はN - 56° - Eを指す。壁の立ち上がりは比較的急で、底面は平坦である。

第368図236～243が出土遺物で、勝坂II式が主体である。

第244号土壙（第353・368・372図）

L - 18グリッドに位置する。長径1.57m、短径1.42mの不整楕円形で、深さは0.62mである。主軸方向はN - 46° - Eを指す。

上下二段の掘り込みを持ち、南西寄りの部分がテラス状に張り出している。壁の立ち上がりは比較的急である。

第368図244の土器片と、第372図360の石鎌が出土した。360は凹基だが、全長に対し返し部分が極端に短かく、石錐の可能性もある。長さ3.1cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.35gである。石材はチャートである。

第246号土壙（第353・368図）

K - L - 17グリッドに位置する。長径1.1m、短径0.94mで、深さは0.38mである。主軸はほぼ東西を指す。

第368図245～249が出土遺物で、勝坂II式が主体である。

第247号土壙（第353・368図）

L - 17グリッドに位置する。直径1.05mの円形で、深さは0.21mである。主軸方向はN - 17° - Eを指す。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第368図250～253が出土遺物で、勝坂式であ

る。

第249号土壙（第353・368・372図）

K - 17・18グリッドに位置する。長径1.18m、短径1mの楕円形で、深さは0.75mである。主軸方向はN - 80° - Wを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、やや西へと傾斜している。

第368図255～272、第372図363が出土遺物である。土器片は、255の勝坂Ⅲ式以外は大半が加曾利E I式期の土器と考えられる。363は打製石斧で、刃部を折損する。長さ8cm、幅4.3cm、厚さ1.9cm、重さ86.36gである。背面の自然面に擦痕が観察され、磨石を転用した可能性がある。石材は結晶片岩である。

第250号土壙（第354・368図）

K - 17・18グリッドに位置する。第251号土壙を壊している。長径1.56m、短径1.27mの楕円形で、深さは0.23mである。主軸方向はN - 62° - Eを指す。壁の立ち上がりはやや急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第368図254の加曾利E I式が出土している。

第251号土壙（第354・369図）

K - 18グリッドに位置する。第250号土壙に壊されている。長径1.49m、短径1.01mの不整楕円形で、深さは0.49mである。主軸方向はN - 36° - Eを指す。丸底の土壙で、壁は比較的緩やかに立ち上がる。北東側の壁際に3基の小ピットが存在する。

第369図273～276が出土遺物である。いずれも諸磣a式であろう。

第252号土壙（第356図）

K - 17グリッドに位置する。直径0.89mの円形で、深さは0.27mである。円錐形の掘り込みで、壁はなだらかに立ち上がる。

第254号土壙（第354・369図）

K - 18グリッドに位置する。長径1.17m、短径0.9mの楕円形で、深さは0.11mである。主軸方向はN - 84° - Eを指す。壁はなだらかに立ち上

がり、底面は平坦である。東壁際に深さ0.59mの小ピットが存在する。

第369図277・278が出土遺物で、勝坂式である。

第256号土壙（第354・369図）

K - 17グリッドに位置する。直径0.9mの円形で、深さは0.22mである。丸底の土壙で、壁はなだらかに立ち上がる。

第369図279～284が出土遺物で、勝坂Ⅱ式が主体である。

第260号土壙（第354・361・369・372図）

K - 18グリッドに位置する。長径1m、短径0.88mの楕円形で、深さは0.39mである。主軸はほぼ東西を指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦である。

第361図3、第369図285～289、第372図365・366が出土遺物である。

3は曾利系の土器で、水平口縁の深鉢口縁部である。復元最大径は約30cm、現存高は約10.7cmである。

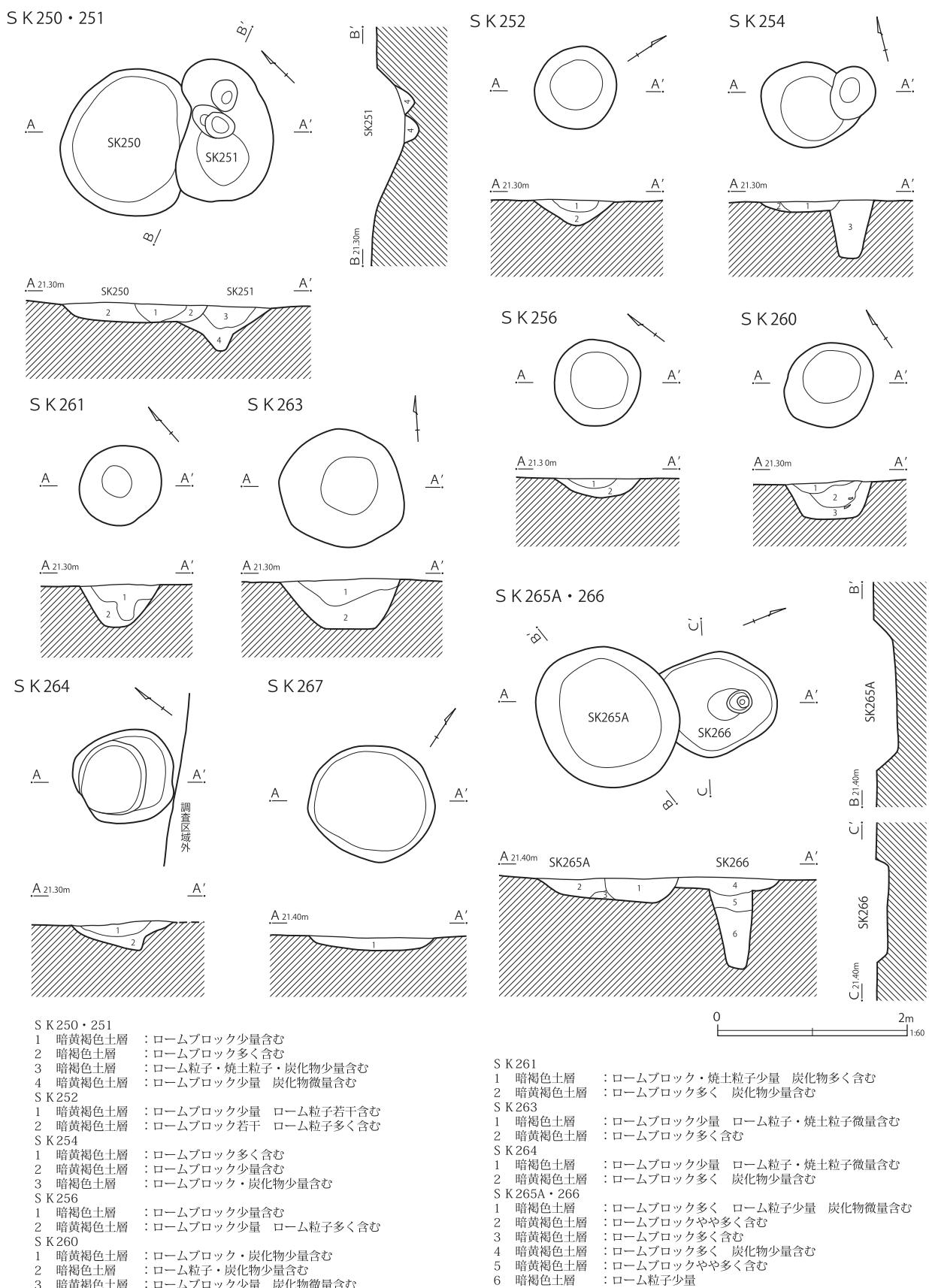
無文の口縁部で、頸部に2条の隆帯が巡り、胴部には撚糸文を施文する。胎土はややシルト質で、器壁は外面暗茶褐色、内面暗橙色である。焼成は良い。内面に二次焼成がみられ、炉体土器として使用されていた可能性がある。

285～289は破片遺物で、加曾利E I式と考えられる。

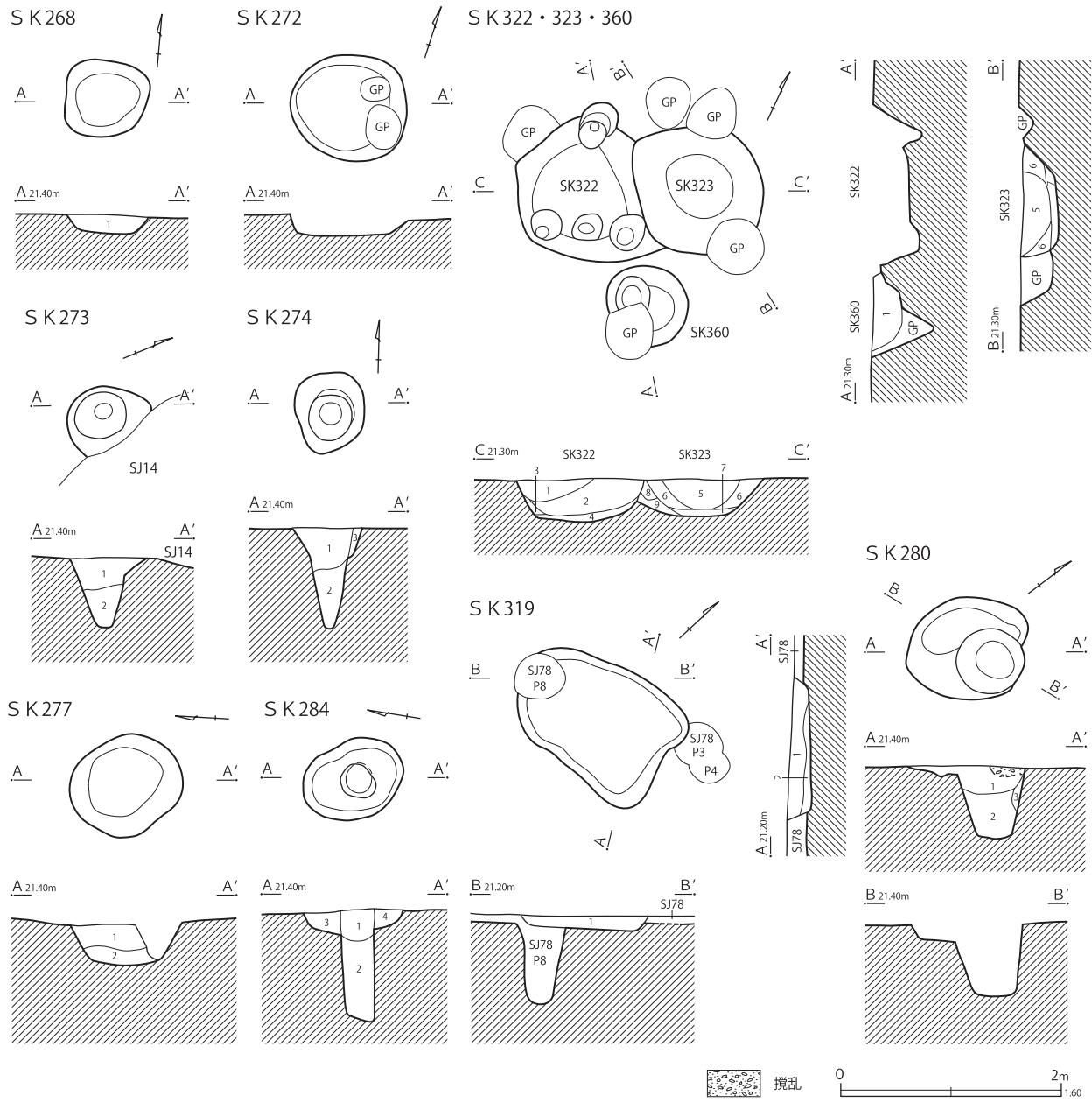
365は短冊形の打製石斧である。長さ11.4cm、幅4.1cm、厚さ2.6cm、重さ143.36gである。石材はシルト岩である。366は磨石である。両面を使用している。左側縁上方に剥離が集中する部分があり、叩き石としても使用されたと考えられる。長さ12.5cm、幅4.4cm、厚さ2.8cm、重さ204.9gである。石材は砂岩である。

第261号土壙（第354・372図）

K - 18グリッドに位置する。直径0.88mの円形で、深さは0.43mである。主軸方向はほぼ東西を



第354図 繩文土壤(9)



SK 268
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く含む

SK 273
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少々 炭化物若干 焼土粒子ごく少量含む

2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子ごく少量 炭化物少々 焼土粒子ごく少量含む

SK 274
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物ごく少量含む

2 暗褐色土層 : ロームブロックごく少量 ローム粒子少量 炭化物ごく少含む

3 黄褐色土層 : ローム粒子ごく少量 炭化物少量含む

SK 277
1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む

2 暗褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 炭化物少量含む

SK 280
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少々 ローム粒子若干含む

2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む

3 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む

SK 284
1 暗褐色土層 : ロームブロックごく少量 ローム粒子若干 烧土粒子ごく少量含む

2 極暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物ごく少量 烧土粒子少量含む

3 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少々 烧土粒子ごく少量含む

4 黄褐色土層 : ロームブロック少々 ローム粒子ごく少量含む

SK 319
1 黒褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子・炭化物少々含む

2 明褐色土層 : ロームブロックわずか ローム粒子多く 烧土粒子・炭化物わずかに含む

SK 322
1 暗褐色土層 : 烧土粒子多く 炭化物わずかに含む

2 黑褐色土層 : ロームブロックわずか 烧土粒子多く 炭化物わずかに含む

3 茶褐色土層 : 烧土粒子少々 炭化物わずかに含む

4 明褐色土層 : 烧土粒子わずか 黑色土粒子少々含む

SK 323
5 黑褐色土層 : 烧土粒子わずか 炭化物微量含む

6 暗褐色土層 : 烧土微粒子多く 炭化物微量含む

7 明褐色土層 : 暗褐色粒子多く含む

8 明茶褐色土層 : 暗褐色粒子少々含む

9 明黄褐色土層 : 暗褐色粒子少々含む

SK 360
1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 烧土粒子わずかに含む

第355図 繩文土壤(10)

指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第372図367が出土遺物で、短冊形の打製石斧である。刃部を折損する。長さ9.9cm、幅4.6cm、厚さ1.9cm、重さ120.43gである。石材は結晶片岩である。

第263号土壙（第354・369図）

L - 18グリッドに位置する。長径1.33m、短径1.21mの不整橜円形で、深さは0.53mである。主軸方向はN - 55° - Wを指す。壁の立ち上がりはやや急で、底面は平坦である。

第369図290～292が出土遺物で、勝坂I～II式である。

第264号土壙（第354・369図）

M - 18グリッドに位置する。長径1.03m、短径0.97mの不整橜円形で、南東側の壁がテラス状に張り出している。深さは0.26mである。主軸方向はN - 37° - Wを指す。壁はなだらかに立ち上がり、底面は南東側へと傾斜している。

第369図293の阿玉台II式が出土した。

第265A号土壙（第354・361・369図）

M - 17グリッドに位置する。第266号土壙を壊している。長径1.55m、短径1.39mの橜円形で、深さは0.27mである。主軸方向はN - 73° - Eを指す。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦で東へと傾斜している。

第361図4・第369図294～304が出土遺物である。

4は勝坂III式である。水平口縁の深鉢で、頸部から下を欠失する。復元最大径は約16.9cm、現存高は約9.1cmである。口縁下が球胴状に張り出し、頸部にくびれを持つキャリパー状の器形である。キャタピラ文を伴う隆帯による横S字状のモチーフを描き、これに沿って刻みを伴う隆帯が巡る。胎土はややシルト質である。器壁は暗黄褐色である。焼成は比較的良好。

294～304は破片遺物である。勝坂II～III式と加

曾利E I式が混在している。

第266号土壙（第354・370図）

M - 17グリッドに位置する。第265 A号土壙に壊されている。長径1.13m、短径1.04mの不整橜円形で、深さは0.12mである。主軸方向はN - 22° - Eを指す。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦で、中央に深さ0.94mの小ピットが存在する。

第370図305の破片が出土している。縄文のみの破片だが、諸磯式と考えられる。

第267号土壙（第354・370図）

L - M - 18グリッドに位置する。長径1.3m、短径1.24mの橜円形で、深さは0.15mである。主軸方向はN - 57° - Eを指す。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央が下がっている。

第370図306の無文の土器片が出土した。

第268号土壙（第355図）

M - 17グリッドに位置する。長径0.84m、短径0.73mの不整橜円形で、深さは0.16mである。主軸方向はN - 55° - Eを指す。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦で東へと傾斜している。

第272号土壙（第355図）

M - 17・18グリッドに位置する。長径1.03m、短径0.96mの橜円形で、深さは0.19mである。主軸方向はN - 73° - Eを指す。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

第273号土壙（第355・370・372図）

M - 17グリッドに位置する。第14号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。長径0.77m、短径0.58mの橜円形で、深さは0.65mである。主軸方向はほぼ南北を指す。壁は急に立ち上がって北東～東壁が漏斗状に開き、底面は平坦である。

第370図308～318、第372図368が出土遺物である。308～318は土器破片で、勝坂式の各時期が混在する。368は短冊形の打製石斧である。背面に広く自然面を残す。長さ11.7cm、幅4.6cm、厚さ1.6cm、重さ122.28gである。石材は砂岩で

ある。

第274号土壙（第355・370図）

M - 17グリッドに位置する。長径0.85m、短径0.63mの楕円形で、深さは0.93mである。主軸方向はN - 20° - Eを指す。壁は急に立ち上がり、検出面付近で漏斗状に開いている。

第370図307の浅鉢洞部が出土した。

第277号土壙（第355図）

L - 18グリッドに位置する。長径1.01m、短径0.92mの楕円形で、深さは0.44mである。主軸方向はN - 30° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦で中央がやや下がっている。

第280号土壙（第355・370図）

J・K - 18グリッドに位置する。長径1.08m、短径0.91mで、深さは0.2mである。主軸方向はN - 15° - Eを指す。壁の立ち上がりはやや急で、東壁寄りに深さ0.66mのピットが存在する。

第370図319～321が出土遺物で、加曾利E I式である。

第284号土壙（第355図）

K - 18グリッドに位置する。長径0.92m、短径0.7mの不整楕円形で、深さは0.2mである。主軸方向はN - 41° - Wを指す。壁は急に立ち上がる。底面は丸底で、中央に深さ0.93mのピットが存在する。

第319号土壙（第355・370図）

K - 15・16グリッドに位置する。第78号住居跡の覆土中に掘りこまれ、床面を壊している。長径1.49m、短径1.12mの不整楕円形で、深さは0.13mである。主軸方向はN - 79° - Eを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦で南東へと下がっている。

第370図322～324が出土遺物で、勝坂式末～加曾利E I式と考えられる。

第322号土壙（第355・370図）

L - 16グリッドに位置する。第323号土壙を壊している。長径1.27m、短径1.17mの不整楕円形

で、深さは0.39mである。主軸方向はN - 8° - Wを指す。壁は急に立ち上がり、底面は平坦で、中央がやや下がっている。壁に沿って4基の小ピットが存在する。

第370図325～331が出土遺物で、勝坂II～III式と考えられる。

第323号土壙（第355・370図）

L - 16グリッドに位置する。第322号土壙に壊されている。長径1.1m、短径1.02mの楕円形で、深さは0.34mである。主軸方向はほぼ東西を指す。壁の立ち上がりは比較的緩やかで、底面は平坦である。

第370図332～334が出土遺物で、勝坂II～III式とみられる。

第324号土壙（第356図）

L - 13グリッドに位置する。第5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。長径1.1m、短径0.9mで、深さは0.19mである。主軸方向はほぼ南北を指す。

壁の立ち上がりは比較的急で、北西壁にテラス状の段差を持つ。底面は平坦で中央がやや下がっている。

第325号土壙（第356・370図）

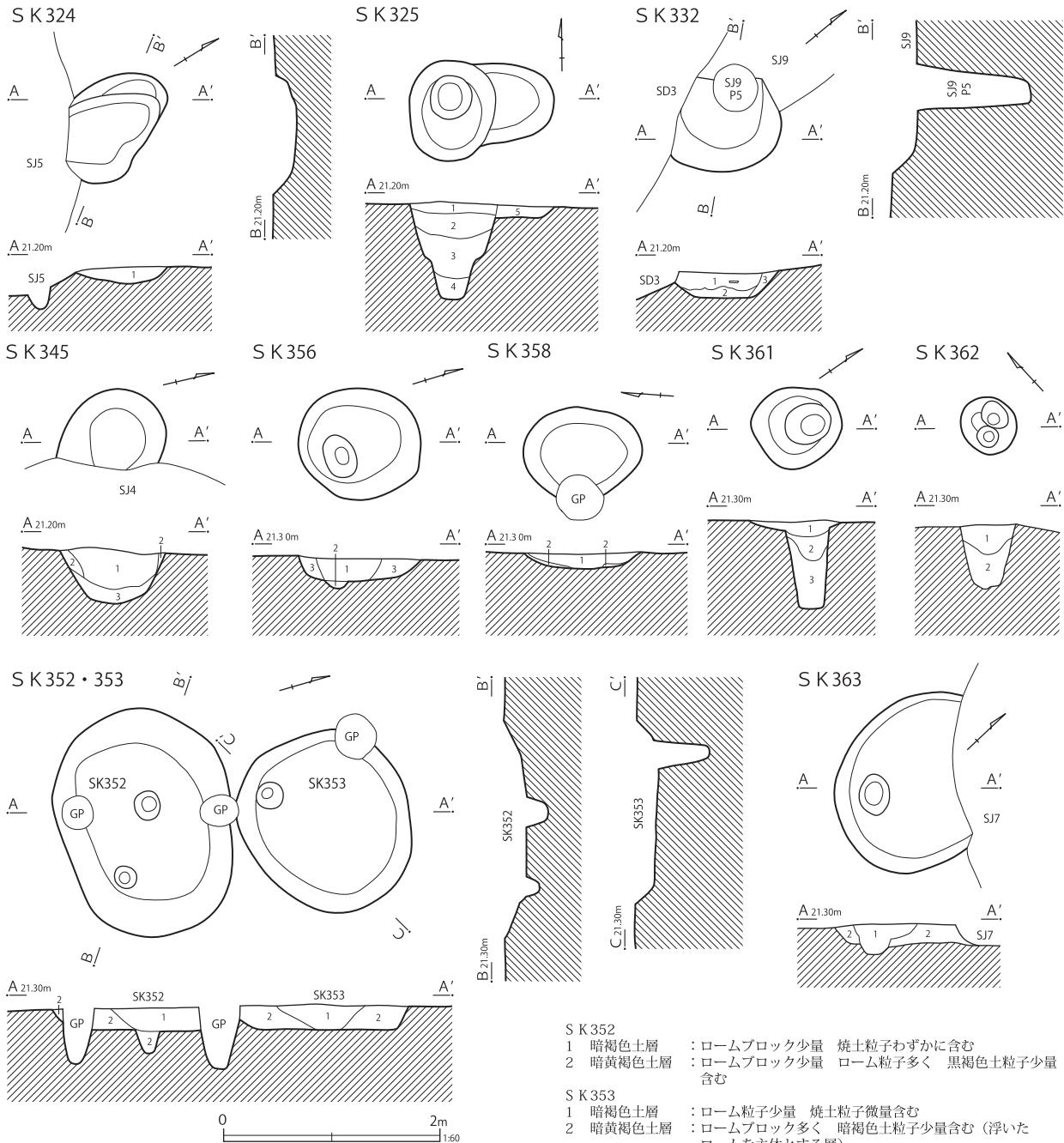
L - 16グリッドに位置する。長径1.32m、短径0.74mの楕円形で、深さは0.88mである。主軸方向はN - 87° - Eを指す。

上下二段の掘り込みを持ち、東壁にテラス状の張り出しを持つ。掘り込みは急で、底面は平坦である。

第370図335・336が出土遺物で、勝坂II式とみられる。

第332号土壙（第356・361・371図）

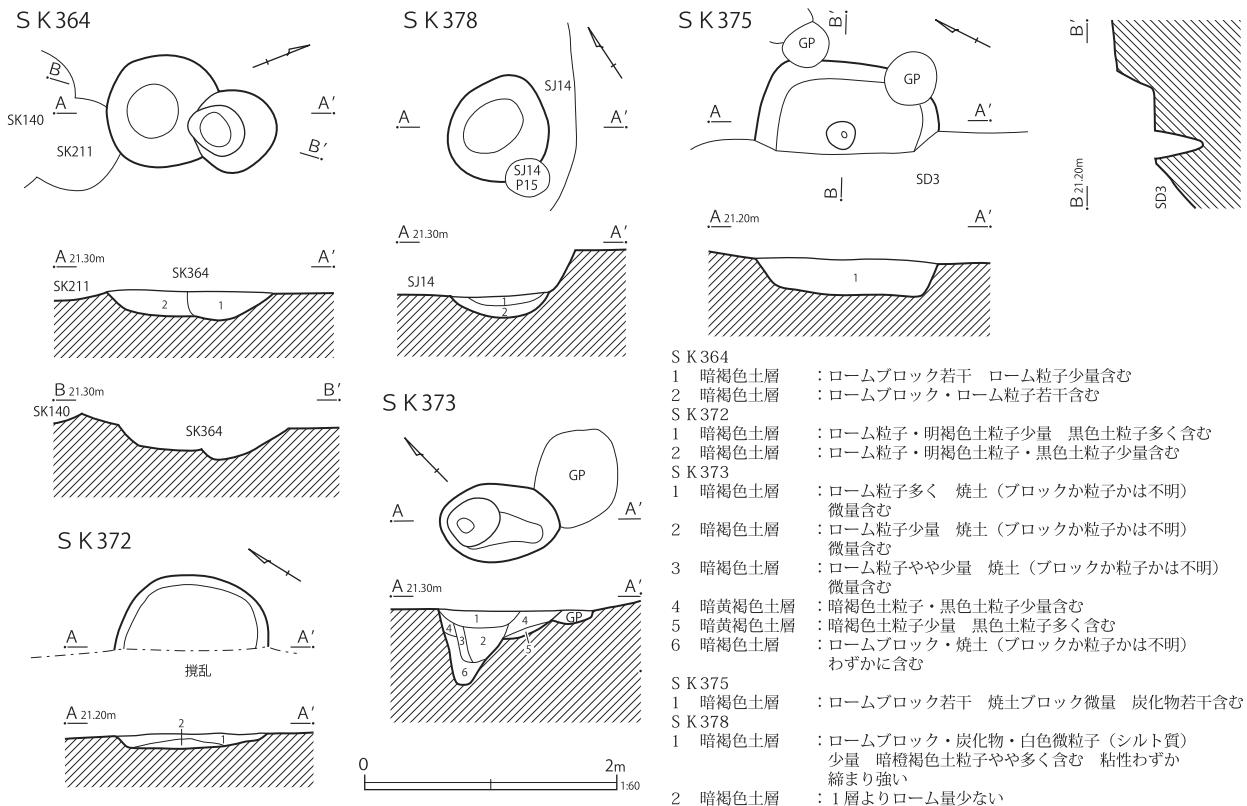
M16グリッドに位置する。第3号溝跡に壊されている。第9号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。規模は不明だが直径1m前後の楕円形であるとみられる。深さは0.28mである。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。



- SK 324**
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干 ローム粒子・焼土粒子・炭化物 少量含む
- SK 325**
- 1 黒褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土粒子・炭化物わずかに含む
 - 3 黒褐色土層 : 焼土ブロックわずか 烧土粒子少量含む
 - 4 暗褐色土層 : ローム粒子多く 烧土粒子わずかに含む
 - 5 暗褐色土層 : ローム粒子・暗褐色土粒子多く含む
- SK 332**
- 1 黒褐色土層 : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子・炭化物わずかに含む
 - 3 明褐色土層 : 最堆積ロームを主体とし、焼土粒子わずか 黑褐色土粒子 少量含む
- SK 345**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子多く 炭化物わずかに含む
 - 2 暗黄褐色土層 : ロームブロックわずか ローム粒子多く含む(崩落した壁)
 - 3 暗褐色土層 : ローム粒子多く 烧土粒子微量含む

- SK 352**
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 烧土粒子わずかに含む
 - 2 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く 黑褐色土粒子少量 含む
- SK 353**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子微量含む
 - 2 暗黄褐色土層 : ロームブロック多く 暗褐色土粒子少量含む(浮いたロームを主体とする層)
- SK 356**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子わずかに含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
 - 3 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く 暗褐色粒子少量含む
- SK 358**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 黑色土粒子含む
 - 2 暗黄褐色土層 : 暗褐色土粒子少量含む
- SK 360**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く 烧土粒子わずかに含む
- SK 361**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 黑色土粒子多く含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子多量 烧土粒子わずかに含む
 - 3 黑褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子わずかに含む
- SK 362**
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・黑色土多く含む
 - 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く 烧土粒子少量含む
- SK 363**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物少量含む
 - 2 暗黄褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物多く含む

第356図 繩文土壙 (11)



第357図 縄文土壤 (12)

第361図5は勝坂II式と考えられる波状口縁の深鉢である。山形大波状口縁の直下に一対の貫通孔を持つ。波頂部から刻みを伴う隆帯が垂下し、胴上半部に巡る鋸歯状の隆帯区画と結合して左右に対向する三角形の区画文を構成する。区画に沿って三角押し文と弧状の短沈線列が巡り、内部に縦位の角押し文列を充填する。

胎土は砂質で器面は暗茶褐色～暗褐色、焼成は不良である。復元最大径は約28cm、現存高は約25.3cmである。

第371図337は破片資料で、眼鏡状突起を持つ浅鉢口縁部である。

第345号土壤 (第356・371図)

K-15グリッドに位置する。第4号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。長径1m前後の楕円形であるとみられる。深さは0.5mである。主軸方向はN-76°-Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は丸底である。

第371図338・339が出土遺物で、加曾利E I式

とみられる。

第352号土壤 (第356・371図)

L-16グリッドに位置する。長径2.09m、短径1.6mの楕円形で、深さは0.21mである。主軸方向はN-90°-Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。中央および南東壁際に小ピットが存在する。

第371図340の加曾利E I式が出土した。

第353号土壤 (第356・371図)

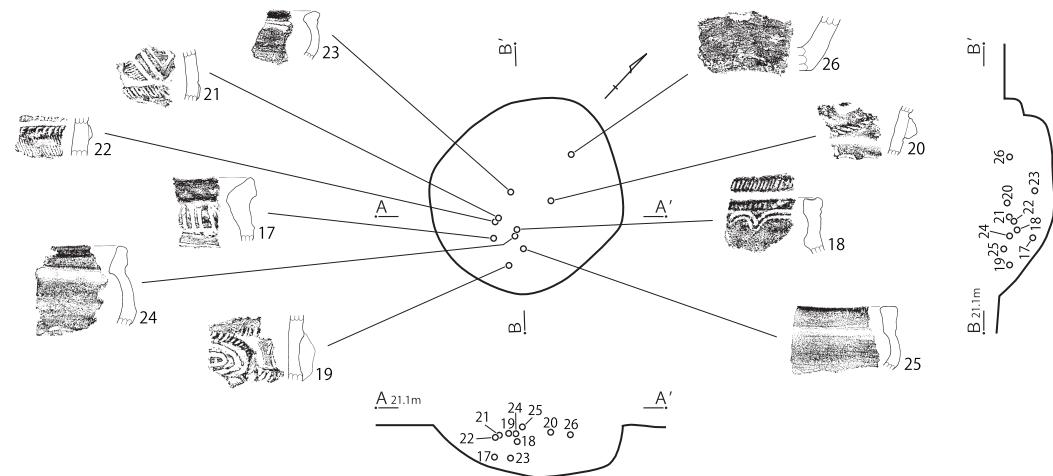
L-16グリッドに位置する。長径1.71m、短径1.52mの楕円形で、深さは0.23mである。主軸方向はN-60°-Eを指す。壁の立ち上がりはやや急で、底面は平坦である。

第371図341～345が出土遺物である。いずれも諸磯b式と考えられる。

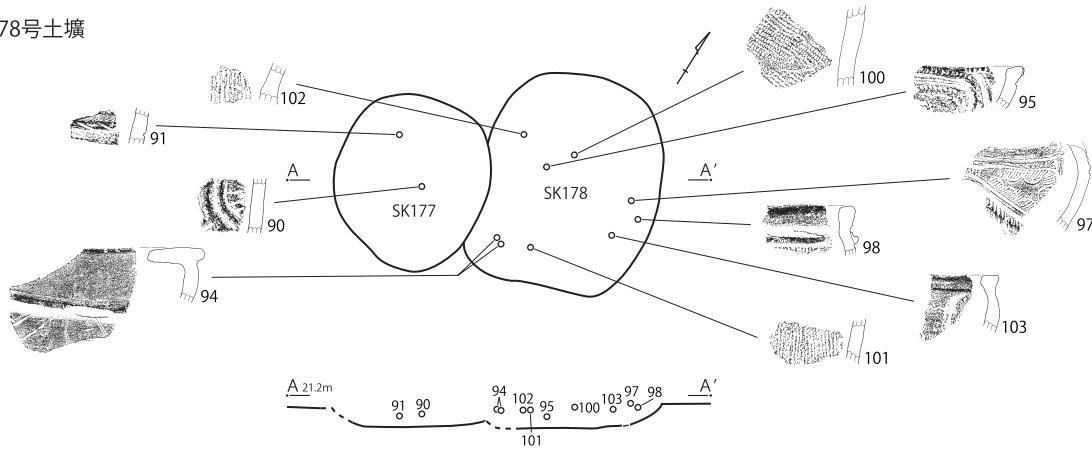
第356号土壤 (第356図)

L-16・17グリッドに位置する。長径1.13m、短径1.02mの楕円形で、深さは0.19mである。主軸方向はN-17°-Eを指す。壁の立ち上がりは

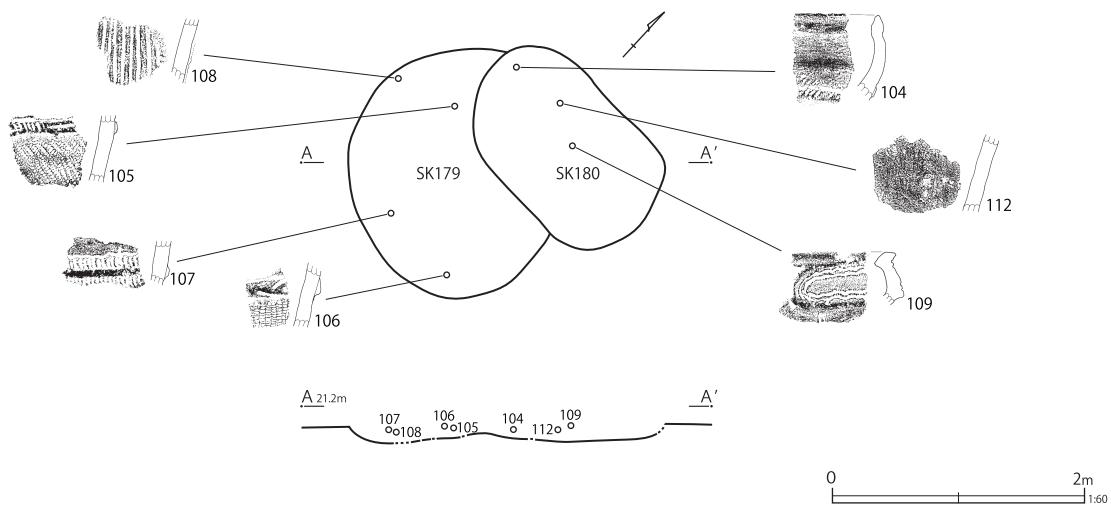
第56号土壤



第177・178号土壤

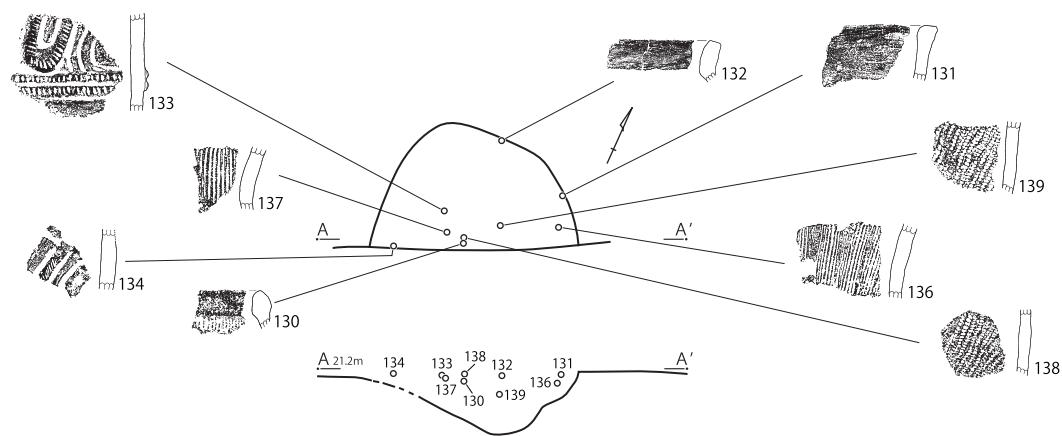


第 179・180 号土壤

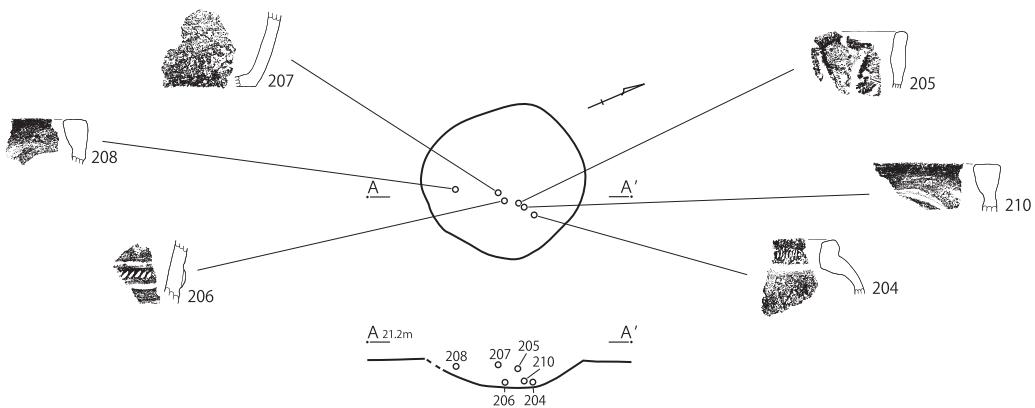


第 358 図 土壌遺物出土状況（1）

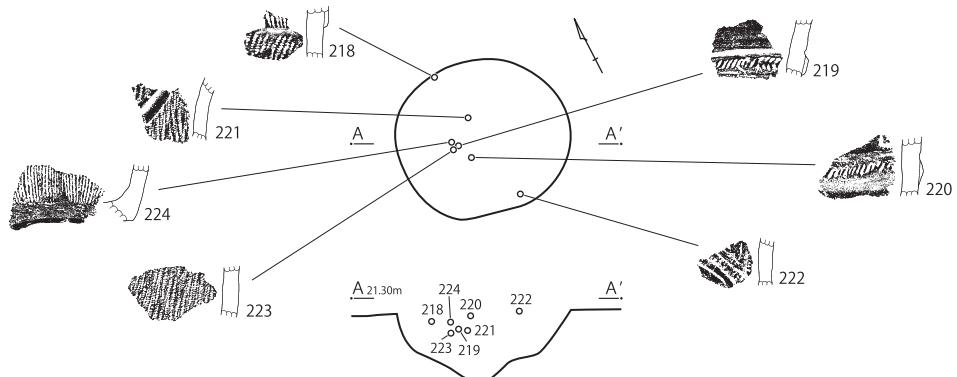
第 186 号土壤



第 210 号土壤



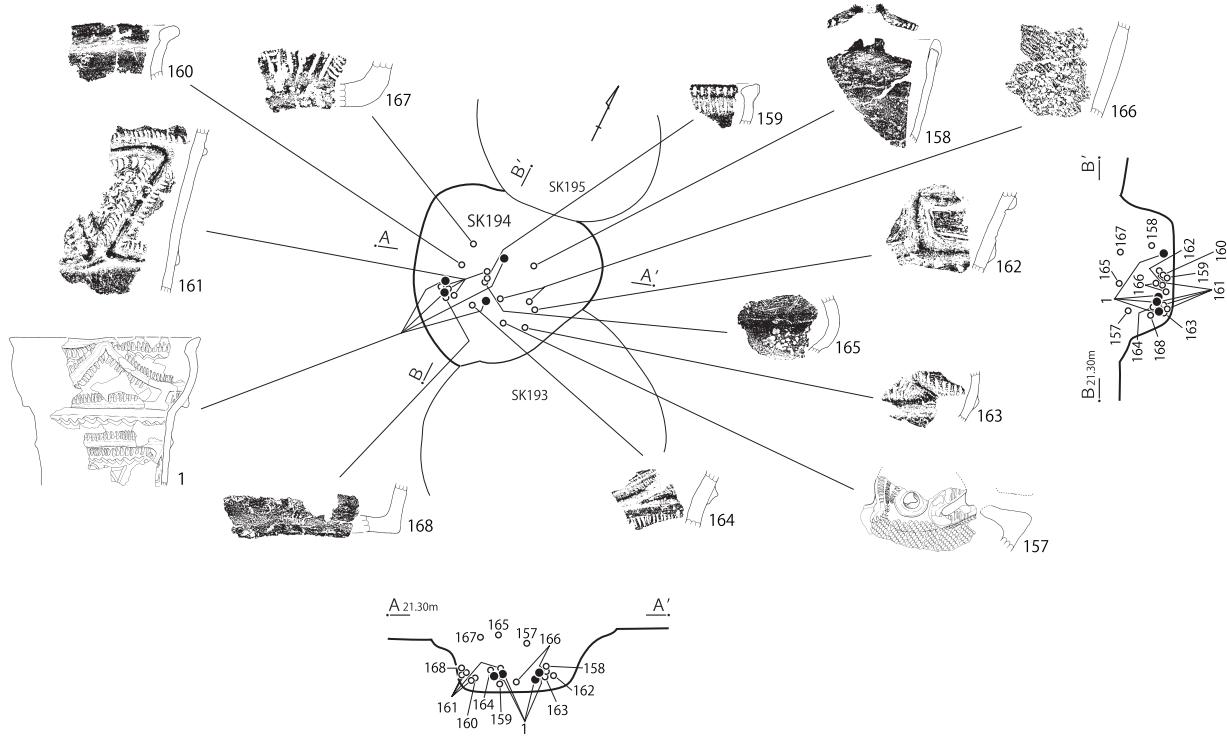
第 215 号土壤



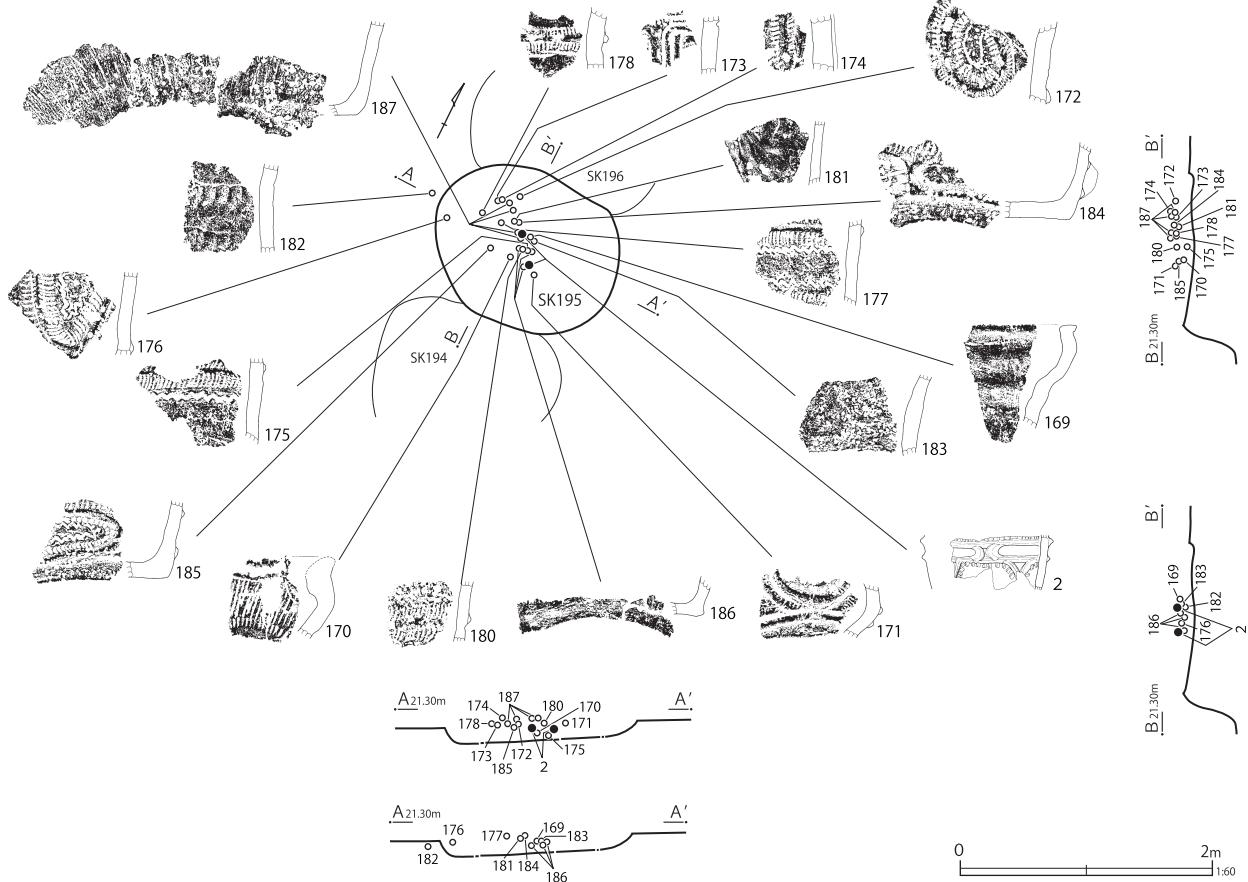
0 2m
1:60

第 359 図 土壤遺物出土状況 (2)

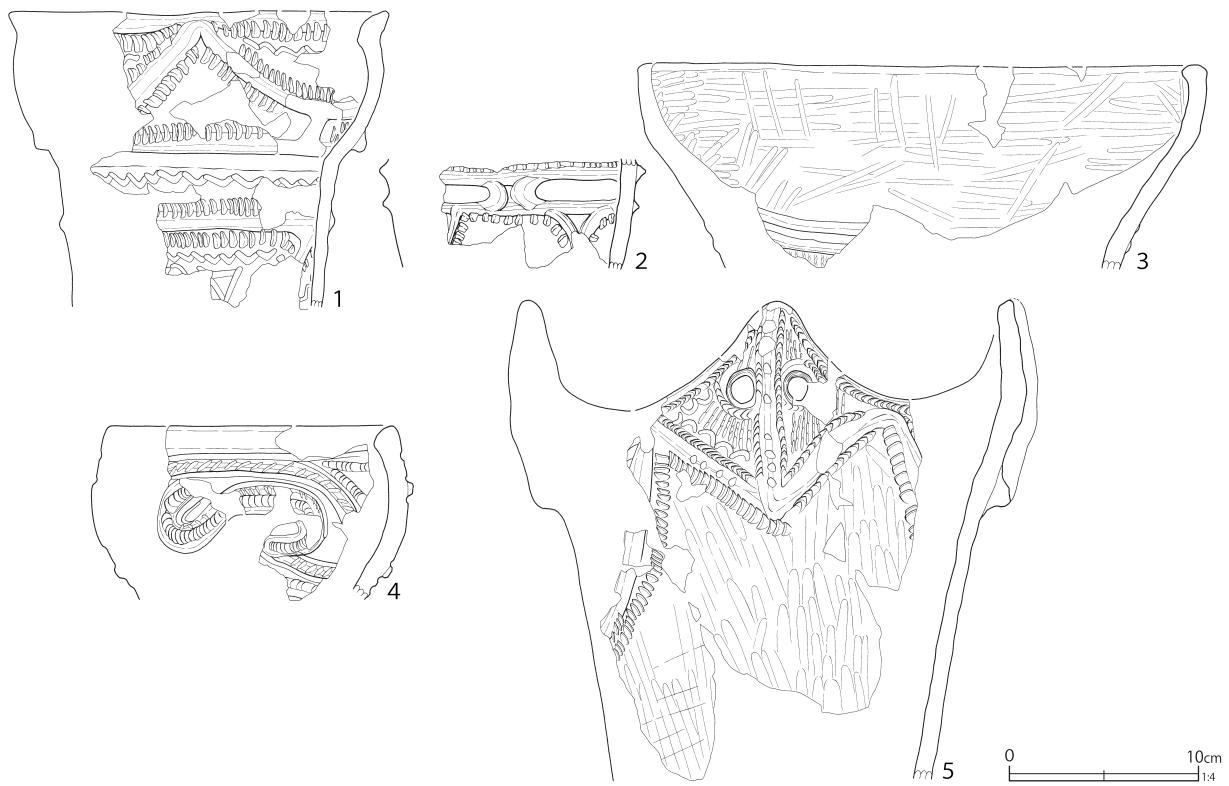
第 194 号土壤



第 195 号土壤



第 360 図 土壤遺物出土状況（3）



第361図 土壌出土遺物（1）

やや急である。底面は平坦で、南寄りに小ピットが存在する。

第358号土壌（第356・371図）

M - 16グリッドに位置する。長径1.08m、短径0.83mの楕円形で、深さは0.15mである。主軸方向はN - 4° - Wを指す。丸底の土壌で、壁は緩やかに立ち上がる。

第371図347の無文の胴部破片が出土した。

第360号土壌（第355・371図）

L - 16グリッドに位置する。長径0.88m、短径0.74mの楕円形で、深さは0.3mである。主軸方向はN - 80° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。東壁がテラス状に張り出している。

第371図346の土製円盤が出土した。

第361号土壌（第356・371図）

L - 16グリッドに位置する。長径0.83m、短径0.74mの楕円形で、深さは0.81mである。主軸方向はN - 34° - Eを指す。壁は急に立ち上がり、

検出面付近で漏斗状に開いている。底面は平坦である。

第371図348～352が出土遺物で、勝坂II式と考えられる。

第362号土壌（第356図）

L - 16・17グリッドに位置する。直径0.52mの円形で、深さは0.63mである。主軸方向はN - 5° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、底面に2基の小ピットが存在する。

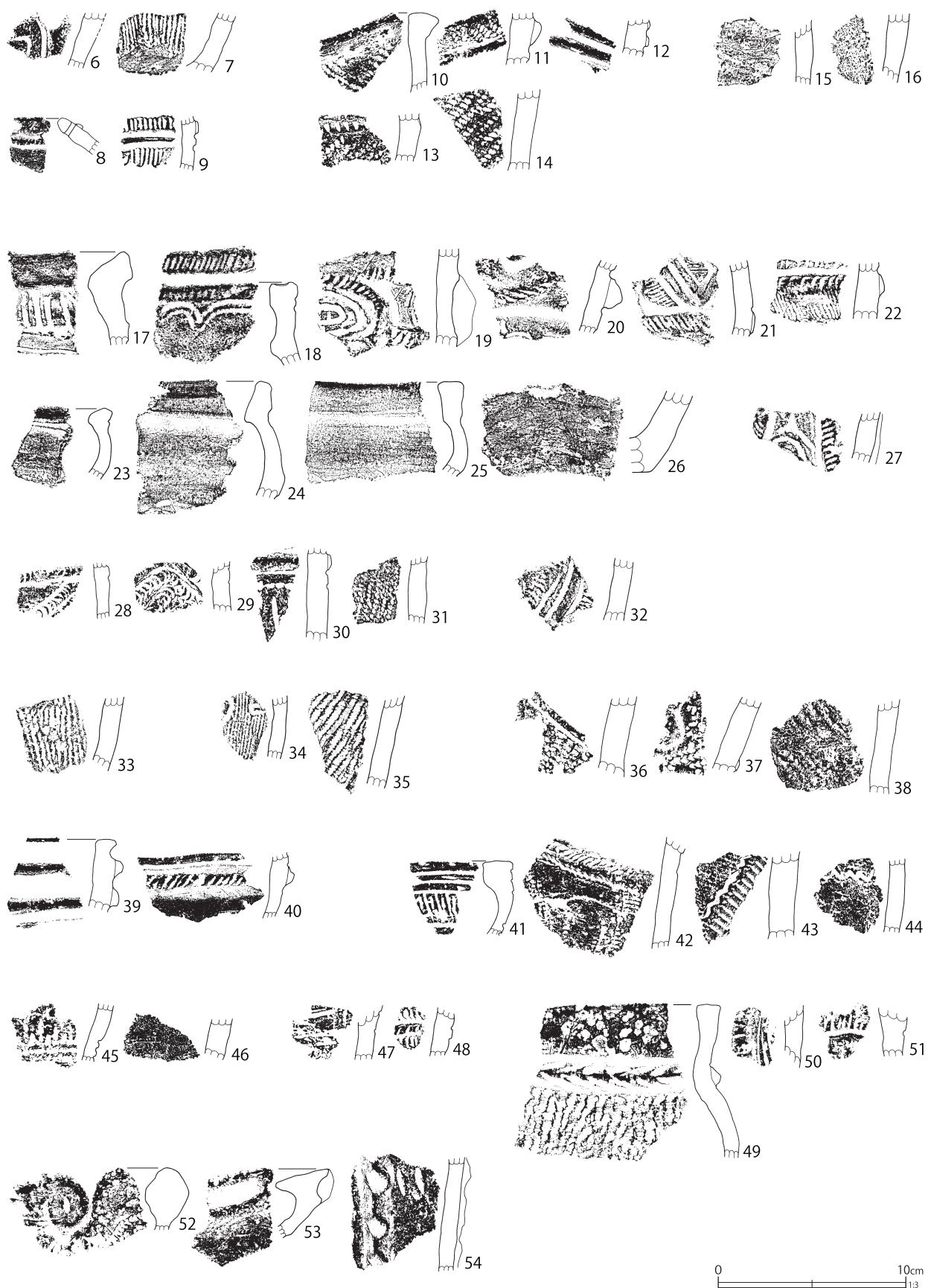
第363号土壌（第356・371図）

M - 15グリッドに位置する。第7号住居跡に壊されている。長径約1.6m、短径1.22mで、深さは0.14mである。主軸方向はN - 17° - Eを指す。壁の立ち上がりは急で、底面は平坦である。南西壁寄りに小ピットが存在する。

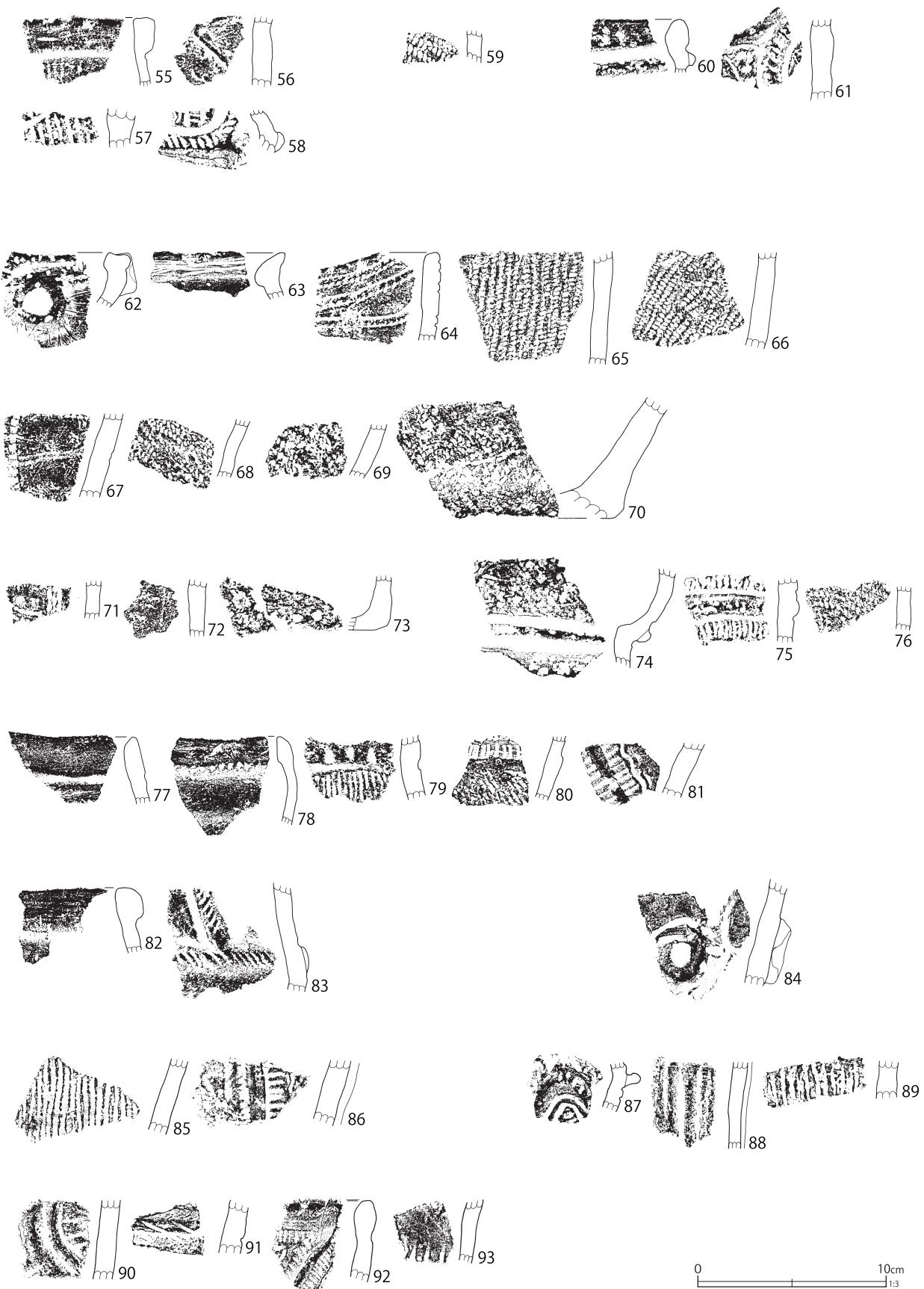
第371図353～356が出土遺物で、勝坂式の各時期が混在する。

第364号土壌（第357・371図）

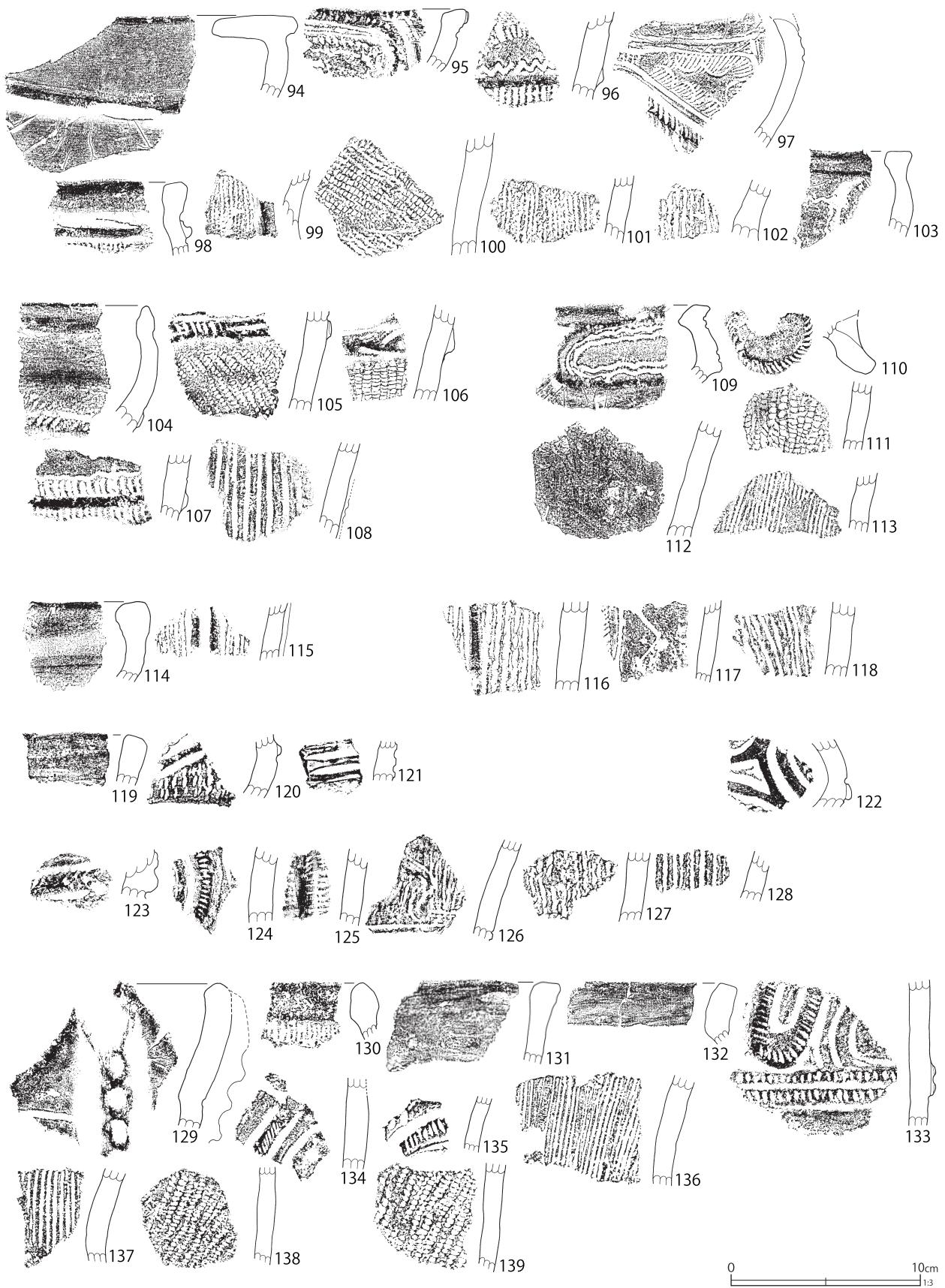
M - 15グリッドに位置する。第211号土壌と重



第362図 土壌出土遺物(2)



第363図 土壌出土遺物（3）



第364図 土壌出土遺物(4)

複するが、新旧関係は不明である。直径0.93mの円形で、深さは0.27mである。主軸方向はN - 38° - Eを指す。

壁の立ち上がりはやや急で、底面は平坦である。北東壁に直径0.7m、深さ0.22mのピットが存在する。

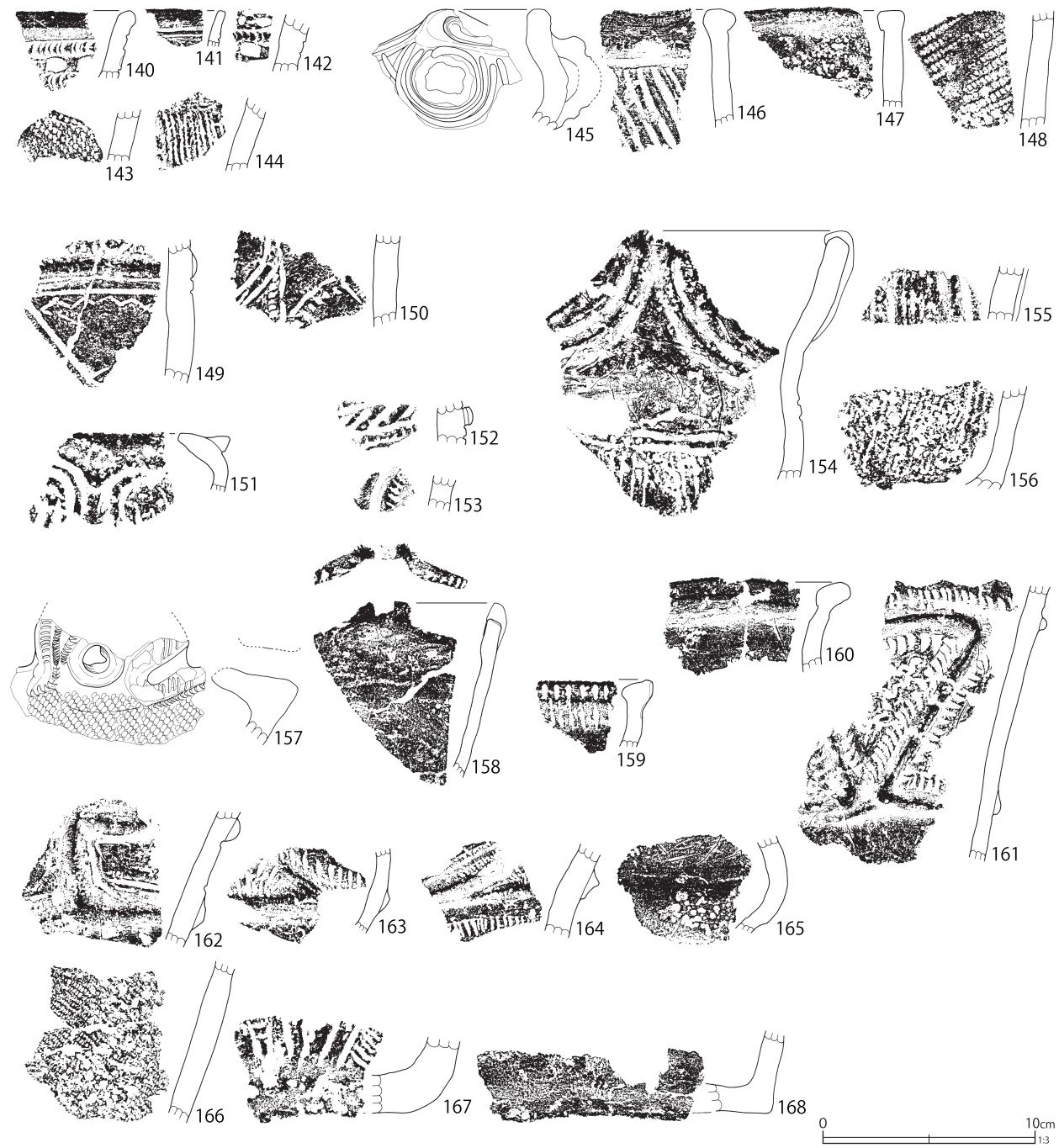
第371図357が出土遺物で、角押し文を描く勝坂I式である。

第372号土壌（第357図）

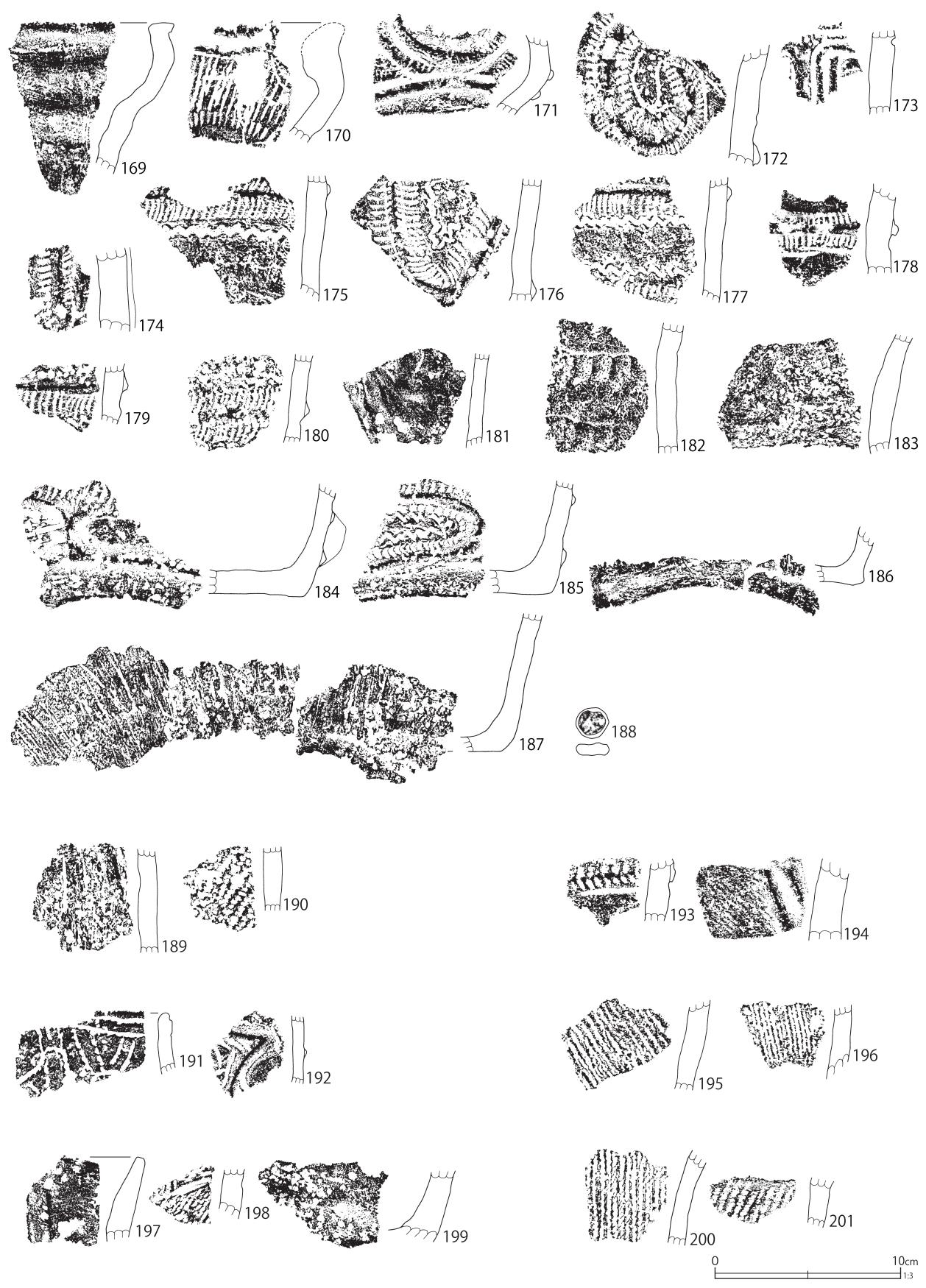
L - 16グリッドに位置する。大半を攪乱により破壊されるが、直径1.2m前後の円形と思われる。深さは0.11mである。壁の立ち上がりはやや急で、底面は平坦で中央が下がっている。

第373号土壌（第357図）

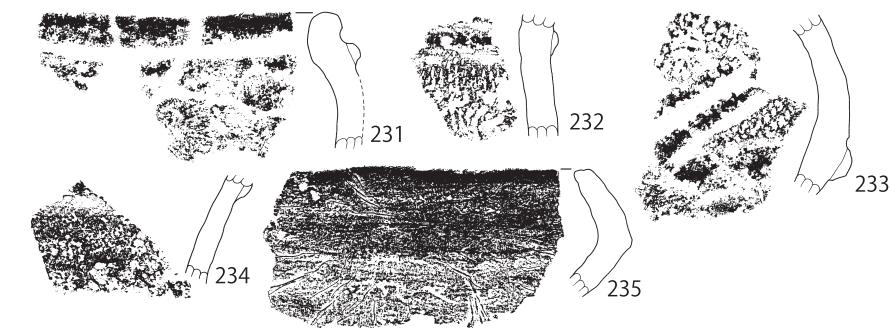
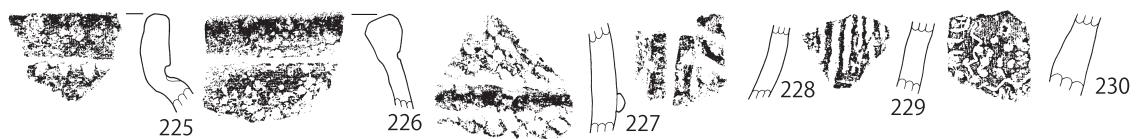
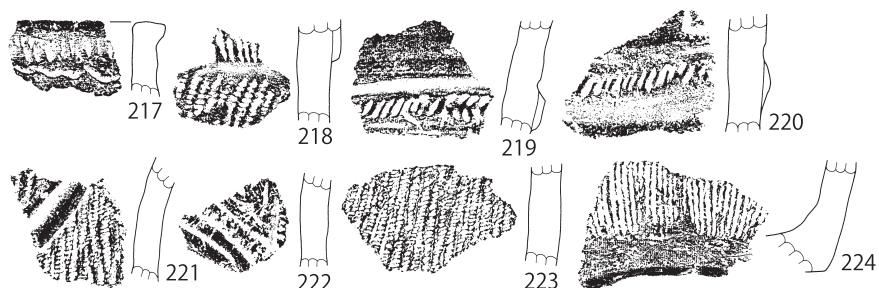
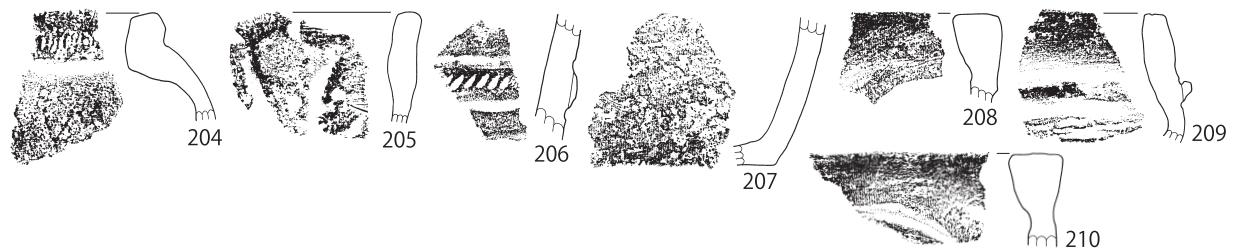
L - 16グリッドに位置する。長径0.97m、短径0.62mの楕円形で、深さは0.6mである。主軸方



第365図 土壌出土遺物（5）

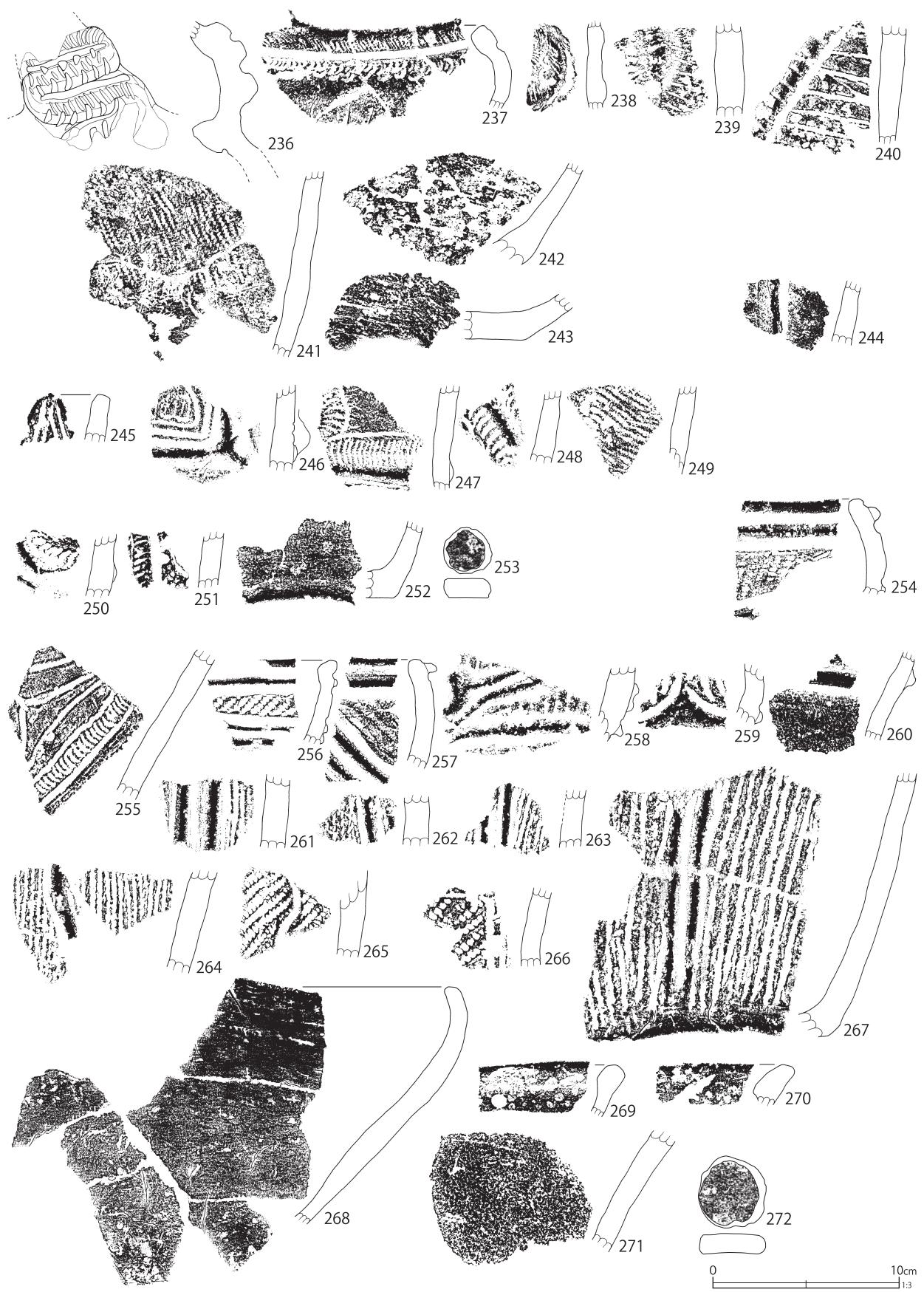


第366図 土壌出土遺物（6）

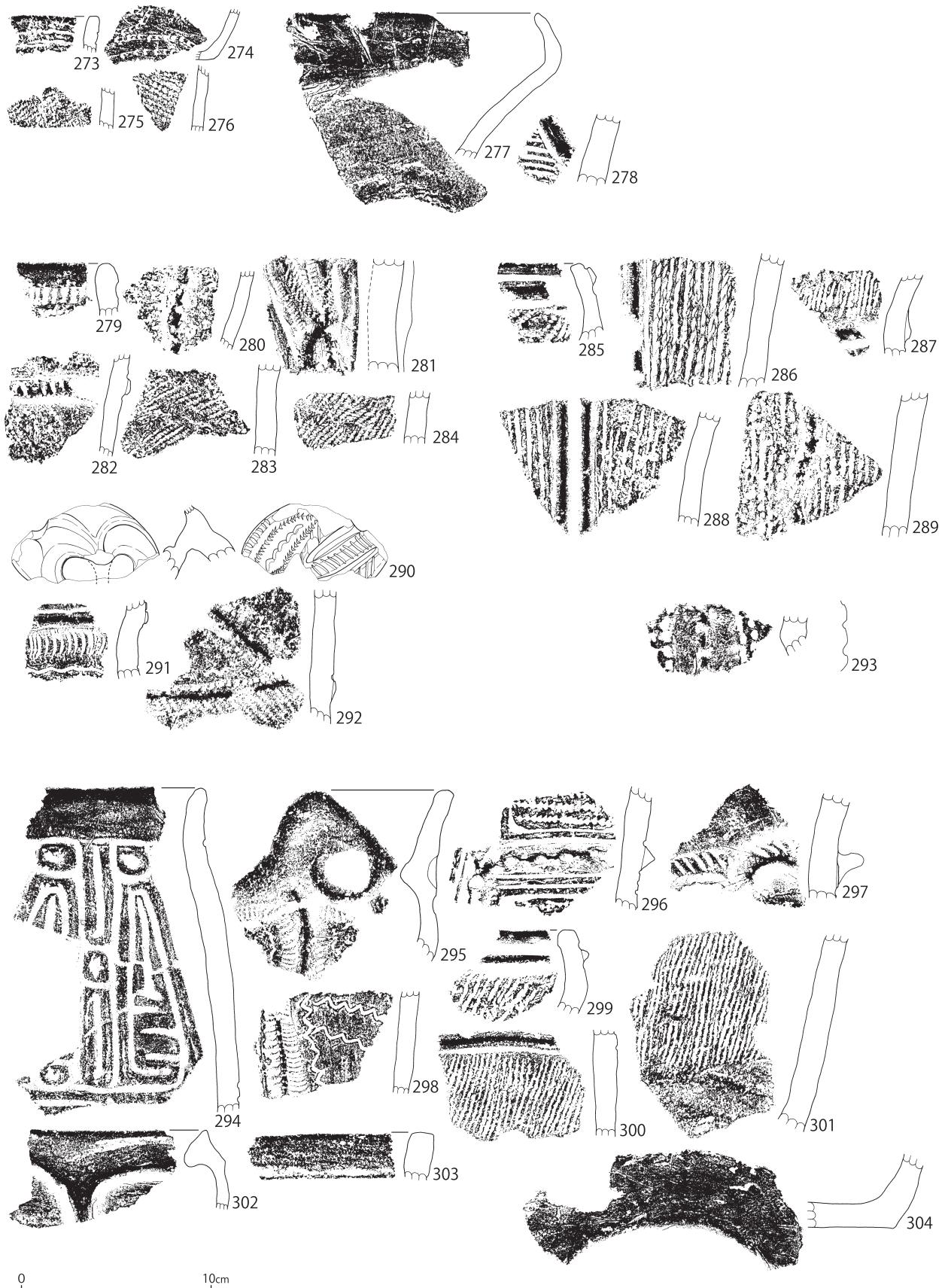


0 10cm
1:3

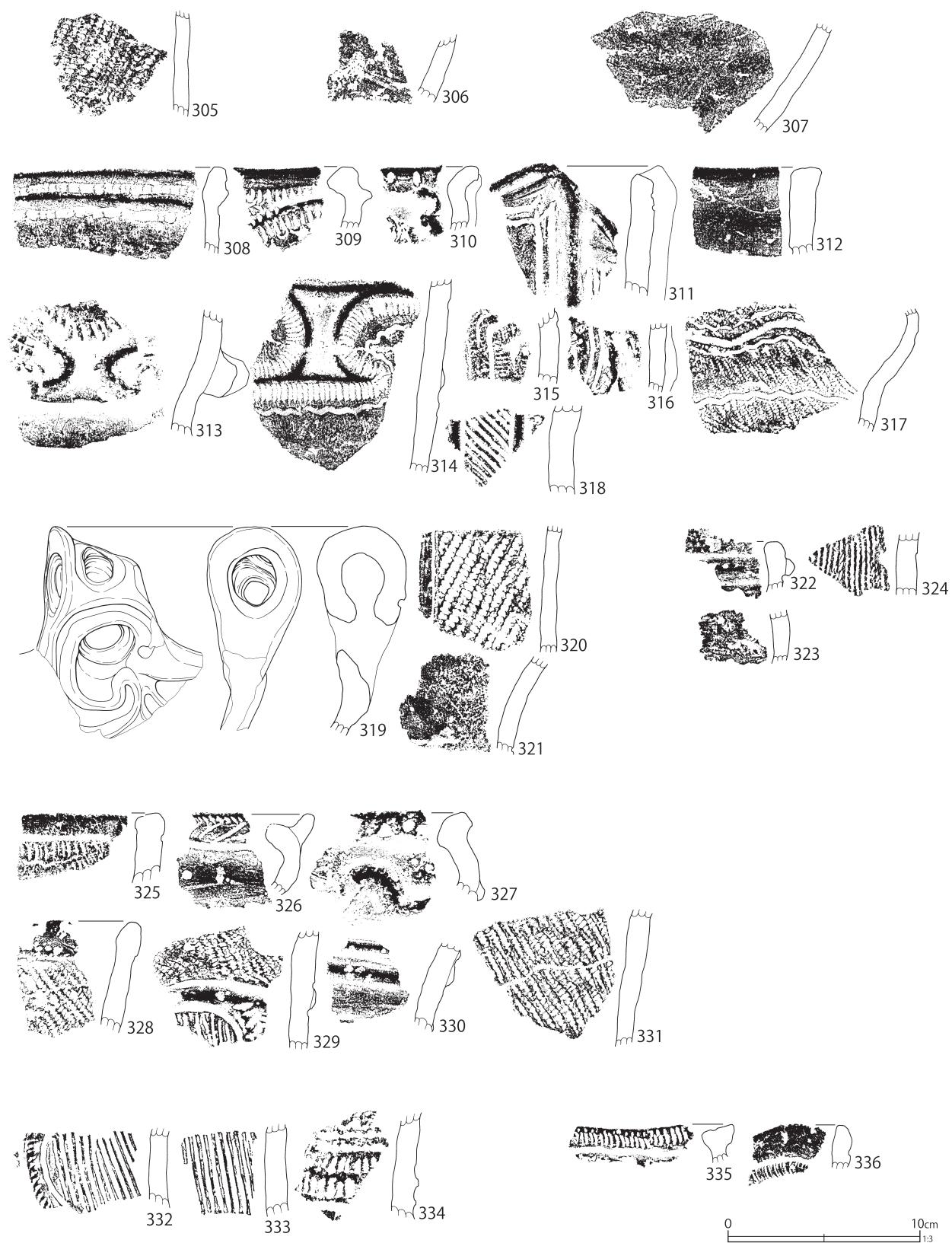
第367図 土壌出土遺物(7)



第368図 土壌出土遺物(8)



第369図 土壌出土遺物(9)



第370図 土壌出土遺物(10)

向はN - 46° - Wを指す。壁の立ち上がりは急で、南東壁がテラス状に張り出している。

第375号土壙（第357・371図）

K - 15グリッドに位置する。第2・3号溝跡に壊されている。第4号住居跡とも重複するが、新旧関係は不明である。

第3号溝跡との重複によって南西部分を失っているが、長径1.45mの隅丸方形の土壙とみられる。

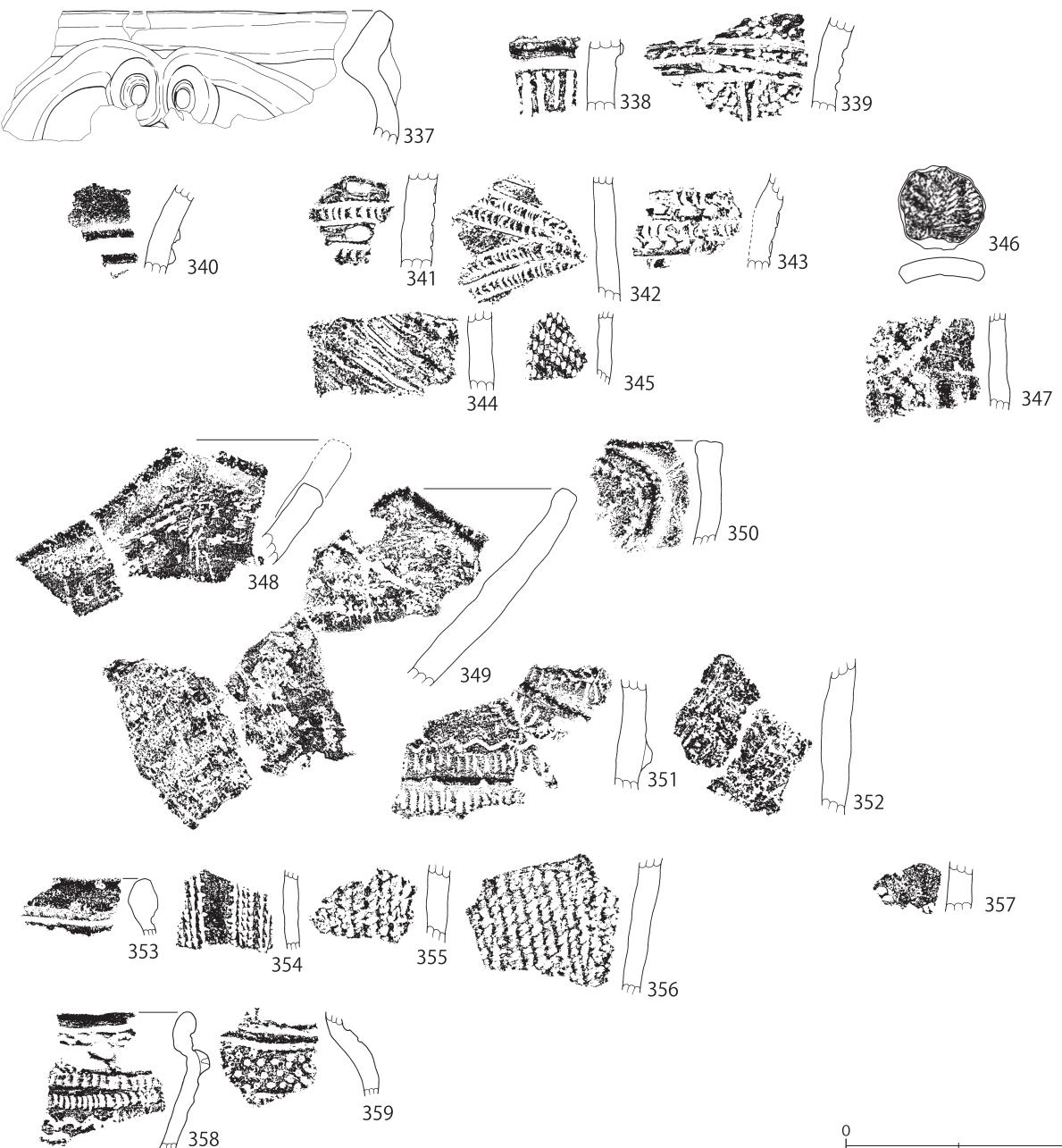
深さは0.31mである。壁の立ち上がりは急で、

底面は平坦で中央がやや下がっている。

第371図358・359の勝坂I式が出土した。

第378号土壙（第357図）

M - 17グリッドに位置する。第14号住居跡の床面上で検出されたが、新旧関係は不明である。長径0.44m、短径0.39mの楕円形で、深さは0.26mである。主軸方向はN - 60° - Eを指す。丸底の土壙で、壁は緩やかに立ち上がる。



第371図 土壙出土遺物(11)



第372図 土壌出土遺物(12)

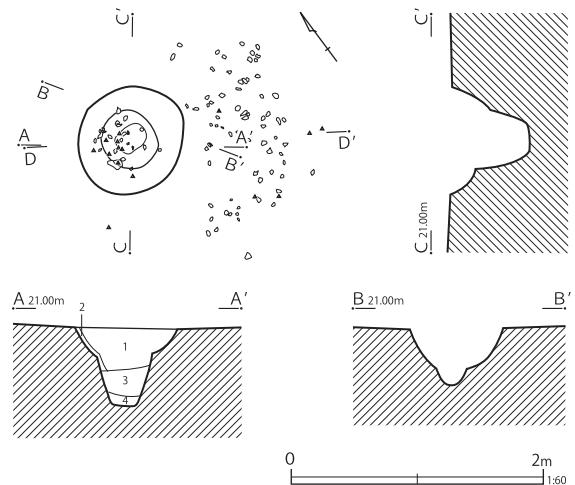
(3) 集石土壙

第1号集石土壙 (第373・374図)

N - 14グリッドに位置する。長径0.9m、短径0.8mの楕円形で、深さは0.63mである。主軸方向はほぼ東西を指す。

第2号(古)住居跡の炉跡を再掘削してつくられている。本土壙の東から南東方向にかけて、住居跡床面上に焼礫が散布していた。調理後に食材を取り出した際、掻き出された礫がほぼ原位置を保って出土したものと理解される。

周辺床面上も含め、合計106点の礫が出土した。礫の総重量は1941.5gであった。礫以外に若干の土器片と剥片4点が出土したが、住居跡の遺物が混入している可能性が高い。遺構の時期は加曾利E I式期である。



S C 1	
1	極暗褐色土層 : ローム粒子少量 焼土ブロック・炭化物若干含む
2	極暗褐色土層 : ロームブロックやや多く 焼土ブロック・炭化物若干含む
3	黒褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く 炭化物多く含む
4	暗褐色土層 : ローム黒色帶を基調に焼土ブロック・炭化物を若干 焼土粒子少量含む 磯含まない

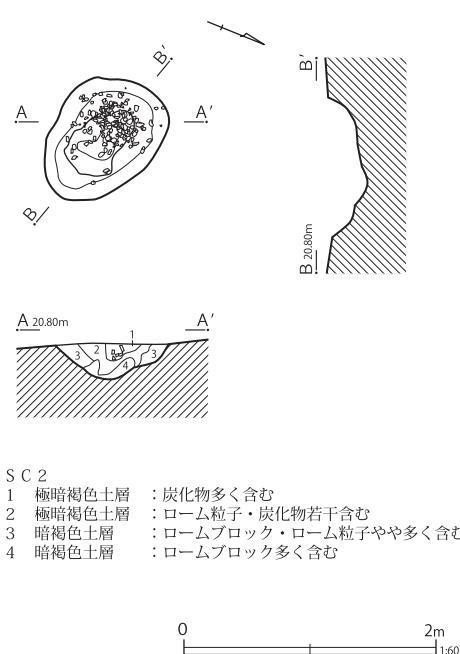
第373図 第1号集石土壙



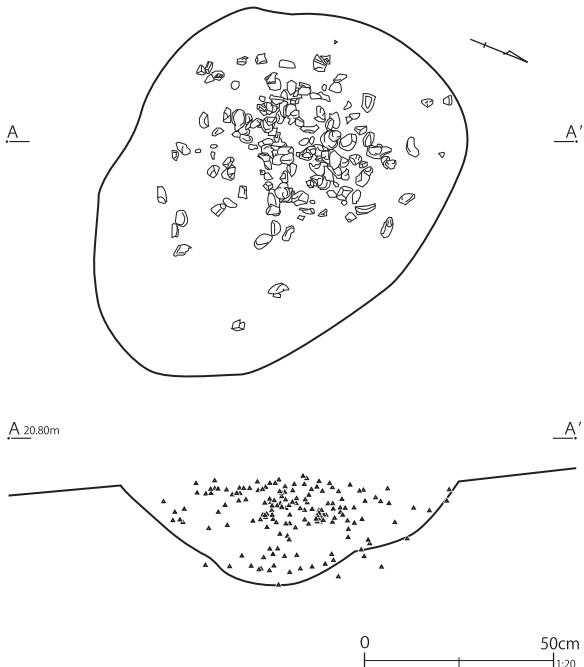
第374図 第1号集石土壙微細図

第2号集石土壌 (第375図)

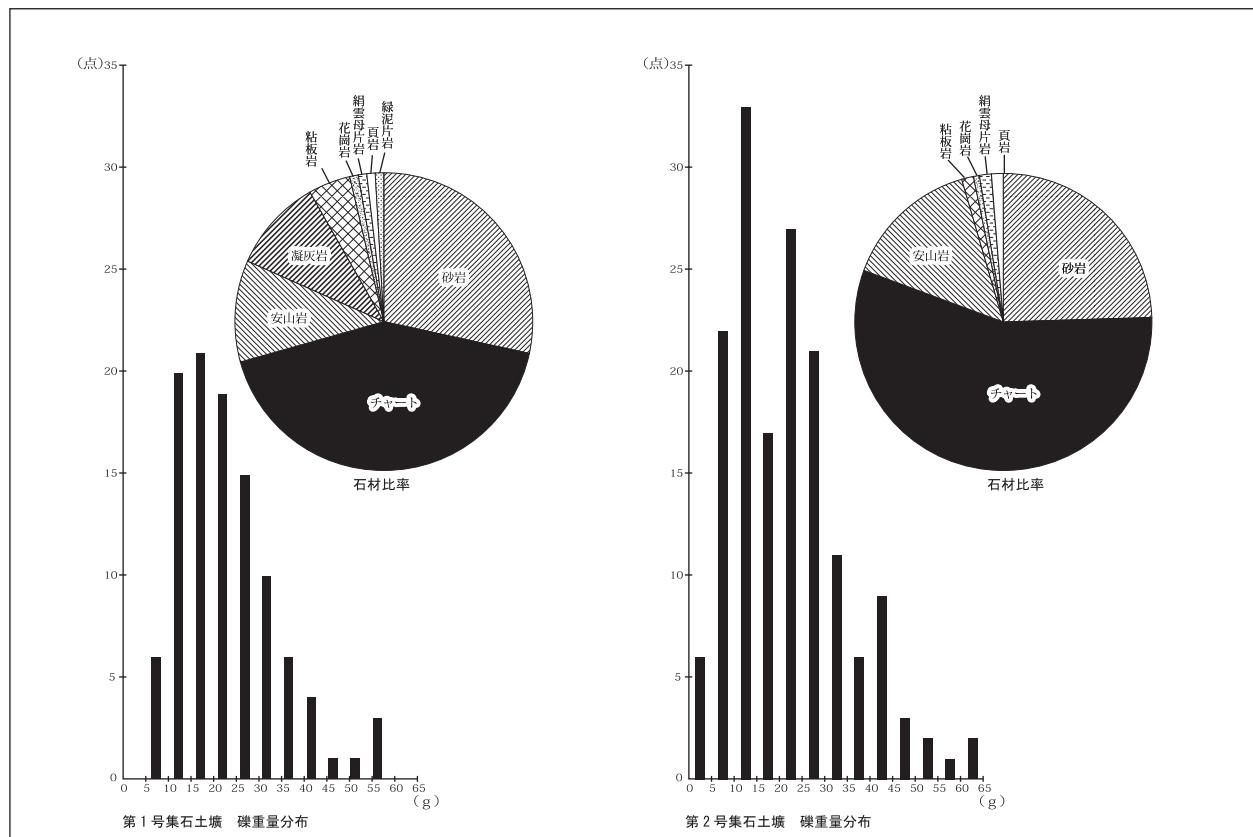
R - 9 グリッドに位置する。長径1.1m、短径0.82mの橿円形で、深さは0.26mである。主軸方向はN - 65° - Wを指す。



合計160点の礫が出土した。礫の総重量は2708.9 g である。礫以外に数点の土器片が出土したが、小破片であるうえに風化が激しく、時期は特定し得なかった。



第375図 第2号集石土壌



第39表 集石土壌 磯重量分布／石材比率

(4) ピット集中区 (第376~383図)

特定の遺構に伴わずに発見されたピットは、低地部分を除く調査区全体に分布していた。所属時期は縄文・近世のものが存在したが、とりわけ環状集落における中央広場の西寄りの一角には、縄文時代の柱穴状ピットが多く集中していた。

座標上は I ~ N - 15~18グリッドに相当する。この一角を、ピット集中区と命名し、以下にその概要を記す。

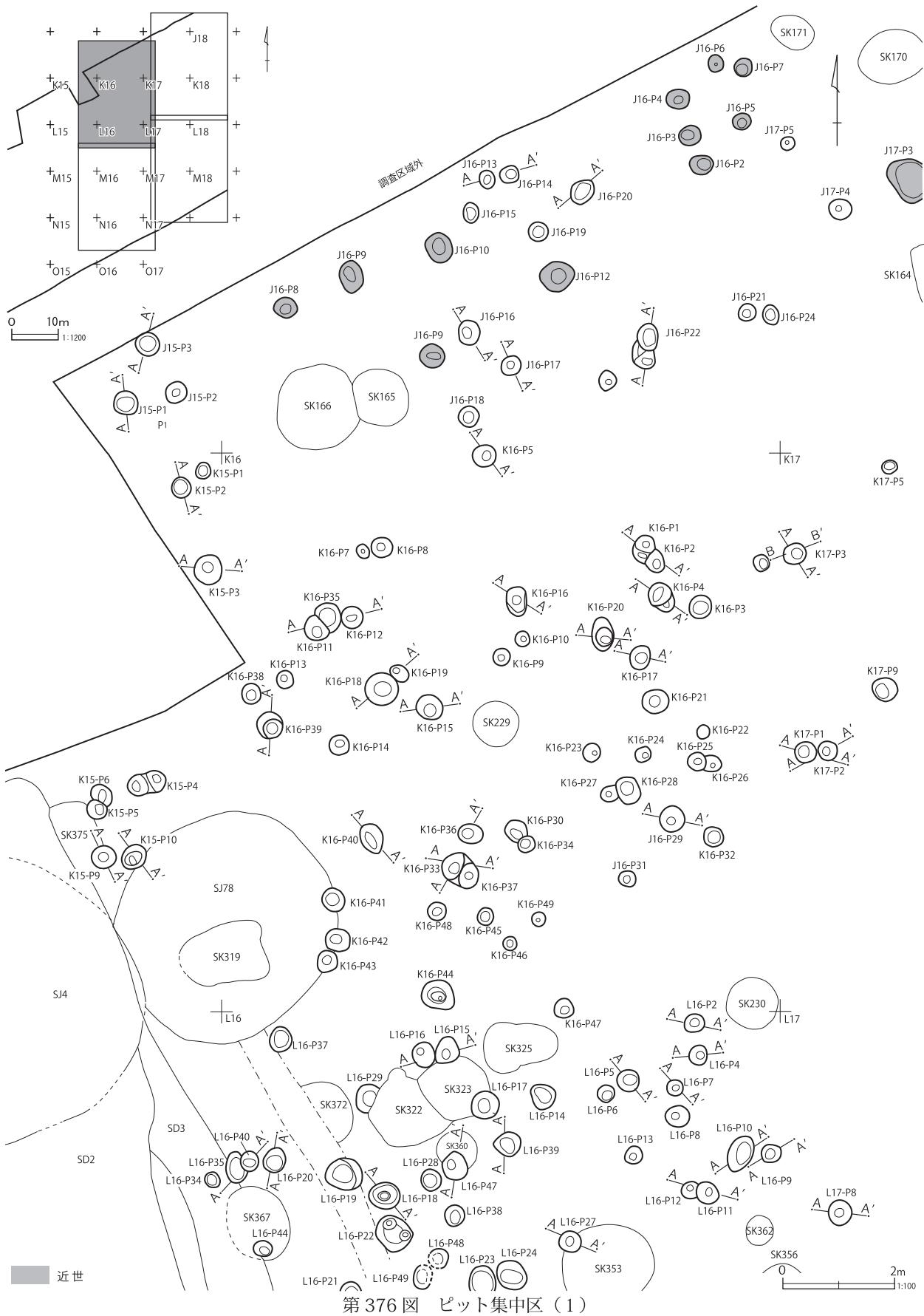
この区域で検出された縄文時代の柱穴状ピットは合計169本で、浅いものは深さ10数cmから、最も深いものでは90cmを越える。個別の計測値は第40表を参照されたい。

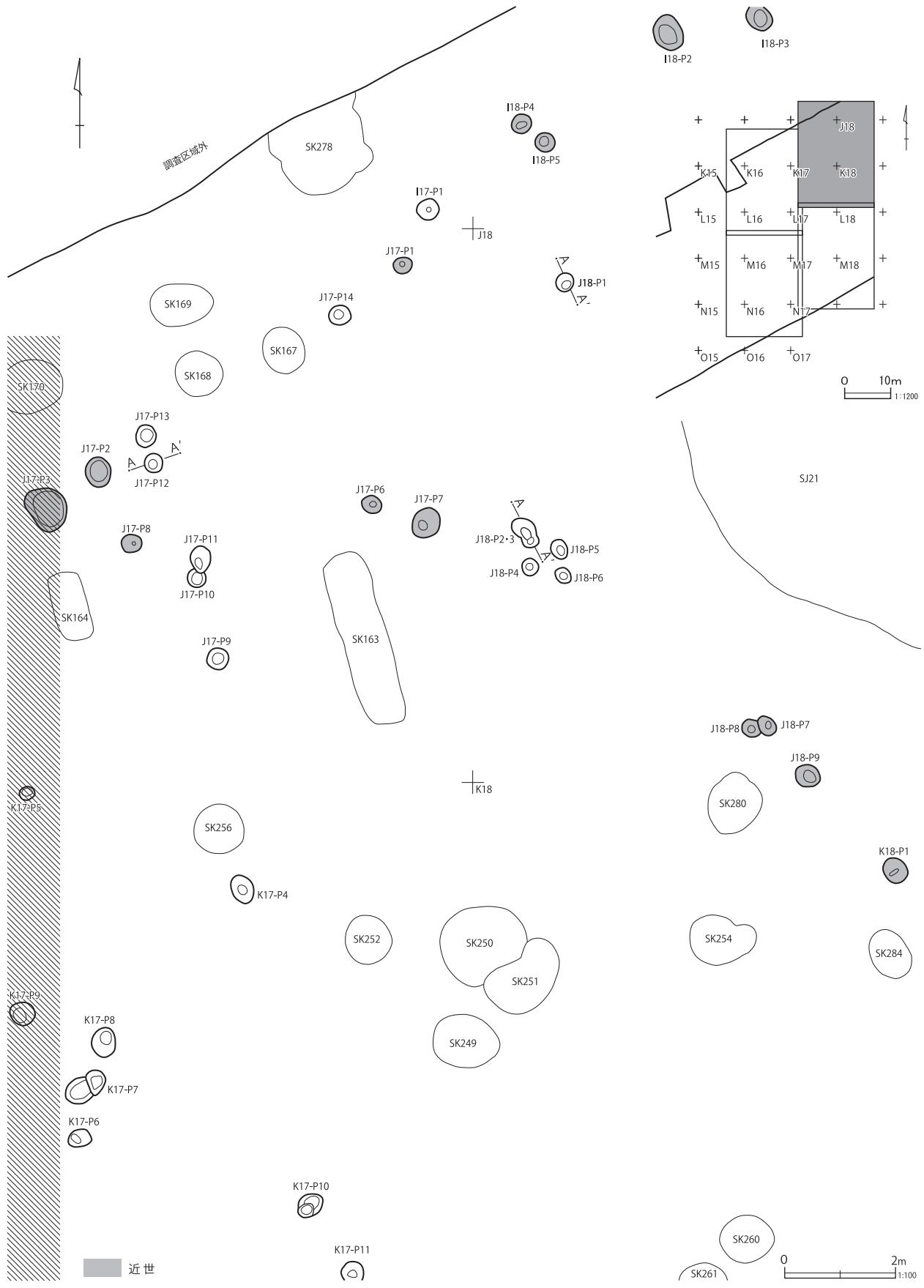
発掘調査時に建物としての配置を確定できたものは存在しないが、直径数mの範囲にピットが集中する箇所がいくつか存在し、竪穴住居以外の仮屋的な建物が存在したものと考えられる。

各ピットからの出土遺物については、第384~

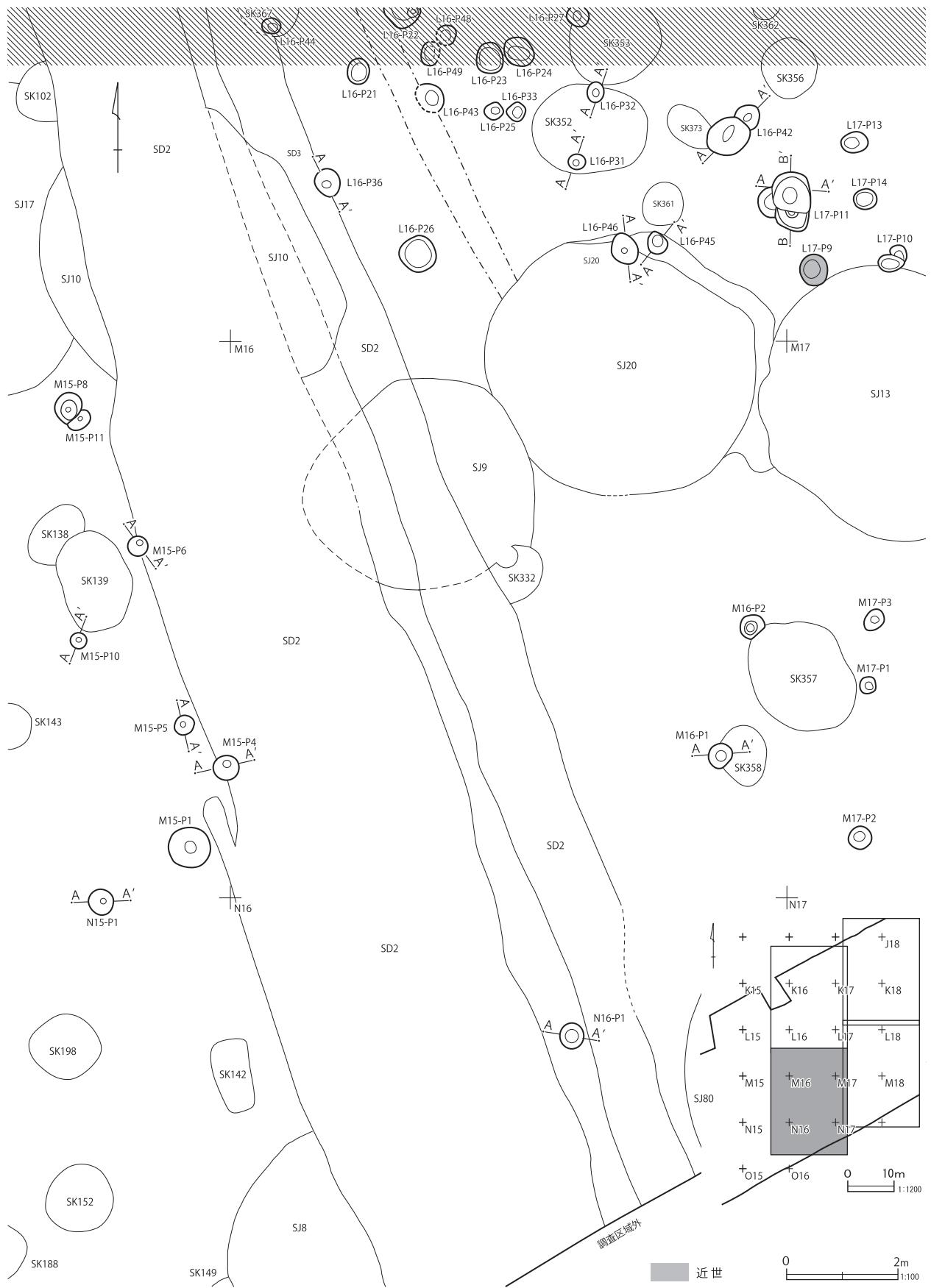
第40表 ピット集中区計測表

グリッド I - 17		P 1	0.28	0.17	P 33 (0.51)	0.85	P 12	0.30	0.14	P 10	0.55	0.16		
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 2	0.36	0.79	P 34	0.32	0.39	P 13	0.33	0.28	P 11	1.06	0.76
P 1	0.39	0.22	P 3	0.51	0.42	P 35	0.53	0.30	P 14	0.47	0.51	P 12	0.16	0.43
グリッド J - 15		P 4	0.68	0.43	P 36	0.43	0.82	P 15	0.47	0.50	P 13	0.50	0.20	
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 5	0.36	0.47	P 37	0.44	0.92	P 16	0.45	0.39	P 14	0.40	0.14
P 1	0.42	0.55	P 6	0.43	0.20	P 38	0.36	0.18	P 17	0.49	0.29	グリッド L - 18		
P 2	0.37	0.30	P 9	0.44	0.67	P 39	0.46	0.75	P 18	0.53	0.66	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 3	0.41	0.67	P 10	0.45	0.56	P 40	0.52	0.58	P 19	0.65	0.33	P 1	0.55	0.18
グリッド J - 16		グリッド K - 16		P 41	0.40	0.49	P 20	0.46	0.69	P 2	0.52	0.95	グリッド M - 15	
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 42	0.45	0.52	P 21	0.45	0.29	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 13	0.33	0.24	P 1	0.50	0.32	P 43	0.40	0.43	P 22	0.64	0.66	P 1	0.77	0.25
P 14	0.34	0.46	P 2	(0.40)	0.45	P 44	0.63	0.33	P 23	0.55	0.11	P 4	0.45	0.63
P 15	0.36	0.14	P 3	0.42	0.26	P 45	0.31	0.26	P 24	0.58	0.23	P 5	0.35	0.58
P 16	0.44	0.45	P 4	0.55	0.85	P 46	0.24	0.18	P 25	0.33	0.33	P 6	0.33	0.46
P 17	0.35	0.40	P 5	0.41	0.60	P 47	0.35	0.20	P 26	0.67	0.30	P 8	0.51	0.43
P 18	0.37	0.22	P 7	0.27	0.31	P 48	0.33	0.30	P 27	0.40	0.47	P 10	0.30	0.39
P 19	0.33	0.29	P 8	0.37	0.20	P 49	0.26	0.25	P 28	0.39	0.28	P 11	0.45	0.24
P 20	0.48	0.45	P 9	0.30	0.27	グリッド K - 17		P 29	0.53	0.13	P 21	0.45	0.65	
P 21	0.30	0.30	P 10	0.27	0.19	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 31	0.30	0.48	グリッド M - 16		
P 22	0.48	0.90	P 11	0.43	0.71	P 1	0.38	0.84	P 32	0.35	0.50	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 24	0.36	0.19	P 12	0.39	0.56	P 2	0.35	0.89	P 33	0.36	0.10	P 1	0.43	0.40
グリッド J - 17		P 13	0.32	0.27	P 3	0.39	0.70	P 34	0.29	0.36	P 2	0.45	0.65	
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 14	0.35	0.25	P 4	0.52	0.25	P 35	0.56	0.20	グリッド M - 17		
P 4	0.42	0.14	P 15	0.49	0.57	P 5	0.27	0.16	P 36	0.52	0.40	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 5	0.24	0.20	P 16	0.52	0.45	P 6	0.42	0.59	P 37	0.44	0.14	P 1	0.31	0.44
P 9	0.40	0.38	P 17	0.44	0.62	P 7	0.79	0.30	P 38	0.38	0.20	P 2	0.42	0.14
P 10	0.34	0.18	P 18	0.59	0.59	P 8	0.54	0.81	P 39	0.48	0.37	P 3	0.42	0.15
P 11	0.48	0.32	P 19	0.35	0.19	P 9	0.44	0.39	P 40	0.37	0.38	P 4	0.50	0.97
P 12	0.34	0.57	P 20	0.58	0.48	P 10	0.50	0.79	P 42	0.45	0.44	グリッド M - 18		
P 13	0.40	0.23	P 21	0.48	0.14	P 11	0.42	0.38	P 43	0.58	0.41	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 14	0.40	0.21	P 22	0.23	0.24	グリッド L - 16		P 44	0.32	0.41	P 1	0.62	0.90	
グリッド J - 18		P 23	0.33	0.37	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 45	0.40	0.85	P 2	0.27	0.40	
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 24	0.28	0.27	P 2	0.35	0.37	P 46	0.60	0.90	P 3	0.41	0.59
P 1	0.32	0.52	P 25	0.35	0.40	P 4	0.35	0.81	P 47	0.52	0.92	グリッド N - 15		
P 2	0.46	0.47	P 26	(0.32)	0.22	P 5	0.40	0.72	グリッド L - 17		ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	
P 3	0.30	0.54	P 27	(0.30)	0.20	P 6	0.31	0.47	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 1	0.44	0.59
P 4	0.31	0.34	P 28	0.51	0.83	P 7	0.30	0.45	P 1	0.60	0.92	グリッド N - 16		
P 5	0.35	0.21	P 29	0.45	0.58	P 8	0.43	0.31	P 4	0.84	0.91	ピットNo.	長径(m)	深さ(m)
P 6	0.31	0.23	P 30	(0.40)	0.40	P 9	0.36	0.53	P 5	0.54	0.19	P 1	0.46	0.44
グリッド K - 15		P 31	0.31	0.37	P 10	0.65	0.82	P 6	0.41	0.38				
ピットNo.	長径(m)	深さ(m)	P 32	0.35	0.19	P 11	0.39	0.75	P 7	0.48	1.27			

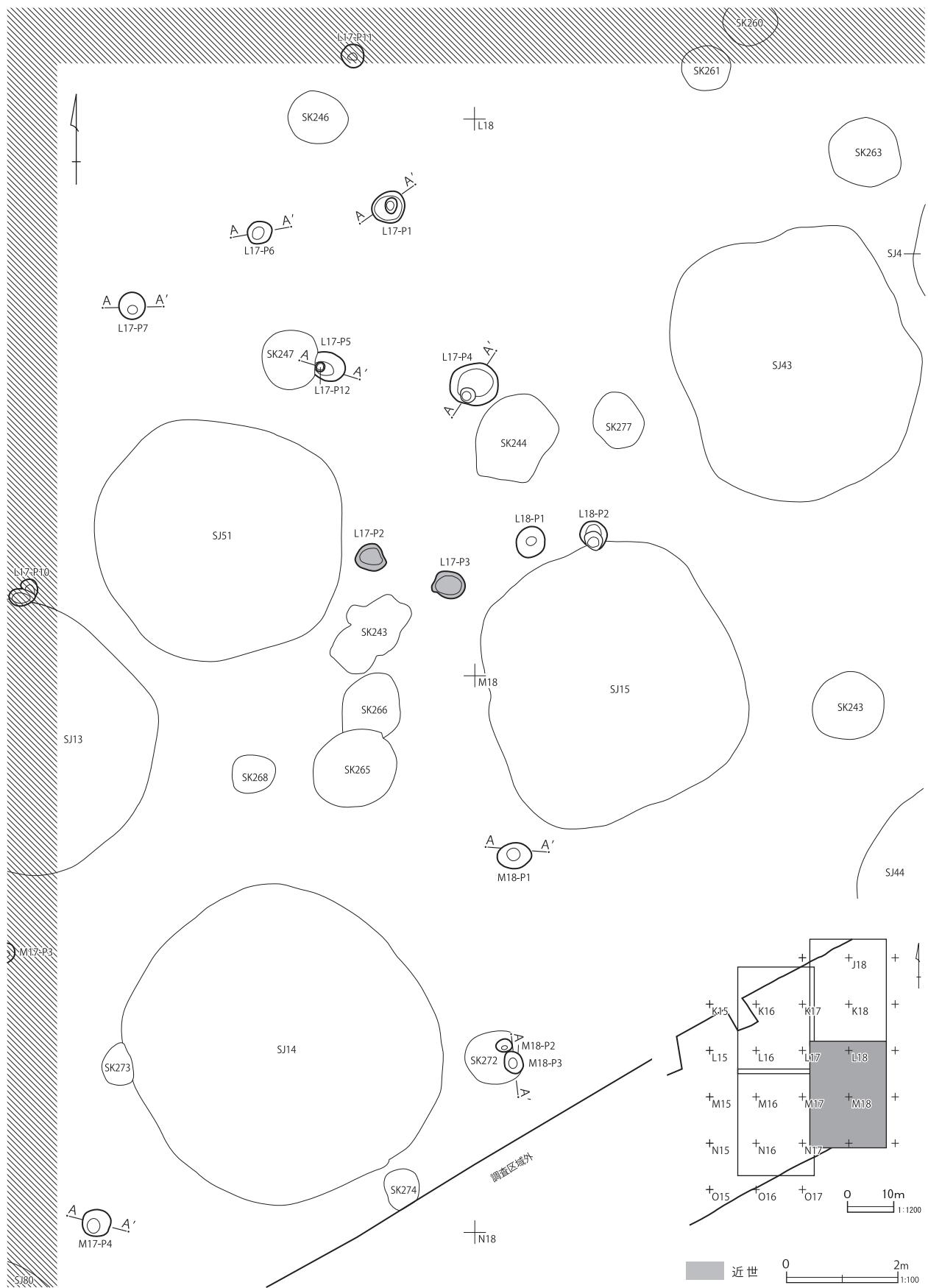




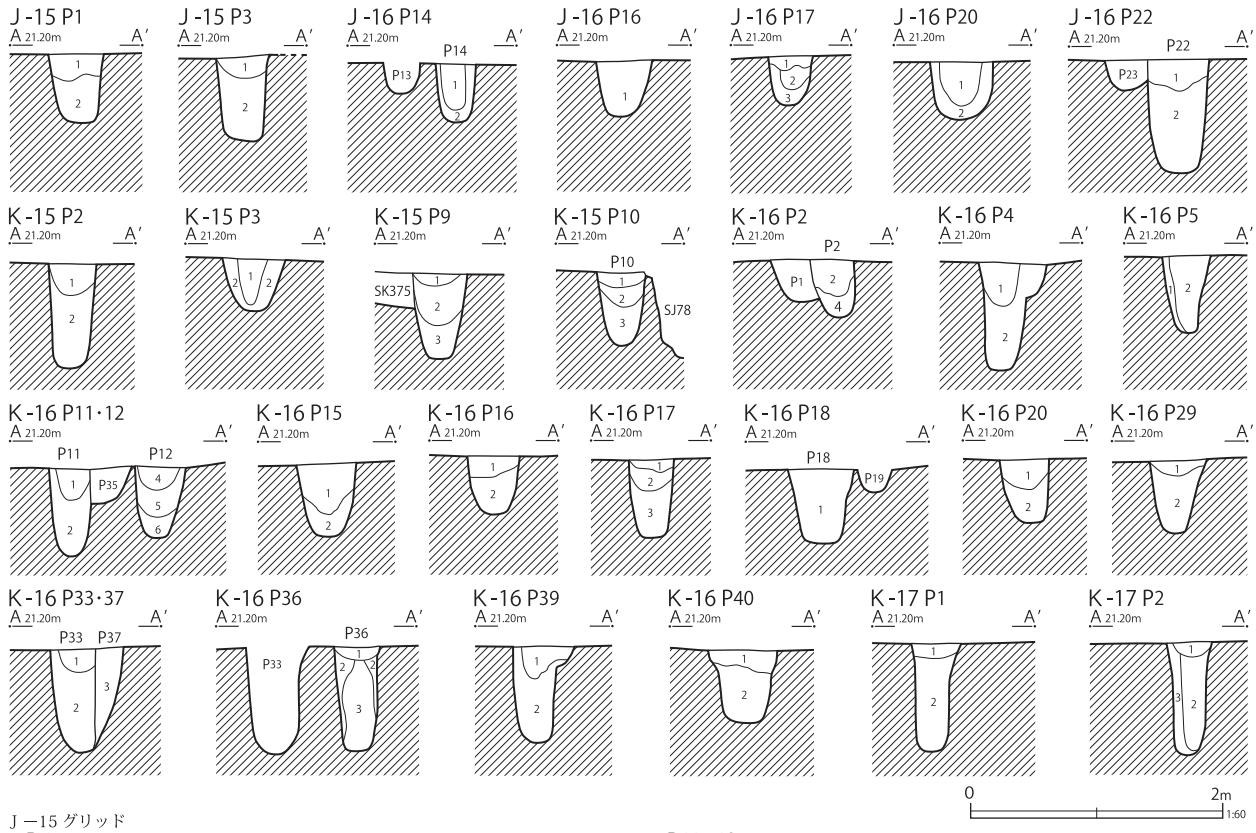
第377図 ピット集中区(2)



第378図 ピット集中区(3)



第379図 ピット集中区(4)

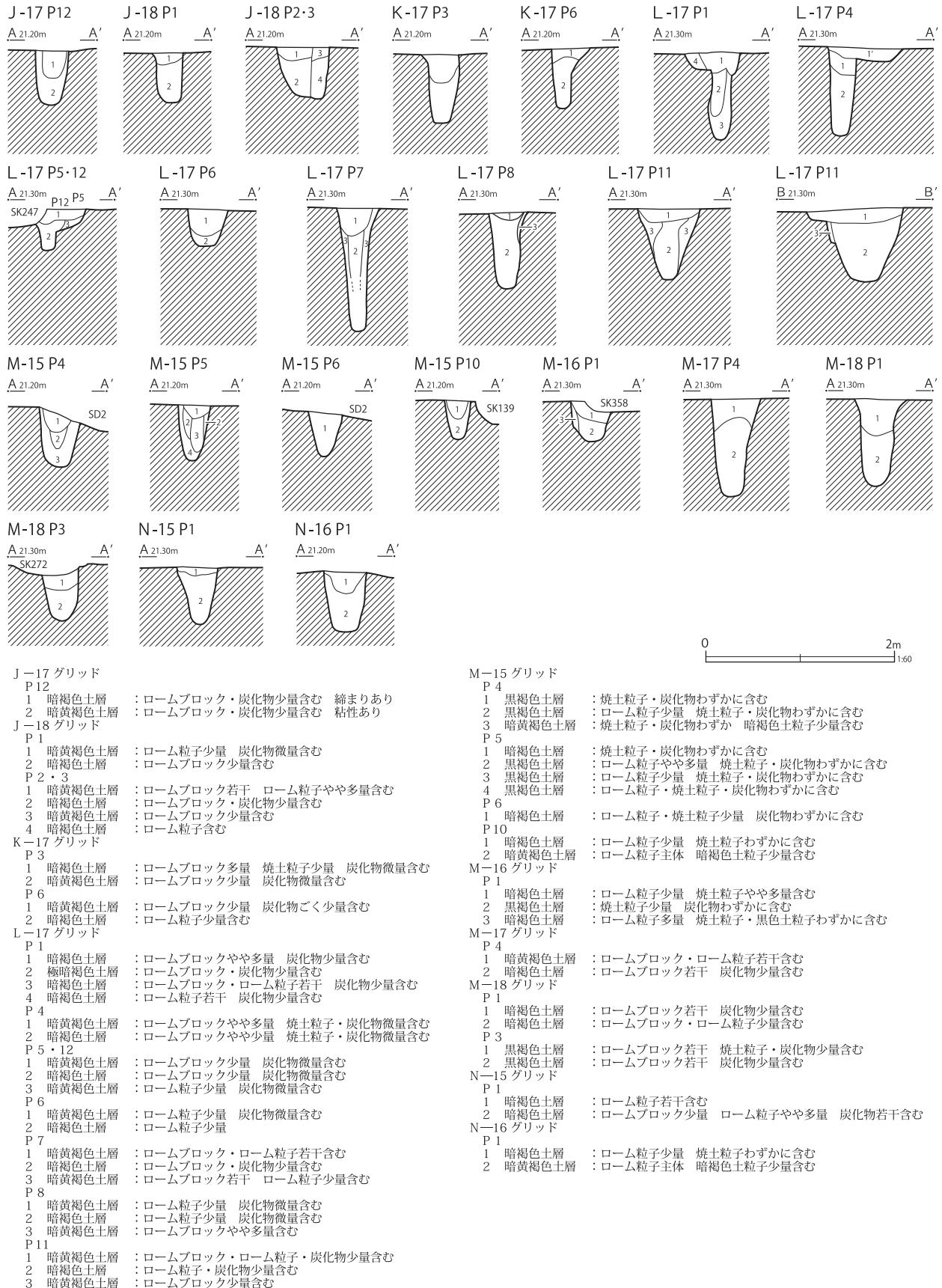


J-15 グリッド

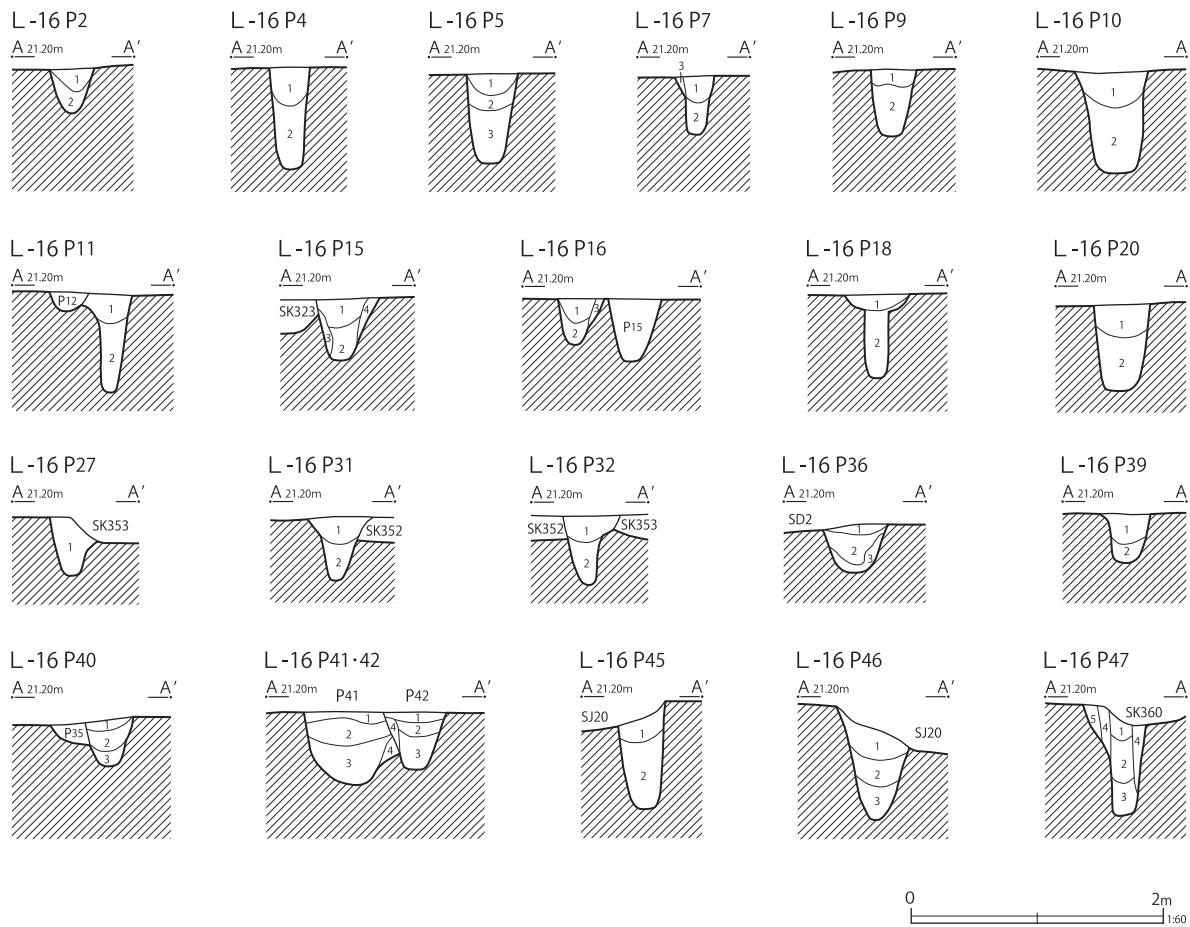
- P 1
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子微量 炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子微量 炭化物少量含む
- P-3
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 炭化物微量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物微量含む
- J-16 グリッド
P 13・14
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 焼土粒子・炭化物微量含む 締まりあり
2 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
- P 16
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
- P 17
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
3 暗黄褐色土層 : ロームブロック多量含む 締まりあり
- P 20
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 烧土粒子・炭化物微量含む 締まりあり
2 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
- P 22
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物多量含む 締まりあり
2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物多量含む 締まりあり
3 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 炭化物微量含む 締まりあり
- K-15 グリッド
P 2
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 烧土粒子微量 炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
- P 3
1 暗褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む
2 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量 烧土粒子微量含む
- P 9
1 黒褐色土層 : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
2 暗茶褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子・炭化物わずかに含む
3 黑褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子・炭化物わずかに含む
- P 10
1 暗褐色土層 : ローム粒子わずか 烧土粒子少量 炭化物わずかに含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子・炭化物わずかに含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子少量 炭化物わずかに含む
- K-16 グリッド
P 2
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック・焼土粒子少量含む 締まりあり
2 黑褐色土層 : ロームブロック・焼土粒子・炭化物少量含む 締まりあり
3 暗黄褐色土層 : ロームブロック多量含む 締まりあり
4 暗黄褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む 締まりあり
- P 4
1 暗褐色土層 : ローム粒子多量 烧土粒子・炭化物少量含む 締まりあり
2 暗黄褐色土層 : ローム粒子多量 炭化物少量含む 締まりあり
- P 5
1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まりあり
2 暗褐色土層 : ロームブロック少量 烧土粒子微量 炭化物少量含む 締まりあり

- P 11・12
1 暗黄褐色土層 : ロームブロックやや多量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む
3 暗黄褐色土層 : ローム粒子多量 炭化物微量含む
4 暗褐色土層 : ローム粒子やや多量 烧土粒子・炭化物微量含む
5 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量含む
6 暗黄褐色土層 : ローム粒子微量含む
- P 15
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む
- P 16
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む
- P 17
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物微量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物少量含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む
- P 18
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量含む
2 暗黄褐色土層 : ローム粒子多量含む
- P 20
1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物微量含む
2 暗黄褐色土層 : ロームブロックやや多量含む
- P 29
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子少量 烧土粒子・炭化物微量含む
2 暗褐色土層 : ローム粒子少量 烧土ブロック微量 炭化物少量含む
- P 33・37
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロックごく少量
3 暗黄褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子・炭化物少量含む
4 暗褐色土層 : ロームブロック若干 炭化物少量含む
- P 36
1 暗褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物やや多量含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
3 暗褐色土層 : ローム粒子若干 炭化物やや多量含む
- P 39
1 暗褐色土層 : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
2 明褐色土層 : ローム粒子多量 暗褐色土粒子少量含む
- P 40
1 暗褐色土層 : ロームブロック少量 烧土粒子・炭化物わずかに含む
2 黑褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子わずかに含む
- K-17 グリッド
P 1
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子・炭化物少量含む 締まりあり
2 暗褐色土層 : ロームブロック・烧土粒子・炭化物少量含む 締まりあり
- P 2
1 暗黄褐色土層 : ローム粒子・烧土粒子・炭化物少量含む 締まりあり
2 暗褐色土層 : ロームブロック・烧土粒子・炭化物少量含む 締まりあり
3 暗黄褐色土層 : ロームブロック多量 炭化物少量含む 締まりあり

第380図 ピット集中区(5)



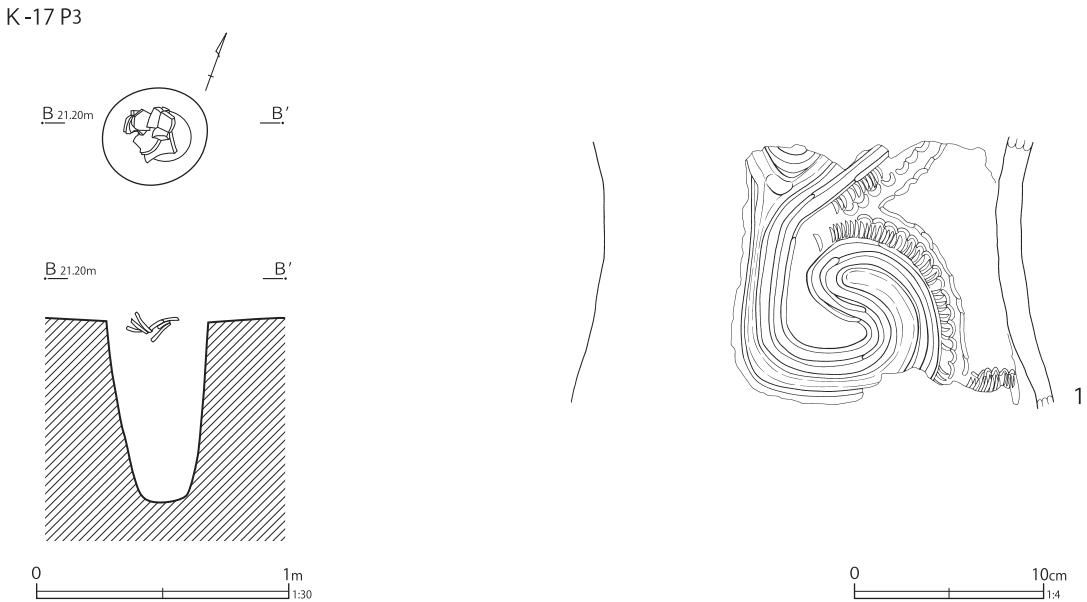
第381図 ピット集中区(6)



L-16 グリッド

P 2	1 暗褐色土層 2 黒褐色土層	: ローム粒子少量 炭化物微量含む : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
P 4	1 暗褐色土層 2 黒褐色土層	: ロームブロック少量 烧土粒子わずかに含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
P 5	1 暗褐色土層 2 黒褐色土層 3 黑褐色土層	: ローム粒子少量 烧土ブロック・焼土粒子わずかに含む : ロームブロック少量含む : 烧土粒子少量 炭化物わずかに含む
P 7	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層 3 暗黒褐色土層	: ロームブロック少量 烧土粒子わずかに含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む : 暗黒褐色土粒子少量含む 浮いたローム主体
P 9	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ロームブロック少量 烧土粒子わずかに含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
P 10	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: 烧土粒子わずかに含む 均一質 : 烧土粒子やや多量含む
P 11	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ローム粒子・焼土粒子わずかに含む : 烧土粒子やや多量含む
P 15	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層 3 黑褐色土層 4 暗黄褐色土層	: 烧土粒子わずかに含む 均一質 : 烧土粒子やや多量含む : 烧土粒子多量含む : 烧土粒子わずか 暗褐色土粒子少量含む 浮いたローム主体
P 16	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ローム粒子少量 烧土粒子わずかに含む : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
P 18	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ローム粒子・焼土粒子わずかに含む : 炭化物わずかに含む
P 20	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: 烧土粒子・炭化物わずかに含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
P 27	1 暗褐色土層	: ロームブロック・ローム粒子やや多量 黑色土粒子少量含む
P 31	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ロームブロックわずか ローム粒子少量含む : ロームブロック少量 烧土粒子わずかに含む
P 32	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ローム粒子・焼土粒子少量含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
P 36	1 暗褐色土層 2 暗褐色土層 3 暗黄褐色土層	: 烧土粒子・炭化物微量含む : ローム粒子少量 烧土粒子・炭化物わずかに含む : 烧土粒子わずか 炭化物微量含む 浮いたローム主体
P 39	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: ローム粒子少量 烧土粒子わずかに含む : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む
P 40	1 暗褐色土層 2 暗黄褐色土層 3 暗黄褐色土層	: ローム粒子わずかに含む : ローム粒子やや多量に含む : ローム粒子多量に含む
P 41	1 暗褐色土層 2 暗褐色土層 3 暗褐色土層 4 暗褐色土層	: ローム粒子・焼土粒子わずかに含む : ローム粒子やや多量 烧土粒子わずかに含む : ローム粒子多量 烧土粒子わずかに含む : 暗褐色土粒子わずかに含む 三角堆積土
P 42	1 暗褐色土層 2 暗褐色土層 3 暗褐色土層 4 暗褐色土層	: 烧土粒子わずか 明褐色土粒子少量含む : 烧土粒子わずか 明褐色土粒子やや多量含む : 烧土粒子わずか 明褐色土粒子多量含む : 烧土粒子・焼土ブロックわずか 明褐色土粒子少量含む
P 45	1 暗褐色土層 2 黑褐色土層	: 烧土粒子・炭化物わずかに含む : 烧土粒子・炭化物わずかに含む
P 46	1 暗褐色土層 2 暗黄褐色土層 3 黑褐色土層	: 烧土粒子・炭化物わずかに含む : 暗褐色土粒子多量含む : ローム粒子・炭化物わずかに含む
P 47	1 暗褐色土層 2 極暗褐色土層 3 黑色土層 4 暗黄褐色土層 5 暗黄褐色土層	: ローム粒子ごく少量 烧土粒子微量含む : ローム粒子・焼土粒子わずかに含む : 烧土粒子微量含む : ロームブロック・ローム粒子やや多量含む : ローム粒子多量 暗褐色土粒子やや多量含む

第382図 ピット集中区(7)



第383図 ピット集中区（8）

386図に掲載した。詳細は後段に記すが、まず前期諸磯 a～b式期のものが明確に存在する。

前期を除いた傾向として、勝坂I～II式期の遺物がまとまって出土する例が目立ち、逆に加曾利E式を出土するピットはごく少数である。

これらのことから、集落を構成する竪穴住居跡よりも一段階以上古い時期の建物群がこの一角に存在したことになる。集落の消長を復元するうえで極めて興味深い現象であることから、ここに一項を設けて記述することとした。

なお、今回の発掘調査区全体におけるピットの分布状況については次回報告において総括する。

ピット集中区出土土器（第384～386図）

I - 17 P 2・3 (第384図1)

半裁竹管文の平行沈線を描く諸磯式である。

I - 18 P 5 (第384図2～5)

2～3は半裁竹管文の諸磯 a式である。5は三角陰刻文の五領ヶ台式である。

J - 15 P 1 (第384図6・7)

キャタピラ文を描く勝坂式である。

J - 15 P 2 (第384図8)

8は複列の角押し文列を描く阿玉台II式である。

J - 16 P 2 (第384図9～12)

11は胎土に金雲母を含む阿玉台式であろう。9・10・12は沈線により三叉文や交互刻み文を描く勝坂III式である。

J - 16 P 4 (第384図13・14)

いずれも阿玉台I～II式である。角押し文を描き、胎土に金雲母を含む。

J - 16 P 5 (第384図15・16)

半裁竹管文の諸磯 a式である。15は口縁部で、胴部に入り組み木の葉文を描く。

J - 16 P 20 (第384図17)

無文の胴部で、胎土に少量の金雲母を含む。

J - 16 P 22・23 (第384図18・19)

いずれも諸磯 aないし b式とみられる。RL単節横位回転の縄文を施文する。

J - 18 P 1 (第384図20)

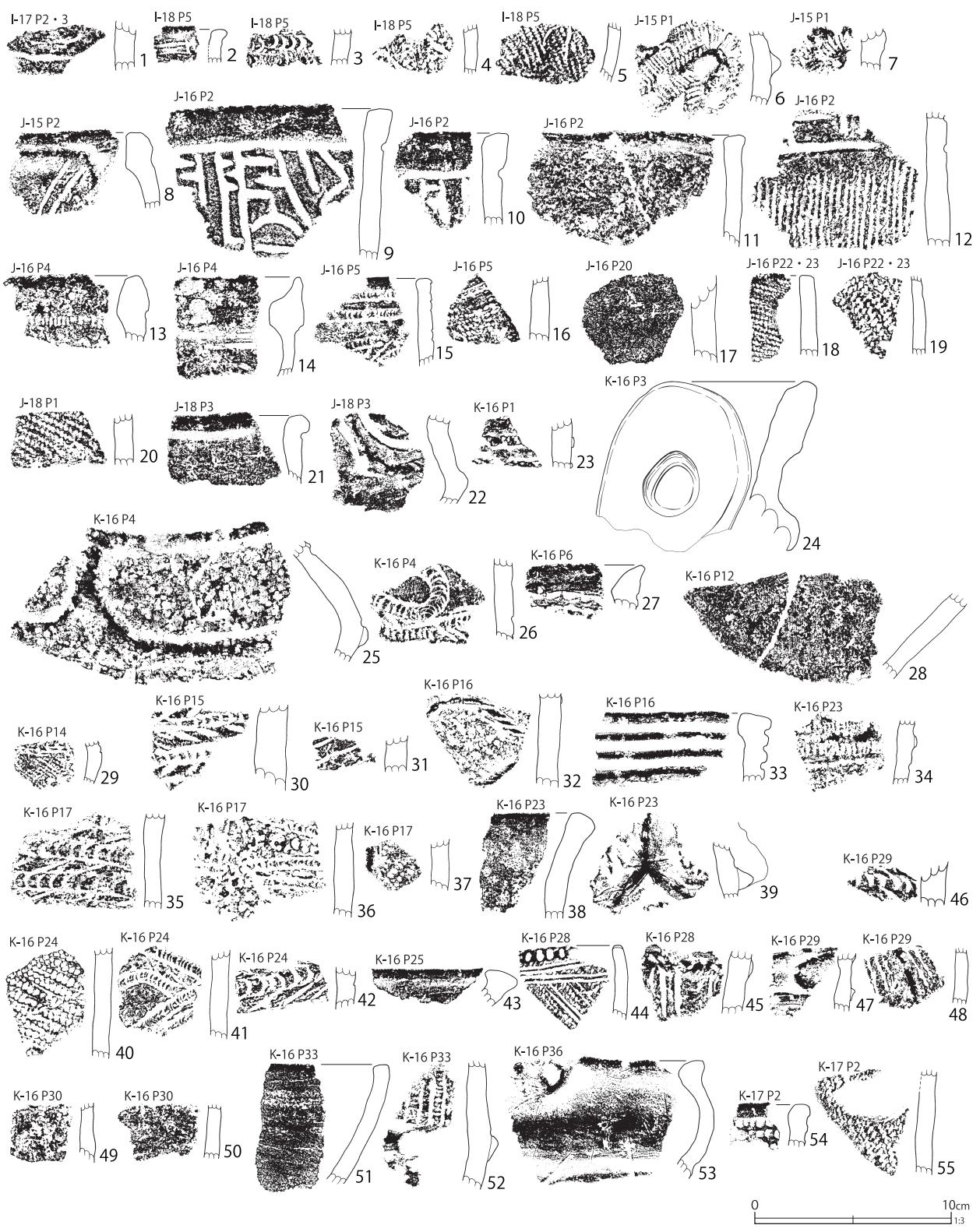
諸磯式であろう。RL単節横位回転の縄文を施文する。

J - 18 P 3 (第384図21・22)

21は無文の折り返し口縁である。22は阿玉台式で、断面三角形の隆帶で区画文を描き、胎土に金雲母を含む。

K - 16 P 1 (第384図23)

斜め刻みの浮線文で、諸磯 b式である。



第384図 ピット集中区出土遺物（1）

K-16 P3 (第384図24)

中央に円孔を持つ円盤状突起で、胎土に大量の金雲母を含む。阿玉台式であろう。

K-16 P4 (第384図25・26)

25は阿玉台I式で、浅鉢胴上半部とみられる。表面は被熱による風化が甚だしいが、隆帯による区画文を描き、内部に角押し文が巡る。胎土に金雲母を含む。26は諸磯b式である。

K-16 P6 (第384図27)

阿玉台II式である。複列の角押し文が巡る口縁部で、胎土に大量の雲母を含む。

K-16 P12 (第384図28)

無文の胴部で、中期の浅鉢とみられる。

K-16 P14 (第384図29)

諸磯a式である。半裁竹管による結節沈線と、RL単節横位回転の縄文を施文する。

K-16 P15 (第384図30・31)

半裁竹管による平行沈線文で、諸磯式とみられる。

K-16 P16 (第384図32・33)

32は斜め刻みの浮線文で、諸磯b式である。地文はRL単節横位回転の縄文である。33は多段の隆帯+沈線が巡る円筒形深鉢口縁部で、勝坂式であろう。

K-16 P17 (第384図35～37)

35・36は諸磯b式で、半裁竹管文を描く。37は加曾利E I式であろう。隆帯の懸垂文が垂下し、RL単節縦位回転の縄文を施文する。

K-16 P23 (第384図34・38・39)

34は勝坂I式で、キャタピラ文と三角押し文が重畠する。38は無文の口縁だが、内面に赤色顔料が残り、浅鉢と考えられる。39は阿玉台式で、胎土に大量の金雲母を含む。断面三角形の隆帯で区画文を描き、内部にキャタピラ文が巡る。

K-16 P24 (第384図40～42)

40はRL単節横位回転の粗大な縄文を施文し、内面に擦痕を持つ。胎土にごく少量の纖維を含む。

41・42は半裁竹管文の諸磯b式である。

K-16 P25 (第384図43)

無文の口縁部である。

K-16 P28 (第384図44・45)

44は諸磯b式である。刻みを持つ口縁部で、RL単節横位回転の縄文を施文し、半裁竹管状工具の平行沈線文を描く。45は半裁竹管による縦位の平行沈線文を描き、横位の隆帯上に同一工具の刺突を施す。

K-16 P29 (第384図46～48)

46は半裁竹管文の諸磯b式である。47・48は阿玉台I式で、胎土に大量の金雲母を含む。47は断面三角形の隆帯で幅狭の区画文を描き、48は半裁竹管状工具による結節沈線文を描く。

K-16 P30 (第384図49・50)

いずれも無文の胴部だが、胎土に大量の金雲母を含む阿玉台式である。

K-16 P33 (第384図51・52)

いずれも勝坂II式と考えられる。51は無文の内湾口縁である。52は隆帯の区画内部に縦位の平行沈線を描き、1列おきに刻みを施す。

K-16 P36 (第384図53)

無文の内湾口縁上に小振りの眼鏡状突起の痕跡がみられる。勝坂II～III式であろう。

K-17 P2 (第384図54・55)

54は口縁直下に角押し文列が巡る勝坂I式である。55は諸磯b式とみられ、RL単節横位回転の縄文を施文する。

K-17 P3 (第383図1・第385図56～60・64)

勝坂II式期の土器が主体をなす。

1は遺構検出面付近から出土した深鉢胴部である。隆帯+平行沈線の曲線的なモチーフに沿って半裁竹管状工具のキャタピラ文と同一工具の弧状刺突文、単沈線の小波状文を描く。

復元最大径25.4cm、現存高14.3cmである。胎土はやや砂質で、チャートの亜角礫を多く含む。器壁は外面暗橙色、内面黄橙色で、焼成はやや不

良である。全体に二次焼成を受けており、外面には黒色の付着物がみられる。

56は扁平な隆帯+平行沈線で曲線的な文様を展開する阿玉台系の土器である。59・60は無文の口縁部で、60は山形の大波状口縁である。57は刻み隆帯に沿ってキャタピラ文が巡る。58は隆帯による平行四辺形の区画内部にキャタピラ文が巡る。64は円孔を持つ双頭の突起である。

K - 17 P 4 (第385図65)

R L 単節縦位回転の縄文を施文する。

K - 17 P 7 (第385図66)

阿玉台式である。無文地に縦位の隆帯を持つ胴部で、胎土に金雲母を含む。

K - 19 P 2 (第385図61~63)

加曾利E I式のキャリパー類深鉢である。61は口縁部文様帶、62は頸部無文帶との間を2本隆帯で区画し、1本隆帯の蛇行懸垂文が垂下する。63は平行沈線による蛇行懸垂文である。

K - 19 P 6 (第385図67・68)

67は平行沈線による蛇行懸垂文で、加曾利E式である。68は阿玉台式で、断面三角形の隆帯+沈線で区画文を描き、R L 単節縦位回転の縄文を施文する。胎土には金雲母粒子を混入する。

K - 19 P 14 (第385図69)

諸磯a式で、半裁竹管状工具の結節沈線文を描く。地文はL R 単節横位回転の縄文である。

K - 19 P 15 (第385図70)

R 縦位回転の撚糸文を施文する胴部で、加曾利E I式と考えられる。

K - 19 P 17 (第385図71)

2本隆帯による文様を描く加曾利E式で、R 縦位回転の撚糸文を施文する。

K - 20 P 4 (第385図72)

R の撚糸文を施文する胴部破片である。

K - 20 P 6 (第385図74)

加曾利E I式キャリパー類深鉢の口縁部文様帶である。2本隆帯で区画文を描き、R 縦位回転の

撚糸文を施文する。

K - 20 P 8 (第385図73・75)

73はR 縦位回転の撚糸文を施文する胴部で、加曾利E I式と考えられる。75は無文の底部である。

K - 20 P 11 (第385図76)

無文の胴部で、胎土に金雲母粒子を含む。

L - 16 P 6 (第385図77)

R 縦位回転の撚糸文を施文する胴部で、加曾利E I式であろう。

L - 16 P 10 (第385図78)

無文の深鉢底部である。

L - 16 P 11・12 (第385図79~83)

諸磯a式である。79は半裁竹管文による結節沈線文が巡る口縁部である。80はR L 単節横位回転の縄文を施文する。81は磨り消しを伴う入り組み木の葉文で、地文はR L 単節横位回転の縄文である。82は結節沈線文による入り組み文様である。83はR L 単節横位回転の縄文のみ施文する胴部である。

L - 16 P 15 (第385図84)

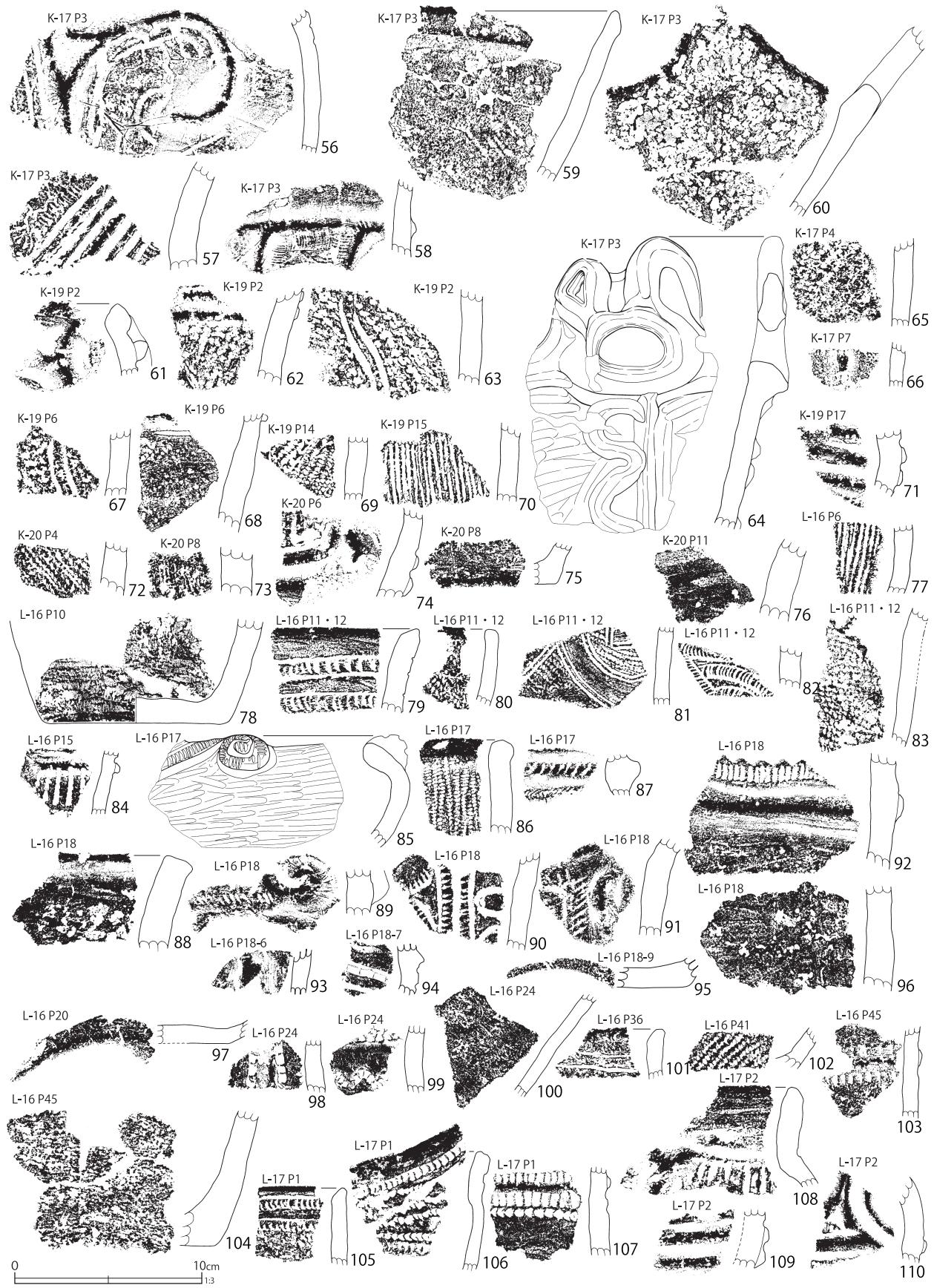
勝坂I式で、隆帯区画内部に角押し文列が並ぶ。

L - 16 P 17 (第385図85~87)

勝坂式である。85は内湾口縁で、口唇上に渦巻文+刻み目を伴う円錐状突起を配する。86は円筒状深鉢の口縁部で、R L 単節（0段多条）の縄文を右下がりに施文して条を縦に揃えている。87は刻み隆帯の区画で、側面に凹線を伴い、下方に三角押し文が巡る。

L - 16 P 18 (第385図88~96)

勝坂II~III式期の土器群と考えられる。88は無文の口縁である。89は刻み隆帯の区画に小渦巻文を伴う。90は刻みを伴う平行沈線で区画を描き、半肉彫りの三叉文を描く。91は刻み隆帯の区画文である。92は文様帶下端を区画する隆帯で、内部にキャタピラ文が巡り、胴下半部は無文化する。93は縦位の隆帯、94は隆帯に沿って複列の角押し文が巡る阿玉台II式である。96は無文の胴部、96



第385図 ピット集中区出土遺物（2）

は底部である。

L - 16 P20 (第385図97)

無文の底部である。

L - 16 P24 (第385図98~100)

98・99は角押し文を描く勝坂I式である。100は無文の胴部で、胎土に金雲母を含む阿玉台式である。

L - 16 P36 (第385図101)

諸磯式で、口縁直下に半裁竹管状工具の平行沈線文が巡る。

L - 16 P41 (第385図102)

底部直上の破片で、LR単節横位回転の縄文を施文する。

L - 16 P45 (第385図103・104)

103は阿玉台I式である。断面三角形の隆帯に沿って角押し文が巡る。104は無文の深鉢底部である。

L - 17 P1 (第385図105~107)

105は諸磯a式である。口縁直下に無文帯を持ち、2条の結節沈線文が巡る。胴部の地文はRL単節横位回転の縄文である。106・107は勝坂I式である。隆帯に沿って幅広の角押し文や三角押し文が巡る。106は波状口縁である。

L - 17 P2 (第385図108~110)

加曾利E I式である。108は浅鉢で、胴上半部に隆帯の区画文を持ち、縦位の集合沈線文を地文とする。109は文様帶下端を区画する2本隆帯である。110は口縁部の文様帶で、2本隆帯の渦巻文を描く。

L - 17 P4 (第386図111~113)

諸磯a式である。111は櫛齒状工具の条線による横位の区画内部に同一工具の小波状文を描く。地文はRL単節横位回転の縄文である。112は無文地に横位の結節沈線文が重畠する。113は結節沈線文による鋸齒文である。

L - 17 P6 (第386図114・115)

いずれも横位の平行沈線による区画の下にR縦

位回転の撚糸文を施文する。114は棒状工具の平行沈線、115は半裁竹管文の平行沈線である。

L - 17 P7 (第386図116・117)

116は角押し文の勝坂I式、117は無文地に斜め刻みの浮線文を描く諸磯b式である。

L - 17 P8 (第386図118・119)

118は阿玉台I式で、胎土に大量の金雲母を含み、断面三角形の隆帯に沿って角押し文が巡る。119は勝坂II式で、半裁竹管のキャタピラ文に沿って弧状の刺突文が巡る。

L - 17 P11 (第386図126~133)

勝坂II式期の土器であろう。126は波状口縁で、隆帯による楕円形区画に沿って幅広の角押し文を描く。127・128は口縁直下に隆帯と半裁竹管状工具の平行沈線が巡り、128は胴部に三角押し文・キャタピラ文・小波状文を描く。

129・130は隆帯に沿ってキャタピラ文と小波状文を描く胴部で、130は楕円形の区画文である。131・132は刻み隆帯に沿って半裁竹管状工具の平行沈線文を描く胴部、133は無文の深鉢底部である。

L - 17 P12 (第386図120)

無文の内湾口縁である。

L - 18 P1 (第386図121・122)

121は無文の折り返し口縁で、勝坂式である。122は諸磯a式で、半裁竹管状工具の沈線文を描く。地文はRL単節横位回転の縄文である。

L - 18 P2 (第386図123)

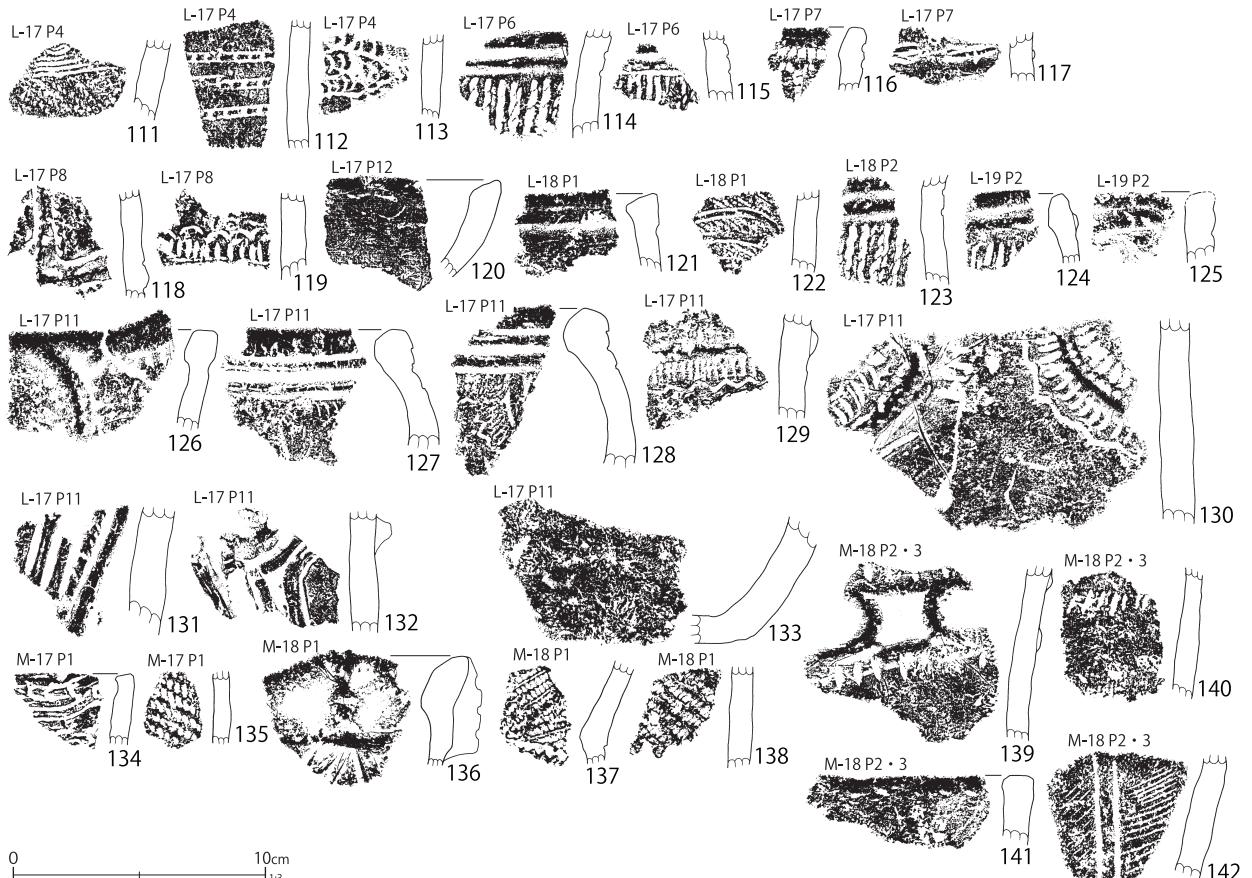
加曾利E式で、胴部にR縦位回転の撚糸文を施文し、棒状工具の平行沈線を巡らせて、沈線間の地文を磨り消している。

L - 19 P2 (第386図124・125)

124は口縁部で、隆帯の区画内部に縦位の条線を施文する。125は扁平な2本隆帯の区画文を描く口縁部である。

M - 17 P1 (第386図134・135)

諸磯a式である。134は半裁竹管状工具の平行



第386図 ピット集中区出土遺物（3）

沈線と結節沈線文を描く口縁部、135はR L単節横位回転の縄文を施文する胴部である。

M-18 P1 (第386図136~138)

136は阿玉台I b式で、波状口縁の波頂部から断面三角形の隆帯が垂下し、横位の刻みを施す。胎土に金雲母を混入する。137は諸磯式で、胴部中段に結節沈線文の区画を持ち、L R単節横位回転の縄文を施文する。138は勝坂式であろう。地

文はL R単節縦位回転の縄文で、0段多条である。

M-18 P2・3 (第386図139~142)

阿玉台I b式を主体とする。139は扁平な隆帯で幅狭の区画文を描き、区画の上下に間隔の広い爪型文が巡る。胎土に金雲母を含む。140は縦位の角押し文列で、やはり胎土に金雲母を含む。141は無文の口縁部、142は平行沈線文の左右に櫛歯状工具の条線を描き、胎土に大量の金雲母を含む。

2. 近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

L～P - 8～11グリッド周辺に集中して、9棟の掘立柱建物が検出された。いずれも遺物は僅少であるが、覆土の一部にヤドロ層（明灰褐色シルト）を含んでおり、近世に構築されたものである。中でも第1・8・9号および第4・5号掘立柱建物跡は同一地点で建て替えられており、近接した時期のものと考えられる。

第1号掘立柱建物跡（第387・388図）

N・O・8・9グリッドに位置する。第8・9号掘立柱建物跡より新しく、第51号土壙に壊されている。

北側の一部が調査区域外に存在するが、桁行5間以上、梁行き2間の建物である。規模は発掘調査部分の桁行10.3m、梁行4.5mで、桁行方向はN - 13° - Wを指す。

第41表 掘立柱建物跡柱穴計測表

第1号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	58	72	P 2	48	22	P 3	60	54	P 4	55	59	P 5	60	62
P 6	65	71	P 7	68	71	P 8	80	70	P 9	70	75	P 10	75	77
P11	70	67	P12	50	45	P13	50	43	P14	38	40	P15	43	22
P16	40	31	P17	45	23									

第2号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	103	54	P 2	91	80	P 3	112	86	P 4	65	84	P 5	90	54

第3号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	75	85	P 2	140	72	P 3	110	81	P 4	124	88			

第4号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	48	60	P 2	(40)	53	P 3	46	52	P 4	53	54	P 5	(46)	31
P 6	43	59	P 7	42	61	P 8	40	56	P 9	40	56			

第5号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	(46)	61	P 2	(42)	53	P 3	29	32	P 4	(52)	66	P 5	48	59
P 6	76	39	P 7	30	38	P 8	40	58						

第6号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	36	58	P 2	32	86	P 3	37	75	P 4	38	40			

第7号掘立柱建物跡

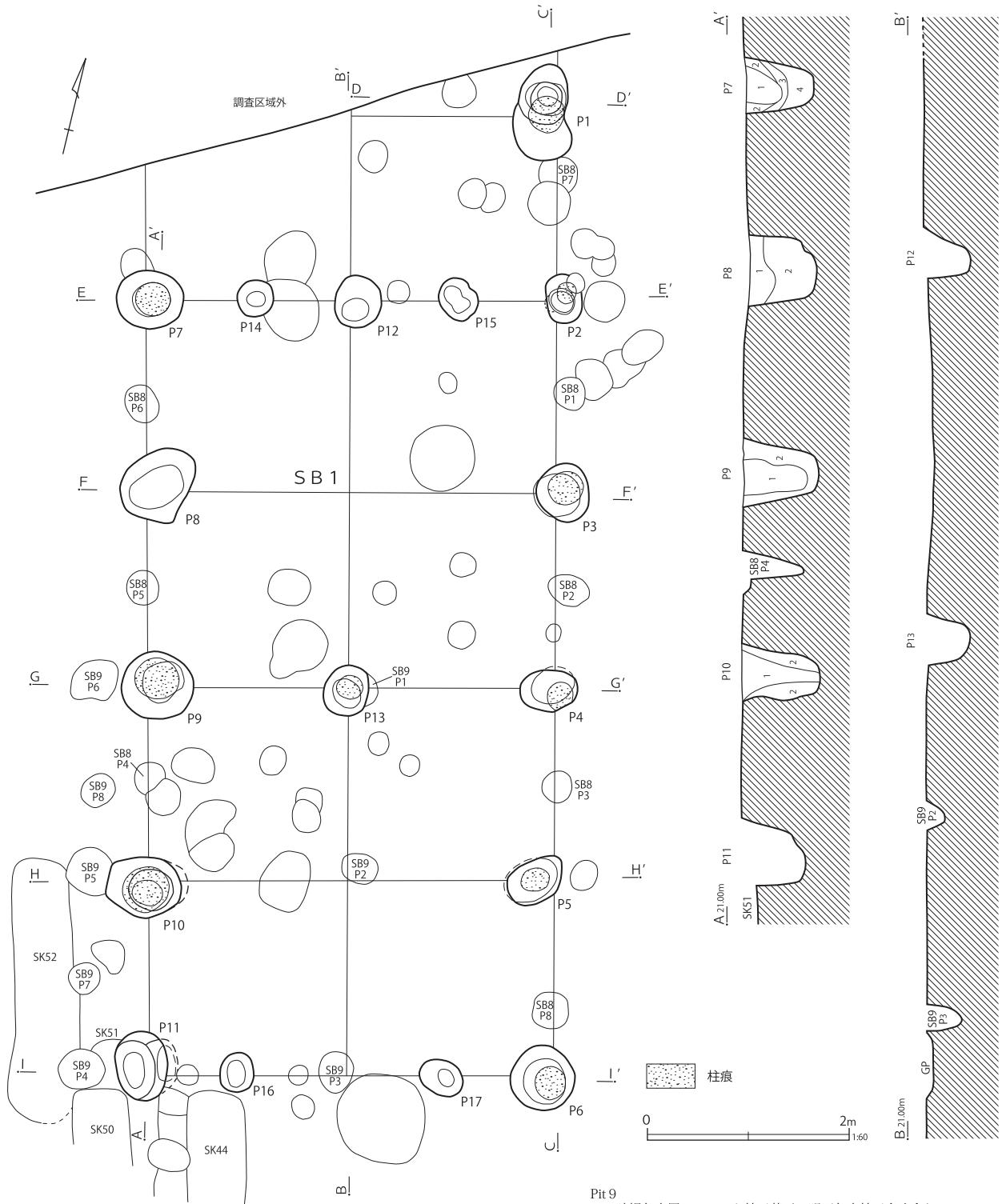
ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	50	48	P 2	50	49	P 3	44	64	P 4	50	53	P 5	50	46
P 6	(56)	23	P 7	38	38	P 8	41	46	P 9	40	42	P10	44	48

第8号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	35	23	P 2	42	23	P 3	34	19	P 4	32	63	P 5	35	35
P 6	40	14	P 7	40	26	P 8	35	24						

第9号掘立柱建物跡

ピットNo.	長径(cm)	深さ(cm)												
P 1	30	29	P 2	35	18	P 3	40	23	P 4	48	33	P 5	50	39
P 6	54	48	P 7	30	10	P 8	36	18						



S B 1

Pit 7

1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰色土ブロック・黒褐色土若干含む
非常に混じり気の多い層

2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 締まり弱い
やや灰色がかった暗褐色土を主体とする

3 明褐色土層 : ロームブロック・暗褐色土若干含む ローム粒子を主体とする

4 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む 一部ブロック状を呈する 粘性に富む 締まっている

Pit 8

1 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・暗褐色土・暗黄褐色土若干含む
締まっている 極めて混じり気の多い層

Pit 9

1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 明灰色土粒子多く含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
締まり弱い 暗褐色土を主体とする

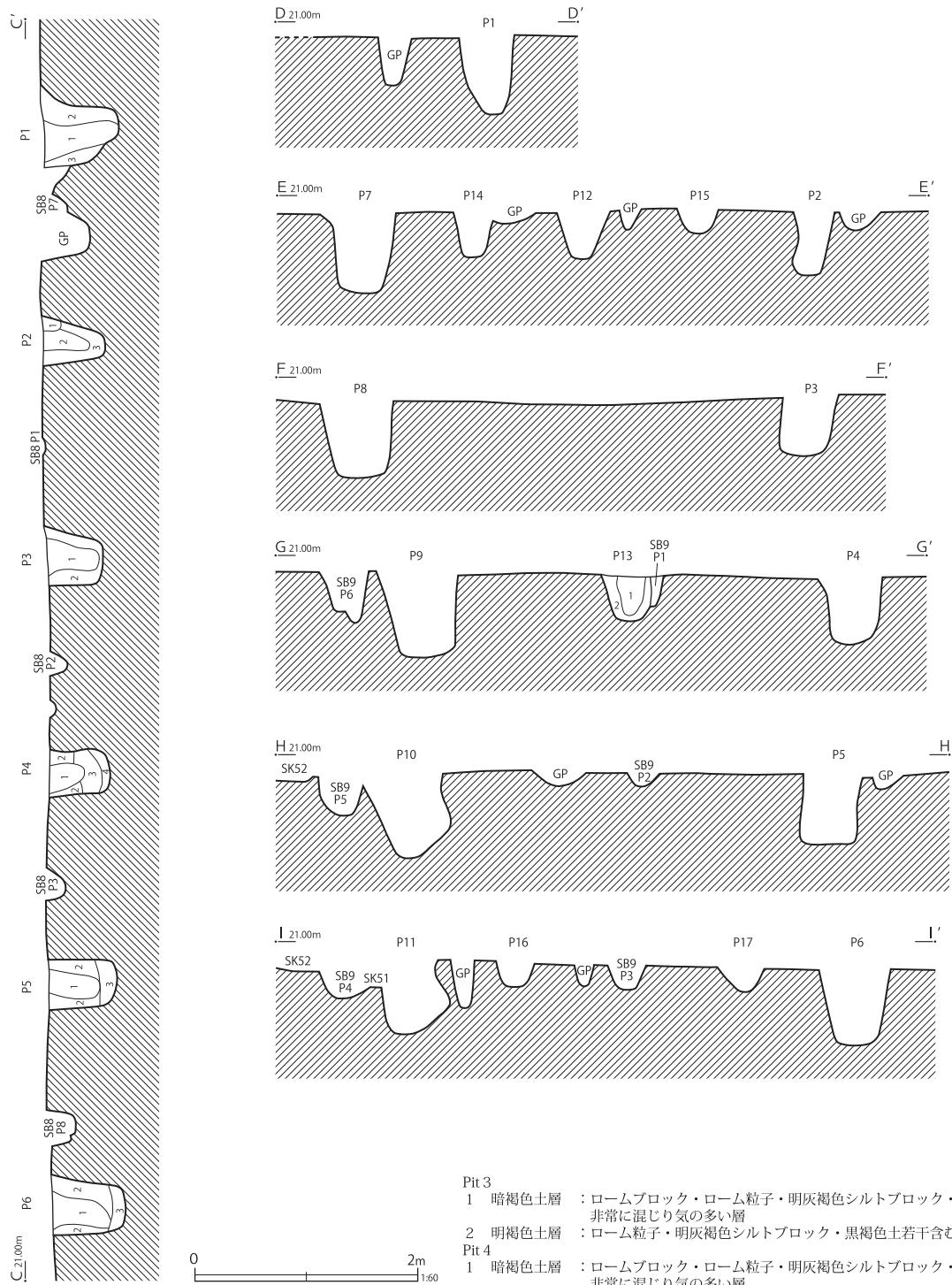
Pit 10

1 暗褐色土層 : ローム粒子若干 明灰色土粒子多く含む
2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
締まり弱い 暗褐色土を主体とする

Pit 13

1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰色土ブロック・
黒褐色土若干含む 非常に混じり気の多い層
2 明褐色土層 : ローム粒子・明灰色土ブロック・黒褐色土若干含む
締まり弱い

第387図 第1号掘立柱建物跡 (1)



Pit 3
1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む
非常に混じり気の多い層

2 明褐色土層 : ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む 締まり弱い

Pit 4
1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む
非常に混じり気の多い層

2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 締まり弱い
やや灰色がかった暗褐色土を主体とする

3 明褐色土層 : ロームブロック・暗褐色土若干含む ローム粒子を主体とする

Pit 5
1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む
非常に混じり気の多い層

2 明褐色土層 : ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む 締まり弱い

3 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む 一部ブロック状を呈する 粘性に富む 締まっている

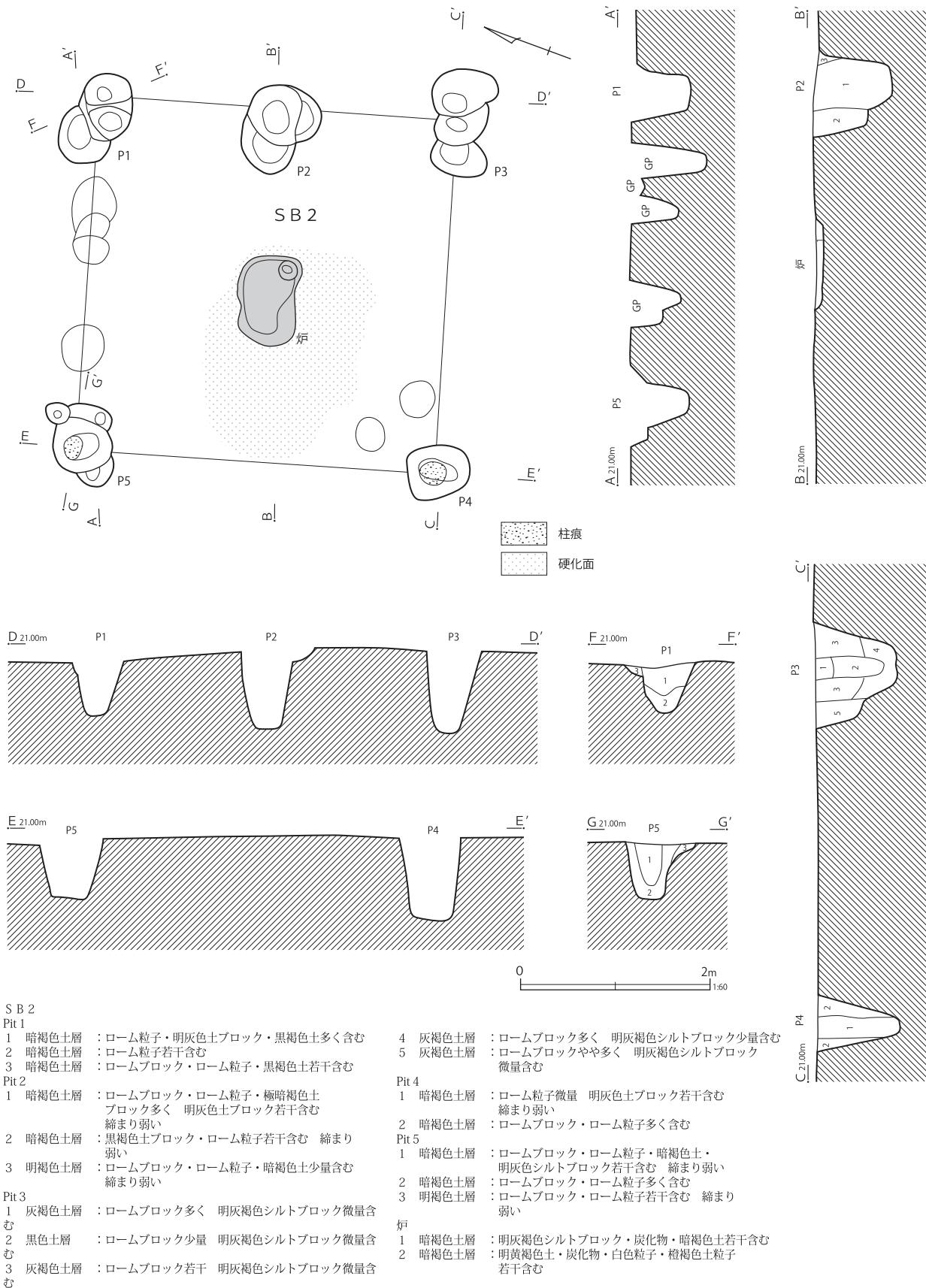
Pit 6
1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む
非常に混じり気の多い層

2 明褐色土層 : ローム粒子・明灰褐色シルトブロック・黒褐色土若干含む 締まり弱い

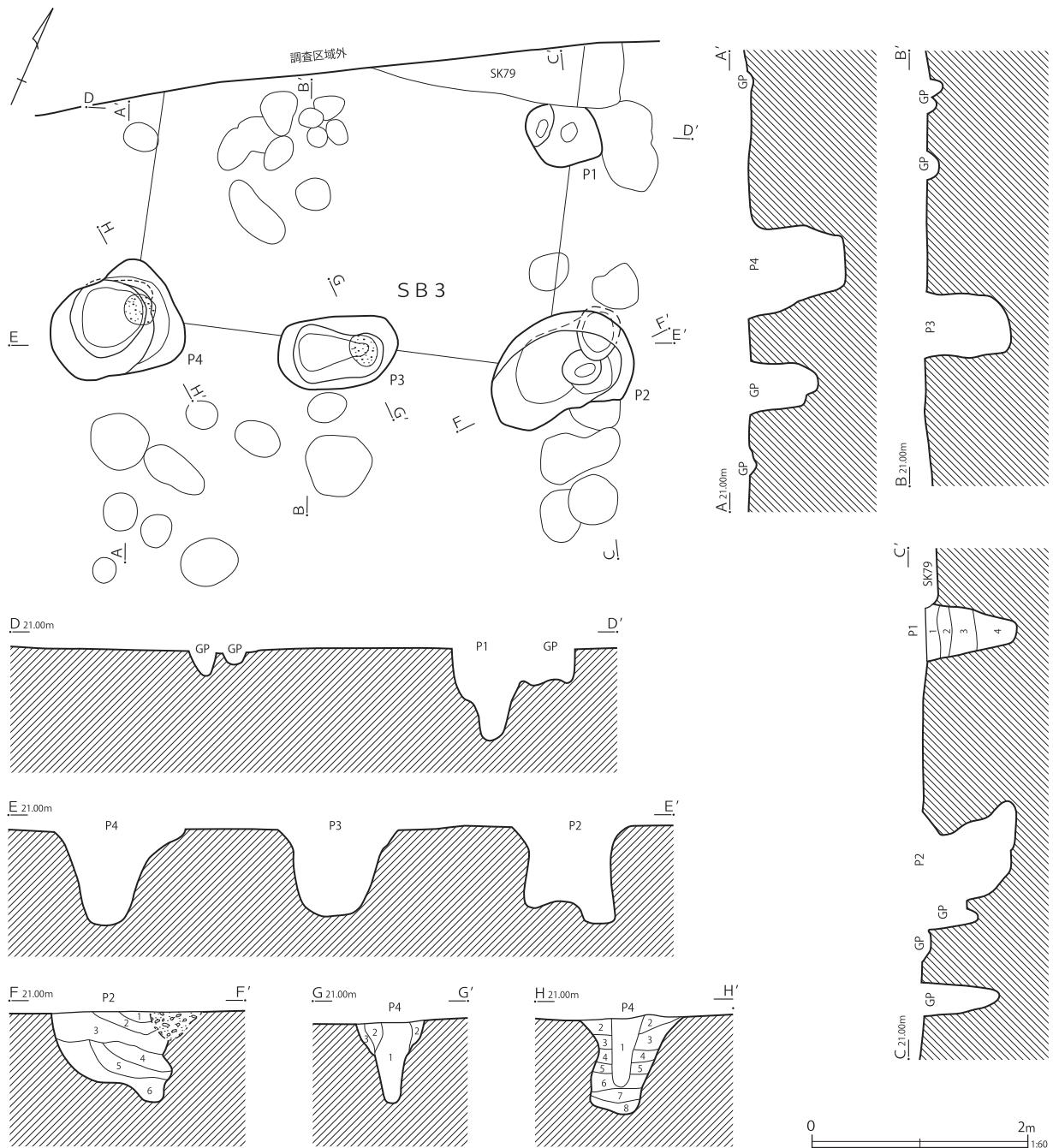
3 暗褐色土層 : ローム粒子微量含む 一部ブロック状を呈する 粘性に富む 締まっている

S B 1	
Pit 1	1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 締まり弱い
	2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 締まり弱い やや灰色がかった暗褐色土を主体とする
	3 黄褐色土層 : ロームブロック・暗褐色土若干含む 締まり弱い ローム粒子を主体とする層
Pit 2	
	1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子微量含む 締まり弱い
	2 暗褐色土層 : ロームブロック・明灰色土ブロック若干含む 黒みがかった暗褐色土を主体とする
	3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・黒褐色土若干含む 締まり弱い 暗褐色土を主体とする

第388図 第1号掘立柱建物跡（2）



第389図 第2号掘立柱建物跡



- S B 3**
- Pit 1**
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多く含む
 - 2 黒褐色土層 : ロームブロック極微量 ローム粒子微量含む
 - 3 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
固く締まっている 粘性に富む
- Pit 2**
- 1 茶褐色土層 : ロームブロック多く 明灰褐色シルトブロック微量含む
 - 2 茶褐色土層 : ロームブロック若干 明灰褐色シルトブロック微量含む
 - 3 茶褐色土層 : ロームブロック多く 明灰褐色シルトブロック微量含む
ローム新しい
 - 4 茶褐色土層 : ロームブロック多く 明灰褐色シルトブロック微量含む
ロームやや風化
 - 5 黒色土層 : ロームブロック若干 明灰褐色シルトブロック少量含む
 - 6 茶褐色土層 : ロームブロック多く 明灰褐色シルトブロック微量含む
ロームさらに風化

- Pit 3**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む 締まり弱い 柱痕と思われる
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む 締まっている 人為的埋没土か
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている 人為的埋没土か
- Pit 4**
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む 締まり弱い
 - 2 明黄褐色土層 : ロームブロック多く含む ローム粒子主体とする
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 暗褐色土を主体とする 締まり弱い
 - 4 明黄褐色土層 : ローム粒子主体 暗褐色土若干含む
 - 5 暗褐色土層 : ロームブロック・黒褐色土若干含む
暗褐色土を主体とする 締まり弱い
 - 6 暗褐色土層 : ロームブロック・黒褐色土若干含む 締まり弱い
 - 7 暗褐色土層 : ロームブロック若干 黒褐色土微量含む 固く締まっている
 - 8 暗褐色土層 : 主体となる暗褐色土がブロック状を呈する 脆く崩れやすい

第390図 第3号掘立柱建物跡

P2・12・7の柱間にP14・15の間仕切りが存在することから、ここから南端部梁行までが2間×4間の部屋となるか、あるいは2間×2間の3間続きの間取りであったと考えられる。

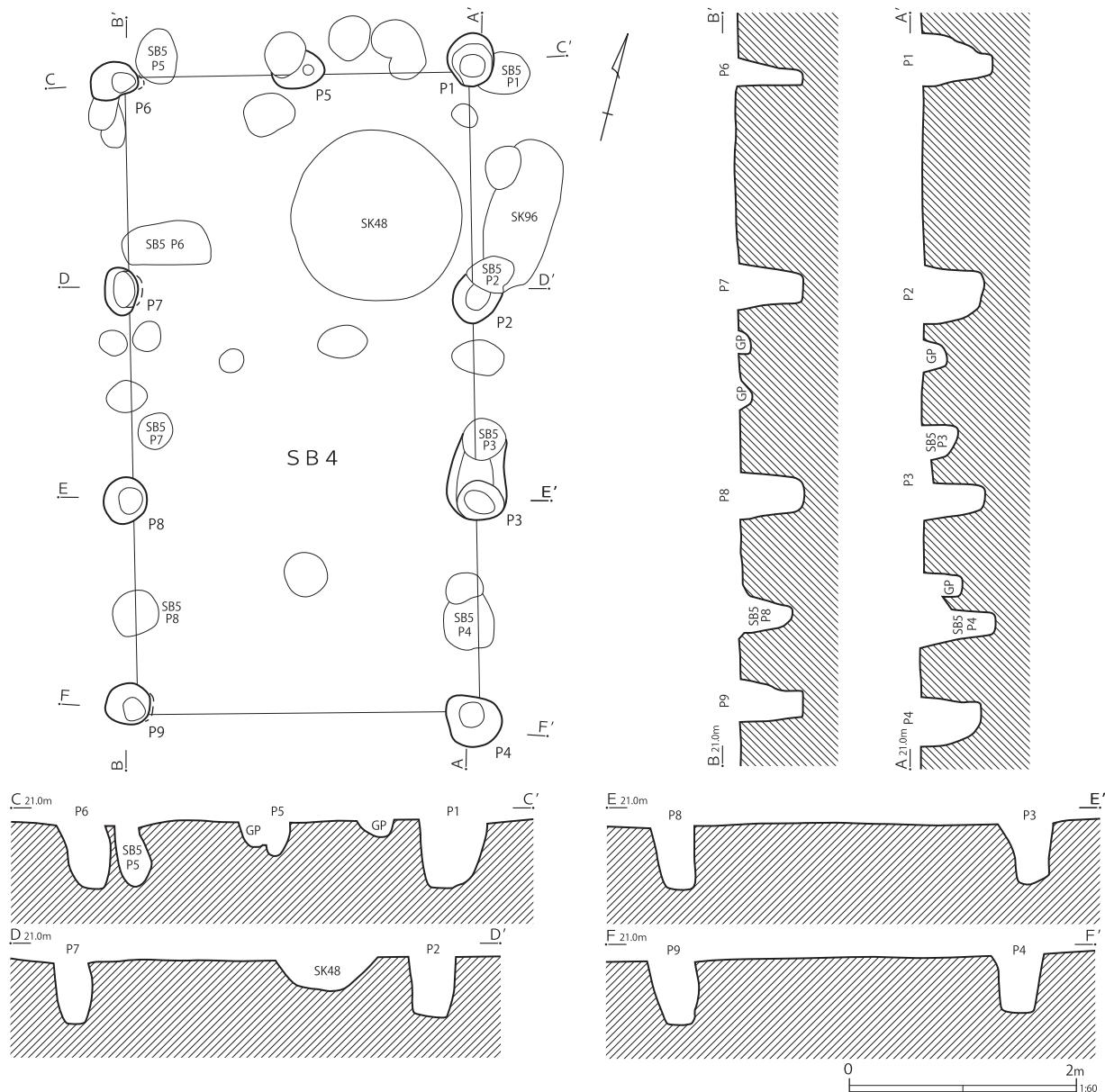
17本のピットで構成され、ほとんどのピットで柱痕が検出された。

第2号掘立柱建物跡（第389図）

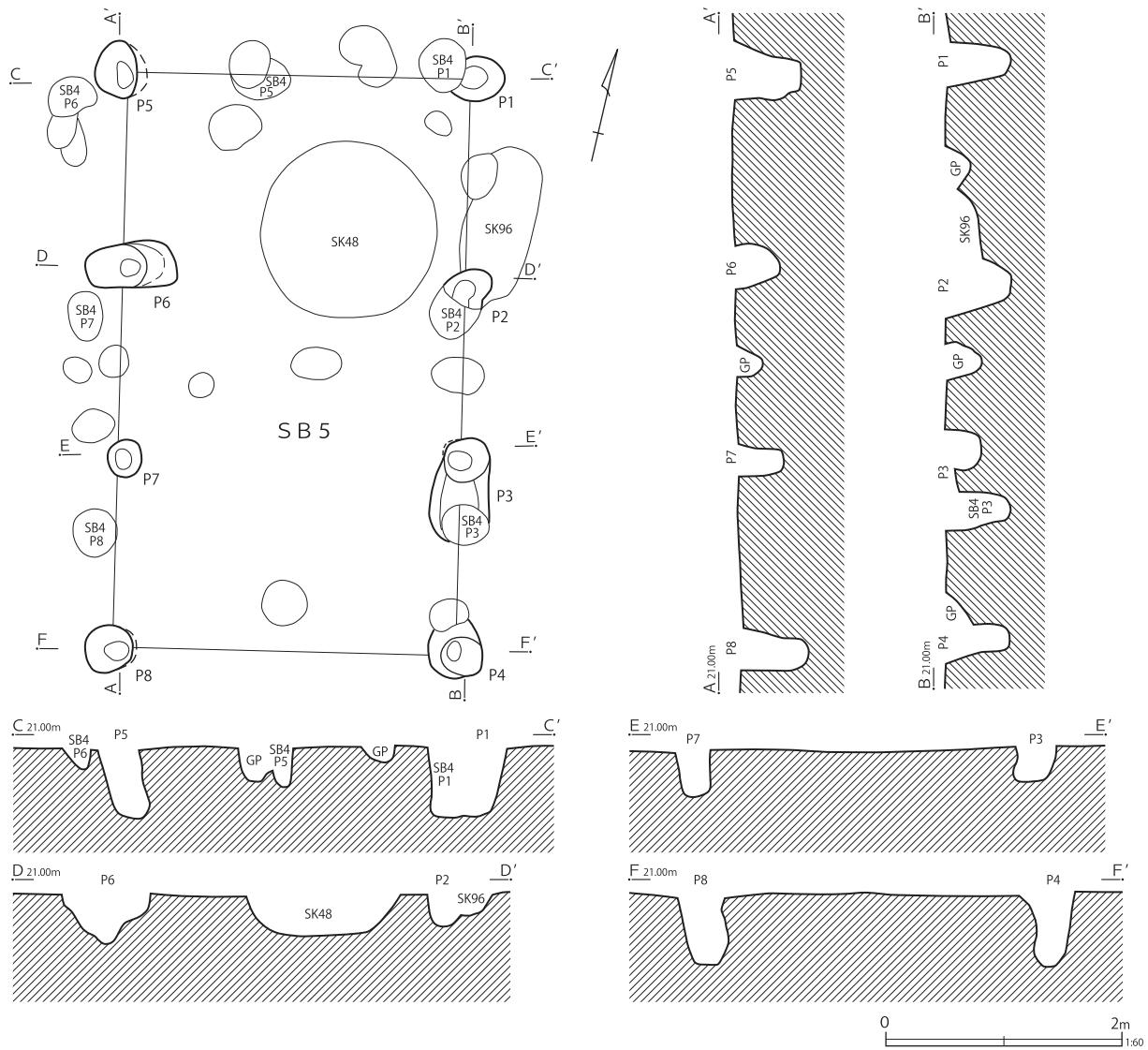
M・N-10グリッドに位置する。桁行1間、梁行1間の建物である。規模は、桁行4.5m、梁行4.35mで、桁行方向はN-73°-Eを指す。

5本のピットで構成される。東の梁行のみ、P1とP3のほぼ中間点にP2が存在する。南西コーナーのP4以外は3本程度のピットの重複が考えられる。P4・P5のみ柱痕が検出された。

プラン中央に長方形の炉跡を持ち、周囲に硬化面が存在する土間構造の建物である。P1・3の梁間にP2が位置しているが、これに対応する柱穴がP4・5間に存在しないこと、炉周辺の硬化面が西へと延びていることから、P4・5間に出入り口を持つ妻入りの建物であった可能性が高い。



第391図 第4号掘立柱建物跡



第392図 第5号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡（第390図）

N - 9・10グリッドに位置する。第79号土壌に壊されている。北側部分が発掘調査区域外に存在する。

桁行2間以上、梁行2間の建物である。規模は発掘調査部分の桁行約3.52m、梁行5.38mである。桁行方向はN - 30° - Wを指す。

4本のピットで構成される。南の梁行にP 2～4が等間隔に並び、東の桁行にP 1が位置する。西の桁行にこれに対応するピットは検出できなかったが、調査区域外に存在するものと思われる。

南梁行のP 3・4で柱痕を検出した。P 2では柱痕を検出できなかったが、覆土の層序が南北方

向に流れしており、柱材の抜き取りが行われたものと考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第391図）

O・P - 10・11グリッドに位置する。第48・96号土壌、第5号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

桁行3間、梁行2間の建物で、規模は桁行8.4m、梁行3.54mである。桁行方向はN - 12° - Wを指す。

9本のピットで構成される。北端の梁行のみ、P 1とP 6の中間点にP 5が位置しており、南側の梁行はこれに対応するピットが存在しないことから、南側に出入り口を持つ妻入りの建物であつ

た可能性がある。柱痕は検出されなかった。

第5号掘立柱建物跡（第392図）

O・P-10・11グリッドに位置する。第48・96号土壙、第4号掘立柱建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

桁行3間、梁行1間の建物である。規模は、桁行5.3m、梁行3.45mである。桁行方向はN-12°-Wを指す。8本のピットで構成される。柱痕は検出されなかった。

第6号掘立柱建物跡（第393図）

M-11グリッドに位置する。第19号住居跡を壞しており、第158号土壙に壞されている。第157・162号土壙とも重複関係にあるが、新旧関係は不

明である。

北側部分が発掘調査区域外に存在するが、桁行2間以上、梁行2間の建物である。規模は発掘調査部分の桁行約3.57m、梁行3.55mである。桁行方向はN-19°-Wを指す。

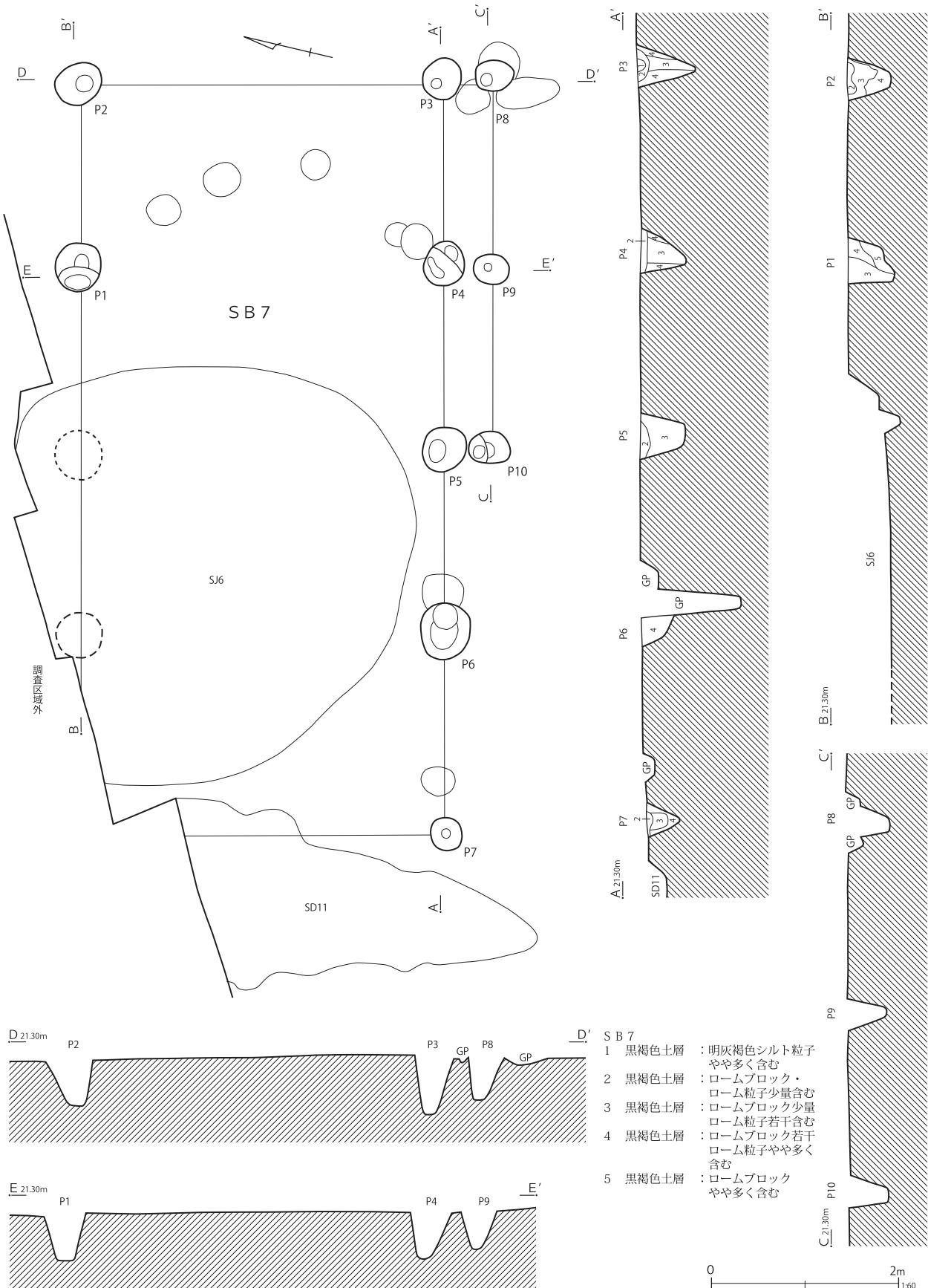
4本のピットで構成される。南端の梁行にP2～4が等間隔に並び、東の桁行上にP1が存在するが、西の桁行にこれに対応するピットは検出できなかった。柱痕は検出できなかった。

第7号掘立柱建物跡（第394図）

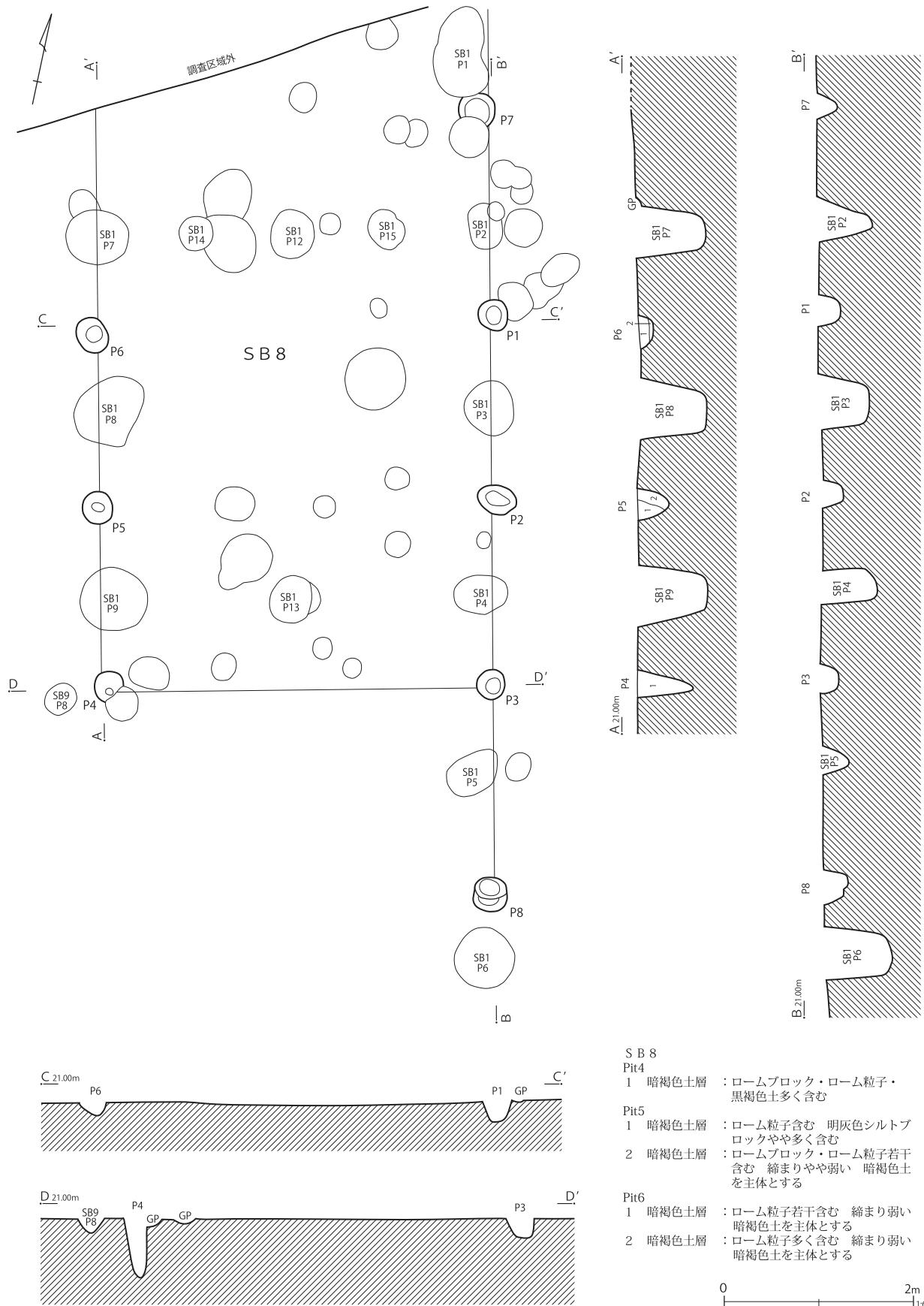
L・M-11・12グリッドに位置する。第6号住居跡を壞している。第11号溝跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。北西コーナー部分



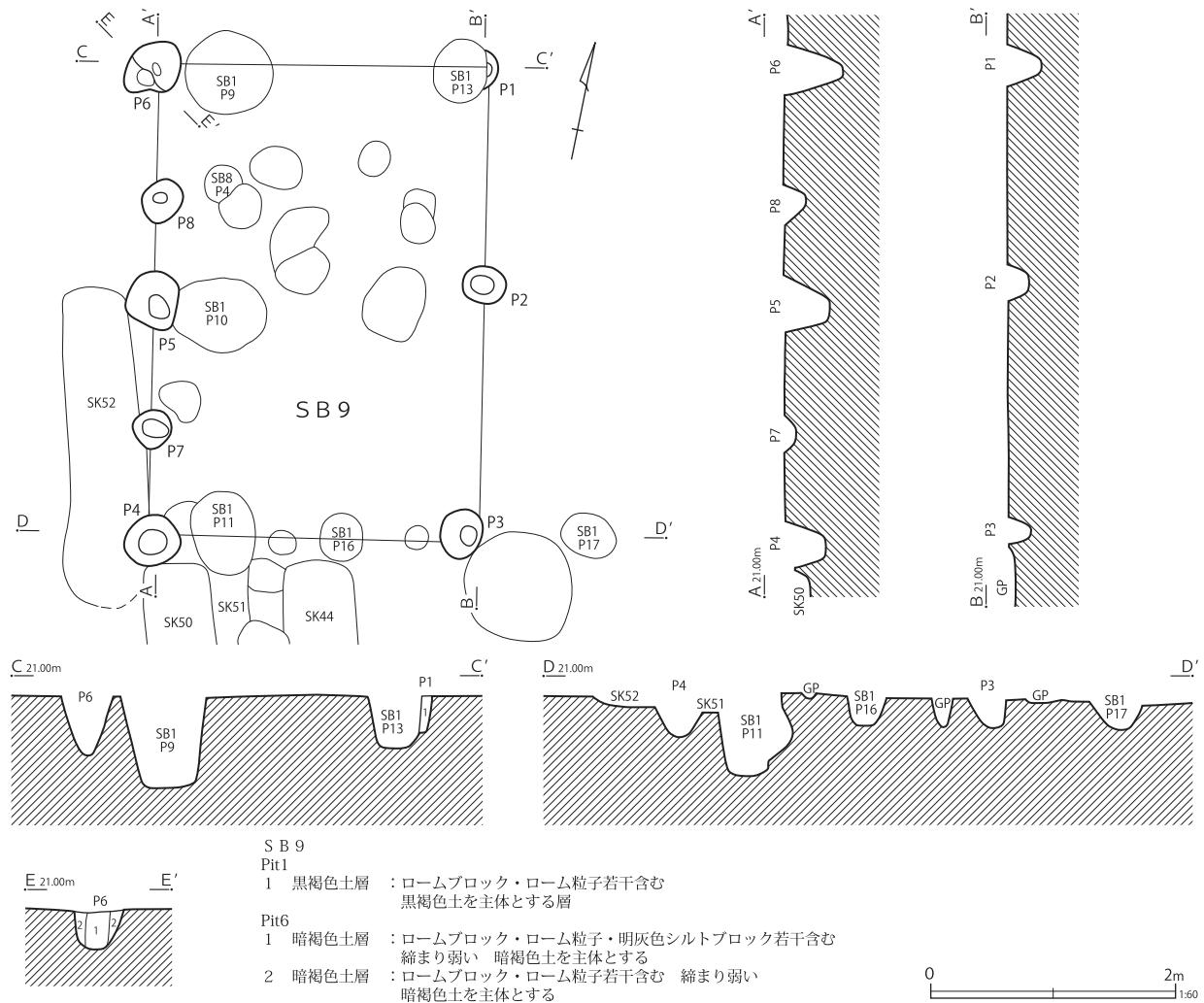
第393図 第6号掘立柱建物跡



第394図 第7号掘立柱建物跡



第395図 第8号掘立柱建物跡



第396図 第9号掘立柱建物跡

が発掘調査区域外に存在するが、桁行4間、梁行1間の建物である。規模は桁行8.4m、梁行4.87mである。桁行方向はN - 82° - Eを指す。

10本のピットで構成される。北側の桁行を構成する5本のピットのうち、西側の3本は第6号居住跡覆土中に存在したものとみられるが、周辺の攪乱が激しく検出できなかった。

南桁行の南東側、P3～5の外側にはP8～10の庇が存在する。柱痕は検出できなかった。

第8号掘立柱建物跡（第395図）

N・O・8・9グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡に壊されている。第9号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

北側部分が調査区域外に存在するが、桁行3間以上、梁行1間の建物である。規模は、発掘調査部分の桁行約8.56m、梁行4.55mである。桁行方向はN - 12° - Wを指す。

8本のピットで構成される。東側桁行の南端に位置するP3の外側でP8を検出した。柱間がP1～3と等しく、ひと続きの柱列と考えられるが、西側桁行でこれに対応するピットを発見することはできなかった。

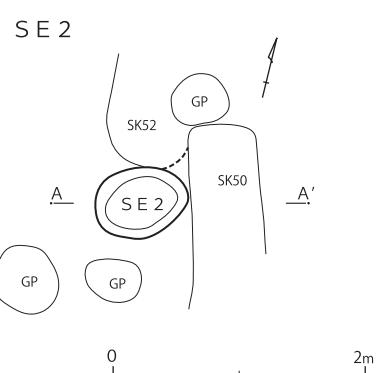
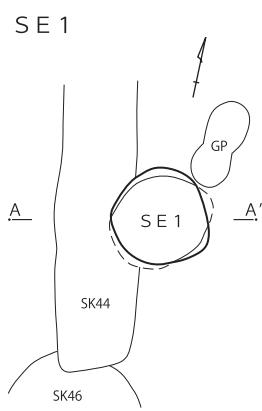
また、東側桁行北端のP7に対応するピットを西側の桁行上で検出することはできなかったが、調査区域外に存在する可能性がある。柱痕は検出できなかった。

第9号掘立柱建物跡（第396図）

O - 8・9グリッドに位置する。第52号土壌、第1号掘立柱建物跡に壊されている。第50・51号土壌とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行4.25m、梁行3mで、桁行方向はN - 10° - Wを指す。

8本のピットで構成される。西側の桁行の、P4・5およびP5・6のほぼ中間点でP7・8をそれぞれ検出したが、東側の桁行にはこれに対応するピットがみられない。このことから、西側のみ壁構造を持ち東側が開放した厩のような建物であった可能性がある。柱痕は検出できなかった。



SE 1・2
1 暗褐色土層 : ロームブロック多量
埋戻し土（一度に埋め戻している）
2 黒色土層 : 締まり弱い、粘性あり
有機質の腐植した黒色土と思われる

(2) 井戸跡

第1号井戸跡（第397図）

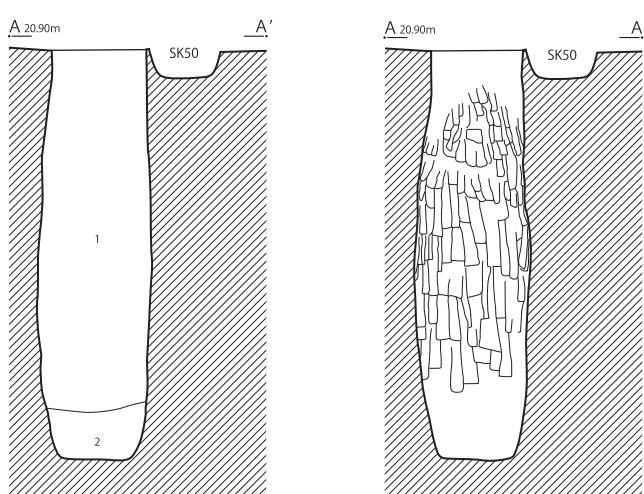
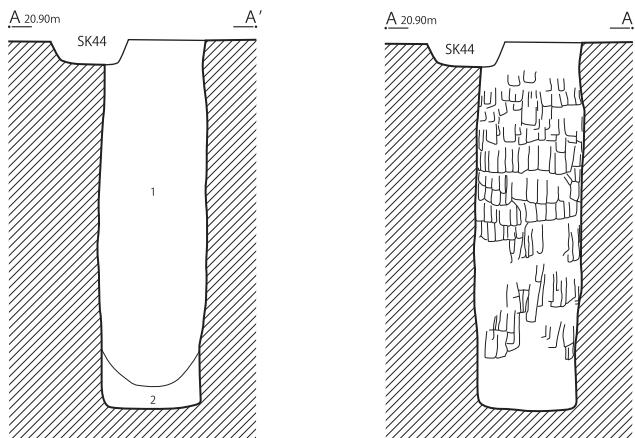
O - 9グリッドに位置する。第44号土壌に壊されている。直径0.76mのほぼ円形で、深さは2.93mである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

壁面に短冊形の掘削痕を検出した。遺物は出土していないが、時期は近世と考えられる。

第2号井戸跡（第397図）

O - 8グリッドに位置する。第50・52号土壌と接しているが、新旧関係は不明である。長軸0.75mの楕円形で、長軸方向はN - 54° - Eを指す。深さは3.24mである。中段の壁が緩やかにオーバーハングする袋状の掘りかたである。

壁面に短冊形の掘削痕を検出した。遺物は出土していないが、時期は近世と考えられる。



第397図 第1・2号井戸跡

(3) 土壌

近世の土壌は、調査区全体で検出されたが、とりわけ台地奥部のK～T - 3～15グリッド付近の掘立柱建物跡や井戸跡が集中する一角をとりまくように分布し、一部はこれらと重複していた。

形態の上では長径数m、短径30～50cmで、長軸が極端に長い溝状のものが定型的に存在していた。それらは主軸方向を一方向に揃えたり、直交させたりした状態で密集する傾向にあり、同一地点で繰り返し掘っては埋められている状態が観察された。

これら溝状の土壌の主軸方向は、溝跡や掘立柱建物跡の主軸と並行し、あるいは直交するものがほとんどで、構築当時の地割りを反映しているものとみられる。

大半の土壌は覆土中にもヤドロと呼ばれるシルト質の河成堆積物を混入していた。遺構の掘り込

み面はヤドロ層を含む耕作土中に存在し、多くはローム上面を数センチ程度掘り込んでいた。また、掘り込みがほぼローム上面で止まっている土壌も多く、調査区の壁面や他の遺構の土層断面上でしか確認できなかったり、面的に検出できても遺構精査の段階で削平され消失してしまったものも少なくなかった。

覆土中からは陶磁器や金属製品等が出土することもあるが極めてまれであり、多くは遺物を伴っていないなかった。

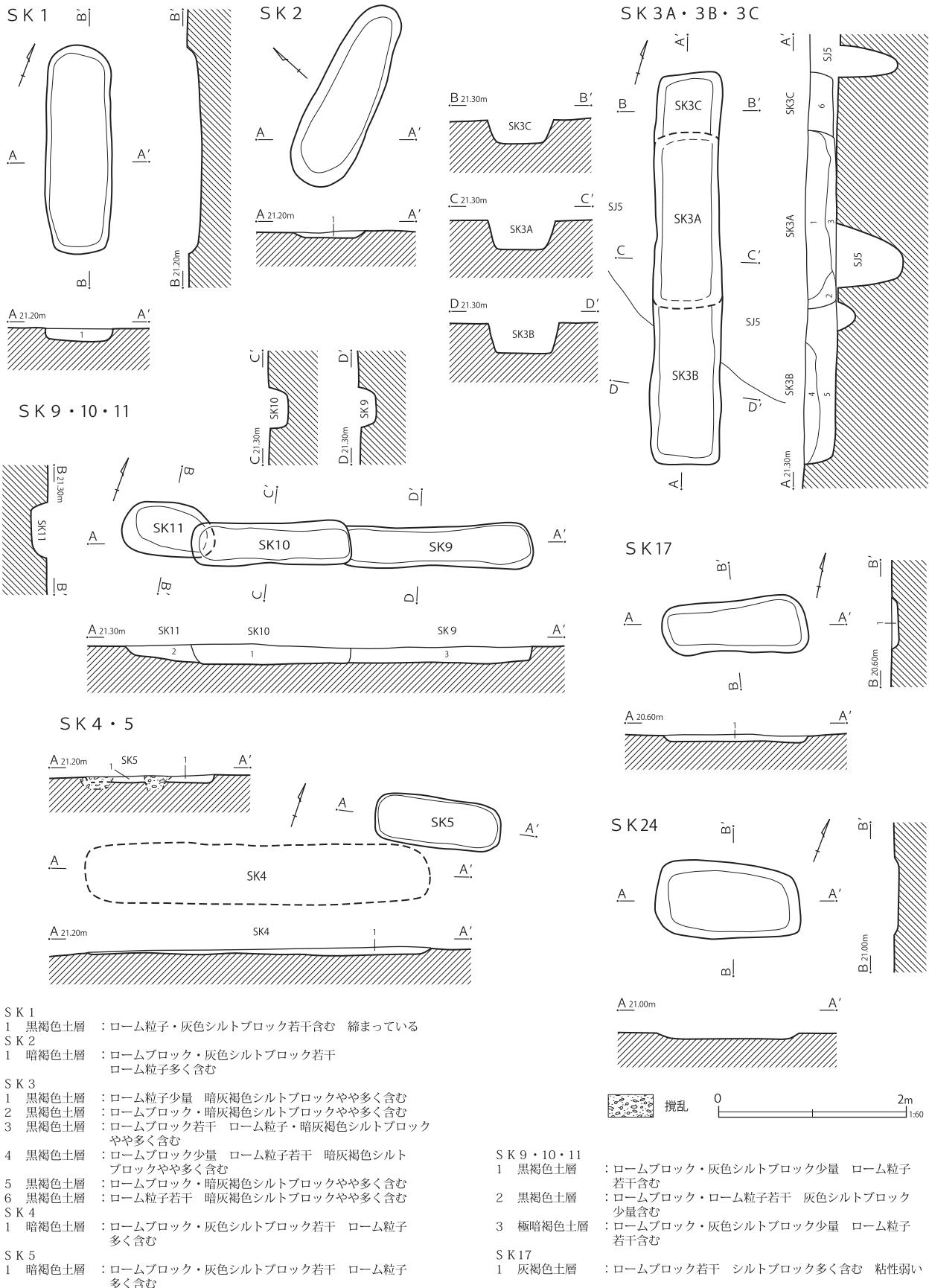
これらは近世の耕作に伴って設けられたもので、具体的には農作業用のムロ穴であると考えられる。このほかにも、不定型な土壌は多数存在していた。やはり遺物に乏しいが、その性格は植栽痕や建物の一部等が考えられる。

個別の土壌の計測値については、第43・44表に一括して掲載した。

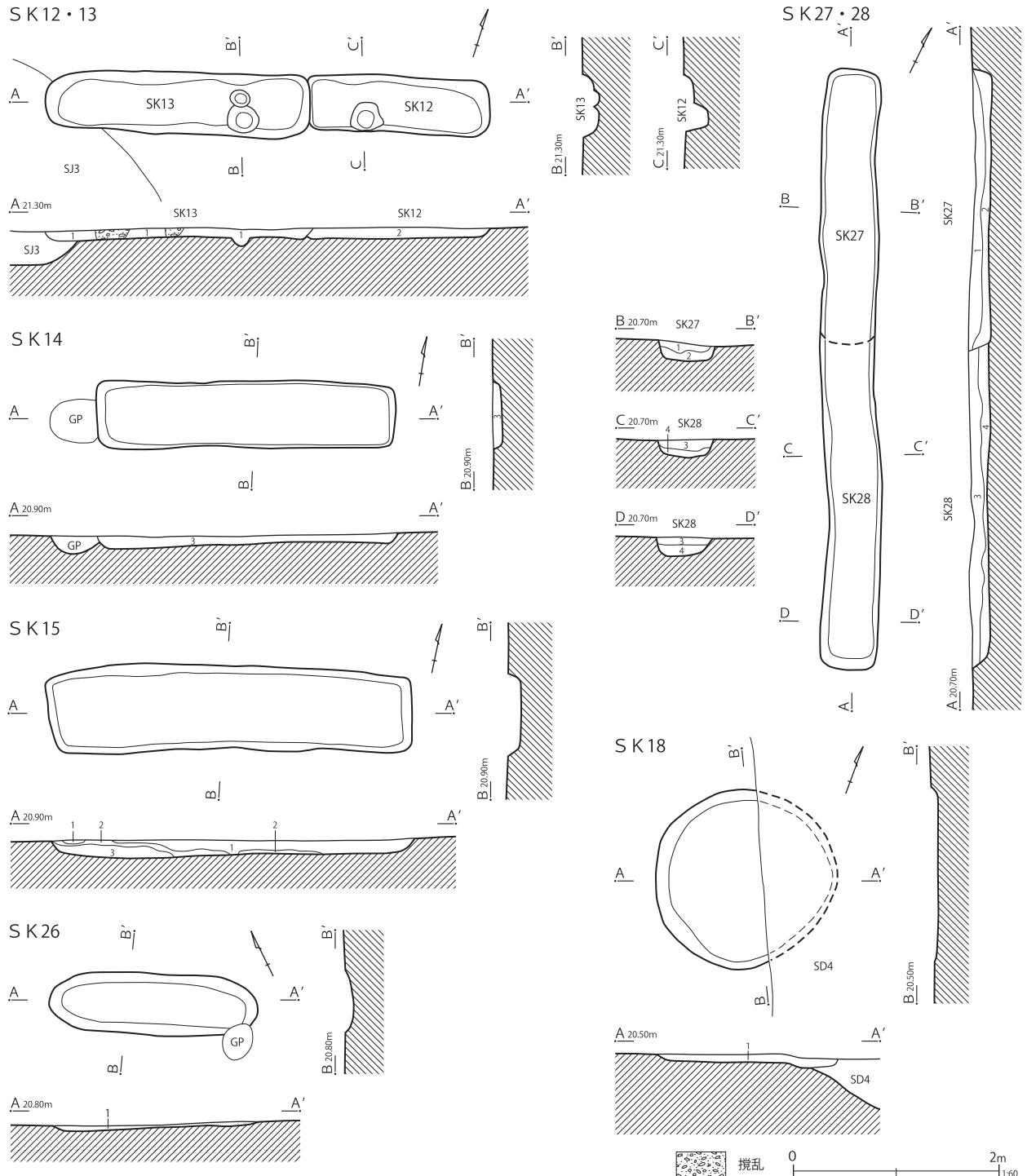
第42表 土壌観察表（1）

名称	所在	切られる	切る	新旧不明	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	図版番号
SK1	M・N-13		SJ3		2.21	0.71	0.14	N - 21° - W	第398図
SK2	N-12				2.05	0.69	0.10	N - 73° - E	第398図
SK3 A	L・M-12		SJ5, SK3 B・C		(1.87)	0.71	0.33	N - 15° - W	第398図
SK3 B	L・M-12	SK3 A	SJ5		-	0.76	9.32	N - 15° - W	第398図
SK3 C	L・M-12	SK3 A	SJ5		-	0.68	0.25	N - 15° - W	第398図
SK4	N-13				(4.00)	(1.00)	0.03	N - 73° - E	第398図
SK5	N-13	SK10			(1.32)	(0.59)	0.03	N - 79° - E	第398図
SK9	M-14	SK10			(2.00)	0.50	0.20	N - 70° - E	第398図
SK10	M-13・14		SK9・11		(1.50)	0.47	0.22	N - 70° - E	第398図
SK11	M-13	SK10			(0.83)	0.60	0.22	N - 86° - E	第398図
SK12	M-13	SK13			(1.73)	0.55	0.11	N - 72° - E	第399図
SK13	M-13		SJ3, SK12		2.55	0.61	0.13	N - 72° - E	第399図
SK14	Q-8				3.30	0.64	0.12	N - 82° - E	第399図
SK15	Q-8・9				1.55	0.75	0.18	N - 79° - E	第399図
SK17	Q・R-7				1.53	0.63	0.07	N - 79° - E	第398図
SK18	R-7		SD4		1.77	(1.73)	0.10	不明	第399図
SK19	Q-9・10	SK20		SK21・22	-	10.87	0.22	N - 80° - E	第400図
SK20	Q-9・10		SK19	SK21・22	6.74	0.94	0.37	N - 80° - E	第400図
SK21	Q-10		SK22・23	SK19・20	-	0.73	0.29	N - 80° - E	第400図
SK22	Q-10	SK21		SK19・20・23	-	-	0.27	N - 80° - E	第400図
SK23	Q-10	SK21		SK22	-	0.63	0.06	N - 13° - W	第400図
SK24	P-8				1.52	0.83	0.05	N - 71° - E	第398図
SK26	P-7				2.02	0.60	0.09	N - 64° - W	第399図
SK27	R-7・8		SK28		2.74	0.56	0.22	N - 65° - E	第399図
SK28	R-8	SK27			-	0.54	0.19	N - 65° - E	第399図
SK29	P-8		SK30		2.34	0.62	0.24	N - 77° - E	第400図
SK30	O・P-8	SK29			-	0.74	0.24	N - 77° - E	第400図
SK31	Q-10				2.93	0.77	0.18	N - 12° - W	第401図
SK32	Q-11				1.78	0.70	0.17	N - 19° - W	第402図
SK33	P-11			SK120	2.21	5.03	0.07	N - 73° - E	第400図
SK35	Q-10	SK36			3.00	0.73	0.23	N - 14° - W	第401図
SK36	Q-10		SK35・37・38		3.68	0.88	0.37	N - 14° - W	第401図
SK37	Q-10	SK36			-	(0.62)	0.07	N - 75° - E	第401図
SK38	Q-10	SK36			2.91	0.64	0.13	N - 76° - E	第401図
SK39	P・Q-11	SK40・41			2.55	1.07	0.29	N - 25° - W	第401図

名称	所在	切られる	切る	新旧不明	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	図版番号
SK40	P・Q-11	SK39・41			5.17	1.24	0.16	N - 25° - W	第401図
SK41	Q-11	SK39・42	SK40		-	1.02	0.23	N - 25° - W	第401図
SK42	Q-11	SK43	SK41		-	0.95	0.27	N - 25° - W	第401図
SK43	Q-11		SK42		-	0.73	0.35	不明	第401図
SK44	O・P-9		SE 1, SK46		5.11	0.58	0.22	N - 12° - W	第402図
SK46	P-9	SK44			1.08	0.91	0.38	N - 83° - E	第402図
SK47	O-10		SK97・98		1.21	1.10	0.31	N - 72° - W	第404図
SK48	O-10			SB 4・5	1.53	1.52	0.38	N - 9° - W	第402図
SK50	O-8・9	SK51		SB 9	2.62	0.58	0.25	N - 19° - W	第402図
SK51	O-8・9		SK50, SB 1	SB 9	3.40	0.79	0.14	N - 10° - W	第402図
SK52	O-8		SB 9		2.62	0.65	0.15	N - 13° - W	第402図
SK58	N-10		SK59・60・61		5.12	0.79	0.28	N - 13° - W	第403図
SK59	N-10・11	SK58	SK62	SK60	-	0.93	0.22	N - 75° - E	第403図
SK60	N-10	SK58		SK59	-	1.44	0.26	N - 75° - E	第403図
SK61	N-10・11	SK58	SK65・237		-	0.69	0.15	N - 79° - E	第403図
SK62	N-10・11	SK59・63			-	0.74	0.14	N - 75° - E	第403図
SK63	N-11		SK62・64		1.88	0.88	0.14	N - 75° - E	第403図
SK64	N-11	SK63			-	0.57	0.15	N - 75° - E	第403図
SK65	N-10・11	SK61・66		SK237	-	-	0.22	N - 75° - E	第403図
SK66	N-10・11		SK65・237		6.65	0.91	0.37	N - 74° - E	第403図
SK67	N-11		SK68		3.40	0.68	0.26	N - 80° - E	第403図
SK68	N-11	SK67			-	0.86	0.20	N - 11° - W	第403図
SK69	O-10				2.64	1.24	1.05	N - 45° - E	第402図
SK70	O-11	SK73			-	0.64	0.29	N - 75° - E	第405図
SK71	N・O-11	SK73	SK72		-	0.64	0.23	N - 75° - E	第405図
SK72	N・O-11	SK71		SK73	3.20	0.70	0.19	N - 75° - E	第405図
SK73	N・O-11		SK70・71	SK72	2.70	0.73	0.33	N - 75° - E	第405図
SK74	N-11				0.89	0.85	0.08	N - 12° - W	第405図
SK75	N-11				2.16	0.69	0.07	N - 77° - E	第405図
SK76	N-10・11				3.41	0.75	0.14	N - 80° - E	第405図
SK77	N-10				2.92	0.35	0.17	N - 75° - E	第405図
SK78	N-10			SB 3	1.31	0.67	0.15	N - 80° - E	第405図
SK79	N-9・10		SB 3		-	-	0.18	N - 85° - E	第405図
SK80	P-11		SK81・91	SK82・83・89・90・92	3.46	0.90	0.14	N - 73° - E	第406図
SK81	P-10・11	SK80	SK82・84	SK83	4.66	0.62	0.22	N - 71° - E	第406図
SK82	P-10・11	SK80・81	SK83	SK84	-	-	0.10	N - 77° - E	第406図
SK83	P-11	SK80・81・82		SK84	2.37	-	0.11	N - 78° - E	第406図
SK84	P-10・11	SK81		SK82・83	3.64	-	0.21	N - 75° - E	第406図
SK85	P-11・12		SK86・88・89・92		5.02	0.80	0.23	N - 70° - E	第406図
SK86	P-11・12	SK85		SK88	-	-	0.07	N - 89° - E	第406図
SK87	P-11・12		SK88		3.05	0.53	0.13	N - 69° - E	第406図
SK88	P-12	SK85・87		SK86	2.50	-	0.24	N - 71° - E	第406図
SK89	P-11	SK85	SK90	SK80	3.32	0.73	0.18	N - 69° - E	第406図
SK90	P-11	SK89		SK80	-	-	0.07	不明	第406図
SK91	P-11	SK80	SK92		3.23	0.90	0.13	N - 72° - E	第406図
SK92	P-11	SK85・91			-	0.70	0.12	N - 72° - E	第406図
SK93	L-12		SJ 5		-	0.66	0.08	N - 20° - W	第404図
SK94	P-9・10				1.01	0.89	0.40	N - 61° - E	第404図
SK95	P-9				0.76	0.61	0.27	N - 31° - E	第404図
SK96	O-10			SB 4・5	1.30	0.49	0.23	N - 5° - W	第404図
SK97	O-10	SK47	SK98		5.45	0.60	0.16	N - 76° - E	第404図
SK98	O-10	SK47・97			4.34	0.60	0.08	N - 78° - E	第404図
SK99	O-7				-	1.98	0.72	N - 8° - W	第405図
SK100	N・O-8			SK101	-	0.60	0.06	N - 7° - W	第407図
SK101	N・O-8			SK100	-	0.54	0.09	N - 7° - W	第407図
SK103	O-6				1.26	0.64	0.09	N - 84° - W	第407図
SK104	Q-4・5				3.56	74.00	0.40	N - 69° - E	第407図
SK106	Q・R-4・5				-	0.62	0.10	N - 79° - E	第407図
SK107	R-5				-	0.47	0.17	N - 8° - E	第407図
SK108	O-4				1.84	0.71	0.13	N - 17° - W	第408図
SK109	P-11				1.25	0.87	0.98	N - 24° - W	第407図
SK110	R-7				0.53	0.44	0.09	N - 53° - W	第408図
SK111	R-7				1.05	0.86	0.34	N - 32° - W	第408図
SK112	P-6				3.36	-	0.10	N - 60° - E	第408図
SK113	R-4				3.89	1.08	0.22	N - 0°	第408図
SK114	Q・R-3				3.02	0.53	0.07	N - 16° - W	第408図
SK115	Q・R-3				5.42	0.71	0.11	N - 15° - W	第408図
SK116	S-5	SK117			-	0.70	0.19	不明	第408図
SK117	S-5		SK116		-	-	0.19	不明	第408図
SK119	Q-4				-	-	0.13	不明	第408図
SK120	P-11			SK33	0.94	0.48	0.16	N - 67° - E	第400図
SK121	S・T-2		SD 7		3.03	0.73	0.19	N - 22° - W	第409図
SK122	T-2		SD 7		2.20	2.07	0.32	N - 33° - W	第409図
SK123	R-4				3.42	0.87	0.08	N - 15° - W	第409図
SK124	T-4・5	SK133			-	0.86	0.19	N - 28° - W	第410図
SK125	T-4				-	1.02	0.26	N - 12° - W	第409図
SK126	T-5	SK127			2.70	0.59	(0.09)	N - 10° - W	第409図
SK127	T・U-5		SK126		-	0.70	0.11	N - 11° - W	第409図
SK128	T・U-4				-	0.70	0.17	N - 26° - W	第409図
SK130	T-3				-	0.83	0.31	N - 75° - W	第410図



第398図 土壌(1)



SK12・13
1 黒褐色土層 : ロームブロック・灰色シルトブロック少量 ローム粒子若干含む

2 極暗褐色土層 : ロームブロック・灰色シルトブロック少量 ローム粒子若干含む

SK14
1 灰色土層 : ロームブロック多く シルト粒子少量含む やや均一

SK15
1 灰色土層 : 粗粒ロームブロック多く シルト粒子少量含む やや均一
2 灰黑色土層 : ロームブロック若干 シルト粒子微量含む やや均一
3 灰色土層 : ロームブロック多く シルト粒子少量含む やや均一

SK18
1 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック若干含む やや均一 砂質

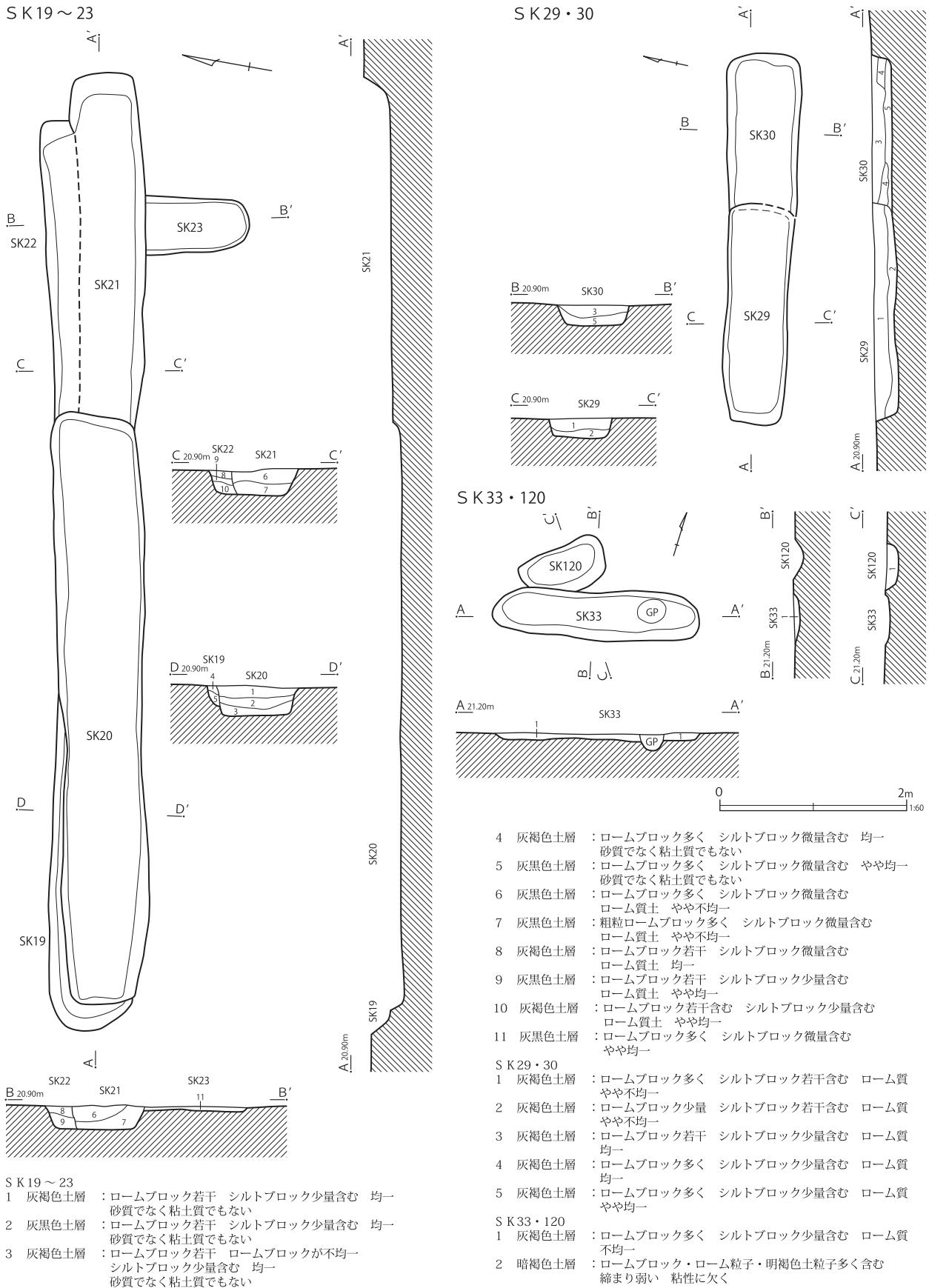
SK26
1 黄灰色土層 : ロームブロック多く シルトブロック若干含む 浅間Aを含む 不均一

SK27・28
1 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む ローム質やや不均一

2 灰褐色土層 : ロームブロック少量 シルトブロック多く含む ローム質やや均一

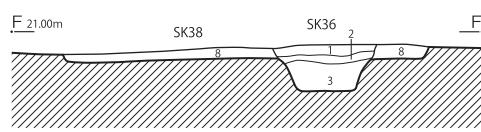
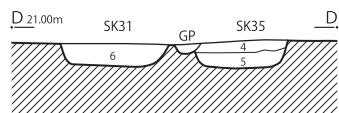
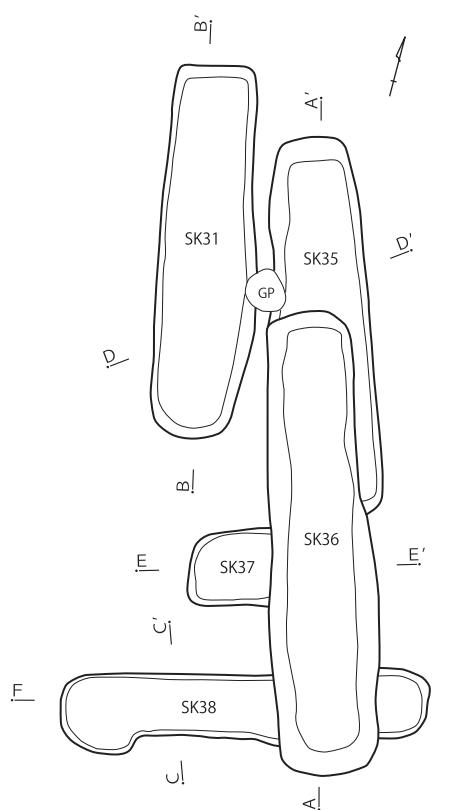
3 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック若干含む ローム質やや均一
4 灰褐色土層 : ロームブロックやや多く シルトブロック若干含む ローム質やや均一

第399図 土壌(2)



第400図 土壌(3)

SK31・35～38



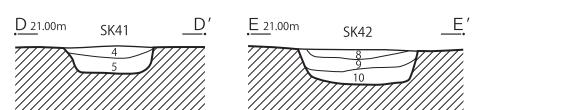
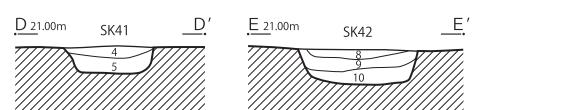
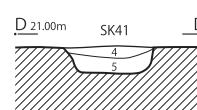
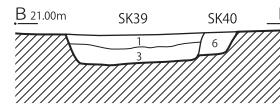
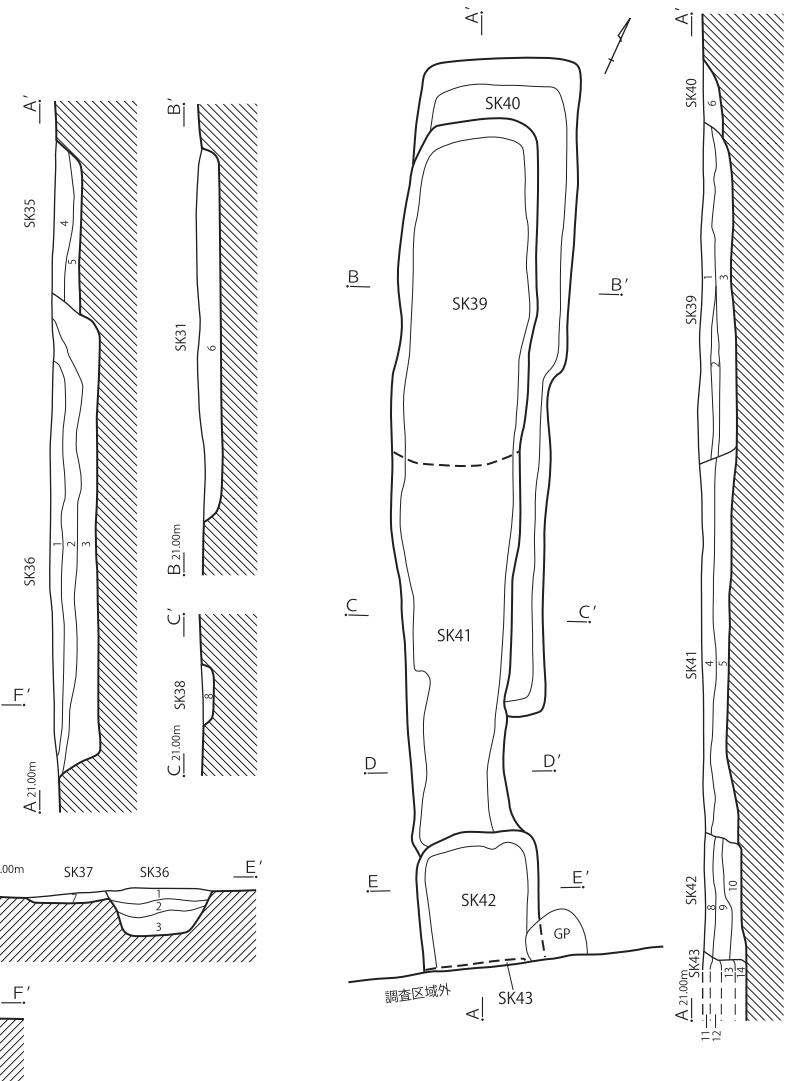
SK31・35～38

- 1 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む ローム質 やや不均一
- 2 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む ローム質 黒色を帯びる やや不均一
- 3 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む ローム質 やや新しく不均一
- 4 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む ローム質 やや均一
- 5 灰褐色土層 : ロームブロックやや多く シルトブロック少量含む ローム質 やや均一
- 6 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック微量含む ローム質 やや均一
- 7 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック若干含む ローム質 やや不均一
- 8 灰褐色土層 : ロームブロック多く含む ローム質 やや不均一

SK39～43

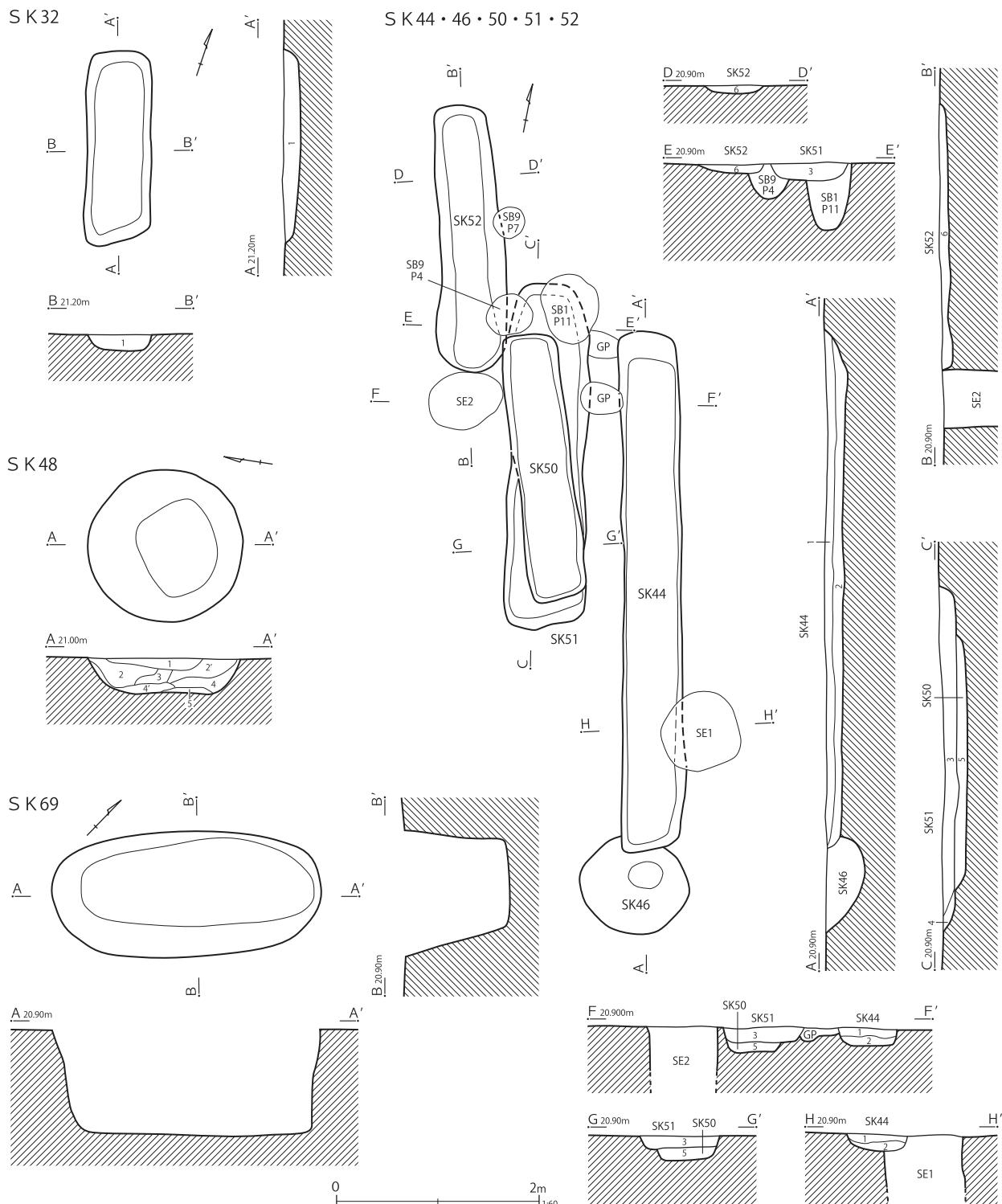
- 1 灰褐色土層 : ロームブロック少量 シルトブロック微量含む ローム質 均一
- 2 灰黒色土層 : ロームブロック少量 シルトブロック少量含む ローム質 黒色土が若干混じる 不均一
- 3 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック微量含む ローム質 やや均一
- 4 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック少量含む ローム質 均一
- 5 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む ローム質 均一

SK39～43



- 6 灰褐色土層 : ロームブロックやや多く シルトブロック少量含む ローム質 やや不均一
- 7 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む ローム質 やや均一
- 8 灰褐色土層 : ロームブロック多く含む 均一
- 9 灰褐色土層 : ロームブロック非常に多く含む 均一
- 10 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック微量 黒色土ブロック 若干含む やや不均一
- 11 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック若干含む ローム質 やや均一
- 12 灰褐色土層 : ロームブロック非常に多く シルトブロック若干含む ローム質
- 13 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック若干含む ローム質 均一
- 14 灰褐色土層 : ロームブロック多く含む ローム質 均一

第401図 土壌(4)

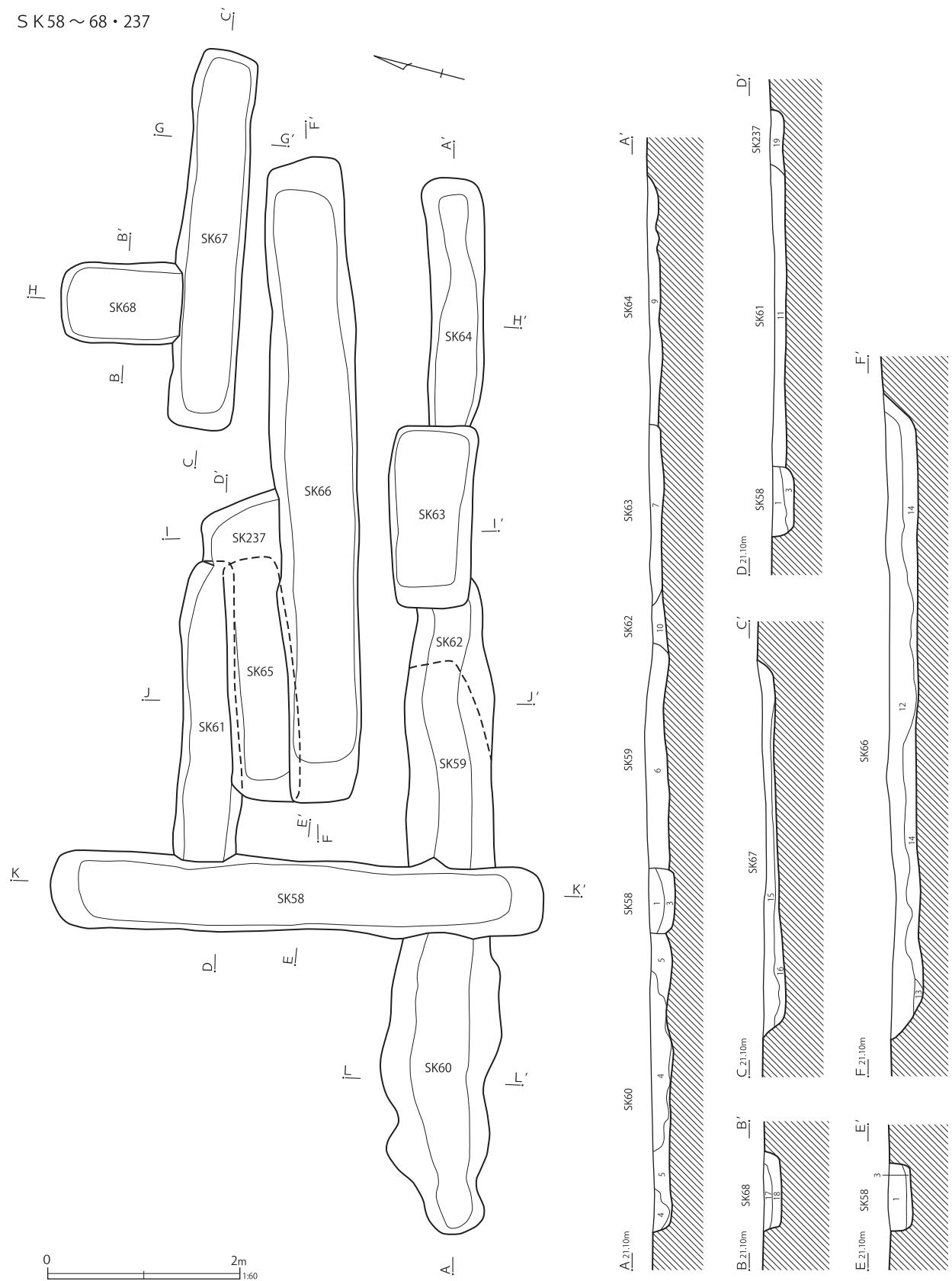


S K 32
1 灰褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む ローム質
やや均一
S K 44・50・51・52
1 茶褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む やや均一
2 茶褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 粗粒シルトブロック少量含む 均一
3 茶褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 微粒シルトブロック少量含む 均一
4 茶褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干 シルトブロック少量含む 均一
5 茶褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む 均一
6 茶褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む 均一
締まりなし

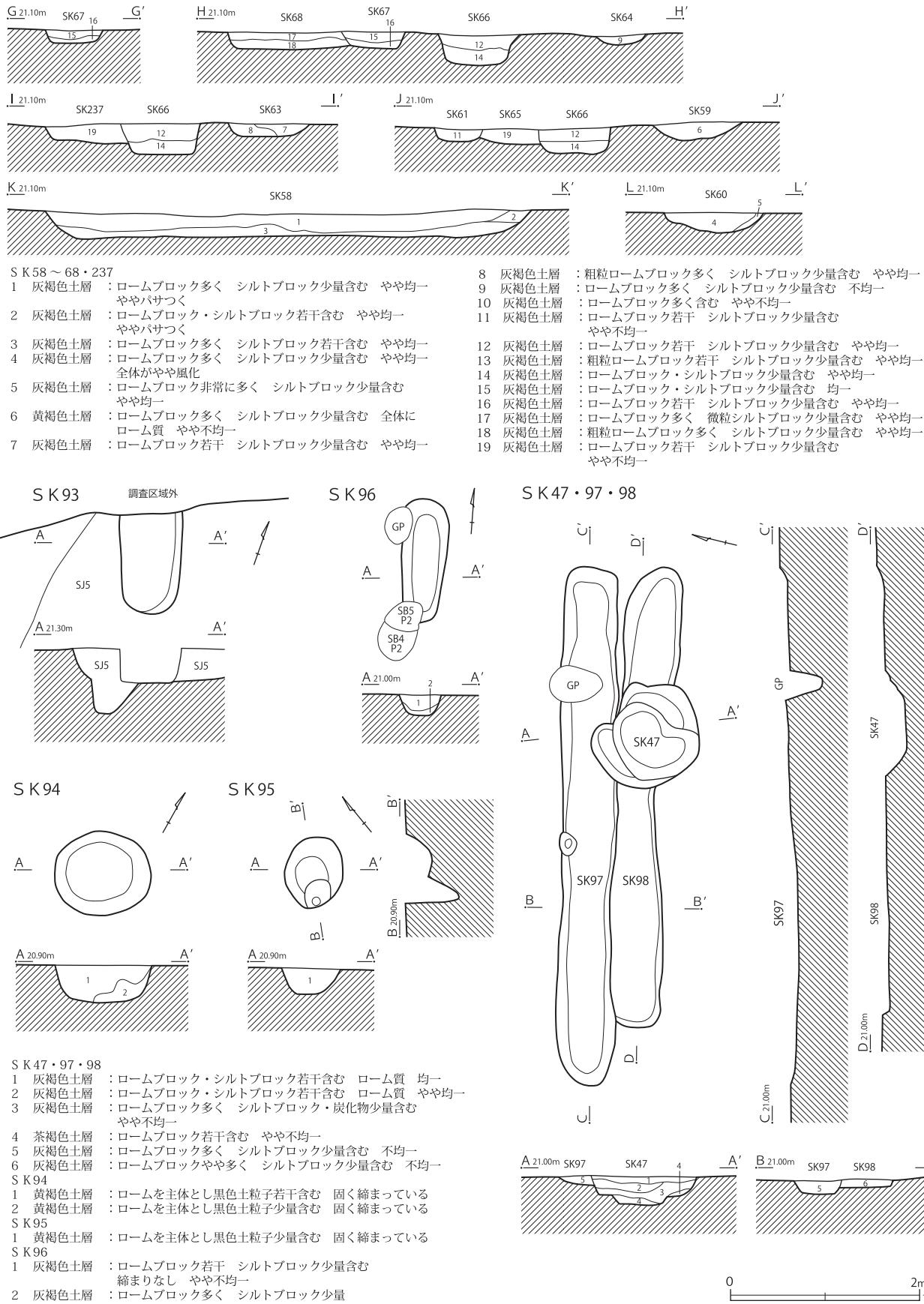
S K 48
1 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック若干含む 均一
2 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック多く含む 不均一
3 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量
灰褐色土ブロック多く含む 不均一
4 灰褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック若干含む 不均一
2層より細かい
5 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む 不均一
4層よりローム細かい
6 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む 不均一
4層よりローム細かい
7 灰褐色土層 : ロームブロック若干含む 不均一

第 402 図 土壌 (5)

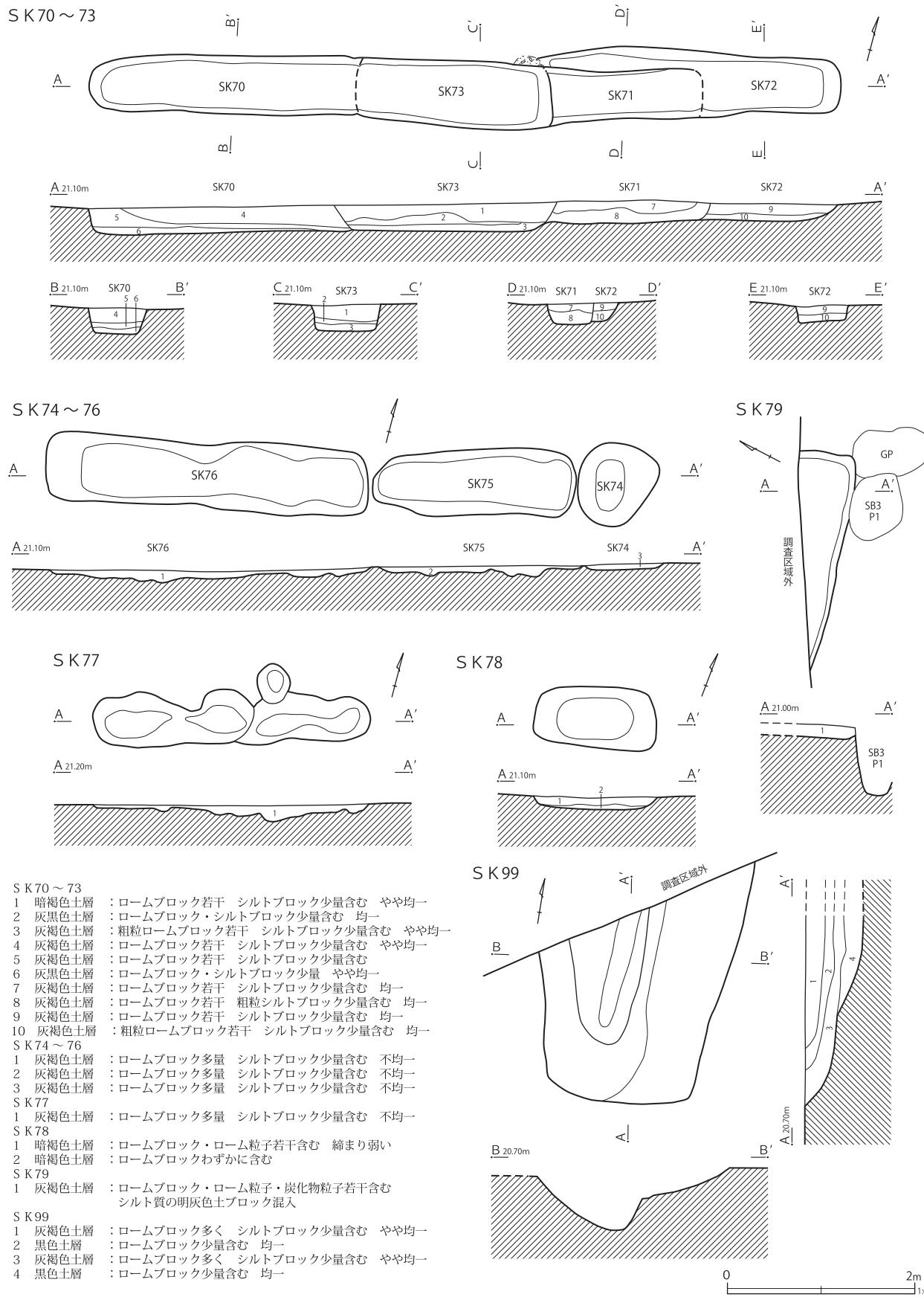
S K 58 ~ 68 • 237



第 403 図 土壌 (6)

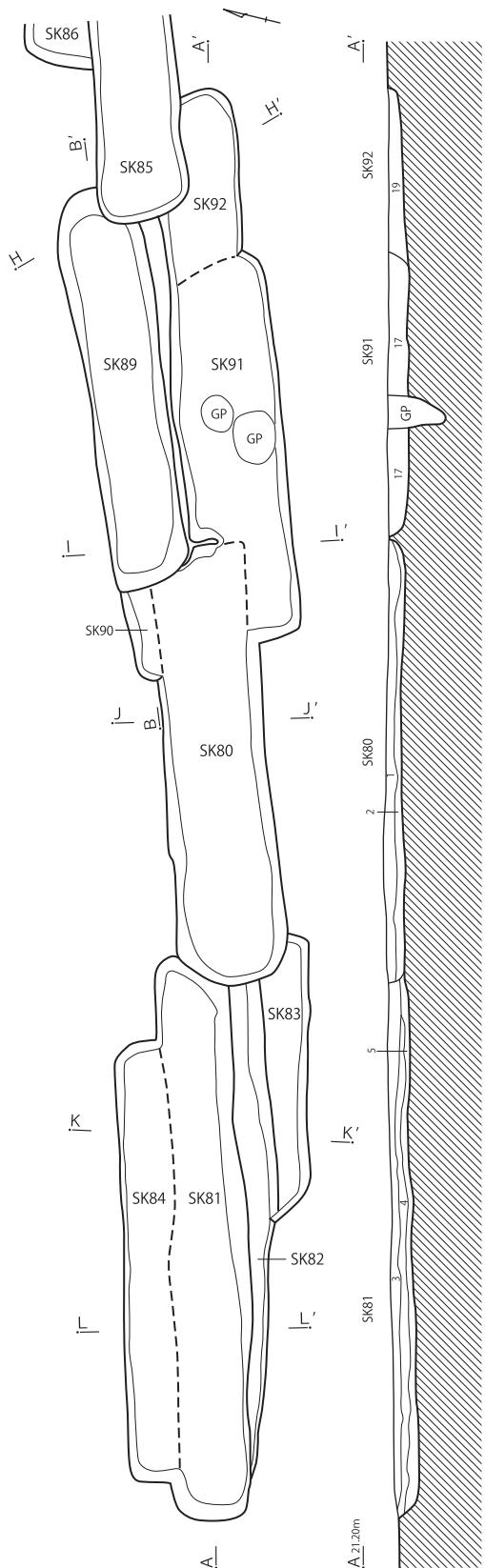


第 404 図 土壌 (7)

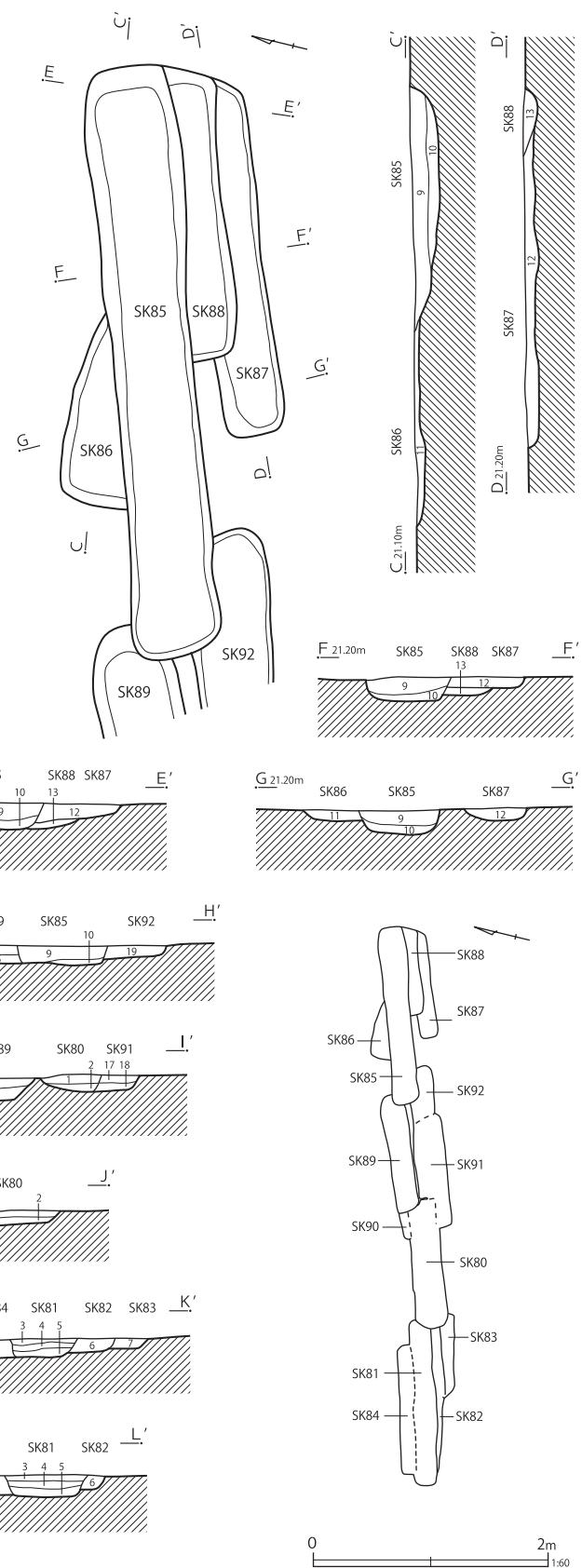


第405図 土壌(8)

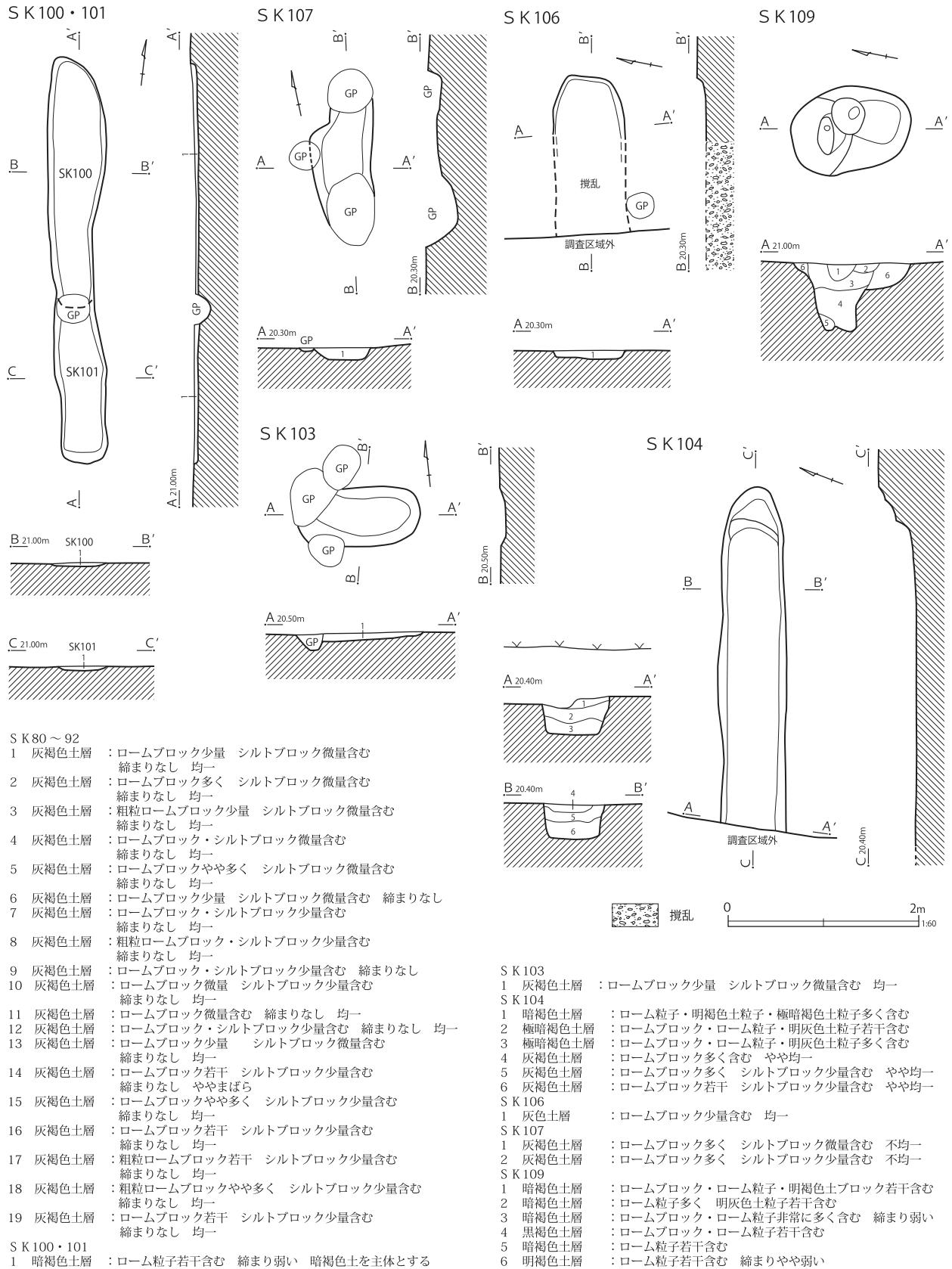
S K 80 ~ 84 • 89 ~ 92



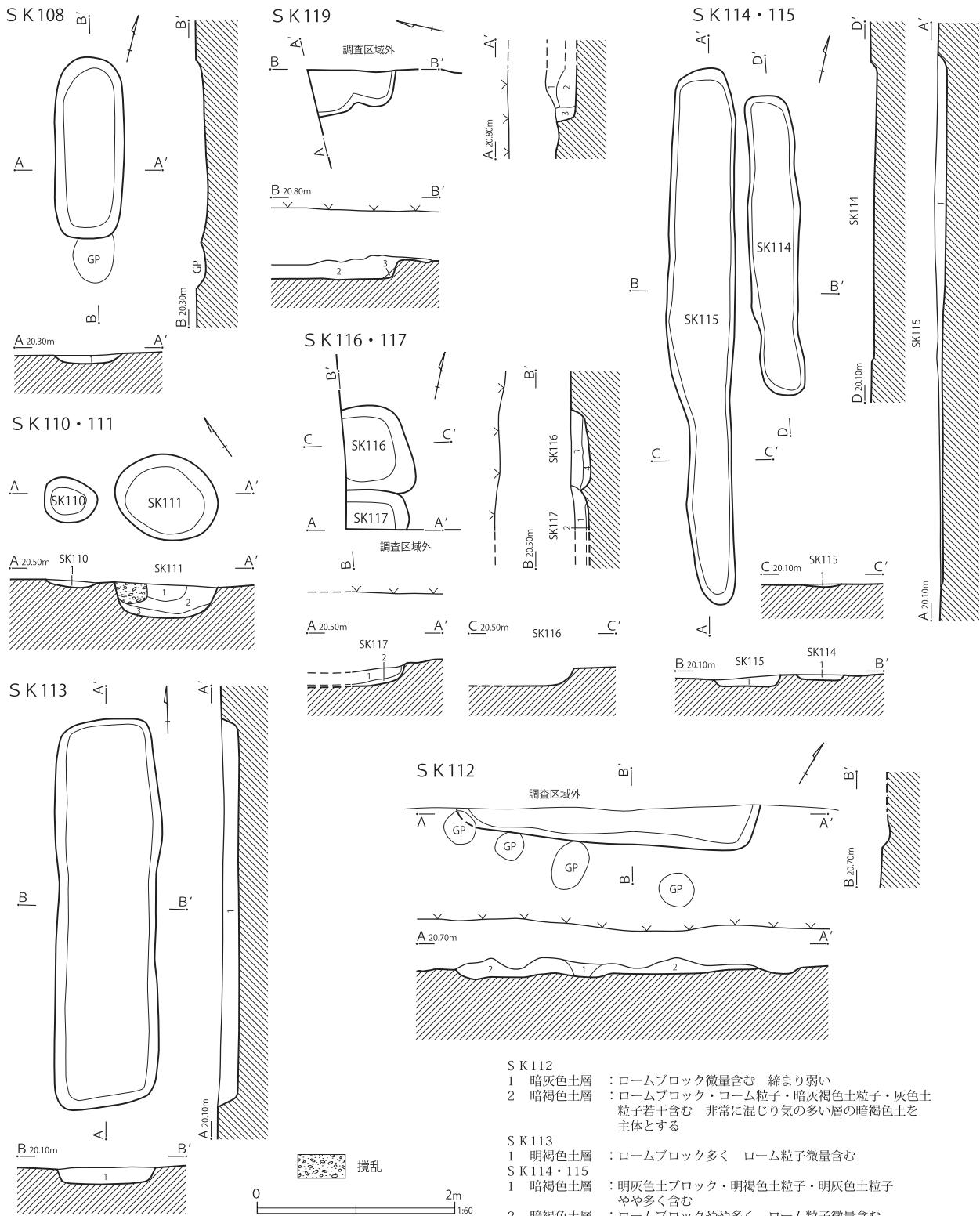
S K 85 ~ 88



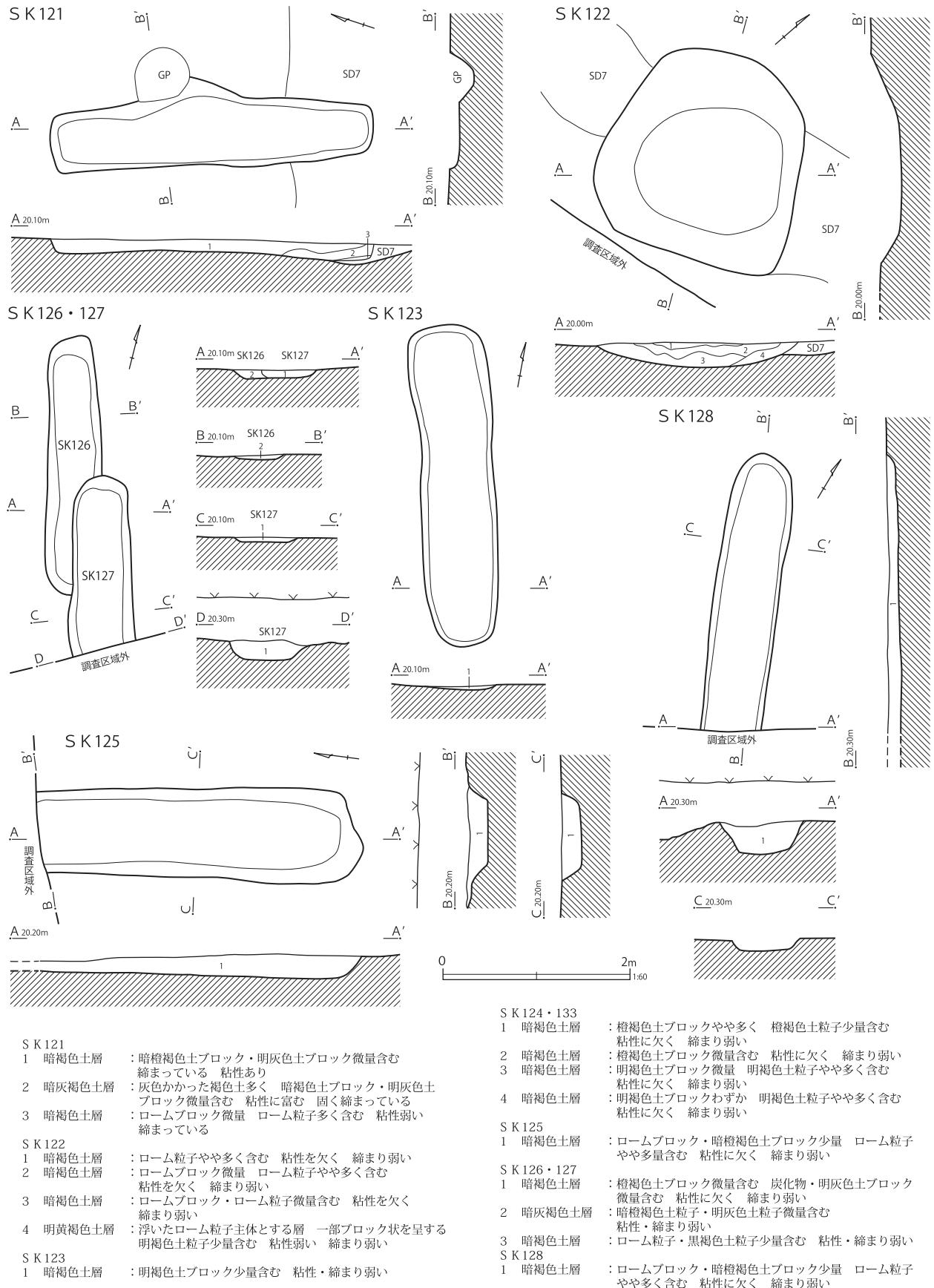
第 406 図 土壌 (9)



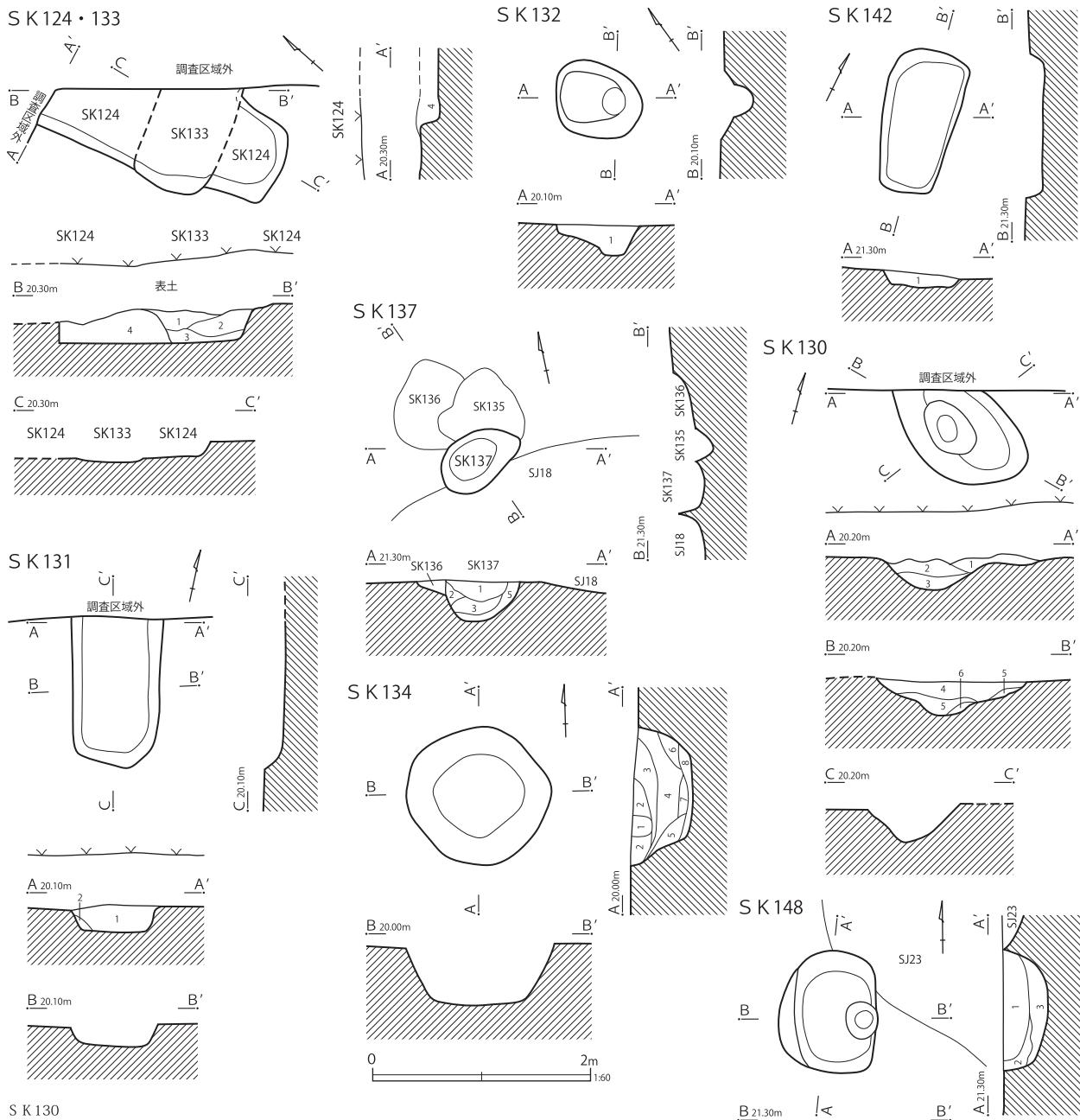
第 407 図 土壌 (10)



第 408 図 土壌 (11)



第409図 土壌(12)



S K 130

- 1 暗褐色土層 : 明褐色土粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 2 黒褐色土層 : 暗褐色土粒子少量 明褐色土粒子微量含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 3 暗褐色土層 : ローム粒子・黒褐色土粒子微量含む 粘性・締まり弱い
- 4 明褐色土層 : ローム粒子少量 暗褐色土粒子微量含む 粘性に欠く 締まっている

S K 131

- 1 黒褐色土層 : ローム粒子・明灰色土ブロック微量含む 粘性・締まり弱い
- 2 明褐色土層 : ローム粒子・黒褐色土粒子少量含む 粘性に欠く 締まり弱い

S K 132

- 1 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む 不均一

S K 134

- 1 黒褐色土層 : ローム粒子少量含む 粘性・締まり弱い
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む 粘性弱い 締まりあり
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 粘性弱い 締まっている
- 4 暗褐色土層 : ローム粒子・明褐色土粒子少量含む 粘性あり 締まっている
- 5 明褐色土層 : 黑褐色土粒子多く含む 粘性あり 締まっている
- 6 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む 粘性あり 締まっている

- 7 明褐色土層 : ローム粒子・黒褐色土粒子少量含む 粘性弱い 締まっている
- 8 黒色土層 : ローム粒子少量含む 粘性・締まり弱い

S K 137

- 1 暗褐色土層 : 暗灰色土ブロック・暗橙褐色土粒子微量 明褐色土粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く 明褐色土粒子少量 白色微粒子微量含む 粘性に欠く 締まり弱い
- 3 暗褐色土層 : 明褐色土粒子少量含む
- 4 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む 粘性に欠く 締まり弱い

S K 142

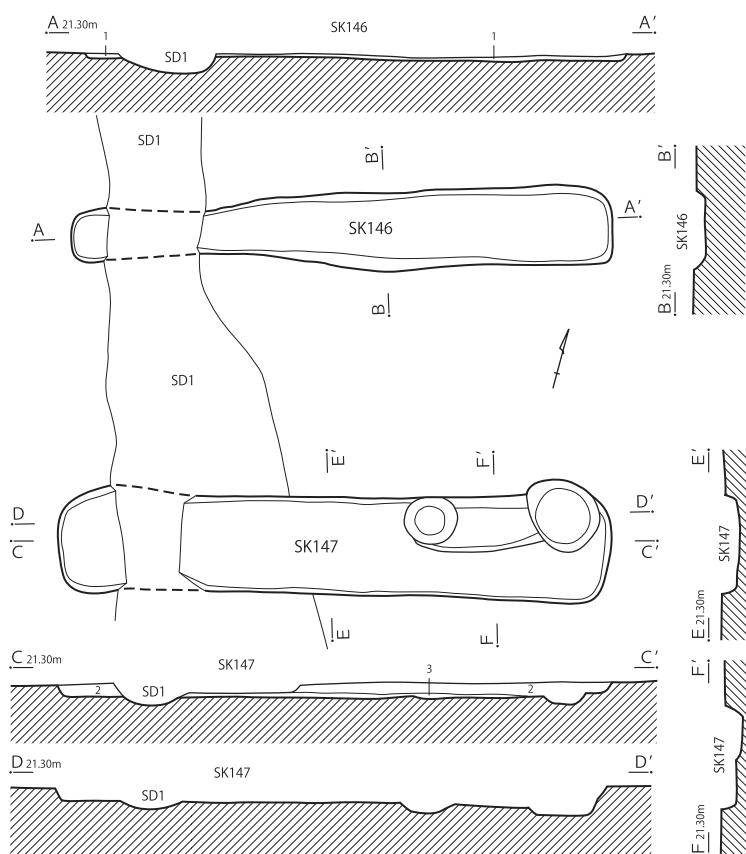
- 1 黒褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子やや多く含む
- 2 黑褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子やや多く含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む

S K 148

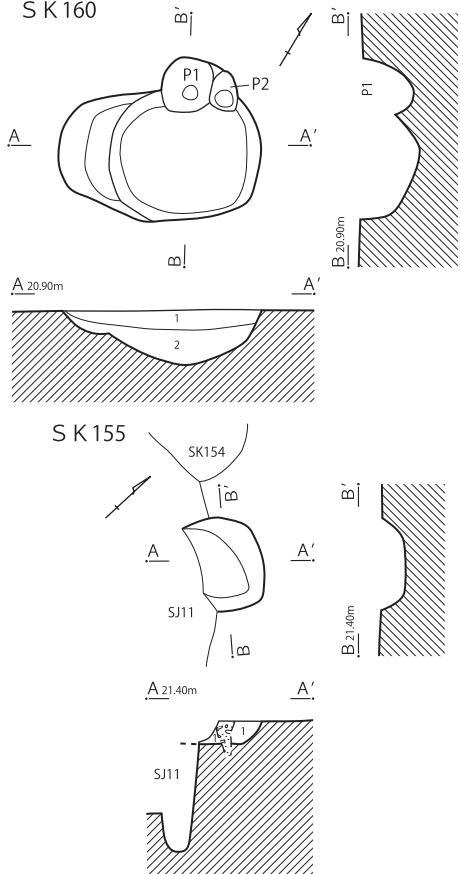
- 1 黑褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量含む
- 2 黑褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子やや多く含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む

第 410 図 土壌 (13)

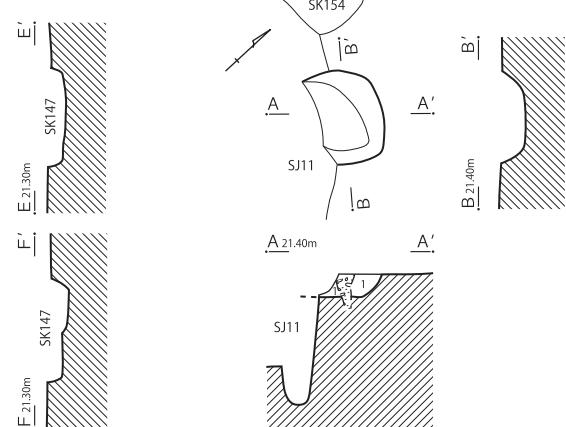
SK 146・147



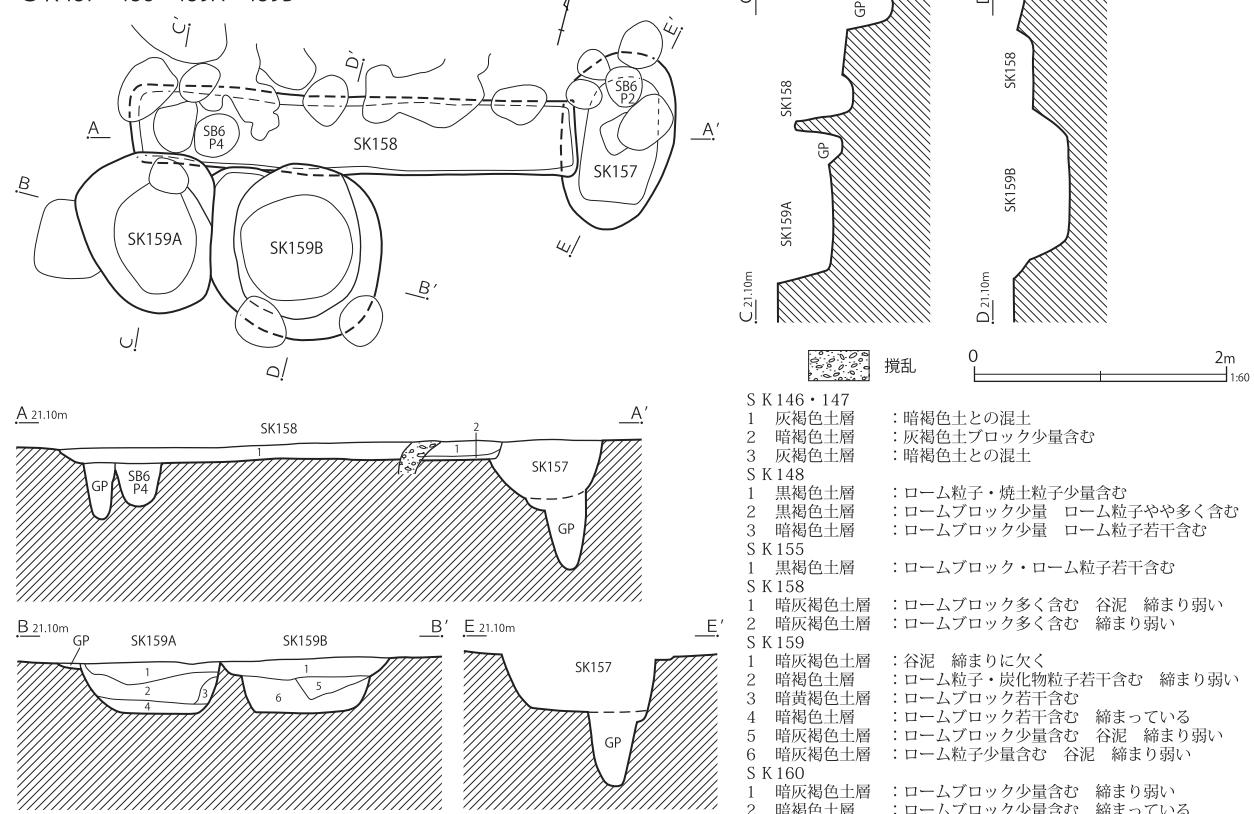
SK 160



SK 155



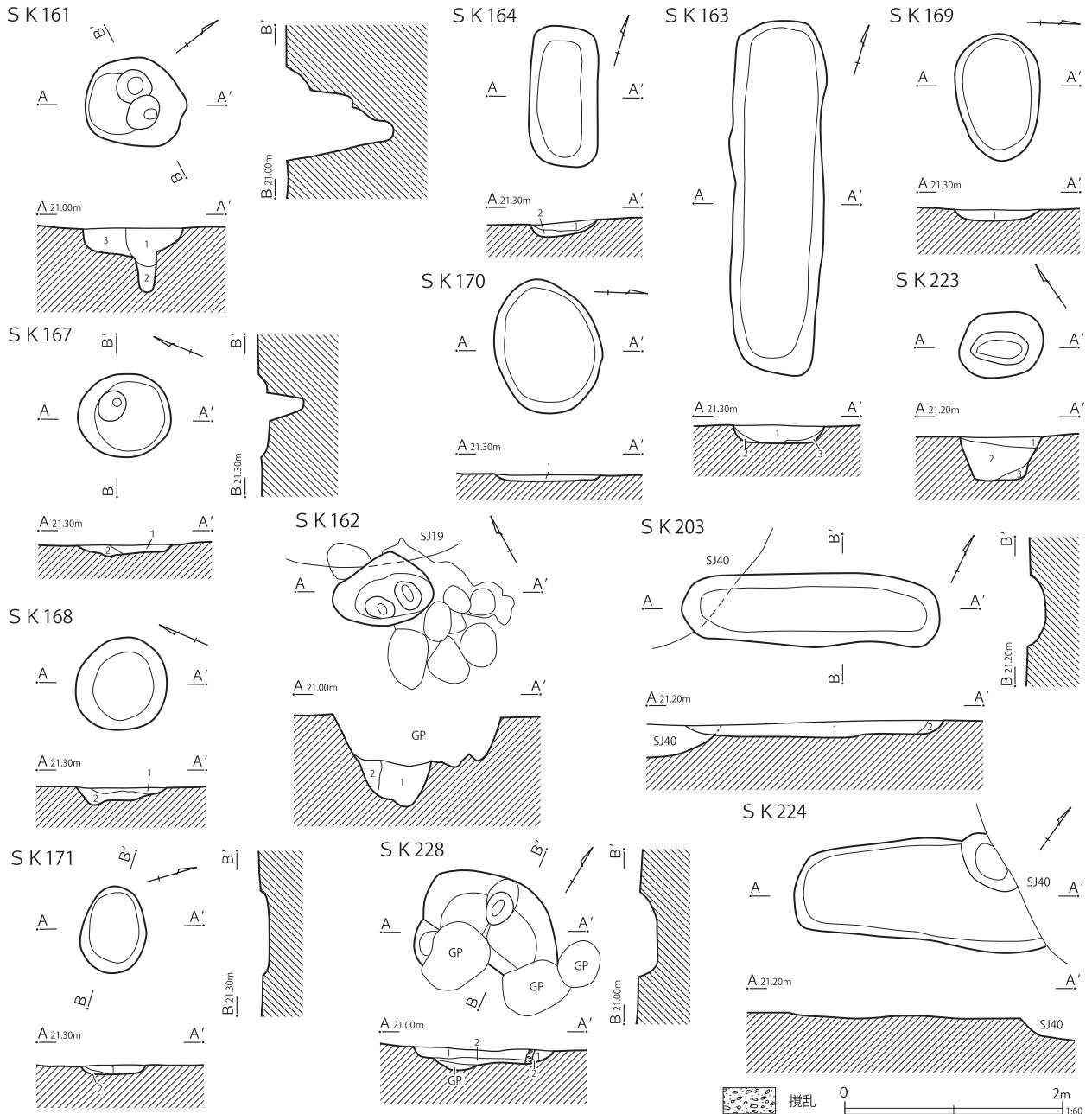
SK 157・158・159A・159B



S K 146・147

- 1 灰褐色土層 : 暗褐色土との混土
- 2 暗褐色土層 : 灰褐色土ブロック少量含む
- 3 灰褐色土層 : 暗褐色土との混土
- S K 148
- 1 黒褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量含む
- 2 黑褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子やや多く含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子若干含む
- S K 155
- 1 黑褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む
- S K 158
- 1 暗灰褐色土層 : ロームブロック多く含む 谷泥 締まり弱い
- 2 暗灰褐色土層 : ロームブロック多く含む 締まり弱い
- S K 159
- 1 暗灰褐色土層 : 谷泥 締まりに欠く
- 2 暗褐色土層 : ローム粒子・炭化物粒子若干含む 締まり弱い
- 3 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 谷泥 締まっている
- 5 暗灰褐色土層 : ロームブロック少量含む 谷泥 締まり弱い
- 6 暗灰褐色土層 : ローム粒子少量含む 谷泥 締まり弱い
- S K 160
- 1 暗灰褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まり弱い
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている

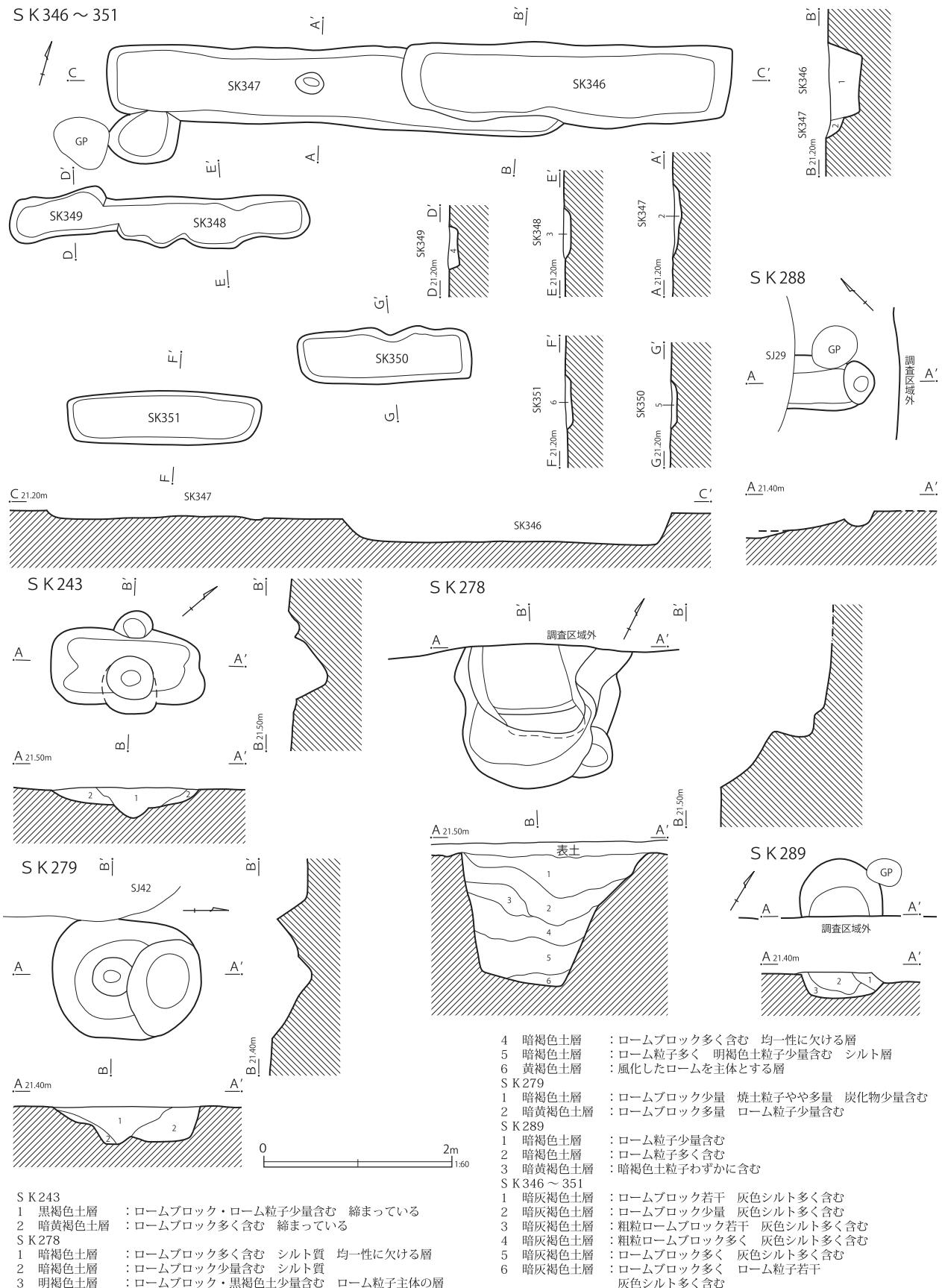
第 411 図 土壌 (14)

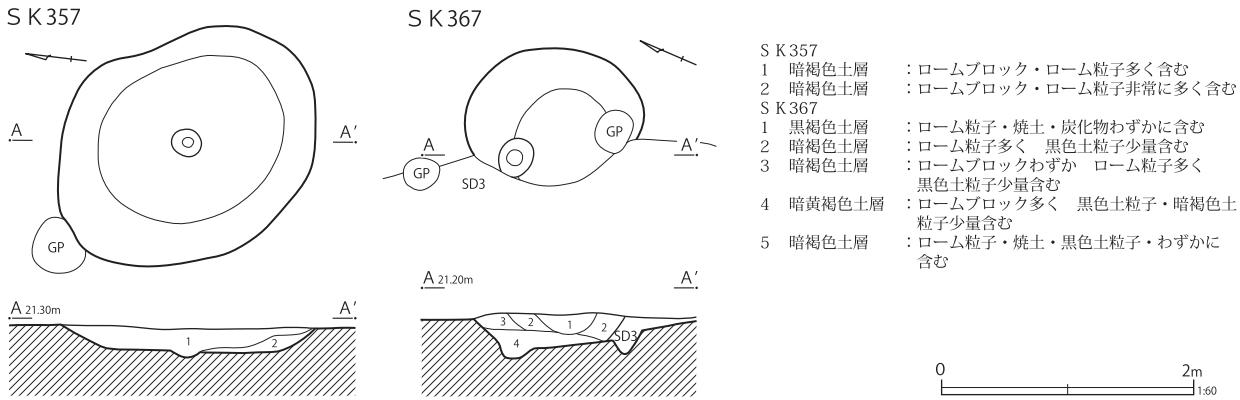


S K 161
 1 暗灰褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている ピット覆土
 2 暗灰褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まりなし ピット覆土
 3 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 締まり弱い
 S K 162
 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む やや締まっている
 2 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている
 S K 163
 1 黒褐色土層 : 明褐色土粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
 2 暗褐色土層 : ローム粒子・黒褐色土粒子少量含む 粘性に欠く 締まり弱い
 3 明褐色土層 : ローム粒子多く含む 黑褐色土粒子少量含む
 S K 164
 1 明褐色土層 : 明褐色土粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
 2 黑褐色土層 : 黑褐色土ブロック少量含む 粘性に欠く 締まり弱い
 S K 167
 1 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
 2 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む 粘性に欠く 締まり弱い
 S K 168
 1 黑褐色土層 : 明褐色土粒子多く含む 黑褐色土粒子少量含む
 S K 171
 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている
 2 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まっている
 S K 228
 1 黑褐色土層 : 明褐色土粒子多く含む 黑褐色土粒子少量含む
 2 黑褐色土層 : ロームブロック少量含む 黑褐色土ブロック多く含む
 3 黑褐色土層 : ローム粒子主体とする

S K 169
 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む 粘性に欠く 締まり弱い
 S K 170
 1 暗褐色土層 : 明褐色土ブロック・明褐色土粒子少量含む
 粘性・締まり弱い
 S K 171
 1 暗褐色土層 : 明褐色土ブロック・明褐色土粒子少量含む
 粘性・締まり弱い
 2 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む 粘性に欠く 締まり弱い
 S K 171
 1 黒色土層 : 灰色粘土・パルプ少量含む 泥炭質
 2 黑色土層 : パルプ多く含む 泥炭質
 S K 203
 1 黑褐色土層 : ロームブロック若干 灰色シルトブロックやや多く含む
 2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く
 灰色シルトブロック少量含む
 S K 223
 1 極暗褐色土層 : ロームブロック微量含む
 2 黑褐色土層 : ロームブロック微量含む
 3 黑褐色土層 : ロームブロック若干含む
 S K 228
 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む 締まりに欠く
 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む 締まり弱い

第412図 土壌(15)





第414図 土壌(17)

第43表 土壌観察表(2)

名称	所在	切られる	切る	新旧不明	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸方向	図版番号
SK131	U-1				-	0.78	0.21	N - 13° - W	第410図
SK132	U-3				0.82	0.67	0.27	N - 55° - W	第410図
SK133	T-4・5		SK124		-	0.63	0.19	N - 73° - E	第410図
SK134	U-2				1.33	1.27	0.54	N - 90°	第410図
SK137	O-14		SJ18, SK135・136		0.80	0.50	0.27	N - 75° - E	第410図
SK142	N-15・16				1.31	0.70	0.17	N - 11° - W	第410図
SK146	L-14		SJ23・24	SD 1	4.25	0.62	0.08	N - 72° - E	第411図
SK147	L-14		SJ23・24	SD 1	4.35	0.81	0.18	N - 75° - E	第411図
SK148	L-14		SJ23		1.12	0.37	0.40	N - 6° - E	第410図
SK155	N-15		SJ11		0.75	(0.50)	0.18	不明	第411図
SK157	M-11	SK158		SB 6	1.42	0.91	0.46	N - 5° - W	第411図
SK158	M-11		SK157, SB 6	SK159A・B	3.47	0.60	0.19	N - 79° - E	第411図
SK159A	M-11			SK158・159B	1.28	1.07	0.41	N - 40° - W	第411図
SK159B	M-11			SK158・159A	1.38	1.35	0.43	N - 50° - W	第411図
SK160	M-10		SJ39		1.58	1.03	0.46	N - 58° - E	第411図
SK161	M-11				0.93	0.82	0.97	N - 80° - E	第412図
SK162	M-11		SJ19	SB 6	0.92	0.67	0.85	N - 60° - W	第412図
SK163	J-17				3.19	0.84	0.16	N - 17° - W	第412図
SK164	J-17				1.26	0.62	0.15	N - 13° - W	第412図
SK167	J-17				0.87	0.75	0.10	N - 21° - W	第412図
SK168	J-17				0.87	-	0.12	N - 62° - W	第412図
SK169	J-17				1.15	0.77	0.10	N - 85° - E	第412図
SK170	J-17				1.22	0.96	0.07	N - 70° - E	第412図
SK171	J-16・17				0.77	0.60	0.07	N - 51° - W	第412図
SK203	N-11・12		SJ40		2.35	0.66	0.15	N - 64° - E	第412図
SK223	P-12				0.75	0.59	0.40	N - 55° - W	第412図
SK224	N-11		SJ40		-	0.97	0.06	N - 53° - E	第412図
SK228	M-10				-	1.17	0.14	N - 75° - W	第412図
SK237	N-11	SK61・66		SK65	-	-	0.19	不明	第403図
SK243	L-17				1.54	1.05	0.42	N - 42° - E	第413図
SK278	I-17				-	1.53	1.21	N - 29° - W	第413図
SK279	L-19		SJ42		1.55	1.25	0.41	N - 9° - E	第413図
SK288	L-20		SJ29		-	0.56	0.11	N - 45° - W	第413図
SK289	M-18				-	0.90	0.18	N - 32° - W	第413図
SK346	K-14・15		SK347		3.49	0.82	0.39	N - 75° - E	第413図
SK347	K-14	SK346			4.81	0.77	0.13	N - 78° - E	第413図
SK348	K・L-14			SK349	2.03	0.54	0.07	N - 71° - E	第413図
SK349	L-14			SK348	1.07	0.41	0.12	N - 61° - E	第413図
SK350	L-14				1.81	0.52	0.09	N - 72° - E	第413図
SK351	L-14				2.02	0.57	0.10	N - 74° - E	第413図
SK357	M-16・17				2.22	1.76	0.26	N - 41° - W	第414図
SK367	L-16		SD 3		1.40	1.09	0.35	N - 35° - W	第414図

(4) 溝跡

第1号溝跡(第415図)

K・L・M-14、M・N・O-15グリッドに位置する。総延長約35.65m、最大幅2.5m、最大深度0.22mである。方位はN - 30° - Wで、N - 15グリッド付近でN - 22° - Wに方向を変える。

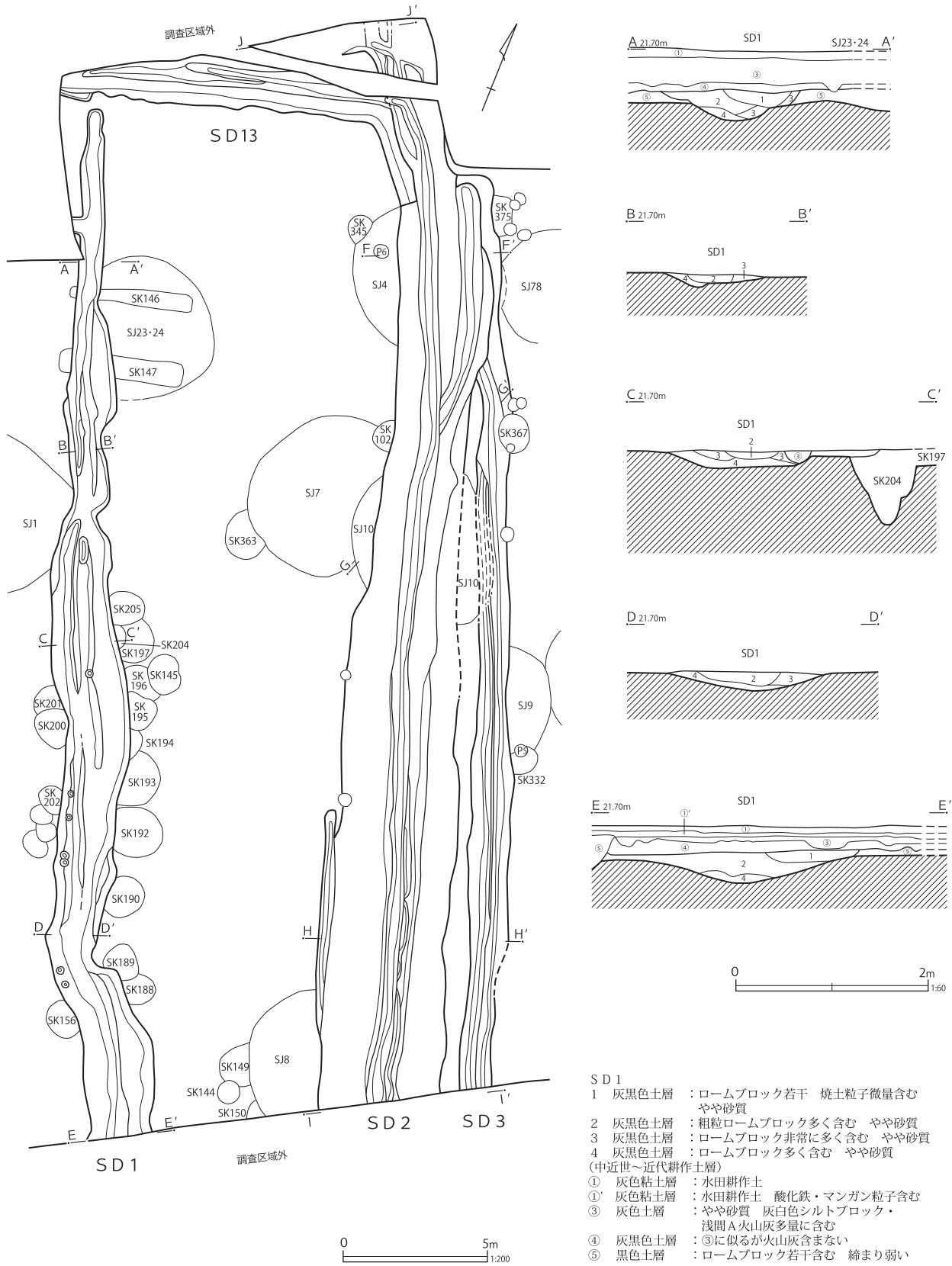
第1・23・24号住居跡、第156・187・188・

189・190・192・193・194・195・196・197・200・201・202・204・205号土壌を壞している。第146・147号土壌とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

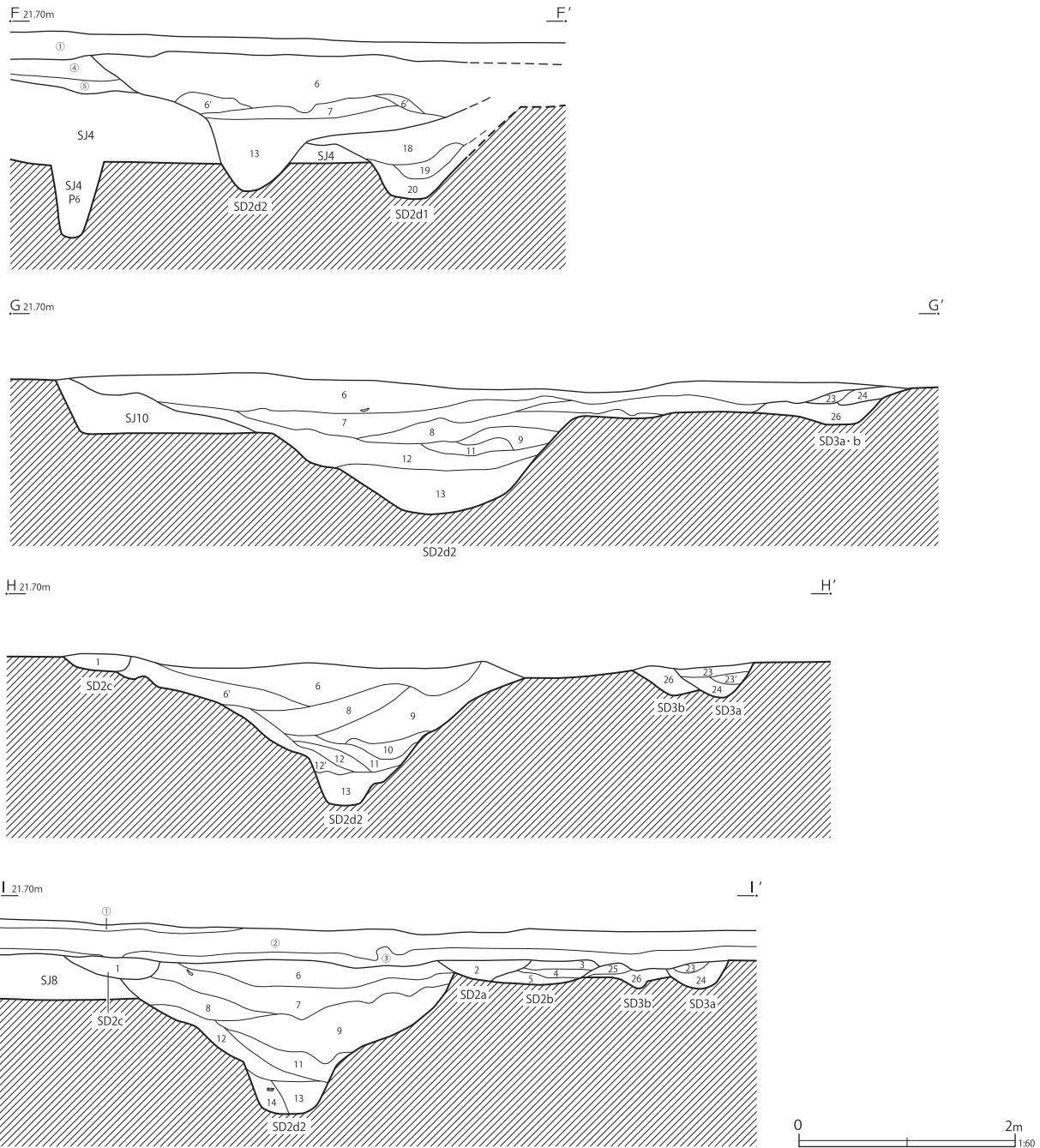
遺物は、近世の陶磁器類が出土した。

第2号溝跡(第415～417図)

N - 14、K・L・M - 15、M - 16グリッドに所



第415図 第1～3・13号溝跡(1)



第416図 第1～3・13号溝跡（2）

在する。総延長36.8m、最大幅4.6m、最大深度1.4mである。方位はN-18°-Wで、K-15グリッド付近でN-34°-Wに方向を変える。

第4・7・8・9・10・78号住居跡、第102・375号土壙を壞している。第3・13号溝跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

少なくとも4時期の溝（2a～2d号）が切り合っており、これらのうち最も古い2d号は断面薬研状の大溝で、それ自体が3時期（2d1～2d3号）にわたって掘られている。

遺物は、近世の陶磁器類が出土した。

第3号溝跡（第415～417図）

L - 15、L・M・N - 16グリッドに位置する。総延長約26.9m、最大幅2.3m、最大深度0.32mである。方位はN - 20° - Wを指す。

第4・9・10号住居跡、第332・375号土壙を壞しており、第367号土壙に壞されている。第2号溝跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。近世の陶磁器類が出土した。

第4号溝跡（第418図）

O・P - 6、P・Q・R - 7、R - 8グリッドに位置する。総延長約33.2m、最大幅3.5m、最大深度0.45mである。方位はN - 23° - Wを指す。

第18号土壙に壞されている。第5・6号溝跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。近世の陶磁器類が出土した。

第5号溝跡（第418図）

R - 7～10、S - 7グリッドに位置する。総延長約25.56m、最大幅約1.78m、最大深度約0.95m

である。方位はN - 73° - Eを指す。

第4号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。調査区の壁に接して、北側の立ち上がりのみを検出したもので、覆土の大半は調査区域外に存在する。

東寄りでは溝の立ち上がりに沿って小ピットが等間隔に並んでいた。

近世の陶磁器類が出土した。

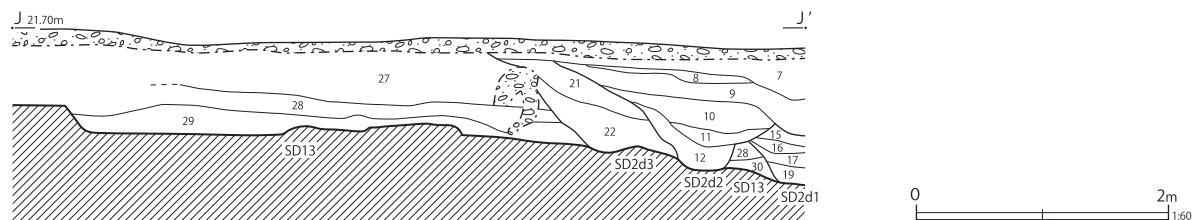
第6号溝跡（第419・420図）

R - 6・7、S - 5・6グリッドに位置する。総延長約22.06m、最大幅1.08m、最大深度0.22mである。方位はN - 72° - Eを指す。

第4号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。近世の陶磁器類が出土した。

第7号溝跡（第419・420図）

R - 5～7、S - 3～5、T - 1～3グリッドに位置する。総延長約64.51m、最大幅1.85m、最大深度0.29mである。方位はN - 71° - Eを指す。



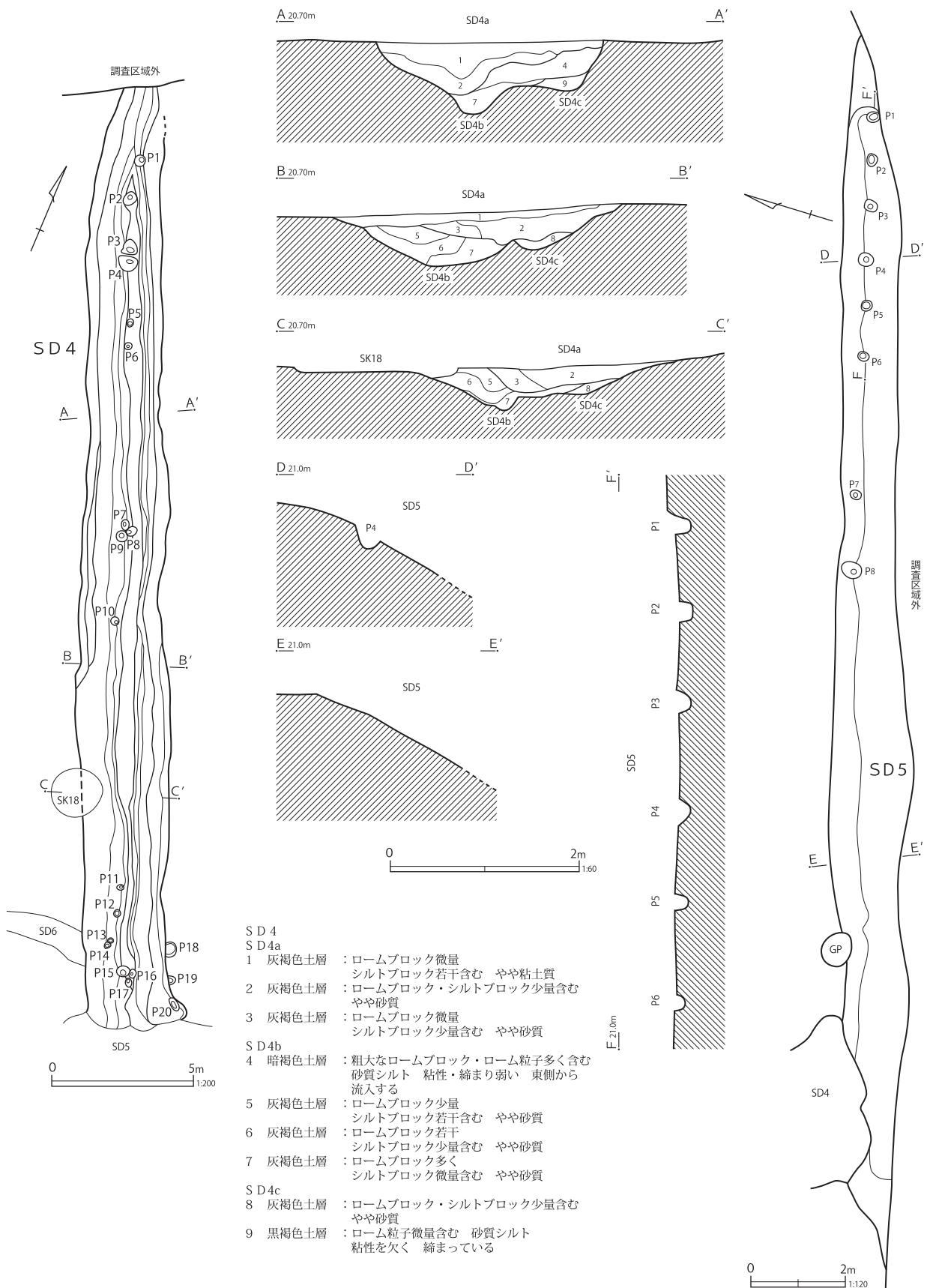
SD2

SD2c

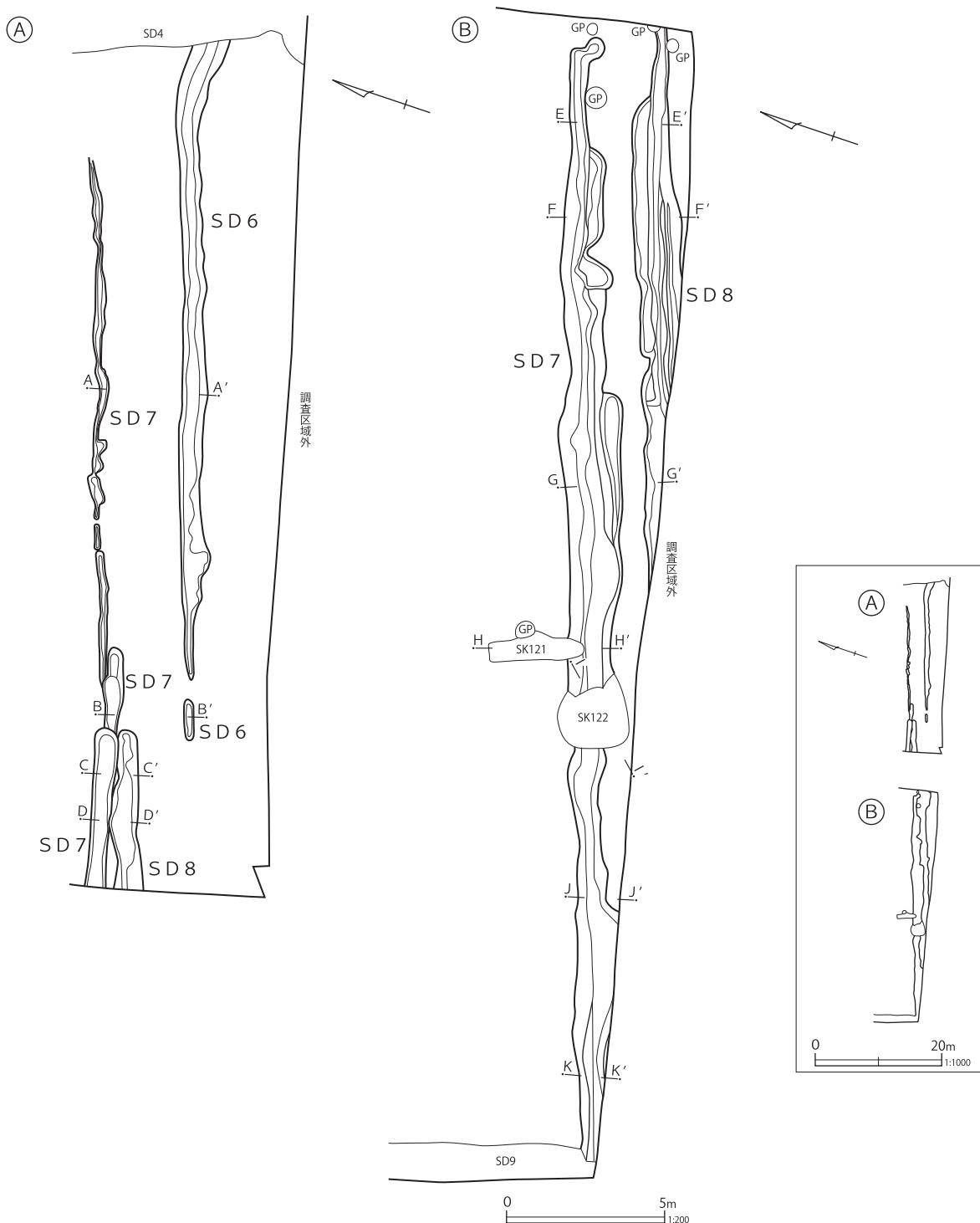
- 1 黄褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック少量含む 砂質 締まりなし
- SD2a
- 2 黄褐色土層 : 粗粒ロームブロック・シルトブロック少量含む やや砂質 締まりなし
- SD2b
- 3 黄褐色土層 : ロームブロック・シルトブロック少量含む やや砂質 締まりなし
- 4 黄褐色土層 : 細粒ロームブロック・シルトブロック少量含む やや砂質 締まりなし
- 5 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む
- SD2d2
- 6 黄褐色土層 : ロームブロック若干 燃土ブロック・シルト粒子少量含む やや砂質 基本土層④を主とする
- 6' 黄褐色土層 : ロームブロック・燃土ブロック・シルト粒子少量含む やや砂質
- 7 黄褐色土層 : ロームブロック多く 燃土ブロック・シルト粒子少量含む 砂質
- 7' 黄褐色土層 : ロームブロック非常に多く 燃土ブロック・シルト粒子 少量含む 砂質
- 8 黄褐色土層 : ロームブロック少量 黒色土粒子・燃土ブロック・シルト粒子少量含む 砂質
- 9 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む 挖削時の土の再混入土層
- 10 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む ロームが暗色 挖削時の土の再混入土層
- 11 黄褐色土層 : ロームブロック少量含む
- 12 黄褐色土層 : ロームブロック若干含む
- 12' 黄褐色土層 : ロームブロック微量含む

- 13 黄褐色土層 : ロームブロック多く含む
- 14 黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- SD2d1
- 15 黄褐色土層 : 細粒ロームブロック多く 炭化物若干含む 締まりやや弱い
- 16 黄褐色土層 : ロームブロックやや多く 炭化物少量含む 締まり弱い
- 17 褐色土層 : ローム粒子不均一に含む 締まり弱い
- 18 褐色土層 : 細文の遺構覆土をブロック状に混入する 締まり弱い
- 19 黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多量に含む 炭化物少量含む 締まり弱い
- 20 黄褐色土層 : ローム粒子多量 炭化物少量含む 締まり弱い
- SD2d3
- 21 褐色土層 : ローム粒子少量 炭化物若干含む 締まり弱い
- 22 黄褐色土層 : 細粒ロームブロック多量 炭化物少量含む 締まりやや弱い
- SD3
- SD3a
- 23 黄褐色土層 : 粗粒ロームブロック若干含む やや砂質 締まりなし
- 23' 黄褐色土層 : ロームブロック少量含む やや砂質 締まりなし
- 24 黄褐色土層 : ロームブロック若干含む やや砂質 締まりなし
- SD3b
- 25 黄褐色土層 : ロームブロック少量含む
- 26 黄褐色土層 : ロームブロック若干含む
- SD13
- 27 暗褐色土層 : ローム粒子多量 燃土粒子微量含む やや締まりあり 陶磁器片を出土する
- 28 黄褐色土層 : ローム粒子多量 燃土粒子ごく微量含む 締まり弱い
- 29 黄褐色土層 : ロームブロック多量 ローム粒子少量含む 締まりなし
- 30 黄褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多量含む

第417図 第1～3・13号溝跡（3）



第 418 図 第 4・5 号溝跡



第419図 第6・7・8号溝跡(1)

第121・122号土壌、第8号溝跡に壊されている。
第9号溝跡とも重複関係にあるが新旧関係は不明
である。近世の陶磁器類が出土した。

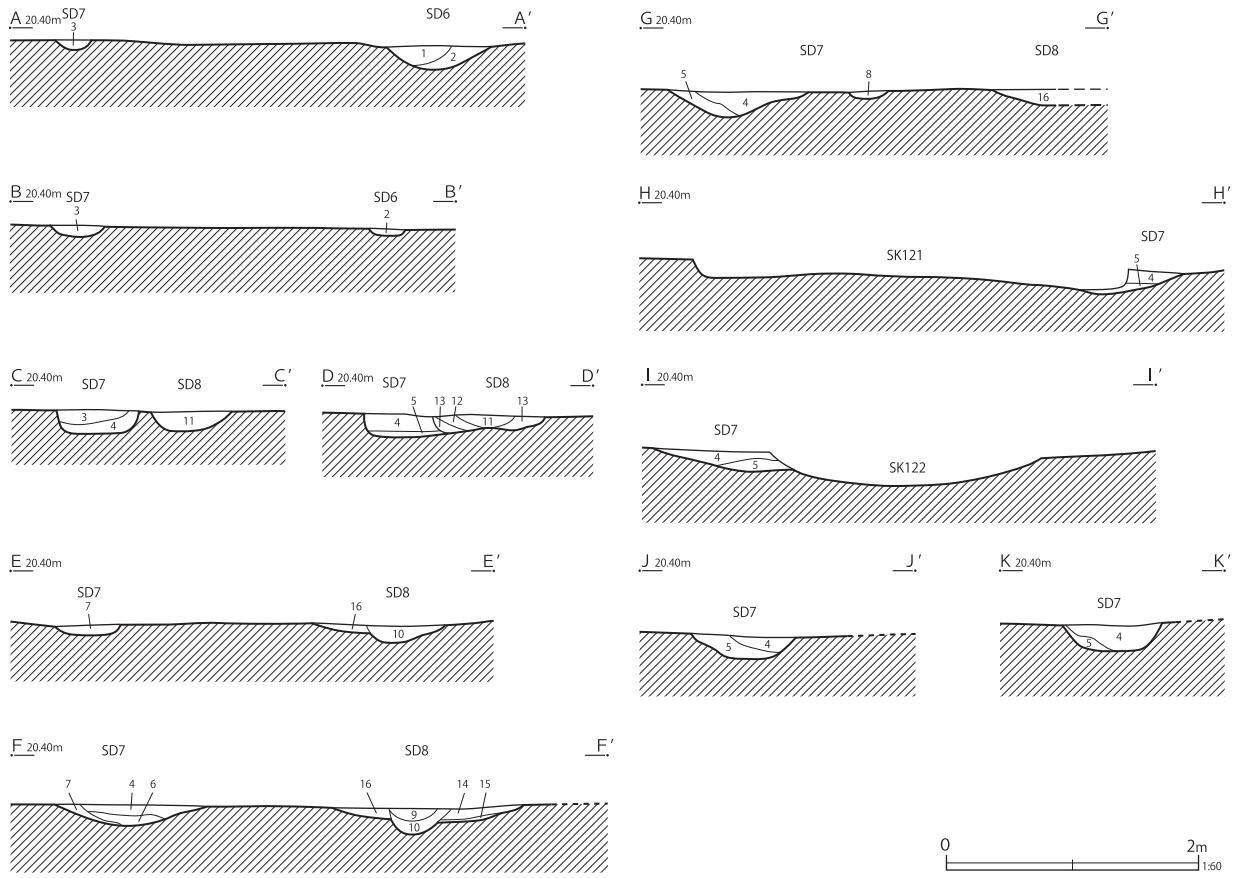
第8号溝跡(第419・420図)

S - 3~5、T - 3・4グリッドに位置する。
総延長約30.95m、最大幅1.45m、最大深度0.22m

である。方位はN - 70° - Eを指す。第7号溝跡を壊している。近世の陶磁器類が出土した。

第9号溝跡(第421図)

S - 0・1、T - 1グリッドに位置する。総延長約13.92m、最大幅約1.37m、最大深度0.63mである。方位はN - 18° - Wを指す。第7号溝跡と



S D 6
 1 灰黒色土層 : ロームブロック少量 シルトブロック微量含む
 やや粘土質
 2 茶褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む
 やや粘土質
 S D 7
 3 灰黒色土層 : ロームブロック・シルトブロック少量含む
 4 灰褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック少量含む
 5 黑褐色土層 : ロームブロック若干 シルトブロック少量含む
 6 黑褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む
 締まり弱い
 7 暗褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子多く含む
 締まり弱い
 8 暗褐色土層 : ローム粒子少量含む 締まり弱い 粘性ややあり

S D 8
 9 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む 締まり・粘性弱い
 10 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子やや多く含む
 締まり・粘性弱い
 11 黄褐色土層 : ロームブロック多く シルトブロック若干含む
 12 灰褐色土層 : ロームブロック少量 シルトブロック微量含む
 13 黑色土層 : ロームブロック若干含む 粘性弱い
 14 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む 締まり・
 粘性弱い
 15 暗褐色土層 : ロームブロック微量 ローム粒子多く含む
 締まり・粘性弱い
 16 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む やや締まりあり 粘性弱い

第420図 第6・7・8号溝跡(2)

重複関係にあるが、新旧関係は不明である。近世の陶磁器類が出土した。

第10号溝跡（第421図）

U - 1、V - 1・2グリッドに位置する。総延長約14.54m、最大幅約1.05m、最大深度約0.43mである。方位はN - 19° - Wを指す。近世の陶磁器類が出土した。

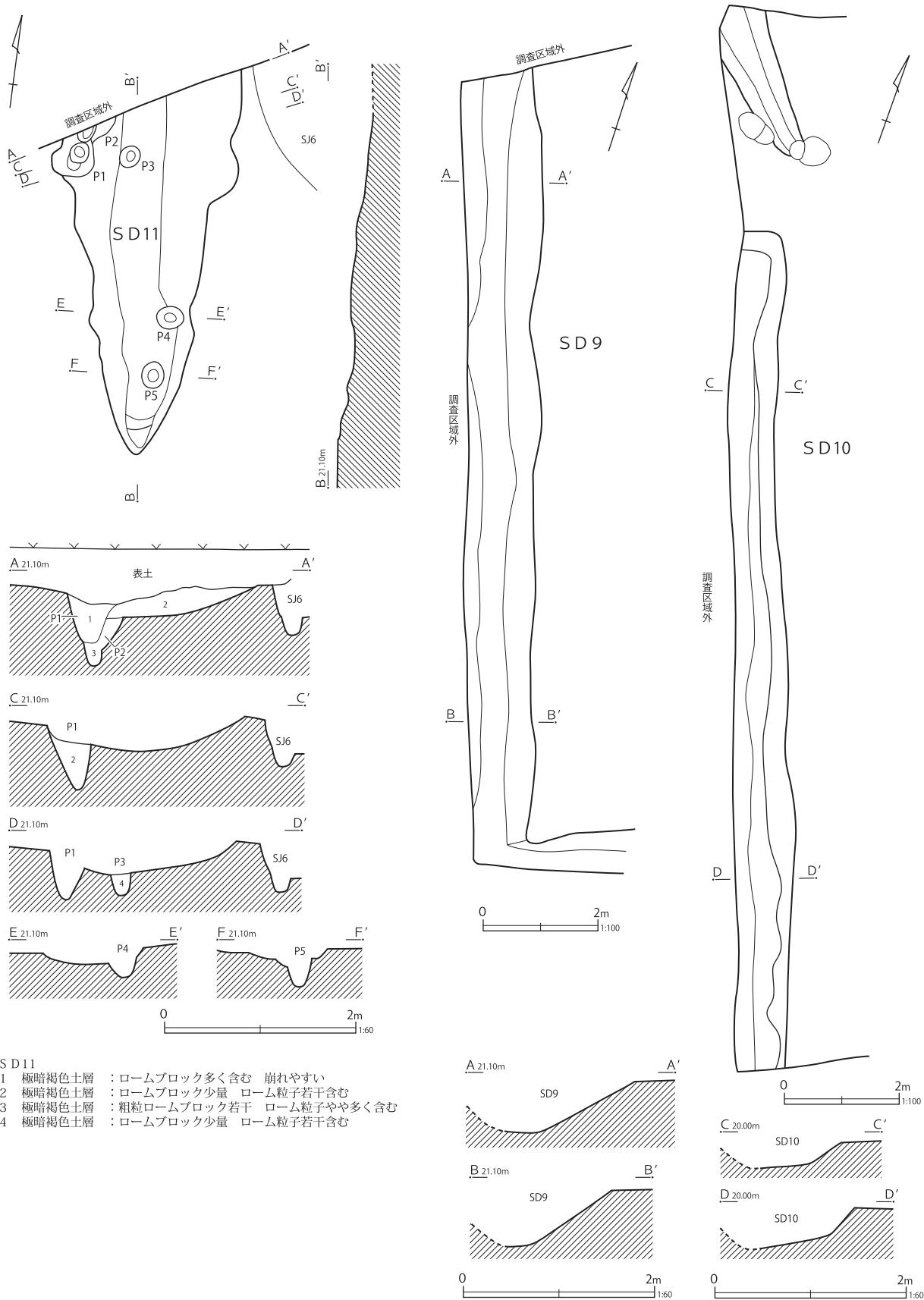
第11号溝跡（第421図）

M - 11グリッドに位置する。総延長約4.09m、

最大幅1.95m、最大深度0.32mである。方位はN - 7° - Wを指す。近世の陶磁器類が出土した。

第13号溝跡（第415～417図）

K - 14・15グリッドに位置する。総延長14.5m、最大幅1.45m、最大深度0.68mである。方位はN - 75° - Eを指す。第4号住居跡を壊している。第2号溝跡とも重複関係にあるが、新旧関係は不明である。近世の陶磁器類が出土した。



第421図 第9・10・11号溝跡

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

諏訪野遺跡は、荒川支流の江川低地に面した台上地および台地直下の低地部分にかけて広がる遺跡である。今回の発掘調査では、台地上で縄文時代前期から晩期と近世の遺構・遺物、低地部分では縄文時代後期の遺構と遺物包含層等を発見した。

遺構・遺物の量が膨大であるため、報告書は二度に分けて刊行されることとなった。そこで、東西に長い調査区を便宜的に中間付近で二分し、第一回目の報告となる本書では西半部分の遺構とその出土遺物を取り扱うこととした。地形的には台地のやや奥まった部分にあたる。

報告した縄文時代の遺構は住居跡・土壙・集石土壙・ピット群である。このうち土壙・ピットに前期の可能性のあるものが若干含まれているが、それ以外はほぼ全てが中期のものであった。

住居跡は環状集落の一部をなすもので、その構築は後述のように、中期中葉から後葉に掛かる限られた時期に集中していた。

土壙は住居跡群の間隙に散在しており、特定箇所に集中するようなありかたは示していなかった。出土遺物等からその性格を明らかにすることはできなかったが、規模や形態から推して、多くは墓壙であったと考えられる。

集石土壙は2基発見された。うち一基は後段で述べるように、住居跡の炉跡を再利用してつくられており、稀な事例として注目される。

ピットは環状集落の中央広場縁辺に集中しており、出土遺物には本遺跡の集落出現期にあたる中期中葉の土器を多く含んでいた。環状集落の成り立ちを考えるうえで、貴重な資料と言える。

近世の遺構は若干の溝や道路状遺構を別にすれば、今回報告する台地奥部に分布が偏る傾向が認められた。特に掘立柱建物跡と井戸跡は半径20m×30mの範囲に集中しており、時期的な前後関係

はあるものの、明らかに一連の遺構と捉えることができる。

近世の遺構覆土はほとんどがヤドロと呼ばれる河成堆積物を含んでいた。ヤドロは近世の土地開発に際し、土壤改良のために荒川河川敷から運び上げられたもので、その分布範囲は北本市・桶川市の西部から上尾市の北西部に及ぶ。形成時期については諸説あるが、近世の遺構群はこうした土地開発の手によって残されたものであることがわかった。

以下、今回の整理作業を通して判明した事柄について記す。もとより整理作業自体が道半ばであり、次回報告分において新たな資料が追加されることは言うまでもない。従って、総括的な分析作業は次回報告に譲ることとし、これに備えた予察と問題提起をもって本書の「まとめ」とする。

2. 遺構出土縄文土器について

今回報告に係る縄文中期土器の時期区分は以下のとおりである。

I期：貉沢～新道式（勝坂I式）

II期：藤内I式（勝坂II式前半）

III期：藤内II～井戸尻I式（勝坂II式後半～勝坂III式前半）

IV期：井戸尻II式（勝坂III式後半）

V期：加曾利E I式古段階

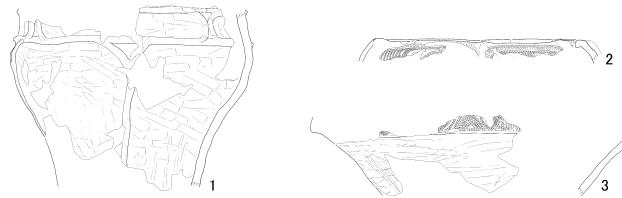
VI期：加曾利E I式新段階

第423～425図に各時期の遺構出土土器の代表的なものを再掲した。区分に際しては、谷井他1982、谷井・細田1997、金子2001、上野2012等の諸文献を参考にしたが、本書では今次調査における遺物の共伴関係を中心に資料を配置したため、他の文献とは若干の差異が生じている可能性もある。

V期の土器群

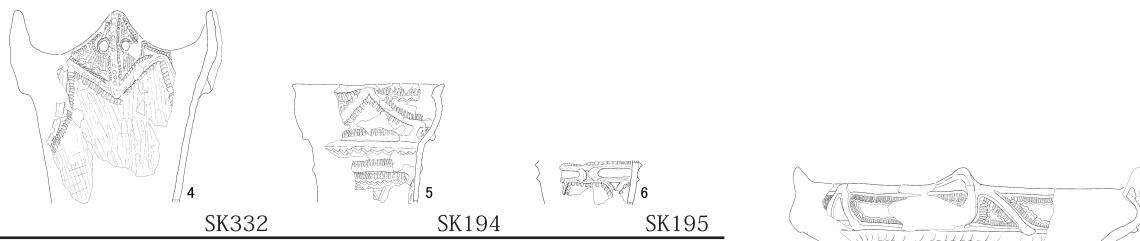
前段における時期区分のうち、I期の資料は第

I 期



SJ2 中土壤?

II 期



III 期



IV 期



※縮尺はすべて 1 : 10

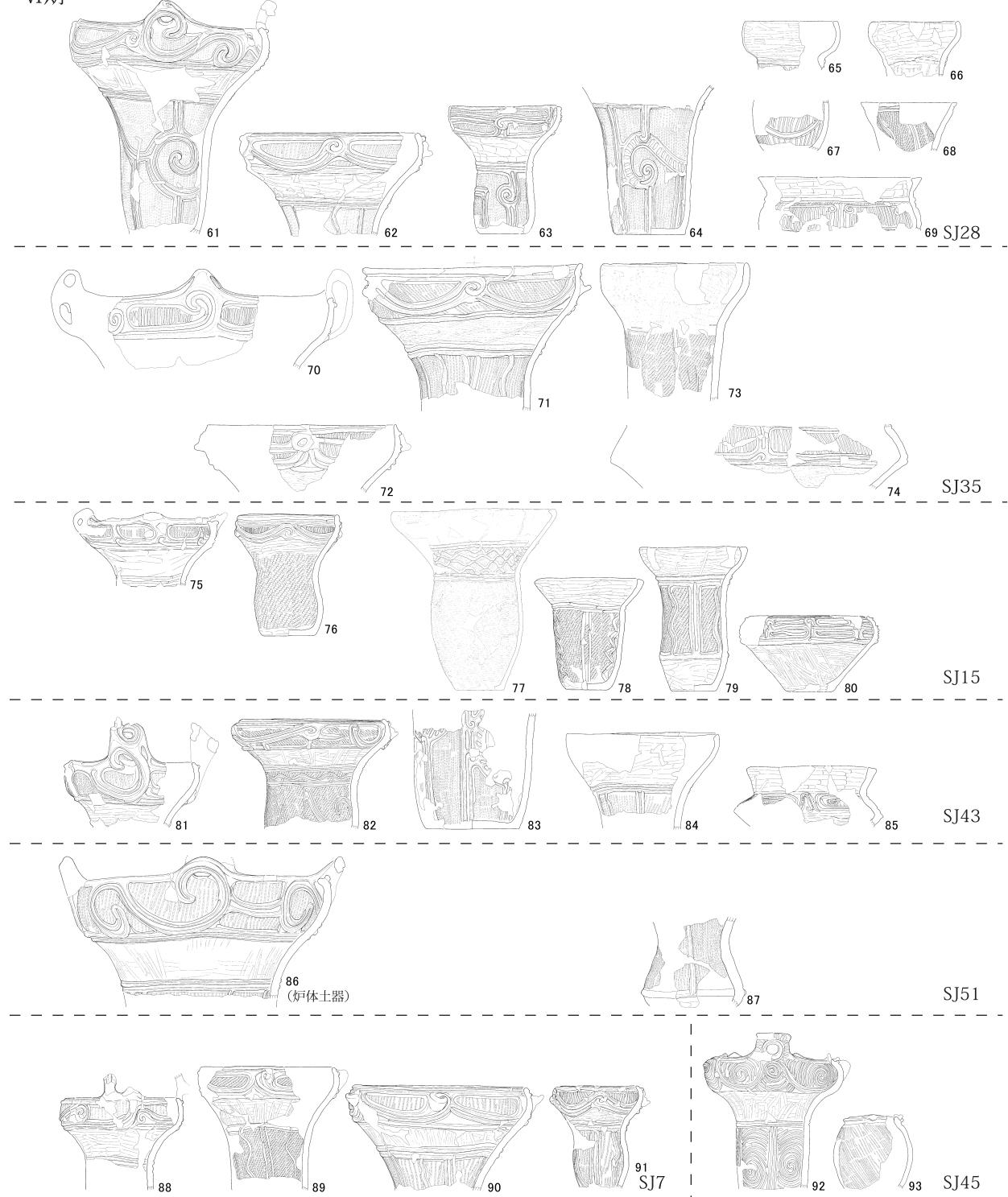
第 422 図 土器変遷図 (1)

V期



第 423 図 土器変遷図 (2)

VII期



※縮尺はすべて1:10 (77のみ1:20)

第424図 土器変遷図(3)

2号住居跡からまとめて出土しているが、住居跡本来の時期とは明らかに異なっているため、床面下ないし近隣に存在した土壌等からの混入と考えた。

竪穴住居跡からはⅡ期からVI期にかけての土器が出土したが、中でも加曾利E I式に属するV期・VI期の住居跡は43軒中31軒と、今回報告した住居跡の7割以上を占めていた。以下、該期の土器について、その組成と変遷について考察する。

第80号住居跡

発掘時の所見では新・古2つの生活面を持つと判断されたが、出土土器はほぼ同時期のものと考えられる。遺物は主として古期の覆土中から出土しており、第424図20～25には古期の一括資料と思われるものを掲載した。

20・21は勝坂系の円筒形深鉢である。口縁部無文で胴部中段に文様帯を持ち、胴下半部は地文となる。21は環状の隆帶外縁に刻みを持つ車輪状のモチーフを配するが、同種のモチーフをもつ円筒形深鉢は本住居跡の土器組成中に複数例存在している。

22は車輪状モチーフが多喜窪タイプの口縁部文様帯に取り込まれたものである。飯能市中郷遺跡8号住居跡に類例を見ることができるが、中郷例ではこれに加曾利E I式古段階（以下、加曾利E I（古）式）の深鉢と、第40号住居跡35のような所謂「東関東タイプ」をそれぞれ複数個体伴っている。

24は「中峠0地点型深鉢」で、狭義の中峠式である。25は円錐状の突起を起点として弧状の区画帯を描くもので、文様構成上は24と共通している。桶川市高井遺跡第8号住居跡に類例がみられ、「多喜窪タイプ」と東関東タイプを伴っている。

第26号住居跡

26・27は多喜窪タイプである。27は胴下半部で、胴部の無文帯との境を矢羽根刻みの隆帶で区画し、背割れ隆帶による弧状モチーフを連続させ

る。飯能市加能里遺跡20号住居跡で全くと言ってよいほど類似する完形個体が出土しており、加曾利E I（古）式のキャリバー形深鉢が伴っている。26は口縁部で、21・22に類似の車輪状モチーフを持つ。

28・29は勝坂系の個体で、無文の内湾口縁を伴う樽形の土器である。28は刻み隆帶の区画内部に沈線文を充填する。29は対向U字文から変じたX字のモチーフで、下半に櫛歯文を取り込んでいる。同種の器形は深谷市台耕地遺跡第34号住居跡に見ることができ、狭義の中峠式と加曾利E I（古）式の土器を伴っている。

30は三原田系の深鉢である。形骸化した中空突起は全周せず、楕円形区画文の接点でワンポイント的な使われ方をしている。31は狭義の中峠式である。32は刻み隆帶による楕円文が連続して描かれる。伊奈町北遺跡第50号住居跡に類例を見ることができるが、北遺跡が同形の楕円文の連続配置であるのに対し、本例は大小の楕円文の交互配置で、全体として4単位の構成となっている。北遺跡例は組成中に多量の加曾利E I（古）式が存在し、これに31に類似の狭義の中峠式や、東関東タイプが伴っている。

第40号住居跡

33・34は勝坂系の土器である。33は無文内湾の口縁を持つタイプだが、本来頸部以下に展開すべき楕円形区画文が単独で口縁直下に配される点に逸脱がみられ、口縁部への文様集約という加曾利E式に共通の特徴が顕われている。34は沈線主導の文様が描かれる円筒形深鉢で、加曾利E I（古）式に並行する勝坂系の土器の典型例といえる。

35・36は口縁部に圧縮された文様帯を持つ東関東タイプである。35の胴部文様は大木8a式に由来し、三原田式にも類似する。37は突起を起点とする縦位の隆帶が波状の区画帯と融合するもので、狭義の中峠式である。38も同系統の土器である。

胴部の懸垂文からはやや新しい印象を受けるが、福島県法生尻遺跡の大木8a式新段階とされた土器にはこうした簡素な懸垂文を施文するものが含まれており、本例もその影響下にある土器である。

39は曾利I式系の褶曲文土器で、その器形や幅広の頸部無文帯に多喜窪タイプからの影響を見ることがある。40は曾利系浅鉢にみられる縦位分割文様が、加曾利E式的なキャリパー形深鉢の口縁部文様帯として取り込まれたもので、胴部文様にやはり大木8a式の影響がみられる。40は加曾利E I (古)式の土器で、2本隆帯による十字文を描く。

第12号住居跡

加曾利E I (古)式を主体とするセットである。

42は勝坂系の円筒形深鉢で、沈線主導の文様を描く。43は東関東タイプで、口縁直下の交互押圧隆帯に中峠式、胴部の文様モチーフに大木8a式の影響が窺われる。51は浮線+沈線による渦文が連続する複弧文土器で加曾利E I式新段階(以下、加曾利E I (新)式)に盛行する一群だが、やはり胴部文様に大木8a式の影響がみられ、古相のものと考えられる。53は断面三角形の隆帯により文様を描く土器である。同種の隆帯を縦横に貼り付けて蛇腹状に装飾する土器は県西部を中心に定型的に存在しており、本例はその变形と考えられる。飯能市八王子遺跡46号住居跡では蛇腹装飾の土器に加曾利E I式の破片が伴い、富士見市松ノ木遺跡35号住居址では勝坂末の円筒形深鉢や多喜窪タイプが、同34号住居址では加曾利E I (古)式が伴っている。

第13号住居跡

やはり加曾利E I (古)式を主体とする。56は主文様である横S字文と上段の区画帯との接点に小渦巻文を配する。小渦巻文の起源は不明だが、26のような勝坂・多喜窪タイプからの移入とも考えられる。次段階の加曾利E I (新)式で発生する繋ぎ弧文土器の起源となるものであろう。

54・55は東関東タイプで、直線的に立ち上がる胴部に勝坂系の円筒深鉢からの影響が窺われる。55の口縁部文様帯には交互押圧隆帯がみられ、第12号住居跡の43と共に通する。

60は複弧文土器だが、渦文の間隙を沈線による櫛歯文で埋める点が古相と考えられる。

以上のように、諏訪野遺跡におけるV期は、きわめて多系統の土器群のなかの一系列として加曾利E I (古)式が出現する時期と評価される。この段階の土器群を構成する加曾利E I (古)式以外の土器系列の代表的なものには、

- ・勝坂系の円筒形深鉢 (20・21・34・42)
- ・勝坂系の樽形深鉢 (28・29)
- ・多喜窪タイプ (22・26・27)
- ・東関東タイプ (35・36・43・54・55)
- ・狭義の中峠式とその変形 (24・25・31・32・37・38)
- ・複弧文土器の古相 (51・60)

等が存在しており、一部の系列にはしばしば大木8a式の影響が見え隠れする。これらの諸系列のすべてが一括資料の中に同時に顔を揃えることはなく、そのことが勝坂式末～加曾利E I式出現期の土器群の理解を困難にしている。

これらの諸系列と加曾利E I (古)式との共伴関係については冒頭挙げた多くの先学の論考があり、これまでに挙げた他遺跡における一括出土例を見ても明らかであるが、今回報告した資料中における加曾利E I (古)式を主体とする一括資料の組み合わせには、一定の傾向がみられるのもまた事実である。

すなわち、加曾利E I (古)式主体の一括資料には東関東タイプ・複弧文土器・円筒形深鉢が常に共伴する一方で、樽形深鉢・多喜窪タイプ・狭義の中峠式は伴っていない。

同時期における多系統の土器群の組成に偏りが生じる原因には、地域性や集団間における土器の保有形態の違い等が考えられる。しかし一方で、

次段階=加曾利E I (新) 式期におけるキャリパー類深鉢の盛行に向かって、土器組成中の加曾利E系土器の比率が漸増していったという仮定も成り立つ。《組成A=勝坂・中峠主体》・《組成B=加曾利E主体》という土器組成の違いをV期内部における小時期差とみることもまた不可能ではない。

今次調査における出土資料の整理と分析は未だ半ばであり、この場で拙速に結論を出すことは避けたい。今後整理作業を行う資料中にも、V期に該当する良好な一括資料が多数存在している。これらの資料を追加したうえで、次回報告書においてさらなる分析・考察を加えることとしたい。

V期の土器群

第28号住居跡

61~63はキャリパー類深鉢で、口縁部文様を知りうるものである。いずれも頸部無文帯を持ち、胴部には懸垂文を施文する。

61は該期の指標となる土器で、口縁部に大柄のS字文を描き、モチーフの末端が変化した大型中空突起を持つ。62は2本隆帯による弧状モチーフを連続して描き、接点に小渦巻文を配する繋ぎ弧文の土器である。63は横位の2本隆帯で口縁部文様帯を上下に分帶する土器で、前段階のクランク文からの変異であり、やはりモチーフ交点に小渦巻文を配する。64は同種の深鉢の胴部で、曾利式に由来する大柄の渦巻文を描くが、2本隆帯間を短い隆帯によって階梯状に連結している。65・66は口縁部文様帯を失う一群で、前段階の勝坂系樽形深鉢の流れを汲みつつ、胴部にはキャリパー類の懸垂文を取り入れている。

第35号住居跡

70~72がキャリパー類深鉢である。70はやや平板化した中空突起である。突起間に沈線主導の渦巻文が配され、突起と渦巻文の間は橢円形の区画文となる等、次段階の加曾利E II式的な傾向が見て取れる。71は繋ぎ弧文土器である。72は繋ぎ

弧文土器と、63のような2段分帯の土器の折衷型である。73は口縁部文様帯を持たない一群で、胴部に半裁竹管による懸垂文を描く。

第15号住居跡

75・76がキャリパー類深鉢である。75は中空突起の深鉢で、突起が小型化しており、沈線主導の小渦巻文や地文部が区画文化する等、次段階に続く要素が出現している。76は繋ぎ弧文土器で、文様帯下端の水平区画帯を失い、弧線文と頸部無文帯が接する点は新しく見えるが、前段階における狭義の中峠式からの系譜と理解される。胴部は地文化し、横位の区画や懸垂文は描かれない。

77~79は口縁部文様帯を失う一群である。77の頸部には曾利式に由来する浮線文が重畳する。78は沈線による平行懸垂文および蛇行懸垂文である。79は胴部文様帯の下端を隆帯で水平に区画し、胴下半部に無文帯を持つ。文様構成上は勝坂系円筒深鉢、器形の上では多喜窪タイプの流れを引くもので、これら繋ぎ弧文土器を伴う一括資料を敢えて加曾利E I式の時間幅に収める根拠となる土器である。80はキャリパー類由来の文様帯を持つ浅鉢で、横位に段分帯の文様を描く。

第43号住居跡

81・82はキャリパー類深鉢である。81は中空突起の深鉢で、やはり口縁部渦巻文の区画文化が進む。82は大木8 b式古段階の影響下にある土器である。83は64に類似の大柄渦巻文で、階梯状モチーフが用いられる。84は口縁部文様帯を失う土器である。

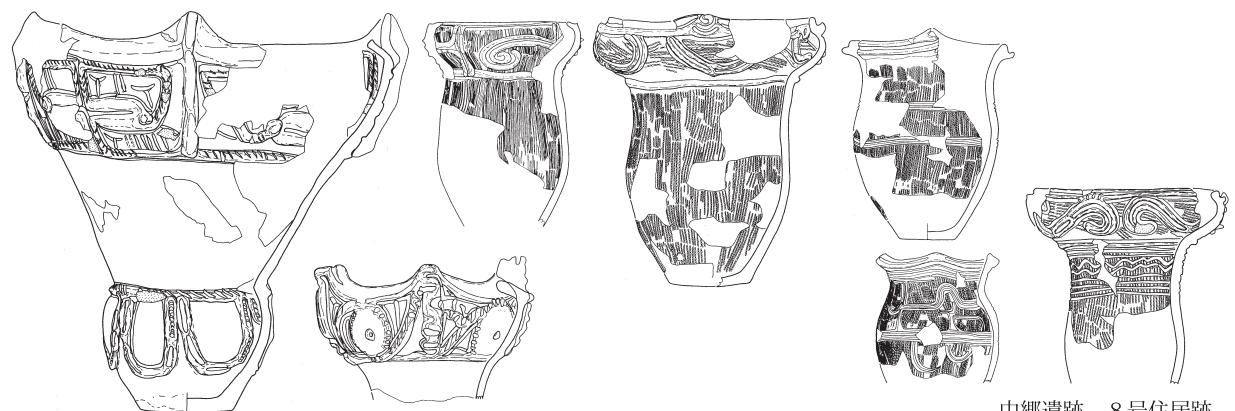
第51号住居跡

86はキャリパー類で大型中空突起の土器である。87は79と同様の、胴下半部に無文帯を持つ土器である。

第7号住居跡

いずれもキャリパー類である。88は大型中空突起の土器である。

89~91は繋ぎ弧文の土器である。91は左右均等



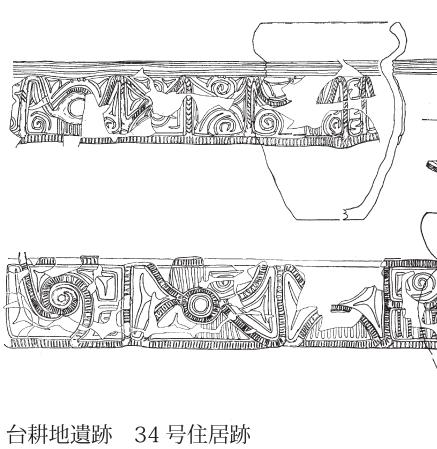
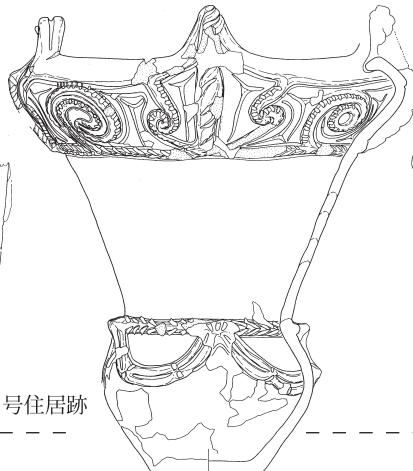
中郷遺跡 8号住居跡



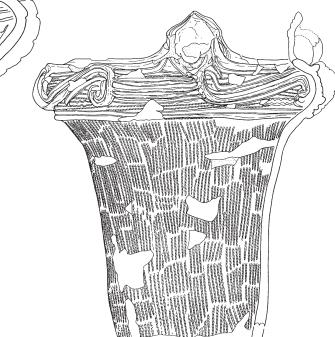
高井遺跡 8号住居跡



加能里遺跡 20号住居跡

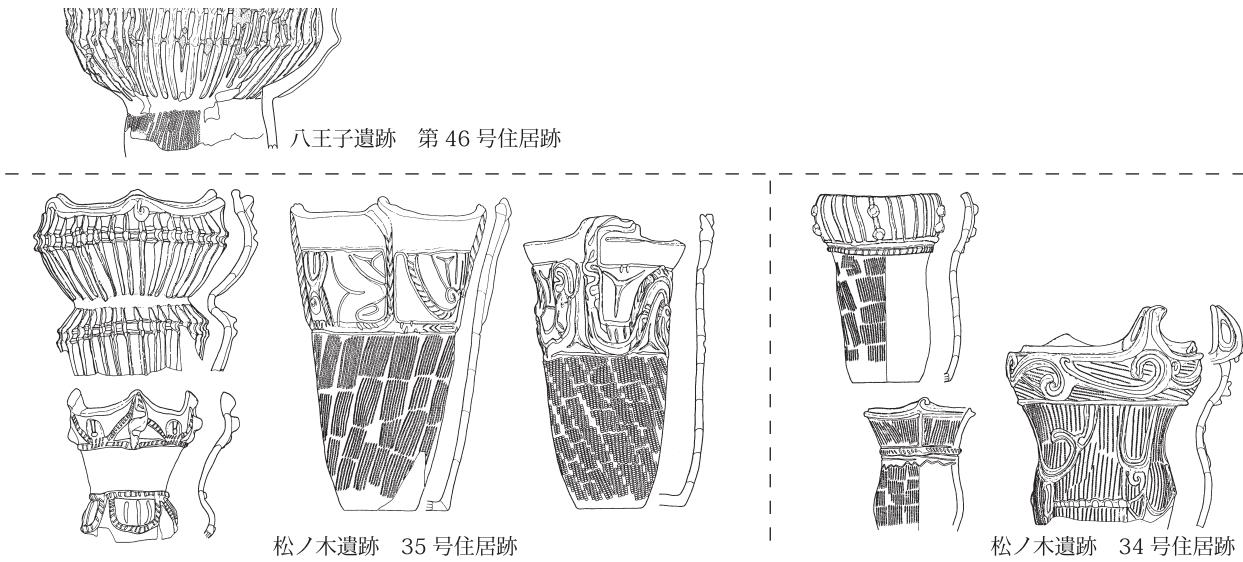


台耕地遺跡 34号住居跡



北遺跡 第50号住居跡

第425図 V期 周辺遺跡資料(1)



第426図 V期 周辺遺跡資料（2）

な繋ぎ弧文だが、89・90は小渦巻文を起点とした片流れの弧状文となっており、繋ぎ弧文土器の系譜の中でも古い要素と考えられる。

第45号住居跡

92は複弧文土器である。平行沈線による波状の区画の上下に浮線+沈線の渦文が配される。胴部には懸垂文間に下端開放する渦巻文を配する馬高式類似の文様が描かれるが、同種の胴部文様は日高市宿東遺跡C区第6号住居跡のキャリバー類大型中空突起深鉢にも採用されている。93は短頸壺形の土器である。口縁直下に貼り瘤を伴うごく簡略な文様帶を持っており、東関東タイプの残存形態と考えられる。

以上のように、今回報告したVI期のキャリバー類深鉢の組成中には、加曾利E I（新）式の指標である大型中空突起深鉢と、加曾利E II式期に盛

行する繋ぎ弧文の土器が共存している。これらの資料を加曾利E I式の範疇で捉えたのは、一見新しく見える文様要素であっても、その成り立ちを考えたときにV期における多系統の土器群の存在を前提とした方が理解しやすいと考えたためである。また、これらの資料を加曾利E II式期に位置付けた場合、V期との間を埋めるべき加曾利E I（新）式のまとまった資料がそっくり抜け落ちてしまうことも、大きな理由となっている。

次回報告に係る資料中に、V期とVI期の間を埋める土器群が存在した場合、VI期は加曾利E II式古段階の土器ということになる。逆に、VI期に後続する、加曾利E II式古段階の資料がまとめて存在する可能性もある。資料の追加を待ち、周辺地域の様相も見極めたうえで、慎重な分析を行っていきたい。

第44表 時期別住居跡一覧表

時期	土器型式	軒数	住居番号
II期	藤内I式	1	38
III期	藤内II式～井戸尻I式	4	4・44・39・78
IV期	井戸尻II式	5	10・14・19・20・25
V期	加曾利E I（古）式	16	2古・5・8・9・11・12・13・16・18・23・26・27・34・37・40・80古・80新
VI期	加曾利E I（新）式	15	1・2新・3古・3新・6・7・15・24・28・29・31・35・42・43・45・51
時期不明		2	25・79
(V期 組成A)	(勝坂・中峠系主体)	(10)	2古・16・18・23・26・27・34・37・40・80古・80新
(V期 組成B)	(加曾利E 主体)	(6)	5・8・9・11・12・13

3. 縄文時代中期の竪穴住居跡について

今回報告した竪穴住居跡は全て縄文時代中期の、勝坂式の半ばから加曾利E I式の新段階までのものである。

各時期の住居跡軒数と内訳を第43表にまとめた。II期（藤内I式）の1軒に始まって、III期（藤内II～井戸尻I式）4軒・IV期（井戸尻II式）5軒と微増し、V期（加曾利E I式古段階）16軒・VI期（加曾利E I式新段階）15軒である。加曾利E I式期に属するものが43軒中31軒で、集落の最盛期を明示している。

住居跡の分布

第428図に時期ごとの住居跡分布を示した。環状集落の中央をトレンチ状に横断する部分的な調査であり、次回報告部分にも多数の住居跡を残しているが、おおまかな傾向として環状集落の体裁が整うのは住居軒数が増大する加曾利E I式期である。

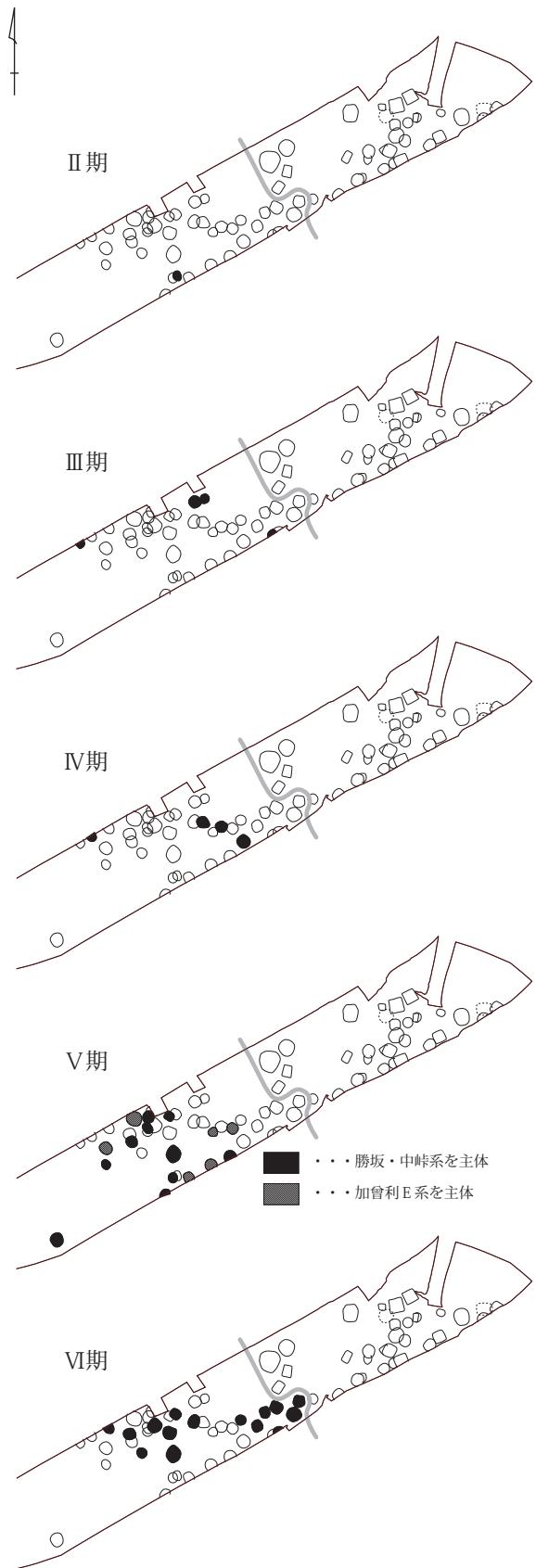
今回、加曾利E I式土器を分析する中で古・新の2時期に細別した。さらに、古段階の住居跡出土資料を勝坂・中峠系の土器が主体を占めるもの=組成Aと、加曾利E式が主体を占めるもの=組成Bに分離し、両者の関係性（時期差か系統差か）の解釈については保留とした。

V期におけるA組成とB組成の住居跡の位置的な関係を色分けしてみたが、両者に極端な偏在は見受けられず、むしろA組成の住居跡の空隙をB組成の住居跡が補填するような関係がみられた。

また、B組成においては2軒1単位の小群がみられる。これらは竪穴住居廃絶後、隣接地に新たな住居を建て替えたものであろう。

住居形態および変遷

第429～431図に各時期の代表的な住居跡を再掲した。縮尺は全て120分の1、主軸方向を上下に揃えてある。なお、本書では基本的に炉跡と出入り口施設を結ぶ線を主軸と考え、それが不明瞭な場合には主柱穴配置や平面プランを参考に決定し



第427図 集落変遷図

た。

I期

遺物は出土したが、住居跡は検出されなかった。

II期

第38号住居跡1軒のみである。床面中央にピットを持つが、炉跡を持たず、柱穴配置等は不明である。

III期

平面プランは楕円形と隅丸長方形が共存する。炉跡は地床炉・埋甕炉・石（土器片）囲い炉が存在する。

柱穴配置等は不明瞭なものが多いが、第4号は亀甲型の6本主柱とみられる。第44・78号は4本主柱の可能性がある。

IV期

平面プランは楕円形と隅丸長方形が共存する。炉跡は地床炉と埋甕炉が存在する。柱穴配置はなお不明瞭だが、第14・(19)・20号住居跡は4本主柱のバリエーションとみられる。出入り口施設が、壁際の小ピット群として出現する。

V期

平面プランは楕円形と隅丸長方形に加え、5～6角形など多角形のものが出現する。炉跡は地床炉と埋甕炉が存在する。4本主柱で主軸線上の奥壁寄りに炉跡、前面壁際に出入り口施設を持つ形態が定着し、主柱穴とそれ以外のピットの規模の違いが明瞭になる。4本主柱の中でも、出入り口寄りの2本が若干開く台形の配置が出現する。壁溝を持つ住居跡もこの時期に出現する。

主に前述A組成（勝坂・中峠系）と、B組成（加曾利E系）の住居跡の間に外見上大きな違いはみられないが、後者のなかに亀甲型6本主柱の住居跡2例が存在する点は注目される。

土器組成の違いを時期差とみるか系統差と考えるかで結論は微妙に変わってくるが、続くVI期に（今回報告した範囲では）亀甲型6本主柱タイプが存在しないことから、加曾利E式成立に相前後

して他地域からこの住居形態が持ち込まれ、その後、在地の住居形態に溶け込むことで速やかに解消していった可能性がある。

なお、住居形態と直接の関係はないが、炉跡が集石土壙に造り替えられていた第2号（古）は、上屋が残存していたか否かも含め注目すべき事例である。今回、周辺地域に類例を見出すことはできなかったが、第1・6・43・51号住居跡等では住居跡の床面がある程度埋没するまで柱材が残存していたことが判明しており、廃絶後の竪穴住居が集落内部で何らかの機能を果たしていたことを窺わせる。

VI期

平面プラン・柱穴配置とも基本的に前段階を踏襲するが、より定型化が進んでいる印象を受ける。炉跡は地床炉・埋甕炉・石（土器片）囲い炉が存在する。

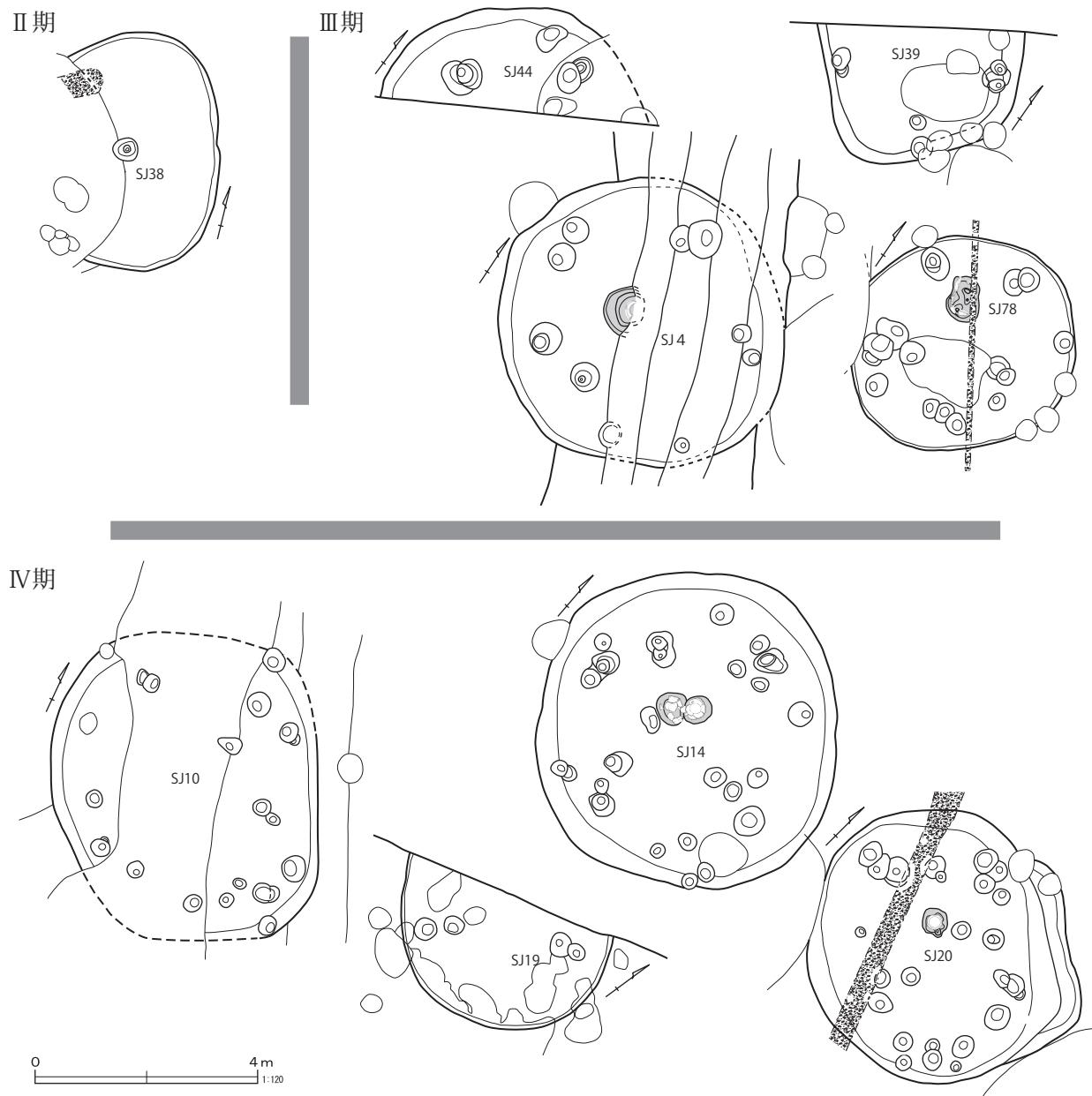
柱穴配置は4本主柱が主流であるが、第31（新）・42号住居跡等は、中段の張り出さない長方形配置の6本主柱である。これは前段階の亀甲型6本主柱が在地化したものであろう。

また、第28・31（新）号住居跡のように、主軸線上奥壁際に柱穴1本を追加する例も出現している。

出入り口部埋甕も、VI期に出現する特徴的な要素である。今回報告した中では第35・43号住居跡が埋甕を伴っていた。周辺地域における加曾利E I式期の竪穴住居跡出入り口部の埋甕は、隣接する高井遺跡第5・15号住居跡（E I式古段階）、伊奈町原遺跡第21号住居跡（同 古段階）、伊奈町北遺跡第7号住居跡（同 古段階）、第15・16号住居跡（同 新段階）等が挙げられる。

基本的に主軸線上の出入り口寄りの壁際に埋設されるものが多いが、北遺跡第16号住居跡例は大きく左にずれた主柱穴付近にあり、諏訪野遺跡第43号住居跡の第2号埋甕に共通する。

今回報告した竪穴住居跡の多くは上屋の建て替



第428図 住居跡集成図（1）

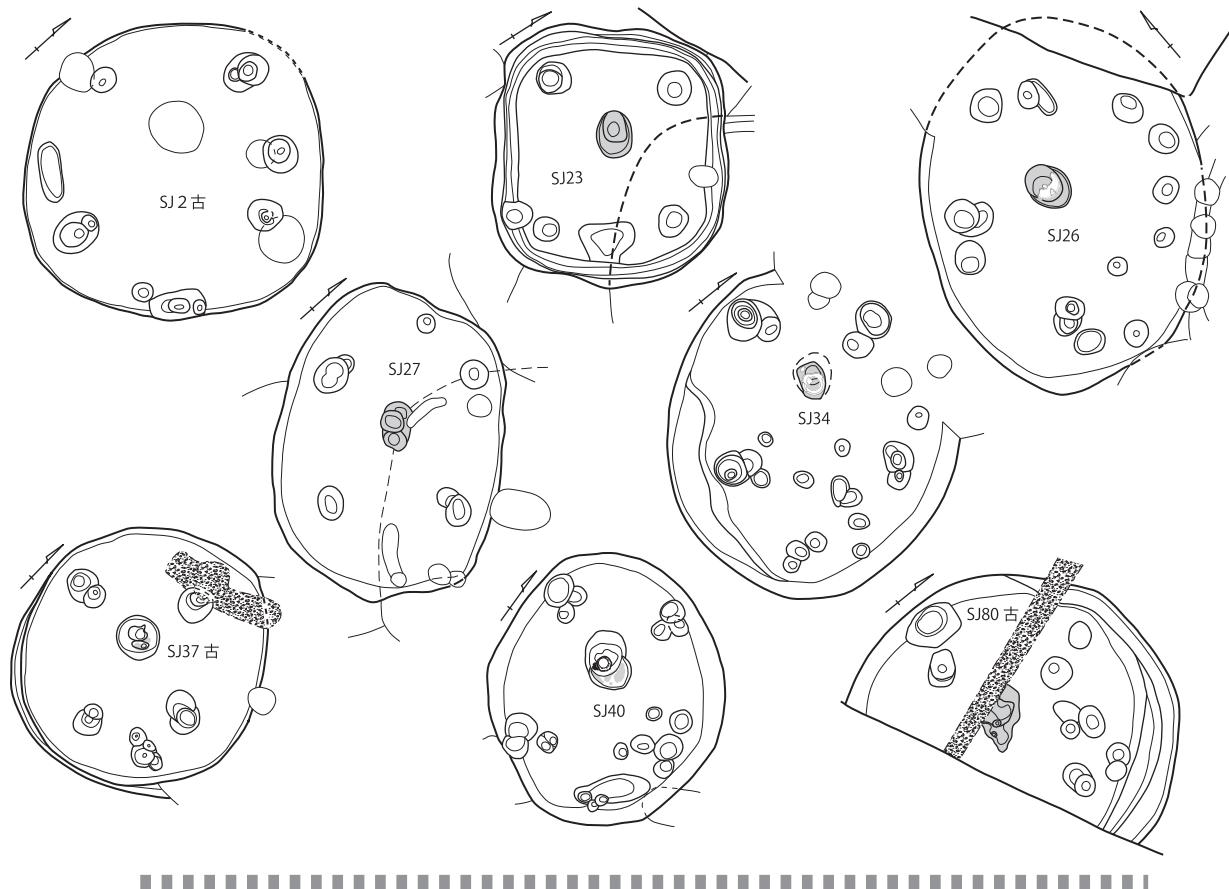
えやプランの拡幅を伴っていた。多くはほぼ同一規模での建て替えか、同心円状に上屋の規模を拡張したものと考えられたが、VI期の住居跡にみられる建て替え・拡幅には、V期までの各時期にはみられなかつた手法がとられている。

例えば、第3・15号住居跡では4本主柱のある1本を基準として、対角線方向に上屋の規模を拡張し、全体の床面積を増している。また、第31・42号住居跡では建て替えに際して主軸を90°変更し、かつ床面積も増している。

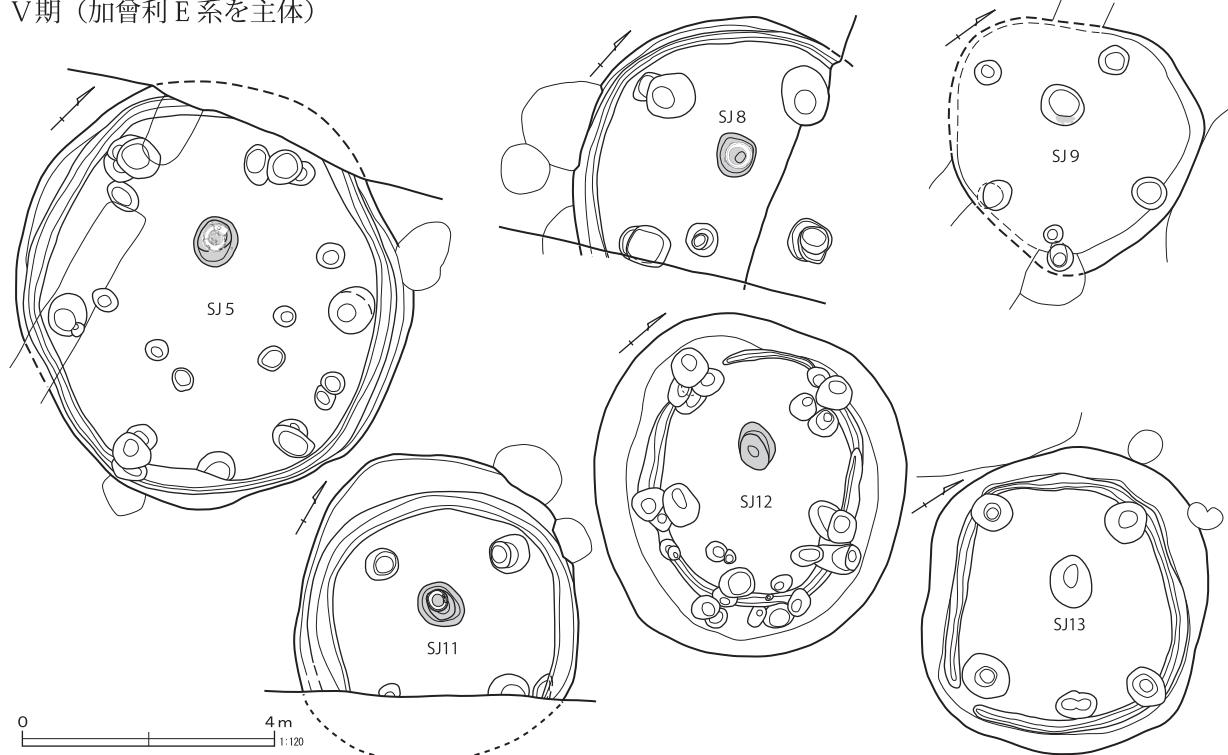
以上、竪穴住居跡の形態と変遷について概観してきたが、住居の定型化という意味ではIV期とV期の間に画期が存在するものと思われた。出入り口部埋甕は、本報告ではVI期に出現しているが、高井遺跡等ではV期に遡る例も珍しくないので、今後該期の事例が増える可能性があるだろう。住居の建て替え・拡幅にみられる変化についても同様である。

次回報告ではさらに周辺地域の様相も含め、より綿密な分析を行うこととした。

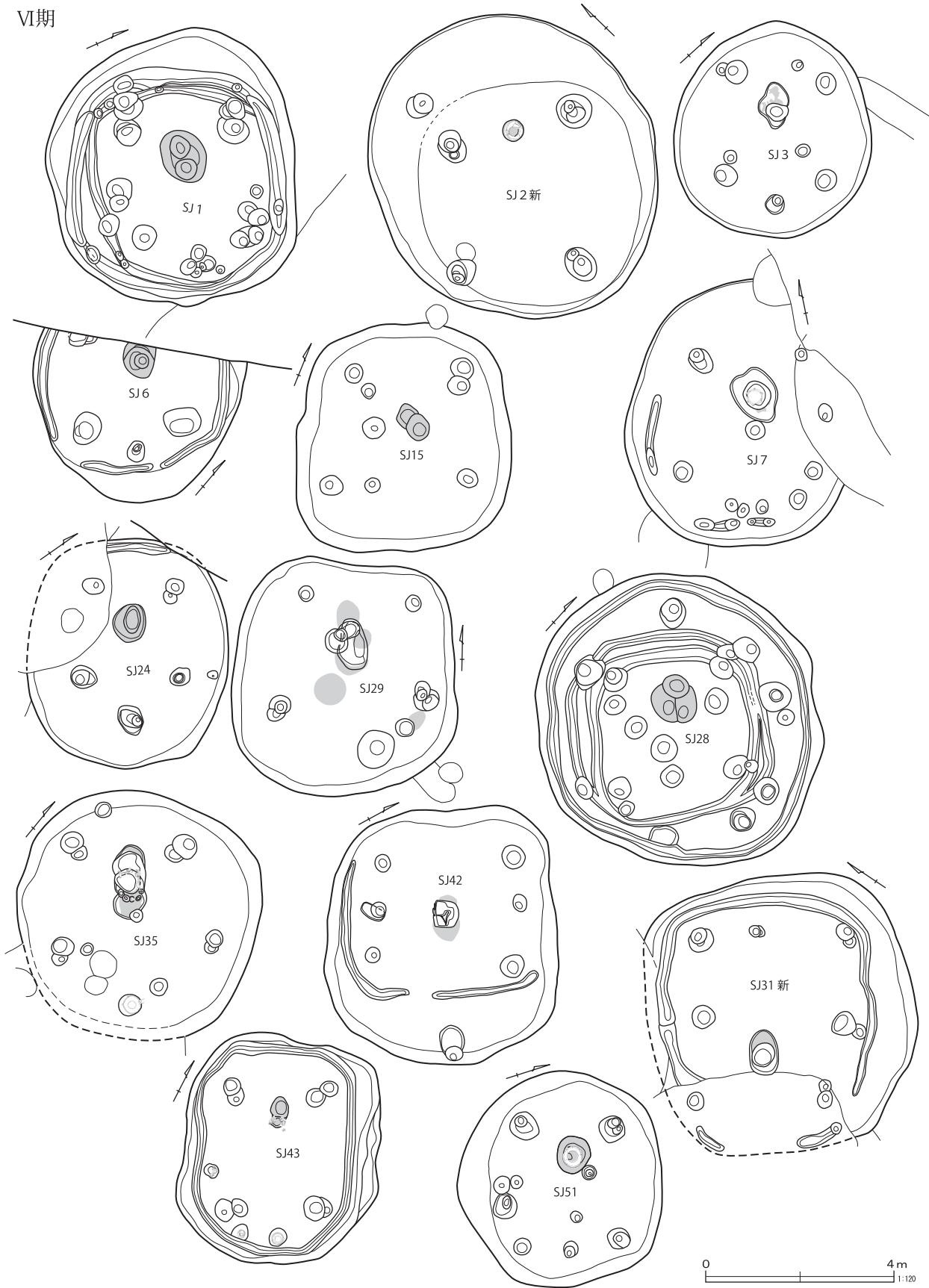
V期（勝坂中峠系を主体）



V期（加曾利E系を主体）



第429図 住居跡集成図（2）



第430図 住居跡集成図（3）

引用・参考文献

- 石坂俊郎 他 2004『後谷遺跡』桶川市教育委員会
- 石塚和則 1986『将監塚・縄文時代 -』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第63集
- 石塚和則 2003『丸山遺跡』狭山市遺跡調査会 第13集
- 石塚和則 2007『宮地遺跡 第6次調査』狭山市文化財調査報告 第26集
- 石塚和則 2012「形式転換期の実態」『埼玉考古』47
- 今井 基 他 1996『西ノ原遺跡』大井町遺跡調査会報告 第6集
- 植木 弘 1988『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会報告 5
- 上野真由美 2012『新田東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第390集
- 大村 裕 他 1998「中峠式土器の型式論的検討」『下総考古学』15
- 大村 裕 他 1998「中峠式土器の再検討」「第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相」縄文セミナーの会
- 金子直行 2001『まま上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第242集
- 金子直行 2004『芝沼堤外遺跡』川島町遺跡発掘調査報告書 第2集
- 金子直行 2006『中野遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第322集
- 金子直行 他 1987『北・八幡谷・相野谷』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第66集
- 後藤信祐 1980『楓木沢遺跡Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告 第171集
- 佐々木保俊 他 1979『松ノ木遺跡』富士見市遺跡調査会調査報告 第2集
- 鈴木孝之 2011『富田後遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第385集
- 鈴木敏昭 他 1983『台耕地(I)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第27集
- 鈴木保彦 他 1980「縄文時代中期後半の諸問題 土器資料集成」「神奈川考古 第10号」神奈川考古同人会
- 高橋 敦 他 1980『富士見市中央遺跡群Ⅲ』富士見市教育委員会
- 谷井 彪 1987「加曾利E式土器における口縁部文様帶と形態の系譜」『埼玉の考古学』新人物往来社
- 谷井 彪 他 1982「縄文中期土器群の再編」「研究紀要」1982 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪・細田 勝 1997「水窪遺跡の研究—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性—」「研究紀要 第13号」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富元久美子 他 1998『飯能の遺跡(25) 加能里遺跡第16・20・21次調査』飯能市教育委員会
- 鍋島直久 1993『西ノ原遺跡』大井町遺跡調査会
- 鍋島直久 1993『西ノ原遺跡第52地点 第55地点 苗間東久保遺跡第18地点 净禪寺跡遺跡第7地点
大井氏館跡遺跡第5地点』大井町遺跡調査会報告書 第5集
- 鍋島直久 他 2009『亀居遺跡Ⅲ 鶴ヶ舞遺跡I 江川南遺跡Ⅲ 東中学校西遺跡I 西ノ原遺跡V 神明後遺跡Ⅱ』
大井町遺跡調査会報告 第18集
- 福島邦男 他 1980『編年 - 中部高地における型式 - 旧石器・縄文・弥生編』千曲川水系古代文化研究所
- 細田 勝 1989「縄文中期土器研究の諸問題」「第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題」群馬県考古学研究所
- 細田 勝 2010「勝坂式の変容と大木式の関係(素描)」「比較考古学の新地平」同成社
- 細田 勝・渡辺清志 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集
- 堀口万吉 1976「II 埼玉県の地形と地質」「新編埼玉県史 別編3」埼玉県
- 松本 茂 他 1991『法正尻遺跡』福島県文化財調査報告書 第243集
- 宮井英一 1989『古井戸 - 縄文時代 -』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第75集
- 村田章人 1997『原／谷畑』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第179集
- 森山 高 他 2012『花積貝塚3次地点、米島西宮遺跡1次地点、米島塚山遺跡1次地点、馬場遺跡5次地点、』
春日部市埋蔵文化財発掘調査報告書 第13集

- 森 幸彦 1998 「福島県内の太木8 a式土器について」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』
縄文セミナーの会
- 柳田敏司 他 1969 『高井遺跡』桶川町文化財調査報告Ⅲ
- 柳戸信吾 1998 『飯能の遺跡（26）中郷遺跡第1～3次調査』飯能市教育委員会
- 柳戸信吾 他 1999 『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能市遺跡調査会
- 山口逸弘 2000 「勝坂系土器という末裔たち」『群馬考古学手帳 10』群馬土器見会
- 山口歳信 1998 「群馬県に於ける中期中・後葉の土器様相」『第11回縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』
縄文セミナーの会
- 山下歳信 1999 「三原田式土器再検討」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 吉川國男 1990 「第二章 縄文海進と桶川」『桶川市史』第一巻
- 吉川國男 他 2000 『高井遺跡』高井遺跡発掘調査会
- 吉川國男 他 2001 『高井遺跡』桶川市教育委員会 高井遺跡発掘調査会
- 吉川國男・塩野 博 他 1979 『桶川市史』第二巻 原始・古代資料編
- 吉田格 他 1998 『駒木野遺跡発掘調査報告書』青梅市遺跡調査会
- 渡辺清志 2001 「埼玉県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会